岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 203

国指定史跡　鬼城山

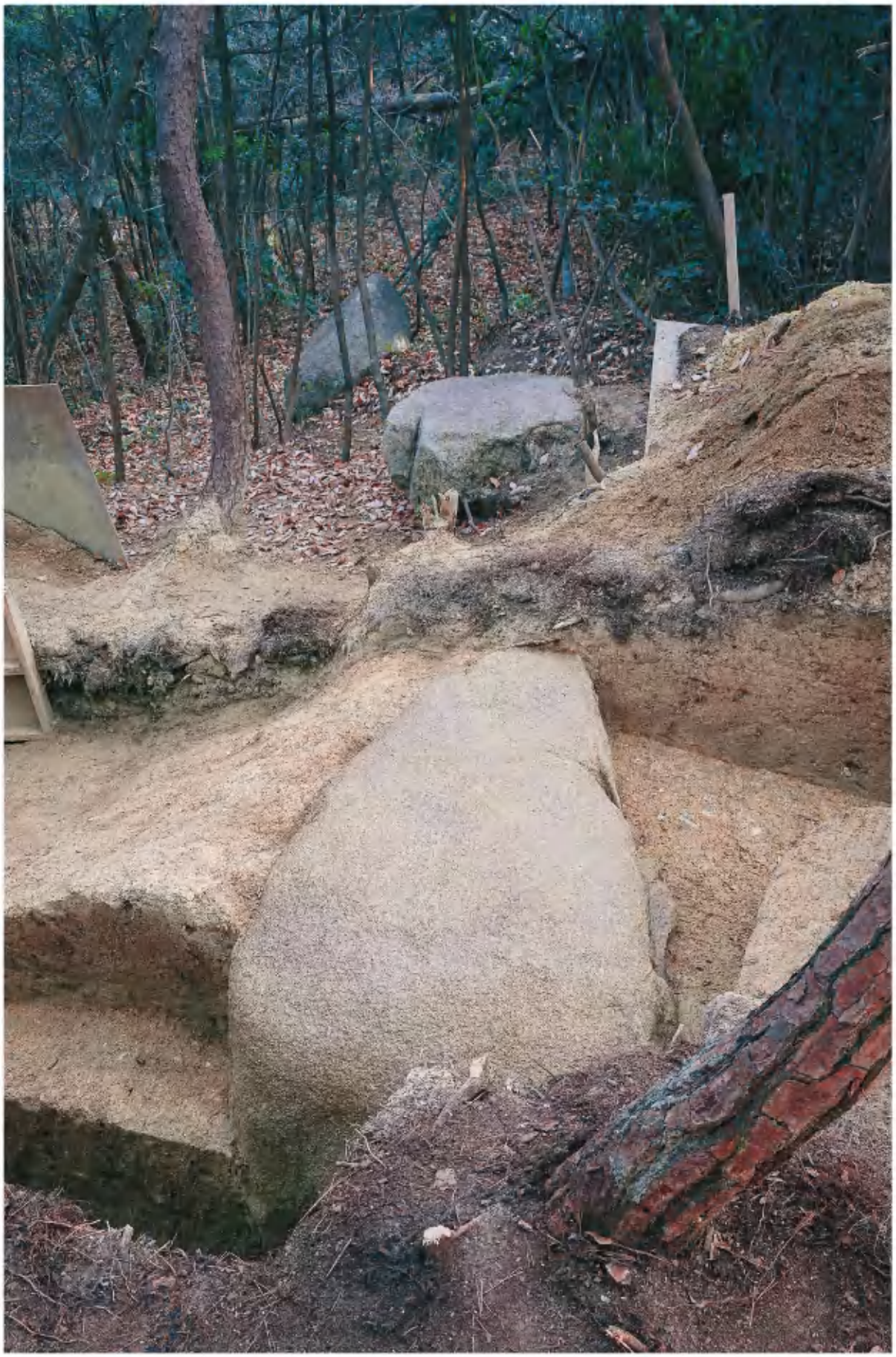
国指定史跡整備事業に伴う確認調査

2006

岡山県教育委員会

T 54　版築土塁と列石控え積み（Ⅱ期：西から）

巻頭図版 2



T59　新発見の礎石建物 5 （Ⅱ期：南西から）

T111　石垣と築堤（Ⅷ期：南から）

巻頭図版 4

1　T54　版築土塁上位の東側布掘りと柱痕跡（Ⅱ期：北西から）

2　T54　西側の布掘り（Ⅱ期：南から）

1　T113　竪穴遺構（Ⅶ期：北から）

2　T125　礎石建物 4 （Ⅷ期：北から）

巻頭図版 6

1　T123　礎石建物 5 の礎石（Ⅴ期：北から）

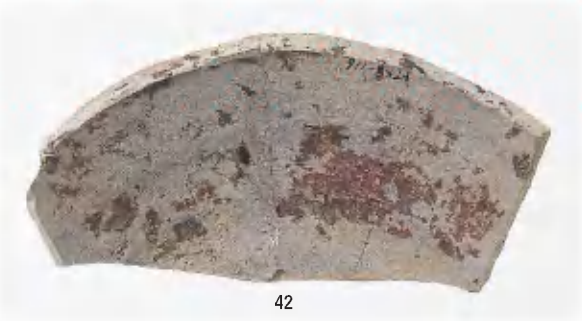
2　T111　石垣（Ⅷ期：南から）

1　T24・48　周辺部出土須恵器

2　T54　版築土塁剥ぎ取りによる表装

巻頭図版 8

1　T113　竪穴遺構と周辺出土遺物（Ⅶ期：鉄滓・炉底滓・鞴の羽口・砥石）



2　漆が付着した須恵器（Ⅳ期：T48出土）

3　土師器甕（Ⅵ期：T82出土）

4　瓦塔（Ⅱ期：T62付近出土）

5　緑釉陶器皿（Ⅲ期：T68出土）

序

鬼城山、通称鬼ノ城は吉備高原の南端に位置し、「温羅伝承」に因む歴史的舞台として古くから知られていました。最高所からは、瀬戸内海や遠く四国の山並みを遠望し、眼下には肥沃な総社平野を睥睨し、旧山陽道の南東には、吉備津を間近に望むことができます。

この鬼城山が、古代山城の一つとしてその名を広く知らしめたのは、今から34年前、昭和46(1971)年のことです。昭和61(1986)年には国指定史跡となり、その数年後には、城壁内は元より、城壁外裾部に至る全域が公有地化された、全国で唯一の古代山城となりました。昭和53(1978)年の学術調査に続き、平成6年から総社市教育委員会による城門や城郭線の継続的発掘調査が実施され、多くの成果が挙げられています。とりわけ、西門や角楼の発見とその整備・復元事業は、これまでの発掘調査成果の集大成といえるものです。

一方、城内の大半を占める県有地については、偶然の機会に発見された第Ⅰ・Ⅱ群礎石建物群が知られているに過ぎず、大きな謎に包まれていました。

岡山県教育委員会では、今後の史跡整備を充実させるため、平成11年度に国庫補助を受けて城内の確認調査を実施することとし、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施致しました。その結果、築城時期を示す7世紀後半の土器が集中して出土する地点や、城内での鍛冶を示唆する竪穴遺構の発見のほか、新たな礎石建物が姿を現すなど、多くの新発見が相次ぎました。これらの発掘成果を収載した本書が、今後の鬼城山の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたっては、地元総社市教育委員会および鬼城山整備委員会の委員の諸先生方をはじめ多くの方々から有益な御指導・御援助を賜りました。また、地域住民の皆様をはじめ、環境保護団体「高梁川流域の水と緑をまもる会」、倉敷地方振興局(現備中県民局)からは、多大な御理解と御協力を賜りました。記して深甚の謝意を表する次第です。

平成18年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　松本和男

例　言

1　本書は、岡山県教育委員会が国指定史跡「鬼城山（きのじょうざん）」（通称「鬼ノ城」）整備事業として、平成11（1999）年度に確認調査および試掘調査を実施した発掘調査報告書である。

2　鬼城山は、総社市奥坂1762－10ほかに所在し、史跡指定地の全域が公有化されている。今回の確認調査実施範囲は、城内のおもに県有地部分を対象とし、一部市有地部分の調査も行った。

池ノ下（いけのした）散布地は、総社市西阿曽701－１ほかに所在し、総社市教育委員会の支援を受け、土地所有者の承諾を得て試掘調査を実施した。

3　発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが担当し、総社市教育委員会から恒常的な援助を受けた。文化財室加藤信二室長をはじめ前角和夫・松尾洋平主事には、現地調査のトレンチ設定や記録保存作業に際し多大な助力を賜った。さらに総社市埋蔵文化財学習の館村上幸雄館長からは、有益な御助言・御指導を賜った。併せて深甚の謝意を表する次第である。

4　発掘調査にあたっては、鬼城山整備委員会の諸先生方、岡山県文化財保護審議会委員から有益な御指導・御助言を賜った。録して深謝の意を表する。

鬼城山整備委員会（平成11年度）

委 員 長　坪井清足（元興寺文化財研究所長）
副委員長　近藤義郎（岡山大学名誉教授）
委　　員　高橋　護（ノートルダム清心女子大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）
狩野　久（京都橘女子大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）
濱島正士（別府大学教授）
河本　清（くらしき作陽大学教授）
葛原克人（岡山県古代吉備文化財センター所長）
高瀬要一（奈良国立文化財研究所遺跡研究室長）

また、発掘調査開始に先立つ現地の植生自然保護については、「高梁川流域の水と緑をまもる会」、萱原　潤氏（同会理事）、榎本　敬氏（岡山大学資源生物科学研究所）の御助言や御指導を受けた。

5　本報告書の作成は、平成17年度に、センター職員岡田　博が担当して行った。

6　本報告書に関係する遺物については、素材の産地同定や類例比較については、次の諸氏から有益な御教示を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である。（順不同）

鉄滓についての所見	大澤正己・光永真一
緑釉陶器の産地同定	高橋照彦（大阪大学文学部）
石器・石製品の石材同定	鈴木茂之（岡山大学理学部）

7　本書の執筆は、鬼城山を岡田　博、池ノ下散布地については亀山行雄（高梁市教育委員会）が担当し、全体の編集は岡田が行った。

8　遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を頂いた。

9　出土遺物ならびに図面・写真・マイクロフィルム等は、すべて岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）に保管している。

凡　例

1　本報告書に用いた高度値は、海抜高である。

2　第２・17・138図に示した座標軸線は、旧日本測地系に準拠しており平面直角座標Ⅴ系による。

3　図面に用いた方位は、真北で表示している。収載遺跡付近の磁北は西偏６°40′を測る。

4　確認調査は城内のトレンチ設定にあたり、９期に分割して実施した。

本文での表記は、発掘時に合わせ、Ⅰ～Ⅸ期としている。本報告書掲載のトレンチは、その番号にＴを付している。トレンチ図、遺構および遺物の縮尺は、次のように統一している。一部の土壙については、土層断面図を例外的に平面図の上に示している。これは、トレンチ調査という制約に起因する。また、遺構図の北表示を下方に示す場合もある。その他例外については、挿図に縮尺率を図示もしくは明記している。

遺構

トレンチ図（土層断面図･平面図）：1/100･1/60　竪穴遺構･建物：1/60･1/80　土壙等：１/30

遺物

土器：１/４　土製品：１/３　石製品：１/２・１/３

5　遺物番号は、土器以外のものについてはその素材を示すため番号の前に次の略号を付した。なお、瓦については、土器に含めて番号を付している。

石製品：Ｓ　　土製品：Ｃ　　金属関連遺物・銅銭：Ｍ

6　遺構図のうち、被熱（加熱）範囲については、おもに網目のスクリーントーンで表現している。また、掲載図中では土壙は土、柱穴は柱、建物は建と略して表記している。

7　土層断面図・土器観察表などに使用した土色は、各担当者の記述に従っており、特に統一していない。記号化して表記しているものは、『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）によっている。

8　本報告書第１章と付章の第１図に使用した地図は、国土地理院発行２/25,000地図の「総社東部」を複製し、加筆したものである。

9　本報告書の時代・時期区分については、一般的な文化史・政治史区分に準拠し、世紀などを併用している。

古代の時期区分については、次による。

古代Ⅰ期……７世紀中葉前後から７世紀末

古代Ⅱ期……８世紀代

古代Ⅲ期……９世紀代

古代Ⅳ期……10～11世紀代

目　次

巻頭図版
序文
例言
凡例
目次
第１章　鬼城山の位置と環境…… 6
第２章　発掘調査の経緯…… 9
　第１節　確認調査に至る経過…… 9
　第２節　発掘調査の概要（付日誌抄）……10
第３章　確認調査報告……19
　第１節　第Ⅰ期の確認調査……19
　第２節　第Ⅱ期の確認調査……34
　第３節　第Ⅲ期の確認調査……56
　第４節　第Ⅳ期の確認調査……65
　第５節　第Ⅴ期の確認調査……73
　第６節　第Ⅵ期の確認調査……76
　第７節　第Ⅶ期の確認調査……84
　第８節　第Ⅷ期の確認調査……88
　第９節　第Ⅸ期の確認調査……95
第４章　まとめ……97
　出土遺物観察表……99
付　章　池ノ下散布地試掘調査報告……103
　第１節　調査の概要（付日誌抄）……103
　第２節　調査の結果……111
　出土遺物観察表……112
報告書抄録
写真図版

挿　図　目　次

第１章　鬼城山の位置と環境

第１図　鬼城山の位置と周辺遺跡分布図（１/25,000）７

第２章　発掘調査の経緯

第２図　鬼城山確認調査トレンチ設定図（1/3,000）　11･12

第３章　確認調査報告

Ⅰ期

第３図　Ｔ１～３配置図（1/400）……19
第４図　Ｔ１石敷き・出土遺物（1/80・1/4）……20
第５図　Ｔ２土壙２（1/30）……20
第６図　Ｔ１土層断面図（1/100）……21
第７図　Ｔ２土層断面図（1/100）……21
第８図　Ｔ３土層断面図（1/100）……22
第９図　Ｔ７土層断面図（1/100）……22
第10図　Ｔ８上層断面図、出土遺物（1/100・1/4）…23
第11図　Ｔ10土層断面図（1/100）……23
第12図　Ｔ11土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）…24
第13図　Ｔ12土層断面図、土壙、出土遺物
（1/100・1/30・1/4）……24
第14図　Ｔ15土層断面図（1/100）……25
第15図　Ｔ16土層断面図（1/100）……26
第16図　Ｔ20土層断面図（1/100）……26
第17図　Ｔ21～25、Ｔ27～29、Ｔ48配置図（1/400）…27
第18図　Ｔ21土壙１、出土遺物（1/30・1/4）……27
第19図　Ｔ21土壙２～４、柱穴１（1/30）……28
第20図　Ｔ21出土遺物（1/4）……28
第21図　Ｔ23出土遺物（1/4）……28
第22図　Ｔ22土壙５・６、出土遺物（1/60・1/4）……29
第23図　Ｔ24土壙７（1/30）……29
第24図　Ｔ22土層断面図（1/100）……30
第25図　Ｔ24土層断面図、出土遺物（1/100・1/2・1/4）30
第26図　Ｔ25土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）…31
第27図　Ｔ25土壙８（1/30）……31
第28図　Ｔ25土壙９（1/30）……31
第29図　Ｔ27上層断面図、出土遺物（1/100・1/4）…32
第30図　Ｔ29出土遺物（1/4）……32
第31図　Ｔ28出土遺物（1/4）……33
第32図　Ｔ29出土遺物（1/4）……33
第33図　Ｔ30土層断面図（1/100）……33
第34図　Ｔ48上層断面図（1/100）……34
第35図　Ｔ48出土遺物（1/4）……35

Ⅱ期

第36図　Ｔ４土層断面図、平面図、土壙、出土遺物
（1/100・1/200・1/30・1/4）……36
第37図　Ｔ５土層断面図（1/100）……37
第38図　Ｔ13上層断面図（1/100）……37
第39図　Ｔ14土層断面図（1/100）……38
第40図　Ｔ17土層断面図（1/100）……38
第41図　Ｔ18土層断面図（1/100）……38
第42図　Ｔ19土層断面図（1/100）……39
第43図　Ｔ51土層断面図（1/100）……39
第44図　Ｔ52土層断面図（1/100）……39
第45図　Ｔ51土層断面図（1/100）……40
第46図　Ｔ52土層断面図（1/60）……41
第47図　Ｔ54平面図（1/100）……42
第48図　Ｔ54上部列石、神籠石状列石（1/30・1/60）…42
第49図　Ｔ54北側布掘り土層断面図（1/60）……42
第50図　Ｔ55土層断面図（1/100・1/60）……43
第51図　Ｔ57土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）…44
第52図　Ｔ58土層断面図（1/100）……44
第53図　礎石建物６周辺地形図（1/300）……45
第54図　Ｔ59上層断面図（1/100）……46
第55図　Ｔ123土層断面図（1/60）……46
第56図　Ｔ123礎石部分土層断面図（1/60）……46
第57図　礎石建物６（1/100・1/4）……47
第58図　Ｔ60上層断面図（1/100）……48
第59図　Ｔ62土層断面図（1/100）……48
第60図　礎石建物１～４・７周辺地形図、出土遺物
（1/300・1/4）……49
第61図　礎石建物１（1/80）……50
第62図　礎石建物２（1/80）……51
第63図　Ｔ124土層断面図（1/60）……52
第64図　礎石建物４（1/80）……53
第65図　Ｔ120サブトレンチ土層断面図（1/60）……53
第66図　礎石建物内土壙（1/30）……53
第67図　Ｔ120土層断面図（1/60）……54
第68図　礎石建物４（1/80）……55
第69図　Ｔ125土層断面図（1/60）……56

Ⅲ期

第70図　Ｔ63土層断面図（1/100）……57
第71図　Ｔ65土層断面図（1/100）……57

第72図　礎石建物５周辺地形図（1/300）……58
第73図　礎石建物５（1/80）……59
第74図　礎石建物５南化粧基壇立面図（1/80）……60
第75図　礎石建物５断面図、出土遺物（1/80・1/4）…60
第76図　Ｔ67平面図、土層断面図（1/80・1/60）……61
第77図　Ｔ67掘立柱建物１断面図（1/60）……61
第78図　Ｔ67出土遺物（1/4）……62
第79図　Ｔ68出土遺物（1/4）……63
第80図　Ｔ68土層断面図、柱穴（1/60）……63
第81図　Ｔ69土層断面図（1/100）……64
第82図　Ｔ116土層断面図（1/100）……64
Ⅳ期
第83図　Ｔ49土層断面図（1/60）……65
第84図　Ｔ49柱穴（1/60）……66
第85図　Ｔ72土層断面図（1/100）……67
第86図　Ｔ73土層断面図（1/100）……67
第87図　Ｔ78土層断面図（1/100）……68
第88図　Ｔ83土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）…68
第89図　Ｔ85土層断面図（1/100）……69
第90図　Ｔ86土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）…69
第91図　Ｔ87土層断面図（1/100）……69
第92図　Ｔ89土層断面図（1/100）……70
第93図　Ｔ90土層断面図（1/100）……70
第94図　Ｔ91土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）…71
第95図　Ｔ91土壙、出土遺物（1/30・1/2）……71
第96図　Ｔ92土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）…72
Ⅴ期
第97図　Ｔ98土層断面図（1/100）……74
第98図　Ｔ121土層断面図（1/100）……74
第99図　Ｔ121列石、周辺出土遺物
（1/200・1/60・1/4・1/3）……75
第100図　Ｔ122土層断面図（1/60）……76
Ⅵ期
第101図　Ｔ75土層断面図（1/100）……77
第102図　Ｔ76土層断面図（1/100）……78
第103図　Ｔ77土層断面図（1/100）……79
第104図　Ｔ80土層断面図（1/100）……80
第105図　Ｔ82土層断面図（1/100）……80
第106図　Ｔ82出土遺物（1/4）……81
第107図　Ｔ102土層断面図、土壙、出土遺物
（1/100・1/30・1/4・1/2）……82
第108図　Ｔ106土層断面図（1/100）……83
第109図　Ｔ108土層断面図（1/100）……83
第110図　Ｔ109土層断面図（1/100）……83
Ⅶ期
第111図　Ｔ112土層断面図（1/100）……85
第112図　Ｔ113土層断面図（1/100）……85
第113図　Ｔ113平面図、出土遺物（1/200・1/4・1/3）　86
第114図　Ｔ113竪穴遺構（1/60）……87
第115図　Ｔ113竪穴遺構付近出土砥石（1/3）……87
第116図　Ｔ114土層断面図（1/100）……88
Ⅷ期
第117図　Ｔ31土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）…89
第118図　Ｔ38土層断面図（1/100）……89
第119図　Ｔ94土層断面図（1/100）……90
第120図　Ｔ47土層断面図（1/100）……91
第121図　Ｔ95土層断面図（1/100）……91
第122図　Ｔ96土層断面図（1/100）……91
第123図　Ｔ104土層断面図（1/100）……92
第124図　Ｔ110土層断面図（1/100）……92
第125図　Ｔ111の位置（1/300）……93
第126図　Ｔ111石垣（1/60）……93
第127図　Ｔ111土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）　94
第128図　Ｔ117土層断面図（1/100）……94
第129図　Ｔ117出土遺物（1/4）……95
第130図　Ｔ95～103出土遺物（1/4）……95
Ⅸ期
第131図　Ｔ33土層断面図（1/100）……96
第132図　Ｔ34土層断面図（1/100）……96
第133図　Ｔ40土層断面図（1/100）……96
第134図　Ｔ43土層断面図（1/100）……96
第４章
第135図　鬼城山城内県有地・市有地区分と特色
（1/5,000）……98
付章
第１図　池ノ下散布地の位置（黒塗り：1/25,000）…103

第２図　周辺地形図（約1/6,000）……103
第３図　トレンチ設定図（1/5,000）……104
第４図　土塁横断模式図（1/300）……104
第５図　Ｔ１・Ｔ２土層断面図（1/60）……105
第６図　Ｔ１出土遺物（1/4）……106
第７図　Ｔ２集石、出土遺物（1/60・1/4・1/2）…106
第８図　Ｔ３土層断面図、出土遺物（1/60・1/4）…107
第９図　Ｔ４土層断面図、出土遺物（1/60・1/4）…107
第10図　Ｔ５～７土層断面図（1/60）……108
第11図　Ｔ８土層断面図、出土遺物（1/60・1/4）…109
第12図　Ｔ９土層断面図（1/60）……109
第13図　Ｔ10・Ｔ11土層断面図（1/60）……110
第14図　Ｔ12土層断面図（1/60）……111

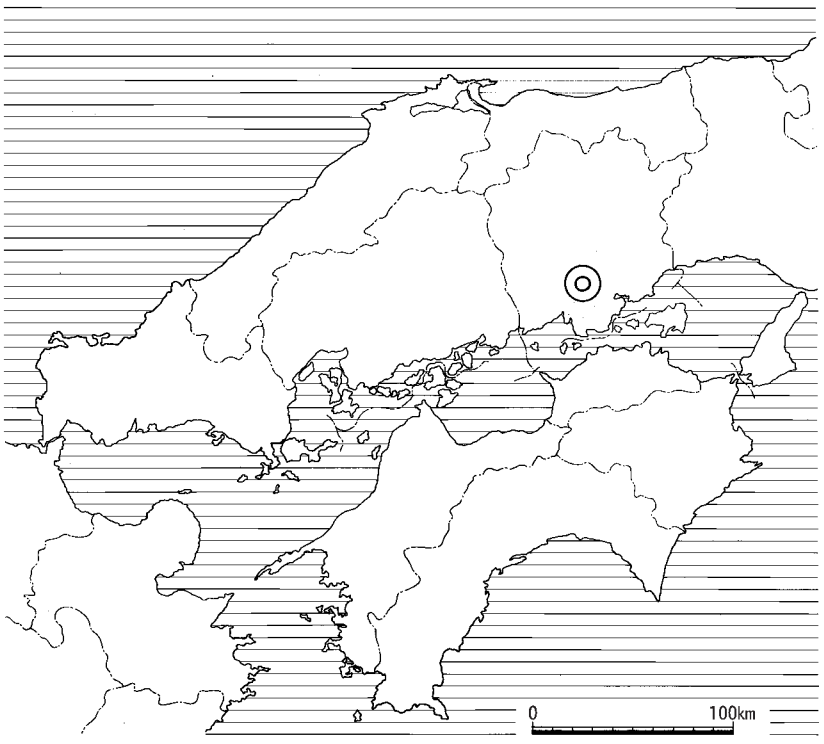
表　目　次

第２章
第１表　確認調査工程表……13
第２表　確認調査トレンチ一覧表……14・15
第４章
第３表　鬼城山建物一覧表……97
巻末
第４表　土器観察表……100
第５表　石器・石製品観察表……101
第６表　土製品観察表……101
第７表　鍛冶関連遺物観察表……101
付章
第１表　土器観察表……110
第２表　銅銭観察表……110

図　版　目　次

巻頭図版１　Ｔ54　版築土塁と列石控え積み（Ⅱ期：西から）
巻頭図版２　Ｔ59　新発見の礎石建物５（Ⅱ期：南西から）
巻頭図版３　Ｔ111　石垣と築堤（Ⅷ期：南から）
巻頭図版４－１　Ｔ54　版築土塁上位の東側布掘りと柱痕跡（Ⅱ期：北西から）
－２　Ｔ54　西側の布掘り（Ⅱ期：南から）
巻頭図版５－１　Ｔ113　竪穴遺構（Ⅶ期：北から）
－２　Ｔ125　礎石建物４（Ⅷ期：北から）
巻頭図版６－１　Ｔ123　礎石建物５の礎石（Ⅴ期：北から）
－２　Ｔ111　石垣（Ⅷ期：南から）
巻頭図版７－１　Ｔ24・48　周辺部出土須恵器
－２　Ｔ54　版築土塁剥ぎ取り作業と表装
巻頭図版８－１　Ｔ113　竪穴遺構と周辺出土遺物（Ⅶ期：鉄滓･炉底滓･鞴の羽口･砥石）
－２　漆が付着した須恵器（Ⅳ期：Ｔ48出土）
－３　土師器甕（Ⅵ期：Ｔ82出土）
－４　瓦塔（Ⅱ期：Ｔ62付近出土）
－５　緑釉陶器皿（Ⅲ期：Ｔ68出土）
鬼城山
図版１－１　鬼城山遠景（南東から）
－２　鬼城山からの眺望（北西から）
－３　確認調査初日、葛原所長作業説明風景
図版２－１　Ｔ４発掘着手風景（西から）
－２　Ｔ10土壙検出状況（南から）
－３　Ｔ21土壙１須恵器出土状態（東から）
図版３－１　Ｔ21土壙２検出状態（東から）
－２　Ｔ54版築土塁下位（西から）
－３　Ｔ54土塁下位石列（東上方から）
図版４－１　Ｔ62と礎石建物１（南西から）
－２　Ｔ62礎石（南から）
－３　礎石建物２とＴ124（東から）
図版５－１　礎石建物３調査風景（北東から）
－２　礎石建物４とＴ125（北東から）

－３　礎石建物４とＴ125上層断面（南から）
図版６－１　Ｔ62土層断面と礎石（北東から）
－２　Ⅱ群礎石建物とＴ116（北東から）
－３　Ⅱ群礎石建物基壇石列（南から）
図版７－１　Ｔ67と掘立柱建物１・石列（南から）
－２　Ｔ67と掘立柱建物１・石列（北から）
－３　Ｔ68（北西から）
図版８－１　Ｔ49柱穴・石列と土層断面（南から）
－２　Ｔ91落とし穴（西から）
－３　Ｔ87上層断面（西から）
図版９－１　Ｔ121石列（東から）
－２　Ｔ113竪穴遺構付近作業風景（北から）
－３　Ｔ113竪穴遺構（北から）
図版10－１　Ｔ106（西から）
－２　Ｔ111石垣（東から）
－３　鬼城山整備委員会（Ｔ54、1999年12月17日）
図版11　出土遺物（須恵器・土師器）
図版12　出土遺物（須恵器・土師器・瓦塔・瓦）
図版13　出土遺物（瓦・須恵器・土師器）
図版14　出土遺物（須恵器・炉底滓・石器・石製品）
池ノ下散布地
図版15－１　池ノ下散布地遠景（北西から）
－２　Ｔ１全景（南東から）
－３　Ｔ３全景（南東から）
図版16－１　Ｔ２土層断面（南東から）
－２　Ｔ２土層断面（北東から）
－３　Ｔ８土層断面（南から）
図版17－１　Ｔ２敷葉層？（西から）
－２　Ｔ８全景（南東から）
－３　Ｔ４全景（北東から）
図版18－１　Ｔ５全景（南東から）
－２　Ｔ７全景（南東から）
－３　Ｔ９全景（南東から）
図版19－１　Ｔ11全景（南東から）
－２　Ｔ５付近作業風景（南から）
－３　鬼城山整備委員会の視察(2000年３月１日)
図版20　出土遺物（土器・銅銭）



鬼城山の位置

第１章　鬼城山の位置と環境

７世紀の半ば、わが国は激動の時代を迎えていた。それは、東アジアにおける国家の存亡につながる国際的な緊張が、頂点に達しようとした時代でもあった。

白村江での敗戦（663年）後まもなく、西日本各地に、６か所の古代山城が築かれているが、これらは記紀に明確な築城の記載がある（日本書紀『天智紀』）。中でも最大規模の城は「大野城」（福岡県大野城市）で、やはり日本書紀に記載される「水城」も備えているが、その築成は664年のこととされている。

一方で記紀に記載のない古代山城は、築城や廃城について記載がある朝鮮式山城に対して、神籠石型あるいは、神籠石系山城と呼ばれており、鬼城山もその一つとされている。(註１) 岡山県内には、もう１か所の神籠石系山城、「大廻り小廻り」が知られており、古代の備前国上道郡日下郷に位置する。(註２) 鬼城山の東方約20数㎞に位置するが、たがいに視認することはできない。2004年に国指定史跡の答申を受け、今後の史跡整備への取り組みが緒についたばかりである。

鬼城山は、古代吉備の中枢部を眼下に見渡す、海抜300～380ｍの山頂に築かれている。中国山脈からなだらかに下降する高原は吉備高原と呼ばれ、その先端に鬼城山は築かれている。鬼城山の西側には砂川、東側には血吸川上流が渓谷をなして源となり、それぞれ足守川に注いでいる。

律令制下では、備中国賀陽郡阿曽郷に属する。記紀に記載がなく、しかも官選史書や歴史的記述とは異なる『温羅伝説』（鬼ノ城縁起）などの説話によって、長く広く親しまれているが、その内容は全くの作り話ではなく、長い年月を経ながら歴史的事実が幾分脚色された印象を受ける。(註３)

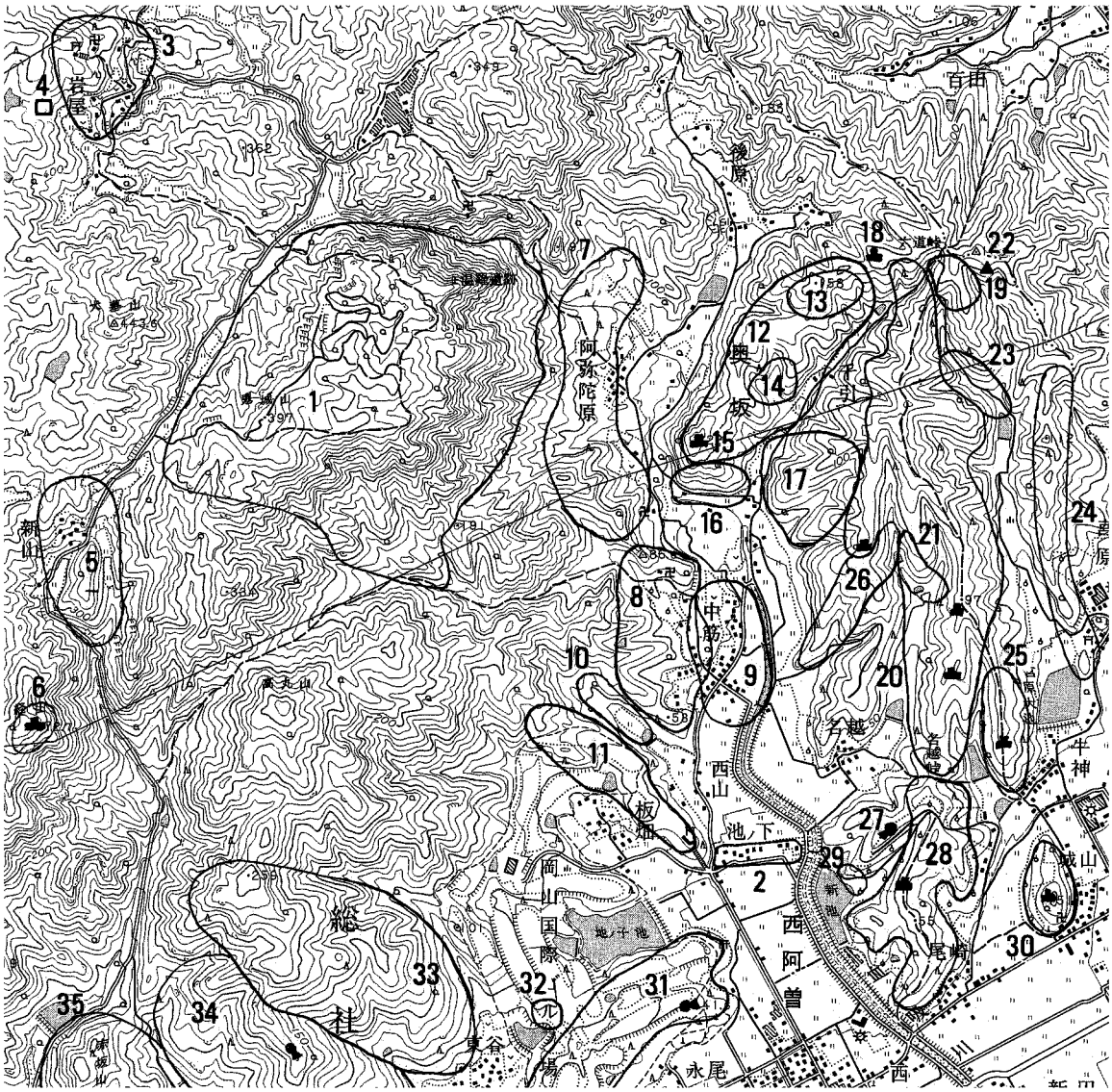
鬼城山からの眺望は、まさにパノラマといえる。晴れた日には、眼下の総社平野の全体を見渡せ、西に高梁川、さらには瀬戸内海や遠く四国の山並みが鮮明に見渡すことができる。南方約10㎞には、東西を結ぶかつての幹線道路、山陽道がその面影をとどめている。また瀬戸内海からの門戸となる吉備津は、南南東およそ11㎞に比定され、かつては幾多の船影を浮かべたであろう瀬戸内海との至近な距離を感じることができる。

鬼城山やその周囲の山塊は花崗岩地帯で、多くの露岩があちこちで見受けられる。城内では、これらの岩を粗割りにして、城壁となる高石垣を築いたり、礎石にも使用している。一方で、きわめて硬い花崗岩で、精密かつ高度な技術や道具を駆使して門礎を製作している点は、近年飛鳥で発見された「亀石」に共通する技術と考えられる。

岩脈の中でもやや軟質部分は、半花崗岩（アプライト）と呼ばれ、鬼城山に多用される石敷きに小割にして使用されている。自然の露岩は、そのまま利用した場所もあり、その上に石垣を築いている場所も多い。谷部分は、６か所の水門と版築土塁で固め、東西南北４か所の城門を設置している。西門の北西側には角楼が置かれる。

鬼城山周辺の遺跡は、第１図に掲げる。北西方約１㎞の３岩屋寺跡は、平安時代の山上仏教の拠点が存在したと伝えられ、寺院の基壇や瓦の出土が知られている。また南西方約800ｍの５新山廃寺でも瓦の出土が知られており、岩屋寺と関連する堂宇の存在が考えられている。

鬼城山は廃城後、仏教的な色彩を帯びることが、従来の知見や今回の確認調査成果も含めて十分に



1. 鬼城山（国指定史跡）　2. 池ノ下散布地　3. 岩屋寺跡　4. 岩屋の皇の墓（無縫塔：県指定文化財）　5. 新山廃寺　6. 絁山城跡（市指定文化財）　7. 阿弥陀原１～13号墳　8. 穴観音箱式石棺・穴観音南１・２号墳、穴観音１～17号墳　9. 中筋遺跡　10. 畑１～３号墳　11. 板畑１～７号墳　12. 千引１～10号墳　13. 千引遺跡　14. 千引カナクロ谷製鉄遺跡　15. 小陣屋　16. かむろ１～15号墳　17. くもんめふ遺跡・古墳　18. 千引砦　19. 大陣屋　20. 名越１～18号墳・名越１～４号砦　21. 名越遺跡　22. 新池奥遺跡　23. 宮原谷遺跡　24. 宮原１～11号墳　25. 牛神１～５号墳・牛神砦　26. 林崎遺跡・林崎１～３号墳　27. 随庵古墳　28. 尾崎１～９号墳・尾崎城跡　29. 新池東遺跡　30. 鳥越山城跡（城山城跡）　31. 久米１～21号墳　32. 神ノ子池１・２号墳　33. 赤坂山１～25号墳　34. 久米大池１～18号墳　35. 黒尾１～16号墳

第１図　鬼城山、池ノ下散布地の位置と周辺遺跡分布図（1/25,000）

推測され、密接な関連があったことは確実と考えられる。城内には、修験道との深い関わりを示す形跡が多く残されていることも特筆すべきであろう。

鬼城山の東山麓から血吸川を挟んだ丘陵地帯には、後期古墳群が多数確認されている。東門を尾根筋に下ると阿弥陀原に達し、後期古墳群が存在する。

さらにその東の丘陵地帯には、千引古墳群・遺跡のほか、千引カナクロ谷製鉄遺跡が存在する。(註４) 後者では、６世紀後半から古代Ⅱ期＝奈良時代にかけての製鉄や鍛冶遺構が発見され、鉄鉱石による製鉄の実態が明らかとなった。近くに存在した千引古墳群では、主体部である横穴式石室から、鉄滓の出土が目立つ点に注目される。なお、千引７号墳（方墳）では、円面硯が副葬品として納められるなど、鬼城山と存続時期が重なる点からも注目すべき遺跡群である。

当時、眼下に一大製鉄工業地帯が存在したことを示唆する重要な遺跡であったが、発掘調査の後、ゴルフ場建設により消滅した。後述の第３章確認調査報告では、東門近くに設定したＴ113で、鍛冶滓や羽口を伴う竪穴遺構の一部を検出したが、この千引カナクロ谷遺跡群とはわずか１㎞足らずの距離である。

今回、試掘調査結果を収載した「池ノ下散布地」は南東方約２㎞に位置する。その東側丘陵には、甲冑や武器をはじめとする多数の鉄製品に加えて、鍛造具などの鍛冶道具が出土したことで著名な、随庵古墳が位置している。(註５)

中世末、戦国期には、南西方約1.5㎞に大内義隆築城と伝えられる経山城が築かれている。鬼城山の東から南方眼下の丘陵部には、高松城の水攻めが行われた時期の小規模な城砦群が目立つ。

近世になると、鬼城山一帯は、豊臣秀吉の正室に近い木下家の足守藩領となり、山奉行によって森林の植生管理や治山が行われたという。(註６) その後、明治期に意欲的な植林や砂防工事が行われ、一部には旧地形が失われた地点もあるが、豊かな自然環境と眺望は、四季を通じて県内外から訪れる、多くの人々を魅了している。

註

（註１）葛原克人「朝鮮式山城」（佐藤宗諄編『日本の古代国家と城』）新人物往来社　1994年
（註２）出宮徳尚・乗岡　実「大廻小廻山城跡発掘調査報告」岡山市教育委員会　1989年
（註３）藤井　駿「吉備地方史の研究」法蔵館　1971年
（註４）武田恭彰ほか「奥坂遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告15』　総社市教育委員会　1999年
（註５）鎌木義昌ほか「随庵古墳」総社市教育委員会　1960年
（註６）確認調査参加の地元作業員、牧野　保氏のご教示による。

第２章　発掘調査の経緯

第１節　確認調査に至る経過

昭和46（1971）年の発見後（註１）、同50（1975）年には、オートバイのクロスカントリー場となっていた北門一帯を県が買収し、「吉備史跡県立自然公園」の中核をなす地域として保護が図られるに至った。

昭和53（1978）年、山陽放送創立25周年事業として、幅広い研究者を結集した「鬼ノ城学術調査団」による初の考古学的な発掘調査が実施され、城門や水門の調査は元より、初めての全域地形測量が実施されるなど画期的な成果が挙げられた。その成果は昭和55（1980）年に「鬼ノ城」としてまとめられ、随所にカラー図版を巧みに取り入れた、当時としては画期的な発掘調査報告書として今日なお高い評価が与えられている。（註２）

昭和55（1980）年、城内で初めて礎石が偶然の機会に発見され、地表面の精査の結果、周辺にあわせて５棟の礎石建物の存在が確認された。最初に発見された一角の礎石建物群を第Ⅰ群、その南西方の化粧基壇を伴う礎石建物をⅡ群と呼称されるに至っている。

その後、昭和61（1986）年には城内部分を含め、1,125,629㎡という広大な鬼城山全域が国指定史跡として認められた。さらに平成元（1989）年から翌年にかけて、外郭線から下方の山裾部に至る私有地も総社市によって買収され、史跡指定範囲の中心を占める城内部分の約70％を県、他を総社市が所有するに至った。ちなみに城内の総面積は269,528㎡、そのうち216,627㎡が県有地、51,867㎡が総社市有地を占め、池など水面にあたる1,034㎡の国有地が含まれている。こうして鬼城山は、全国でも唯一といってよい、全域公有地化が完了した古代山城となったのである。

平成６（1994）年からは、総社市教育委員会によって市有地である外郭線の調査が開始され、第１城門（現東門）、水門、角楼、西門、南門の発見や精査などめざましい成果が収められている。これらの考古学的発掘成果は、年次報告として総社市埋蔵文化財調査年報（註３）に掲載され、全国的にも大きな学術的関心が寄せられている。平成17（2005）年の「古代山城 鬼ノ城」（総社市埋蔵文化財発掘調査報告18）の刊行によって、10年に及ぶ歴史学的・考古学的な調査研究成果が結実したとみられている。

今回の確認調査は、以上の成果を踏まえながら、今後の具体的な史跡整備事業を視野に入れ、礎石建物群が発見された範囲を含め、従来発掘調査が行われなかった、おもに県有地部分を中心とした城内の実態を解明するために、国庫補助を受けた県事業として実施する運びとなったものである。

確認調査は、当初予定から約１か月遅れて８月６日から開始した。遅延の理由は、まず自然保護団体「高梁川流域の水と緑をまもる会」から『発掘が結果的に動植物の生態系を壊してしまう恐れがある』などとして、岡山県教育委員会教育長（黒瀬定生教育長）あての「鬼ノ城試掘調査の見直しについて（要望）」（６月14日付）が提出され、ついで「山をまもり鬼城山と深い関わりを持って暮らしてきた地元有志一同」から総社市教育委員会教育長（秋田皓二教育長）あてに「鬼城試掘調査の見直し

について（要望）」（６月22日付）が提出された。さらに、確認調査の実施を見直すように、岡山県倉敷地方振興局長（龍門　巧局長）あてにも「鬼ノ城全面試掘調査に伴う保安林の取り扱いについて(要望)」（７月２日付）が寄せられたためであった。(註４)

関係者による計画の見直しや、熱意ある協議の結果、最終的には７月29日、貴重植物が生息するという湿地帯などを調査対象から外し、さらに調査予定地の事前設定と植生等の確認などの合意が取り交わされ、確認調査実施の運びとなった。「鬼城山埋蔵文化財確認調査の実施について」（７月29日付）の合意内容の要点は、下記のとおりである。

1．トレンチ箇所について

①その決定について保安林内作業許可面積の範囲内で順次行う。

②さらにまもる会、地元、自然保護専門家（県文化財保護審議会関係委員等）の意見を十分聞き入れ、自然保護上、特に問題のある箇所については、場所の変更、場合によっては、箇所の削除を行う。

③水系に変化をきたすようなトレンチは設定しない。その結果、箇所数・確認調査面積の減少は止むを得ないものとする。

2．調査に当たっての自然保護への配慮について

①決定したトレンチ箇所に所在する貴重種について、まもる会等との協議の上、必要な処置を行う。

②帰化植物・自然の生態系に配慮し、原則として重機は入れない。

③まもる会による環境調査は確認調査と平行して行うものとし、環境調査実施のために確認調査を休止する必要はない。

3．調査に当たっての治山上の留意事項について

①保安林内作業許可の基準に従い、確認調査を実施するものとする。作業許可区域の確認調査が終了した時点で、埋め戻しを行い、その後、次の区域の調査に移るものとする。

②樹木の伐採は、必要最小限とする。（大木の伐採は行わない）

4．発掘調査体制について

①作業員の確保に当たっては、過去の経緯を踏まえ、可能な限り地元の人にお願いする。

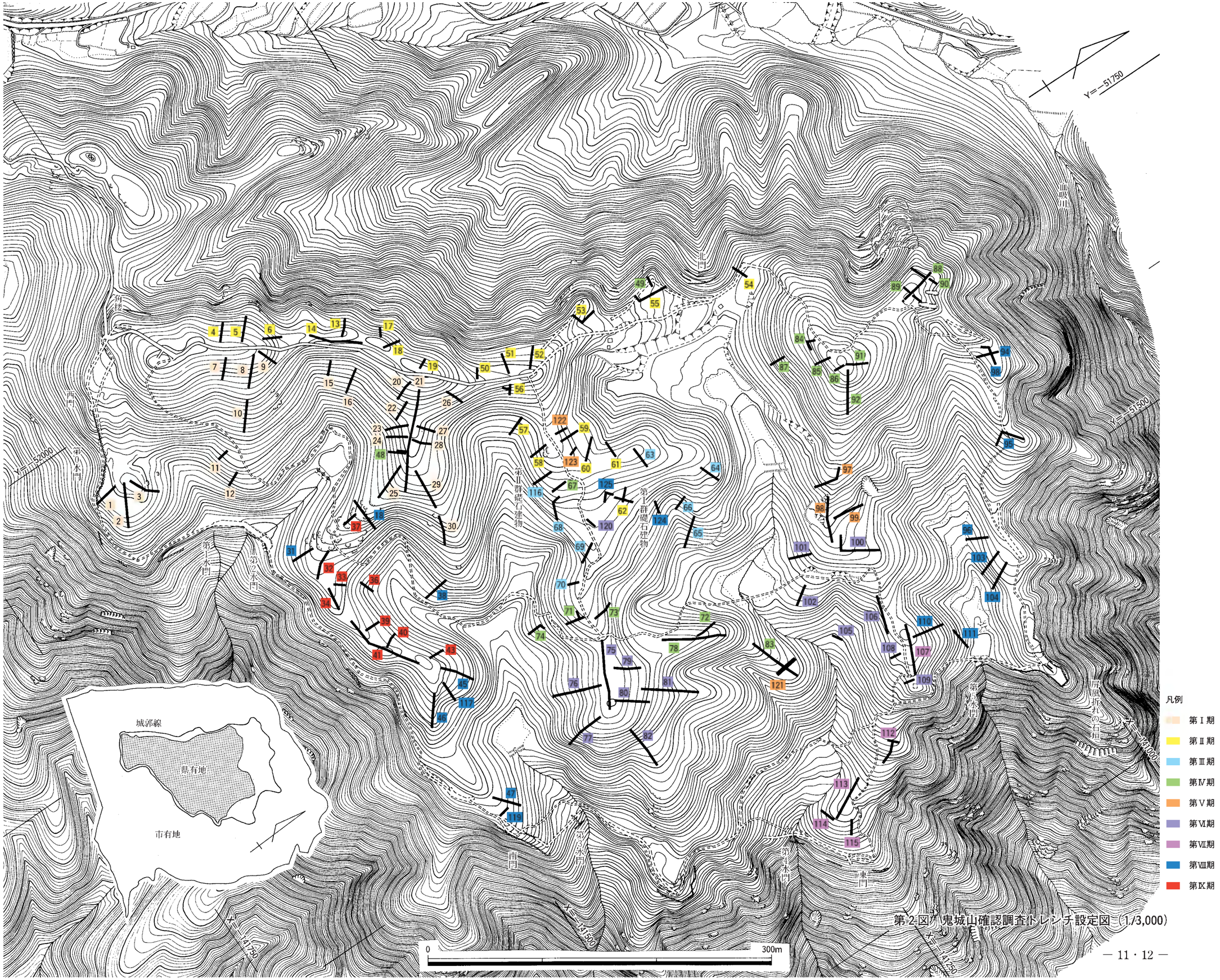
以下略

以上の合意は、岡山県教育庁文化課（松井英治課長）、総社市教育委員会（守長健尚教育次長）、高梁川流域の水と緑をまもる会（室山貴義会長）、山をまもり鬼城山と深い関わりを持って暮らしてきた地元有志一同（牧野勘一代表）が、７月29日に地元有志の会メンバー宅で実現する運びとなり、翌日の新聞各社は、「環境に配慮した合意」、「県教委と市民団体が合意」、「来月にも鬼ノ城試掘開始」などと一斉に報じた。

第２節　確認調査の概要と体制（付日誌抄）

確認調査計画は、当初の予定では城内115か所のトレンチ（試掘坑）を３時期に分割し、計6,000㎡の発掘調査を実施するという規模であった。

トレンチの規模は幅２ｍを基本とし、地形や自然保護の立場から植生への配慮を行いながら規模を決めていくこととした。芝切り作業による表土や掘り上げによる土置き場は、「作業届け出面積」に含まれるため、トレンチの片側に設定する幅１ｍを加算し、基本的には幅３ｍの作業許可を申請してい



第2図　鬼城山確認調査トレンチ設定図（1/3,000）

第１表　確認調査工程表

年月 / 発掘期他	H11 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H12 1月	2月	3月
調査準備												
第Ⅰ期　(1,125㎡)												
第Ⅱ期　(875㎡)												
第Ⅲ期　(300㎡)												
第Ⅳ期　(800㎡)												
第Ⅴ期　(300㎡)												
第Ⅵ期　(910㎡)												
第Ⅶ期　(290㎡)												
第Ⅷ期　(820㎡)												
第Ⅸ期　(410㎡)												
計　5,830㎡												

る。

トレンチの設定は、事前の計画に基づいて、現地に２本の木杭を打設し、その間にテープを張って明示し、自然保護団体の専門家によって周囲に稀少植物などの有無を事前に調査していただいた。その結果、トレンチの位置や規模を変更した場合もあるが、Ｔ35・Ｔ42・Ｔ44の欠番は、この間の事情によって生じた。

なお、このような事前の確認によって保存した植物は、オオミズゴケ・ベニドウダン・アオハダ・ササユリ・ドウダンツツジ・ミヤマウズラのほか、鬼城山では珍しいクロマツがある。

雑木等についても計15㎝程度以上の樹木については、樹種を問わずできるだけ残し、十分な「根鉢」を残すよう指導を受けた。

基本的に木製品などの遺存が期待された湿地帯のトレンチは、移植等提案したが、一切認められなかった。植物以外の動物や昆虫の生息についての制約は、トレンチ設定予定箇所にはなかった。

鬼城山全域は、保安林にも指定されているため、作業許可や実施面積の制約は元より、立木の伐採や発掘後の埋め戻しなど、細心の配慮が求められ、倉敷地方振興局（当時）から有益な御指導・御助言を得ながら進めた。発掘調査の実施と調査後の埋め戻し作業は、一連の作業として完結させることは当然であるが、作業が可能な届け出上限面積2,000㎡には、作業拠点であるテントやトレンチに至る通路、発掘作業で掘り上げた土置き場も含まれ、分割して実施する必要があった。

第Ⅰ期の後半、９月中頃になると、当初予定の３時期に2,000㎡ずつ行うという計画では、埋め戻しが完了するまで次の発掘作業（雑木の伐採を含む）に長期間着手できず、確認調査着手時期が１か月遅れたことも加え、多少の面積減少は止むを得ないとしても、計画面積に近い確認調査の実施が危ぶまれる不安が生じてきた。

このような状況を改善、打開するため、９月16日、急遽文化課と倉敷地方振興局関係部局（農林水産事業部森林課）との協議が行われた。その結果、Ⅲ期はトレンチの数を減らし、Ⅳ期では逆に増やすなど、予定している申請時期を長期・短期と組み合わせて、作業面積計2,000㎡の範囲内で実施するという提案が出された。つまり、300㎡と1,700㎡の申請を組み合わせて行う方法が最善ではないかという結論に辿り着くことになった。同時に、「保安林内作業許可」申請書類を早めに提出させて貰い、それによって、小木の伐採を早めることも可能になるなど助言を受けて、Ⅴ期以降も同様な方法で手続きを行うことを確認した。

以上の経過を経て、11月中頃にはⅨ期までの計画を立案し、最終的にはトレンチ122本、5,830㎡の

第２表　確認調査トレンチ一覧表

発掘期	トレンチ番号	実測面積(㎡)	掲載図	遺　構	出土遺物	備　考
Ⅰ期	Ｔ１	50	第３・４・６図	石敷き	土師器	西門の南東、畠状区間近く
	Ｔ２	80	第３・５・７図	集石土壙		
	Ｔ３	60	第３・８図	土壙		
	Ｔ７	40	第９図			溜井の上方
	Ｔ８	60	第10図		須恵器	
	Ｔ９	40				
	Ｔ10	60	第11図			
	Ｔ11	25	第12図			
	Ｔ12	30	第13図	焼成土壙	須恵器・土師器	
	Ｔ15	30	第14図	加熱面		
	Ｔ16	50	第15図			
	Ｔ20	40	第16図			
	Ｔ21	150	第17～20図	柱穴・土壙	須恵器・土師器	土壙の中に「落し穴」含む
	Ｔ22	40	第17・22・24図	柱穴	須恵器・土師器	
	Ｔ23	45	第17・21図			
	Ｔ24	40	第17・23・25図	炉?	須恵器・土師器多数・石鏃１	
	Ｔ25	65	第17・26～28図	柱穴	須恵器・土師器	
	Ｔ26	35				
	Ｔ27	35	第17・29図		須恵器	
	Ｔ28	35	第17・31図			
	Ｔ29	70	第17・30・32図		須恵器・鉄片	
	Ｔ30	45	第33図			
	(22本)	1125				
Ⅱ期	Ｔ４	40	第36図	集石土壙		
	Ｔ５	50	第37図			
	Ｔ６	40				
	Ｔ13	30	第38図		須恵器	
	Ｔ14	95	第39図			
	Ｔ17	20	第40図			
	Ｔ18	30	第41図			
	Ｔ19	25	第42図			
	Ｔ50	20				
	Ｔ51	40	第43図	土畠痕跡	須恵器	
	Ｔ52	40	第44図	土畠・溝?		
	Ｔ53	55	第45図	土畠		低平な土畠
	Ｔ54	40	第46～49図	版築土畠		北門近く、神籠石状列石
	Ｔ55	65	第50図	土塁		
	Ｔ56	30				
	Ｔ57	40	第51図		須恵器・土師器多数	
	Ｔ58	40	第52図		土師器	
	Ｔ59	40	第53・54図	礎石	瓦・須恵器	新発見の礎石建物６
	Ｔ60	50	第58図			
	Ｔ61	30				
	Ｔ62	60	第59～61図	礎石	須恵器・瓦質土器	第Ⅰ群建物中央
	(21本)	875				
Ⅲ期	Ｔ63	40	第70図		須恵器	
	Ｔ64	40				
	Ｔ65	50	第71図		土師器	
	Ｔ66	30				
	Ｔ68	40	第72・79・80図	柱穴・整地面	緑釉陶器・須恵器・瓦	第Ⅱ群建物東
	Ｔ69	40	第81図			
	Ｔ70	20				
	Ｔ116	40	第72～75・82図	礎石・根石	土師器・須恵器	第Ⅱ群建物中央
	(８本)	300				
Ⅳ期	Ｔ48	30	第17・34・35図	土壙	須恵器・土師器	Ｔ21関連追加トレンチ
	Ｔ49	20	第83・84図	土塁・柱穴		土塁関連追加トレンチ
	Ｔ67	30	第72・76～78図	柱穴・列石	瓦・須恵器・土師器	掘立柱建物が存在する
	Ｔ71	50				
	Ｔ72	40	第85図	土壙		土壙は落し穴?
	Ｔ73	40	第86図			
	Ｔ74	40			土師器	
	Ｔ78	105	第87図	土壙		土壙は落し穴?
	Ｔ83	95	第88図	土壙	須恵器	土壙は落し穴?
	Ｔ84	30				
	Ｔ85	30	第89図		土師器	
	Ｔ86	20	第90図		土師器	
	Ｔ87	30	第91図		土師器	造成痕跡
	Ｔ88	60				
	Ｔ89	30	第92図			
	Ｔ90	40	第93図		鉄器片	
	Ｔ91	40	第94・95図	土壙	石鏃	土壙は落し穴?
	Ｔ92	70	第96図	列石	土師器	
	(18本)	800				

発掘期	トレンチ番号	実績面積(㎡)	掲載図	遺　構	出土遺物	備　考
Ⅴ期	T97	60				
	T98	80	第97図	土壙		土壙は落し穴?
	T99	60				
	T121	60	第98･99図	列石	羽口･須恵器	付近に鍛冶炉?
	T122	20	第100図		瓦･須恵器	
	T123	20	第53･55～57図	礎石(掘方)	瓦･須恵器	T59礎石と礎石建物６を形成
	(６本)	300				
Ⅵ期	T75	120	第101図		土師器	
	T76	90	第102図			
	T77	80	第103図		須恵器	
	T79	50				
	T80	60	第104図			
	T81	100				
	T82	80	第105･106図	土壙	土師器･須恵器	
	T100	100				
	T101	40				
	T102	40	第107図	土壙	土器片･石斧	小型土壙は落し穴?
	T105	20				
	T106	70	第108図			
	T108	20	第109図			
	T109	20	第110図	土壙		
	T120	20	第60･64～67図	礎石	土師器	Ⅰ群礎石建物の１棟
	(15本)	910				
Ⅶ期	T107	90				
	T112	60	第111図			
	T113	80	第112～115図	竪穴遺構	鉄滓･炉壁･砥石	東門近く､鍛冶遺構が存在
	T114	30	第116図			
	T115	30				
	(５本)	290				
Ⅷ期	T31	40	第117図		須恵器･土師器	
	T38	50	第118図			
	T45	60				
	T46	60				
	T47	50	第120図		土師器	
	T93	50				
	T94	40	第119図			
	T95	40	第121図			
	T96	40	第122図			
	T103	50				
	T104	50	第123図			
	T110	60	第124図			
	T111	40	第125～127図	石垣(堤防)	須恵器	第３水門に関連する遺構
	T117	40	第128･129図		須恵器･土師器･鉄滓	
	T118	60				
	T119	20			土師器	
	T124	30	第60･62･63図		土師器	第Ⅰ群礎石建物(城庫２)
	T125	40	第60･68･69図		土師器	第１群礎石建物(城庫４)
	(18本)	820				
Ⅸ期	T32	60				
	T33	20	第132図			
	T34	40	第133図			
	T36	30				
	T37	30				
	T39	30				
	T40	30	第134図		須恵器	
	T41	140			土師器	
	T43	30	第135図			
	(９本)	410				
総面積：5,830					トレンチ総数：122本　※T35・T42・T44は欠番	

調査実績を挙げることが可能となった。あらためて関係部局の御高配と御指導に深謝の意を表する次第である。

なお、確認調査実施にあたっては、事前に下記の届け出が必要で、それらの事務手続きについては、すべて文化課が担当した。

（１）吉備史跡県立自然公園普通地域内における土地の形状変更届

（２）保安林内立木伐採届出

（３）保安林内作業許可の行為着手届・行為終了（中止）届～森林法に基づく手続き

発掘調査実施の体制

平成11（1999）年度

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬　定生

岡山県教育庁

教育次長	宮野　正司

文化課

課長	松井　英治
課長代理	佐々部　和生
参事	正岡　睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長）	松本　和男
文化財保護主任	大橋　雅也
主任	奥山　修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長	葛原　克人
次長	大村　俊臣

〈総務課〉

課長	小倉　昇
課長補佐（総務係長）	安西　正則
主査	山本　恭輔

〈調査第一課〉

課長	高畑　知功
課長補佐（第二係長）	下澤　公明
文化財保護主幹（調査担当）	岡田　博
文化財保護主任（調査担当）	亀山　行雄

報告書作成

平成17（2005）年度

岡山県教育委員会

教育長	宮野　正司

岡山県教育庁

教育次長	釜瀬　司

文化財課

課長	芦田　和正
参事	田村　啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）	平井　泰男
主任	小林　利晴

岡山県古代吉備文化財センター

所長	松本　和男
次長（総務課長）	内田　猛
参事	平松　郁男
参事	高畑　知功

〈総務課〉

総括副参事（総務班長）	若林　一憲
主任	小川　紀久

〈調査第一課〉

課長（作成担当）	岡田　博

なお、付章に掲載する池ノ下散布地の試掘調査については、早くから堤防状の地形が注目されていた。かつて総社市教育委員会によって、小規模な試掘調査が行われた経緯もある。

第９回鬼城山整備委員会の席上、調査が可能ならば実施すべきとの意見があり、総社市教育委員会の全面的な支援を受けて現地試掘調査が実現したものである。

総社市教育委員会（平成11年度）

教育長	秋田　皓二
教育次長	守長　健尚
文化財室長	加藤　信二
主事	前角　和夫
主事	松尾　洋平

〔埋蔵文化財学習の館〕

館長	村上　幸雄

文化財保護法に基づく提出書類一覧

（１）国指定史跡の原状変更許可申請（第80条）

申請文書 番号　日付	種類及び名称	所在地	目的	主体者	期間	処理の内容・理由	許可文書番号日付
教文保 第1302号 H11.12.20	史跡 鬼城山	総社市黒尾1141外	発掘調査	岡山県知事 石井正弘	許可日～H12.3.31	・工事に際しては、岡山県教育委員会職員の指示に従う。	委保第4の503号 平成11年7月2日

（２）試掘確認の報告

岡山県文書 番号　日付	周知・周知外	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	包蔵地の有無	報告者	担当者	期間
H12.3.30	周知	鬼城山遺跡	総社市奥坂1763-１	5,830	遺跡整備	有	岡山県古代吉備文化財センター	岡田　博	H11.8.6～ H12.3.29

（３）第98条の２

岡山県文書 番号　日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期間
教文埋 第1605号 H12.2.24	池ノ下散布地	総社市西阿曽701-１ ほか	162	国指定史跡（鬼城山） 整備事業	岡山県教育委員会 教育長　黒瀬定生	亀山行雄	H12.2.14～ H12.3.31

（４）遺物発見通知

岡山県文書 番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋 第1701号 H12.3.10	土器（土師器・須恵器）陶器（備前焼・唐津焼）木製品、銅銭等計１箱	総社市西阿曽701-１ ほか 池ノ下散布地	H12.2.14～ H12.3.31	岡山県教育委員会 教育長　黒瀬定生	岡山市山崎335-18 松下　ほか	岡山県古代吉備文化財センター

岡山県文書 番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋 第1816号 H12.3.31	土器（土師器・須恵器・緑釉陶器）、瓦（平瓦・丸瓦・瓦塔）、鉄滓、炉壁、砥石計８箱	総社市奥坂1763-１ ほか 鬼城山	H11.8.6～ H12.3.29	岡山県教育委員会 教育長　黒瀬定生	岡山県知事　石井正弘 総社市長　竹内洋三	岡山県古代吉備文化財センター

註

（註１）高橋　護「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』117号　ニューサイエンス社　1976年

（註２）坪井清足ほか「鬼ノ城」鬼ノ城学術調査委員会　1980年

（註３）「鬼城山第１城門遺構の調査」（総社市埋蔵文化財調査年報５　平成６年度　1996年　総社市教育委員会）に始まる。鬼城山の発掘調査報告書としては、「古代山城　鬼ノ城」が刊行されている。（総社市埋蔵文化財発掘調査報告18　総社市教育委員会　2005年）

（註４）「高梁川流域の自然」第20号に鬼城山発掘調査見直し運動の報告、要望書、見直し要望の合意、終結についての記録がすべて掲載されている。高梁川流域の水と緑をまもる会　1999年10月10日発行

調査日誌抄

平成11（1999）年

8月6日（金）　発掘資材搬入、第Ⅰ期確認調査開始。葛原所長の挨拶の後、Ｔ４から作業着手し、報道関係者に公開。

27日（金）　Ｔ１下位で敷石検出。

9月3日（金）　Ｔ22で柱穴状土壙を検出、石鏃のほかＴ24で須恵器片多数の出土を確認。

9日（木）　葛原所長来跡、現状説明する。

25日（土）　高梁川流域の水と緑をまもる会（室山貴義会長）から鬼ノ城発掘調査関係機関あてに「鬼ノ城試掘調査事業に伴う環境保全について」（お願い）で下記の点が申し入れられた。要点を記す。

1．トレンチ調査終了箇所の後終いについて。

・作業道の閉鎖措置と一般者の立ち入りを防ぐ。

【理由】帰化植物の進入を防ぐ・植生の

回復、復元を早める・植物の盗掘防止
・事故、火災の防止
2．環境調査に対する支援について
・総社市の支援のもと鬼ノ城環境調査が実施されているが、これについて可能な限り便宜を図ること。環境調査団の意見には充分配慮すること。
3．トレンチ箇所に於ける樹木の保護対策について
・トレンチ箇所の樹木の保護が不十分である。根鉢の範囲を十分に残し、残置樹木の保護に努めて下さい。

10月１日（金）　第Ⅱ期確認調査開始。
19日（火）　山口副知事視察、松井文化課長、松本補佐同道。T59で礎石建物新発見。
20日（水）　総社市教育長、教育次長、文化財室長視察。T54版築土塁の断面確認。
25日（月）　T59新発見の礎石建物、記者発表。
11月１日（月）　10月27日付けで、榎本敬氏（岡山大学資源生物科学研究所）から「トレンチ予定箇所の植物について」で、当初から予定されていた119か所のトレンチについての調査が終了し、『出現頻度が低く貴重と考えられる植物』について県教委・総社市教委あてに報告。
８日（月）　第Ⅲ期確認調査開始。
11日（木）　文化庁坂井秀弥調査官視察、文化課・センター・総社市教育次長ほか同道。
12日（金）　葛原所長、小田富士雄福岡大学教授、武末純一同助教授、亀田修一岡山理科大学助教授来跡、案内。
19日（金）　第Ⅳ期確認調査開始。
22日（月）　村上館長、王綿厚中国遼寧省博物館長、徐光輝龍谷大学講師、西川宏氏案内。
25日（木）　県文化財保護審議会委員視察、狩野久・高橋護両先生から御指導賜る。
29日（月）　T68で造成面確認、緑釉陶器片出土。
30日（火）　榎本敬氏（岡山大学資源生物科学研究所）から「トレンチ予定箇所の植物について」（11月29日付）で、その後追加したトレンチ８か所についての調査終了報告を受け取る。
12月２日（木）　予算ヒアリング、鬼城山整備委員会打合せ会出席。
６日（月）　T54版築土塁ビデオ撮影実施。午後、鬼城山西側の犬墓山から写真撮影。
14日（火）　T83下位列石について、地元作業員最高齢の牧野勘一氏に確認して貰う。明治期の砂防工事による構築ではないとご教示を得る。
17日（金）　第９回鬼城山整備委員会開催。総社市の西門調査の説明に続き、城内調査の説明を行う。
22日（水）　T87で道状の造成部分を確認。
27日（月）　年内の現場作業終了。

平成12（2000）年
１月５日（月）　現場作業再開、第Ⅴ期確認調査開始。17日（水）第Ⅵ期確認調査開始。
24日（月）　T116付近で瓦塔片採集、T121で須恵器のほか鞴羽口片確認。
31日（月）　午後、T54版築土塁の剥ぎ取り作業。
２月17日（木）　第Ⅶ期確認調査開始。
24日（木）　文化庁小林克調査官来跡、文化課正岡参事、松本補佐同道。
28日（月）　第Ⅷ期確認調査開始。
３月１日（水）　第10回鬼城山整備委員会開催。
２日（木）　陸上自衛隊（日本原駐屯地第13特科連隊本部）、幹部教育の一環として40名見学。
10日（金）　T54土層断面剥ぎ取り標本、表装してセンター到着、写真撮影。
17日（金）　第Ⅸ期確認調査開始。
24日（金）　T111埋め戻し作業に続きT35埋め戻しに着手、最後のトレンチ。
28日（火）　県文化財保護審議委員会視察。
29日（水）　現場撤収開始。
30日（木）　センターにて各種起案、完了届けについて文化課に報告。
31日（金）　確認調査完了。

第３章　確認調査報告

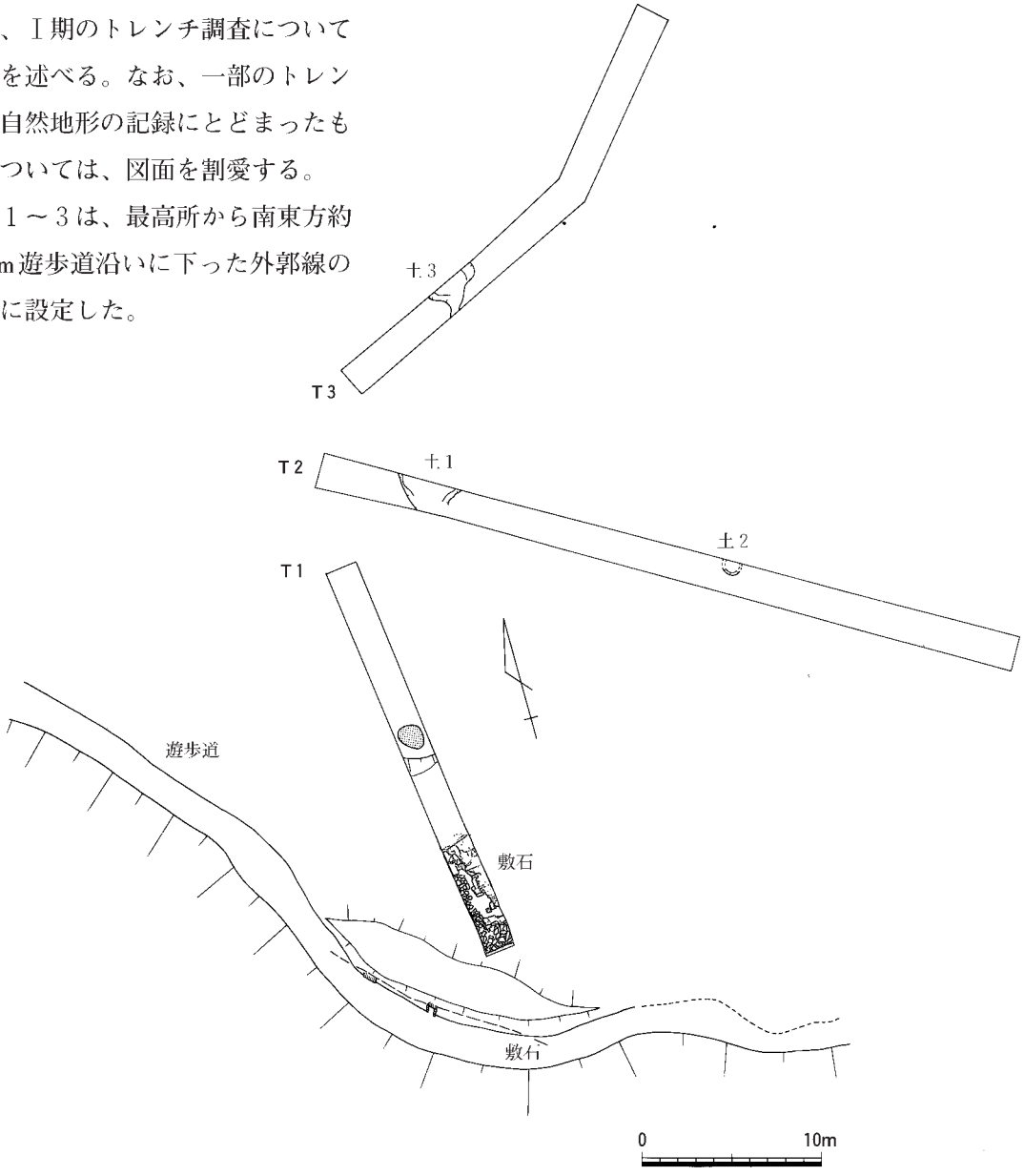
第１節　第Ⅰ期の確認調査概要

すでに述べたとおり、基本的に鬼城山の南端の最高所周辺からほぼ時計回りに、城内および未調査の西縁城郭線に試掘溝（トレンチ）を設定した。

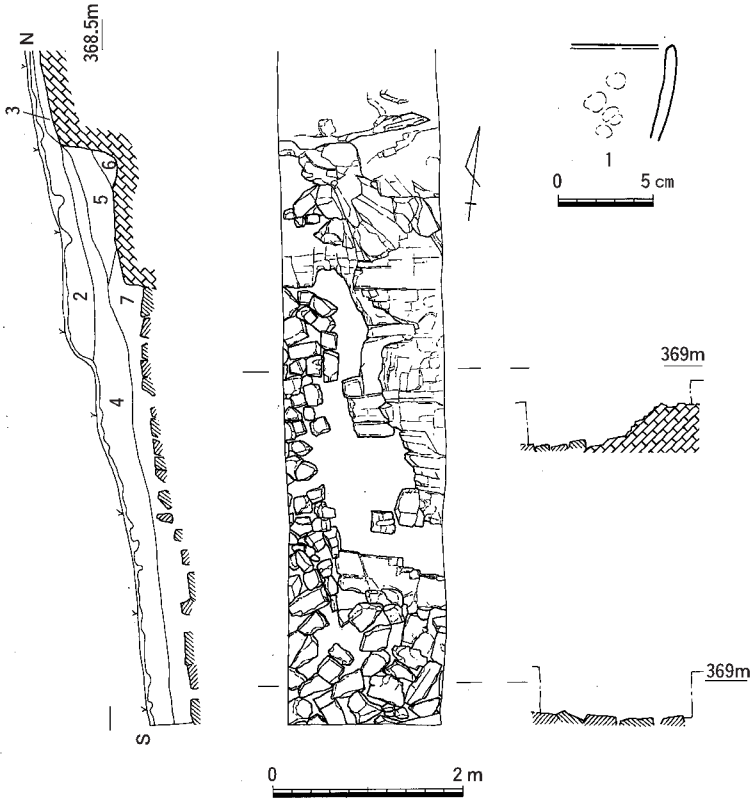
Ⅰ期の確認調査は、第１表に掲げるように盛夏の８月６日から開始した。初日に発掘調査に着手したのは、最高所の北寄り緩斜面に設定したＴ７で、これは報道関係者等に今回の確認調査の具体的な作業方法を公開するためでもあった。

以下、Ⅰ期のトレンチ調査について概要を述べる。なお、一部のトレンチ、自然地形の記録にとどまったものについては、図面を割愛する。

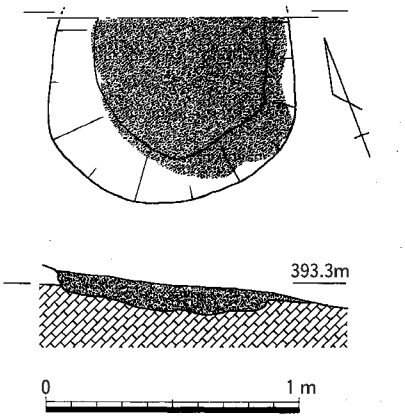
Ｔ１～３は、最高所から南東方約100ｍ遊歩道沿いに下った外郭線の内側に設定した。



第３図　Ｔ１～３配置図（1/400）



第４図　Ｔ１石敷き・出土遺物（1/80・1/4）



第５図　Ｔ２土壙２（1/30）

いずれも樹木が繁った、わずかに起伏に富む比較的平坦な場所で、Ｔ１のすぐ南には、敷石が遊歩道に露見している。

南北方向に設定したＴ１では、中ほどに段があり、そのすぐ北側地山上面に直径1.2ｍほどの赤変した不整円形部分が検出された。大規模な城壁築成や土木工事が行われたすぐ近くのエリアでもあり、このような位置にあった作業拠点で火が使われた可能性もある。

Ｔ１の中ほどの段から南には、花崗岩とアプライト（半花崗岩）を使った敷石遺構が存在し、後年全貌が明らかとなった第０水門上部の敷石遺構の一部であることがわかった。敷石は、水平に敷き詰められたのではなく、緩やかに南に傾斜している。

敷石遺構付近から甑の口縁部片とみられる土師器１が出土しており、先に述べた加熱痕跡との関わりも十分に考えられる。

また、敷石東半部には自然の露頭岩がそのまま残っているが、段の延長部はＴ２では検出されていない。

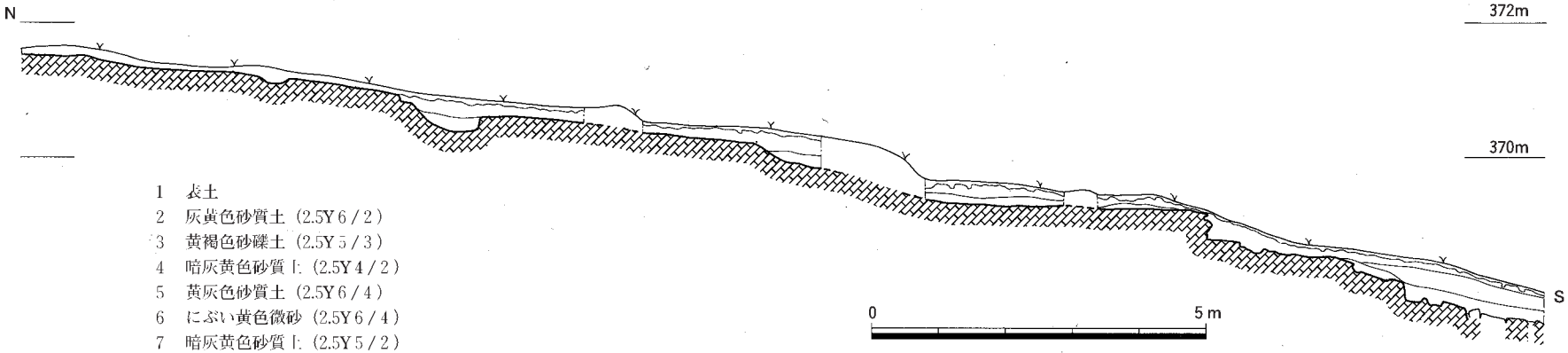
Ｔ２では、土壙２基が検出された。土壙１は、トレンチの高位平坦面で検出されたやや大型の土壙で、下層には炭を含む埋積土が確認されている。底面は比較的平らで、人工的に掘りこまれた遺構であることは確実とみられる。

土壙２は、緩やかな斜面で検出された木炭片が埋積した浅い土壙である。出土遺物は認められないが、土壙１と同様人工的に掘りこまれた遺構と考えられる。

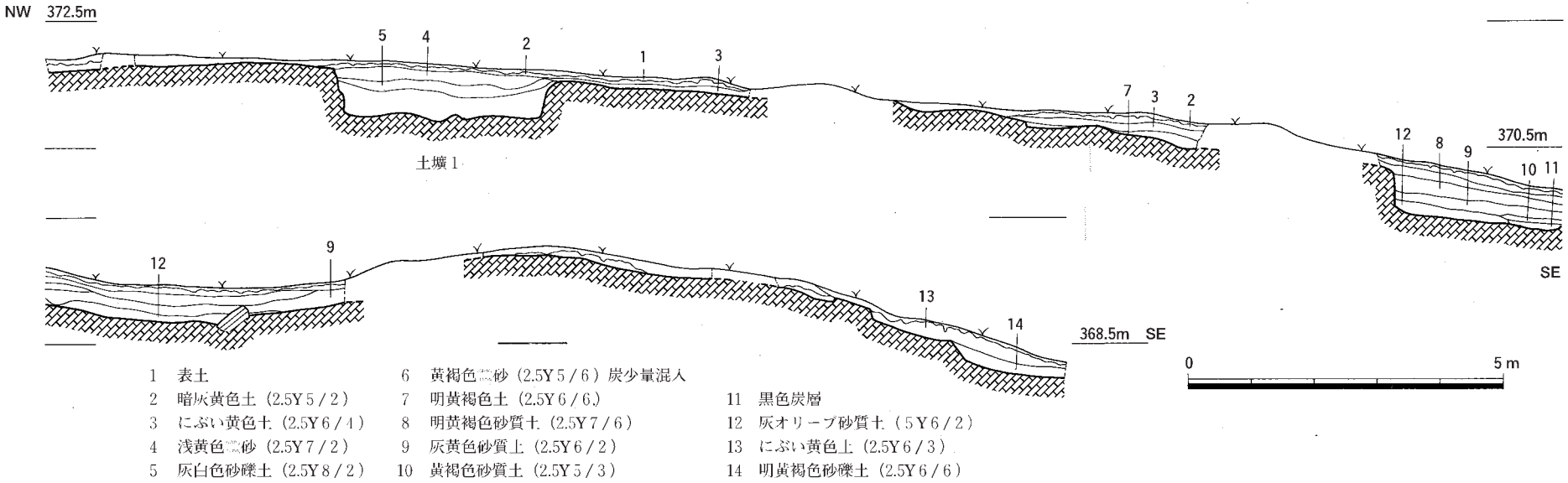
Ｔ３はＴ２の北側に設定し、上位西側平坦部で土壙３が検出された。土壙１と同様、やや大型の土壙で、底面は平らである。埋積土中には多くの花崗岩礫を含む。

Ｔ７は、最高所から北東方向約50ｍに設定したトレンチである。緩やかな斜面で、下方にはわずかながら地山を整形した痕跡も観察される。土層の中には炭を含む層もある。

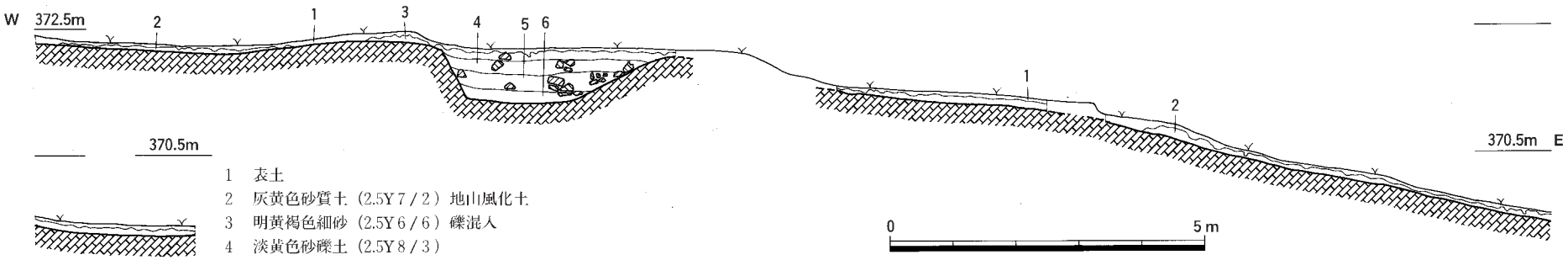
Ｔ８は、Ｔ７からさらに北東方向の緩やかな斜面に設定したトレンチで、２の須恵器片が出土して



第６図　Ｔ１土層断面図（1/100）

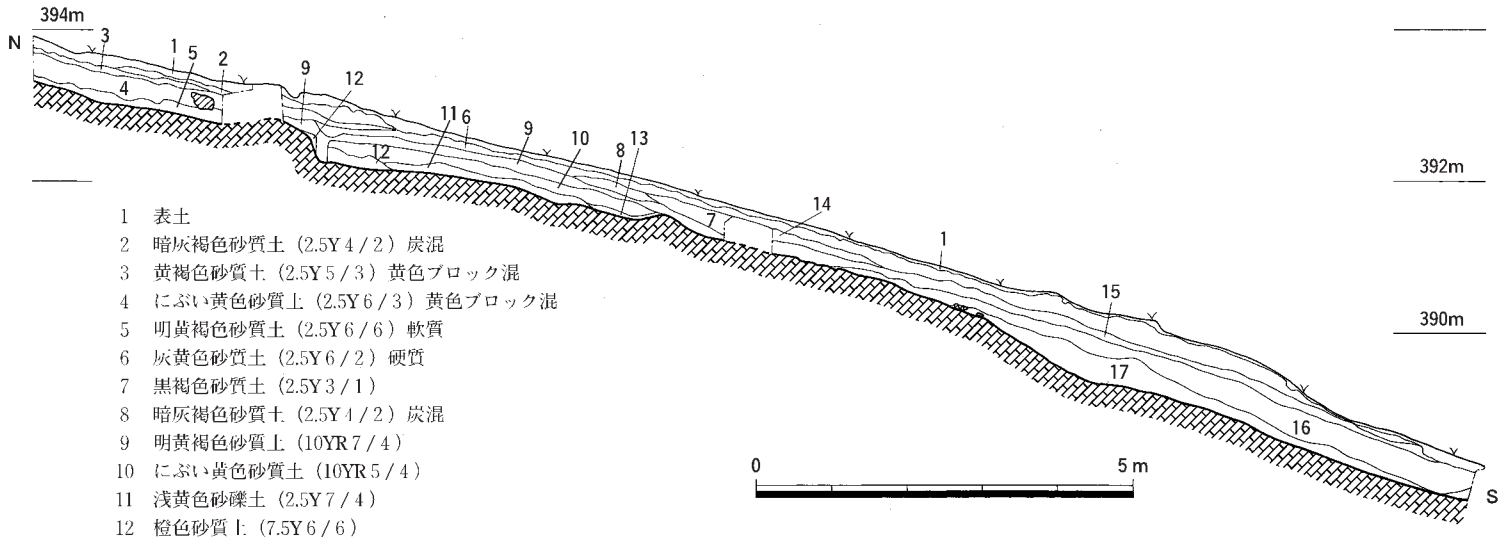


第７図　Ｔ２土層断面図（1/100）



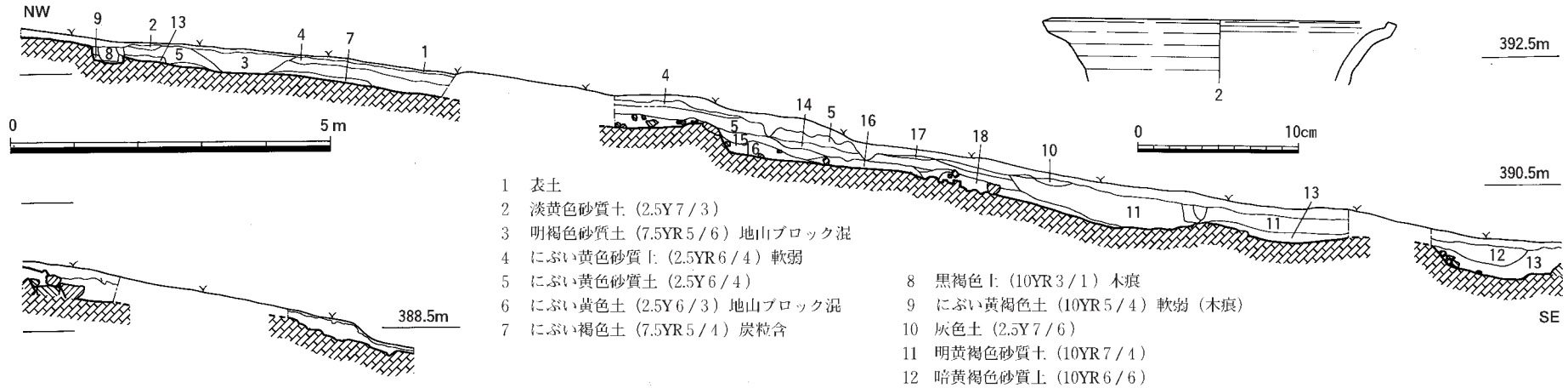
1　表土
2　灰黄色砂質土（2.5Y７/２）地山風化土
3　明黄褐色細砂（2.5Y６/６）礫混入
4　淡黄色砂礫土（2.5Y８/３）
5　灰黄色礫土（2.5Y７/２）礫多含
6　にぶい黄色砂礫土（2.5Y６/３）礫多含

第８図　Ｔ３土層断面図（1/100）



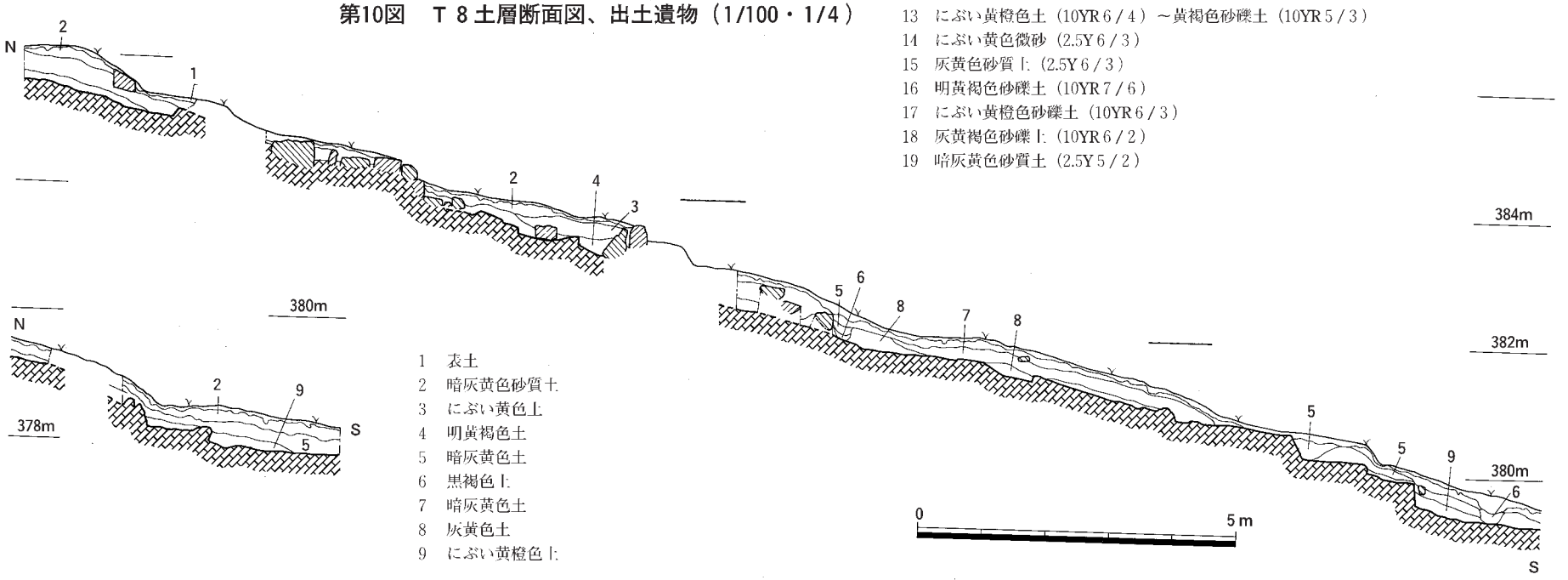
1　表土
2　暗灰褐色砂質土（2.5Y４/２）炭混
3　黄褐色砂質土（2.5Y５/３）黄色ブロック混
4　にぶい黄色砂質土（2.5Y６/３）黄色ブロック混
5　明黄褐色砂質土（2.5Y６/６）軟質
6　灰黄色砂質土（2.5Y６/２）硬質
7　黒褐色砂質土（2.5Y３/１）
8　暗灰褐色砂質土（2.5Y４/２）炭混
9　明黄褐色砂質土（10YR７/４）
10　にぶい黄色砂質土（10YR５/４）
11　浅黄色砂礫土（2.5Y７/４）
12　橙色砂質土（7.5Y６/６）
13　にぶい黄色砂質土（2.5Y６/３）
14　暗灰黄色砂質土（2.5Y５/２）炭含
15　黄色砂礫土（2.5Y４/１）～黄灰色砂質土（2.5Y５/１）地山ブロック含
16　灰黄色砂質土（2.5Y７/４）灰色土混
17　浅黄色砂礫土（2.5Y７/４）軟質

第９図　Ｔ７土層断面図（1/100）



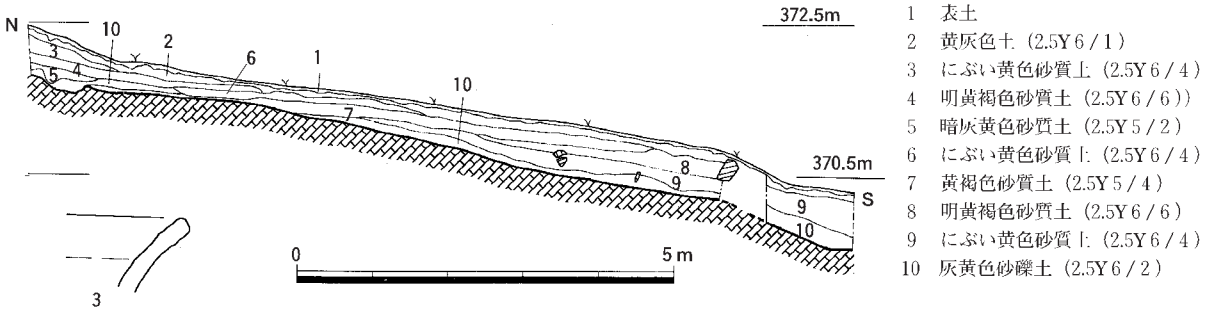
1　表土
2　淡黄色砂質土（2.5Y 7 / 3）
3　明褐色砂質土（7.5YR 5 / 6）地山ブロック混
4　にぶい黄色砂質土（2.5YR 6 / 4）軟弱
5　にぶい黄色砂質土（2.5Y 6 / 4）
6　にぶい黄色土（2.5Y 6 / 3）地山ブロック混
7　にぶい褐色土（7.5YR 5 / 4）炭粒含
8　黒褐色土（10YR 3 / 1）木痕
9　にぶい黄褐色土（10YR 5 / 4）軟弱（木痕）
10　灰色土（2.5Y 7 / 6）
11　明黄褐色砂質土（10YR 7 / 4）
12　暗黄褐色砂質土（10YR 6 / 6）
13　にぶい黄橙色土（10YR 6 / 4）～黄褐色砂礫土（10YR 5 / 3）
14　にぶい黄色微砂（2.5Y 6 / 3）
15　灰黄色砂質土（2.5Y 6 / 3）
16　明黄褐色砂礫土（10YR 7 / 6）
17　にぶい黄橙色砂礫土（10YR 6 / 3）
18　灰黄褐色砂礫土（10YR 6 / 2）
19　暗灰黄色砂質土（2.5Y 5 / 2）

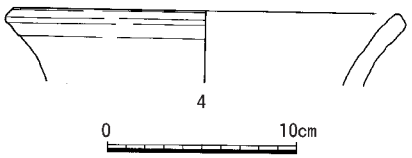
第10図　Ｔ８土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）



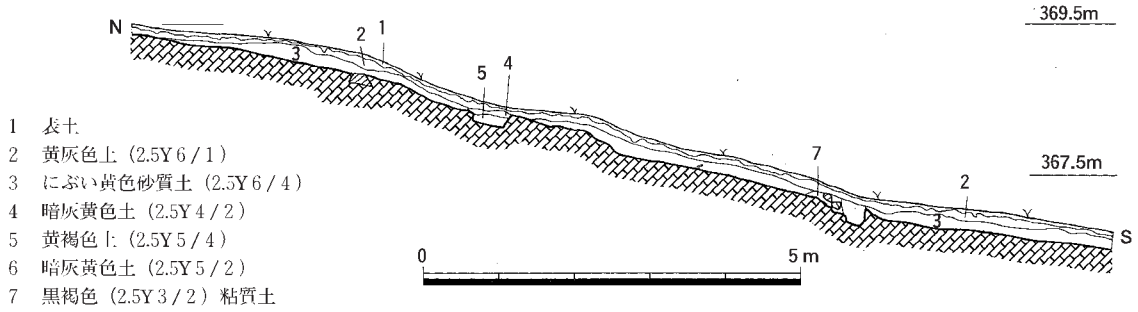
1　表土
2　暗灰黄色砂質土
3　にぶい黄色土
4　明黄褐色土
5　暗灰黄色土
6　黒褐色土
7　暗灰黄色土
8　灰黄色土
9　にぶい黄橙色土

第11図　Ｔ10土層断面図（1/100）

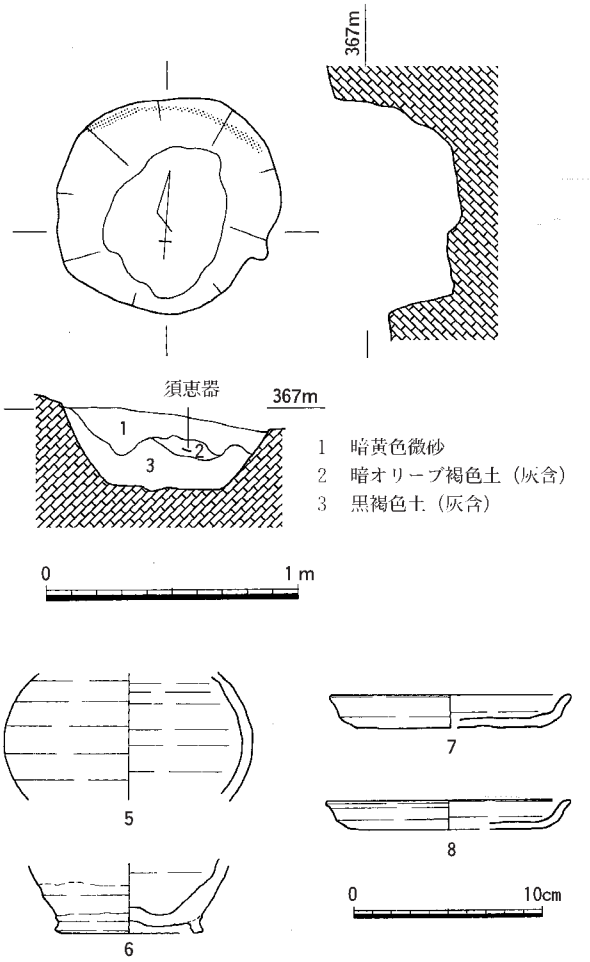




第12図　Ｔ11土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）



第13図　Ｔ12土層断面図、土壙、出土遺物
（1/100・1/30・1/4）



いる。小片であるが、古代Ⅰ期あるいは、Ⅱ期に比定される甕か壷の口頸部であろう。

Ｔ10は、Ｔ８の南東方下方延長部に設定し、緩やかな斜面にあたる。上位から山石である花崗岩の露頭が目立つ。平面的な遺構は元より、明瞭な造成痕跡は認められない。

Ｔ11は、Ｔ10と小道をはさんで南下方に設定した。緩やかな斜面であるが、高位では平坦である。出土遺物には**３・４**の須恵器があり、いずれも古代Ⅰないし Ⅱ期に比定される甕の口頸部片であろう。

Ｔ12はＴ11の北東側緩斜面に設定したトレンチで、初めて遺物を伴う明瞭な遺構が検出された。第13図に掲げるやや不整な円形を呈する土壙がそれで、周壁に被熱による赤変が認められ、埋積土には炭が顕著に含まれる。出土遺物には**６**の須恵器がある。高台をもつ

壷で、同一個体の小片も土壙の埋積土中層から少量出土している。

周辺からの出土遺物には5の須恵器と6・7の土師器がある。5は球形を呈する壷の体部、7・8は土師器杯で、いずれも古代Ⅱ期でも後半に比定されるだろう。

T15・16は、T８を設定した尾根と後述のT21を設定した尾根の中間にあたる谷部に設定したトレンチで、比較的急斜面である。低い地形での土地利用や、遺物の流れ込みを期待したが、いずれの成果も得られなかった。

T20は、T15の北西方のやや高所に設定したトレンチである。地山面では、下位では溝状のくぼみなどが認められるが、平面的な広がりは不明である。

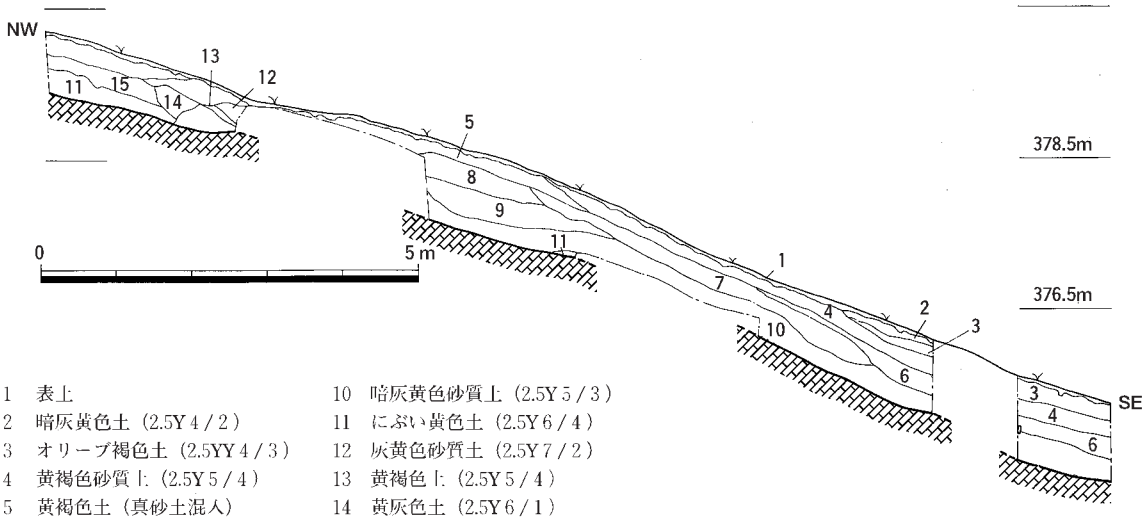
T21は、今回の確認調査では最長のトレンチで、城内遺構の存在が期待された比較的平坦部分をもつ尾根線上に設定した。

雑木林の中での発掘実施、一方で樹木の保全について気を配りながら残暑の厳しい８月下旬から９月にかけての調査は、蒸し風呂の中での作業であった。

第17図に掲げるように、最終的にT21を中心ラインとし、両側に８本のトレンチを設定した。T24から南東方でおもに須恵器を中心とした出土遺物が目立ち、土壙や柱穴も検出されている。なお、T48は、Ⅳ期に追加設定したトレンチで、出土遺物はもっとも多い。

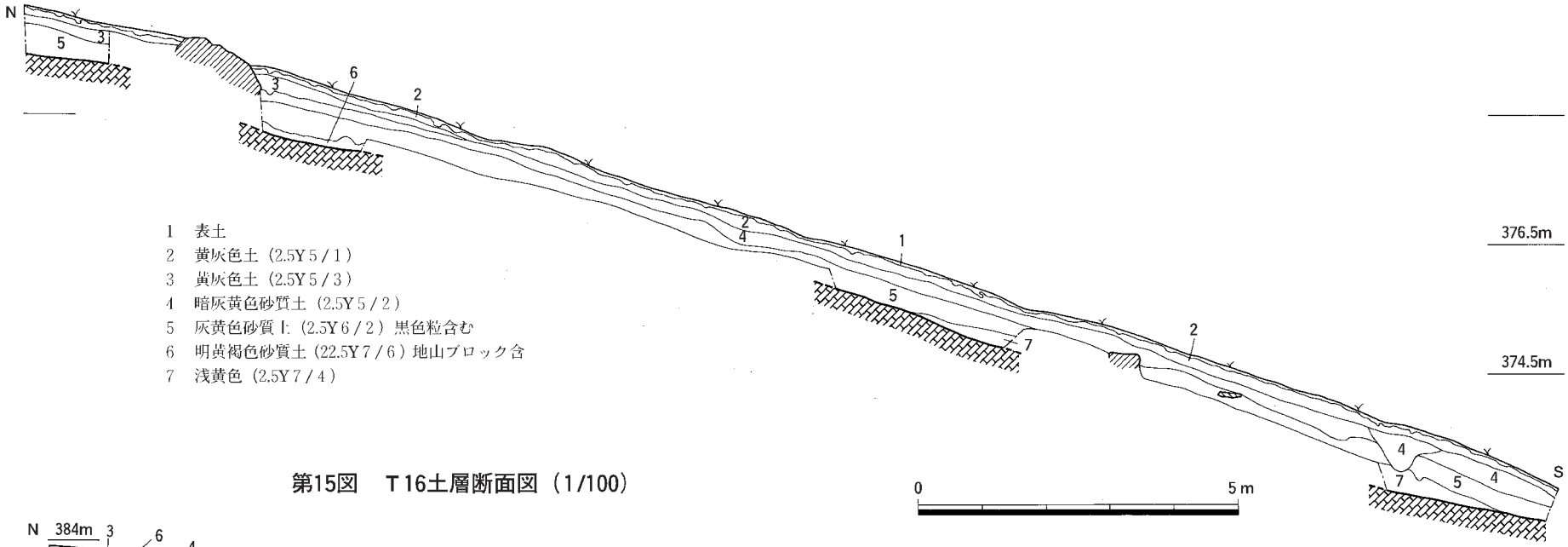
T21で検出された遺構については、第17～19図に掲載する。土壙１は、比較的平坦な地点で検出された不整形な土壙である。焼土や炭を含む埋積土は付近での居住や日常生活の営みを示していると推察される。出土遺物には9・10の須恵器があり後者は完形に近い残存状態である。時期的には、古代ⅠからⅡ期前半に比定されるだろう。土壙の壁面の一部には、加熱痕跡があるが全体の規模は明らかでない。のちにT48を設定したが、土壙の延長部は現れなかった。

土壙２は、形状から柱穴と考えていたが、古代以前の「落し穴」が検出されたことから、その可能性も指摘しておきたい。出土遺物が認められないので、時期的な断定は避けたい。



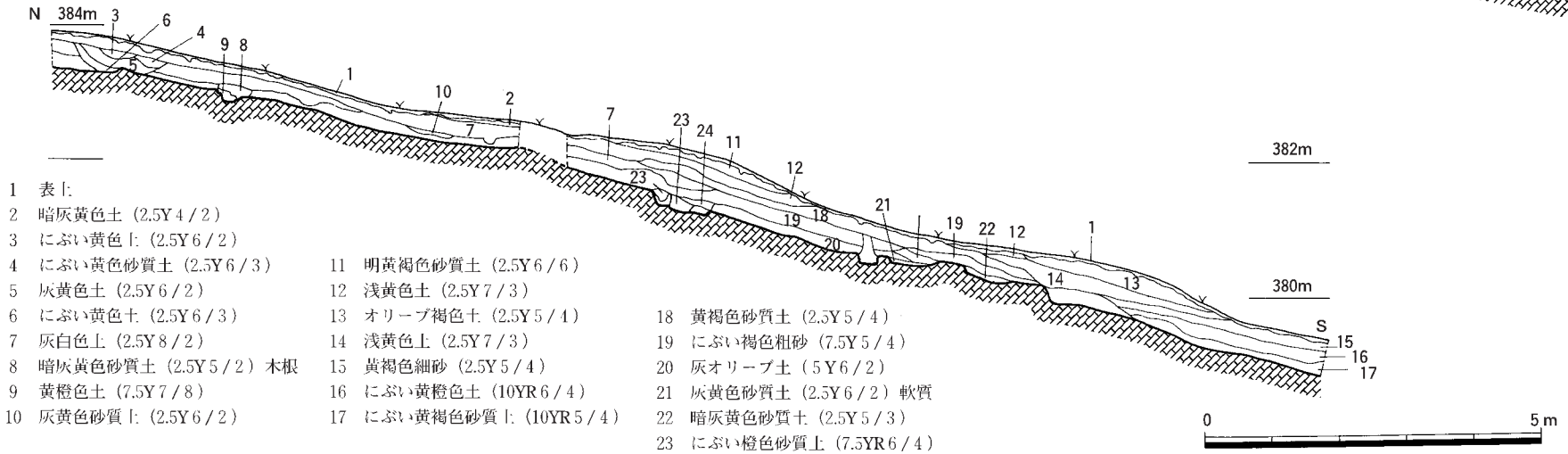
1　表土
2　暗灰黄色土（2.5Y４/２）
3　オリーブ褐色土（2.5YY４/３）
4　黄褐色砂質土（2.5Y５/４）
5　黄褐色土（真砂土混入）
6　暗灰黄色土（2.5Y４/２）
7　黄褐色砂質土（2.5Y５/３）
8　にぶい黄色砂質土（2.5Y６/４）
9　黄褐色砂質土（2.5Y５/４）
10　暗灰黄色砂質土（2.5Y５/３）
11　にぶい黄色土（2.5Y６/４）
12　灰黄色砂質土（2.5Y７/２）
13　黄褐色土（2.5Y５/４）
14　黄灰色土（2.5Y６/１）
15　明黄褐色土（2.5Y７/６）
16　暗灰黄色土（2.5Y５/２）～灰黄色土（2.5Y６/２）黒色土混
17　にぶい黄色土（2.5Y６/３）
18　にぶい黄色土（2.5Y６/３）

第14図　T15土層断面図（1/100）



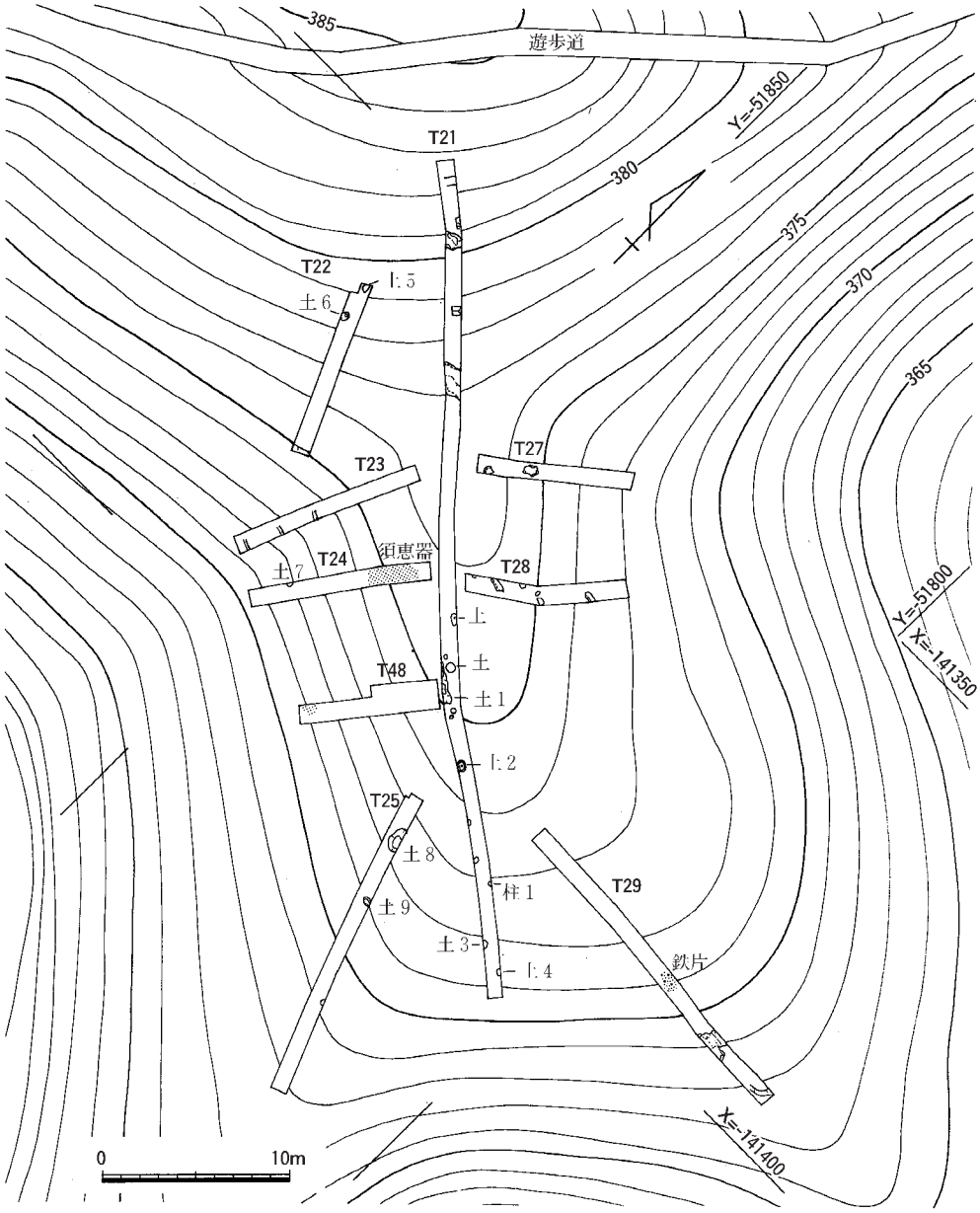
1　表土
2　黄灰色土（2.5Y５/１）
3　黄灰色土（2.5Y５/３）
4　暗灰黄色砂質土（2.5Y５/２）
5　灰黄色砂質土（2.5Y６/２）黒色粒含む
6　明黄褐色砂質土（22.5Y７/６）地山ブロック含
7　浅黄色（2.5Y７/４）

第15図　Ｔ16土層断面図（1/100）

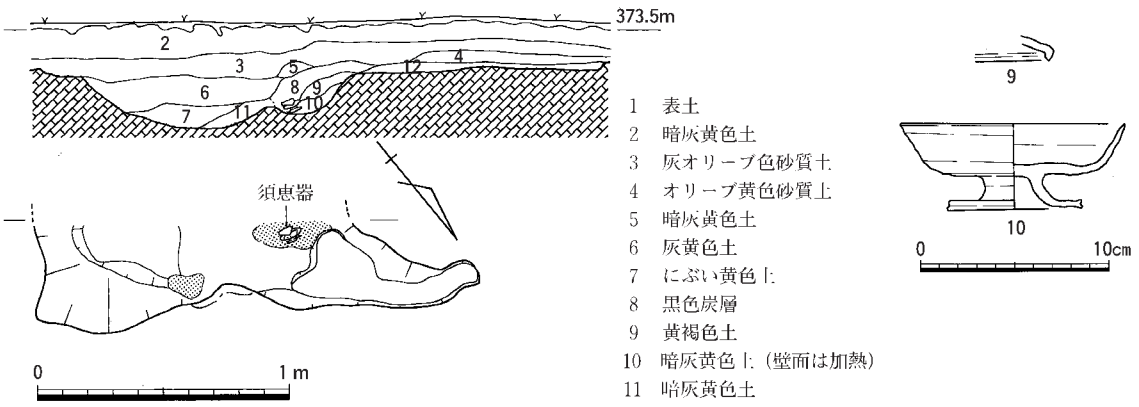


1　表土
2　暗灰黄色土（2.5Y４/２）
3　にぶい黄色土（2.5Y６/２）
4　にぶい黄色砂質土（2.5Y６/３）
5　灰黄色土（2.5Y６/２）
6　にぶい黄色土（2.5Y６/３）
7　灰白色土（2.5Y８/２）
8　暗灰黄色砂質土（2.5Y５/２）木根
9　黄橙色土（7.5Y７/８）
10　灰黄色砂質土（2.5Y６/２）
11　明黄褐色砂質土（2.5Y６/６）
12　浅黄色土（2.5Y７/３）
13　オリーブ褐色土（2.5Y５/４）
14　浅黄色土（2.5Y７/３）
15　黄褐色細砂（2.5Y５/４）
16　にぶい黄橙色土（10YR６/４）
17　にぶい黄褐色砂質土（10YR５/４）
18　黄褐色砂質土（2.5Y５/４）
19　にぶい褐色粗砂（7.5Y５/４）
20　灰オリーブ土（５Y６/２）
21　灰黄色砂質土（2.5Y６/２）軟質
22　暗灰黄色砂質土（2.5Y５/３）
23　にぶい橙色砂質土（7.5YR６/４）
24　にぶい黄色砂質土（2.5Y６/４）溝埋土

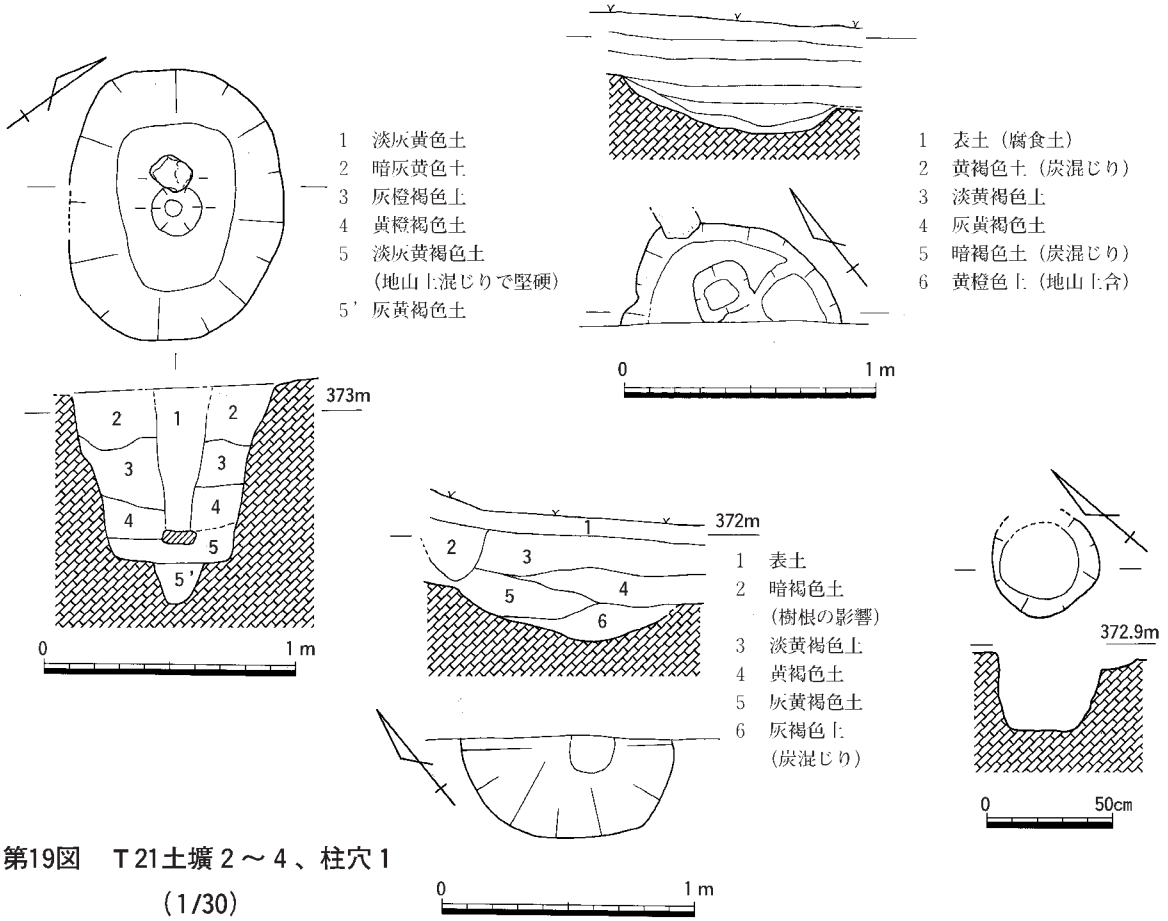
第16図　Ｔ20土層断面図（1/100）



第17図　Ｔ21～25、Ｔ27～29、Ｔ48配置図（1/400）



第18図　Ｔ21土壙１、出土遺物（1/30・1/4）

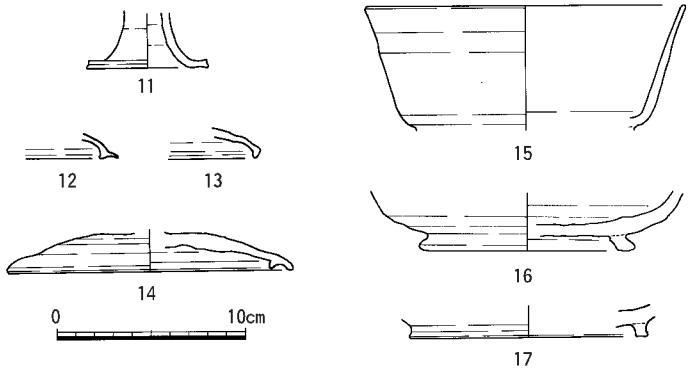


第19図　Ｔ21土壙２～４、柱穴１
（1/30）

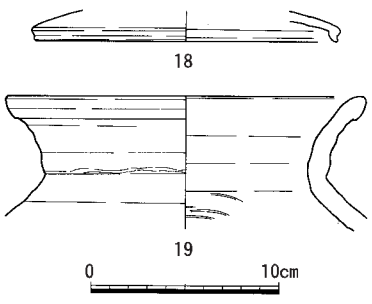
土壙３・４は、いずれもＴ21南端付近で検出された浅い土壙で、前者には埋積土には炭が含まれる。出土遺物は認められないが、付近からは第20図に掲げる11・13・14・16・17などの須恵器が出土している。

柱穴１は、径約45㎝、深さ約40㎝ほどの円形を呈する柱掘り方で、地山を掘りくぼめている。周辺の拡張によって建物の平面的な規模は判明すると思われる。

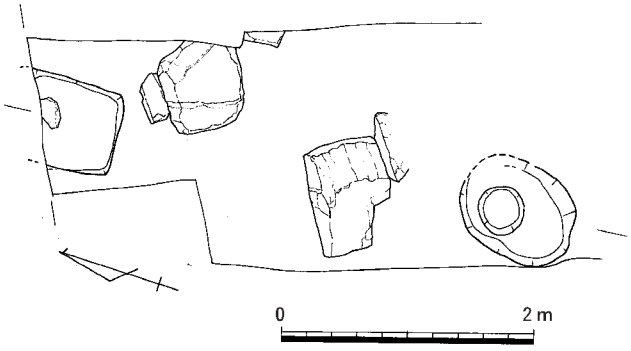
Ｔ22はＴ21の上位南西方に設定したトレンチである。発掘着手間もなく、土壙５と土壙６を検出し、当時は柱穴と考えていた。第22図のように、それぞれに大きなレベル差があり、同一の建物を構成する可能性は少ないと判断される。また一方で、古代以前の「落し穴」の可能性も捨てきれず、古代に比定される遺構とするには、やはり周辺の平面的精査を待たねばならないだろう。

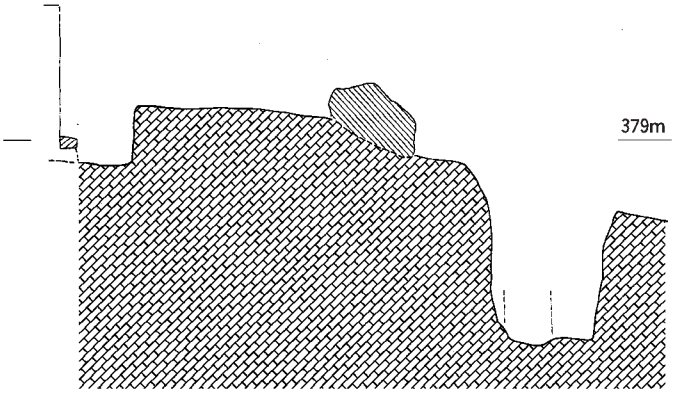


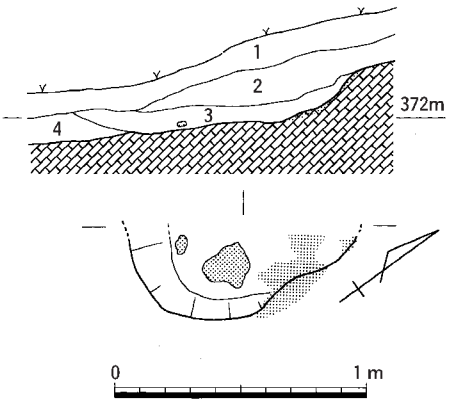
第20図　Ｔ21出土遺物（1/4）



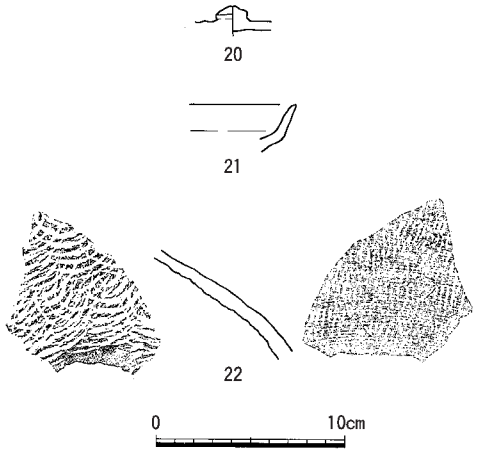
第21図　Ｔ23出土遺物（1/4）







第23図　Ｔ24土壙７（1/30）



第22図　Ｔ22土壙５・６、出土遺物
（1/60・1/4）

ただ、このトレンチからは、20～22の須恵器片が出土しており、注意する必要がある。

Ｔ23は土層断面図を割愛するが、18・19の須恵器片が出土している。

Ｔ24は上位は比較的平坦で、中ほどから緩やかな斜面に移行する。上位では第25図に掲載する23～25の須恵器のほかＳ１のサヌカイト製石鏃が出土している。中でも須恵器破片の出土が目立ち、特に大型容器としての甕の体部破片が著しく多い。

また、土師器片も図化はできないが少なからず出土しており、この地点での居住すなわち、少なくとも一時的にせよ、日常生活が営まれたことは確実であろう。

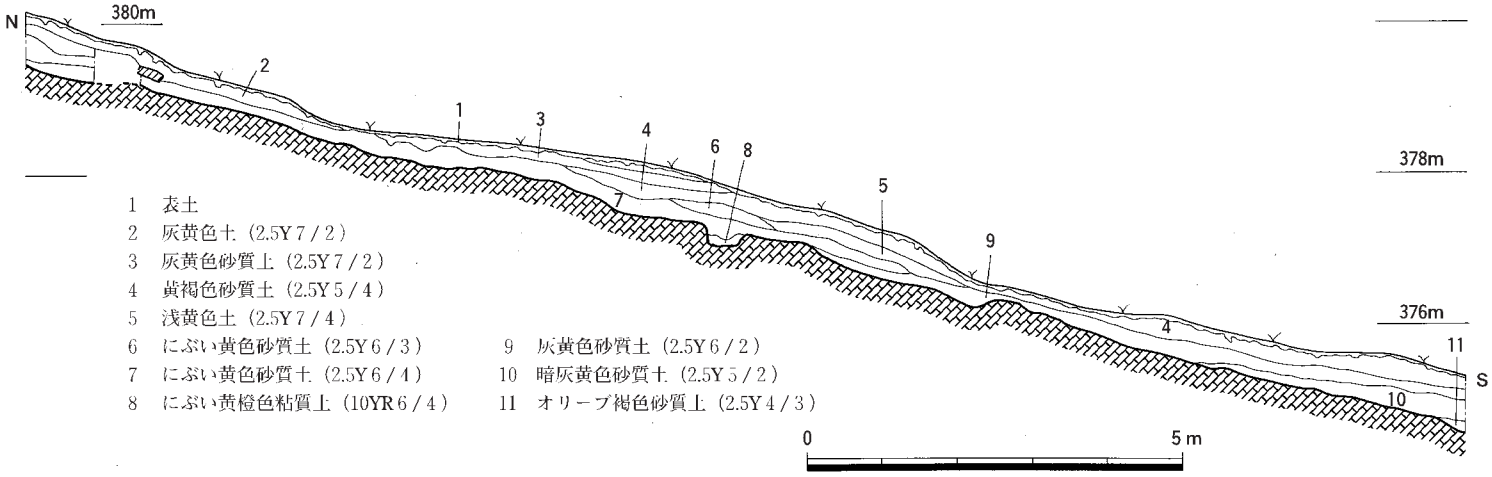
一方、石鏃の出土は、すでに触れた「落し穴」の可能性がある土壙との関連性を物語る遺物と理解すべきかもしれない。

土壙７はＴ24の下位で検出された。土壙の周囲の一部には被熱部分、埋積土には焼土塊が含まれる。すぐそばから25の須恵器が出土しており、古代Ⅰ期の遺構と考えられる。

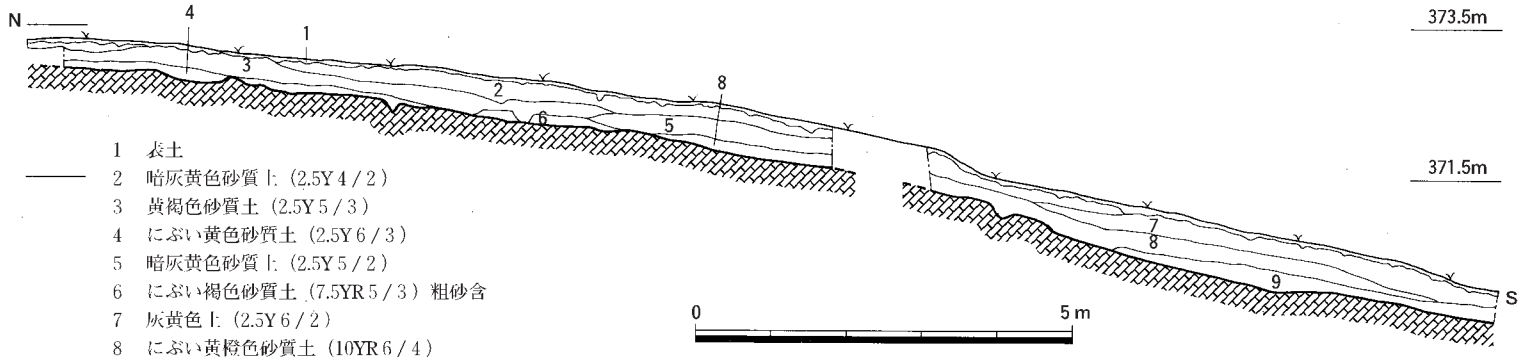
Ｔ25は、Ｔ21下方の南に設定したトレンチである。第26図のように、比較的平坦な地山面が検出されている。出土遺物には、26・27の須恵器がある。

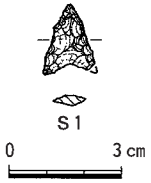
土壙８はＴ25の上位で検出されたやや大型の土壙で、長円形を示す。深さは約60㎝以上もあるが、性格や時期は不明である。

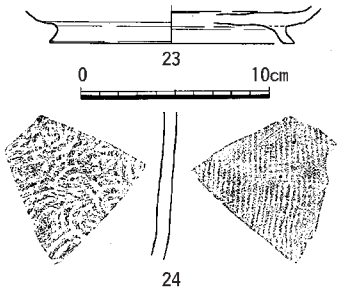
土壙９は底部に小穴があり、これもまた土壙２に類似している点で共通し、「落し穴」の可能性を考える必要がある。

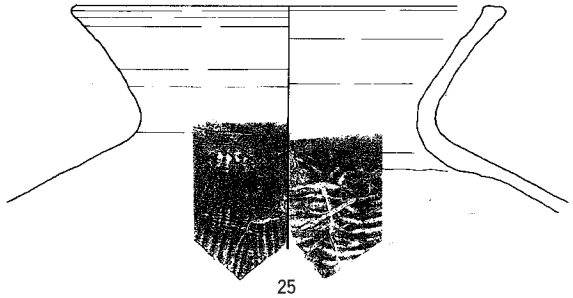


第24図　Ｔ22土層断面図（1/100）

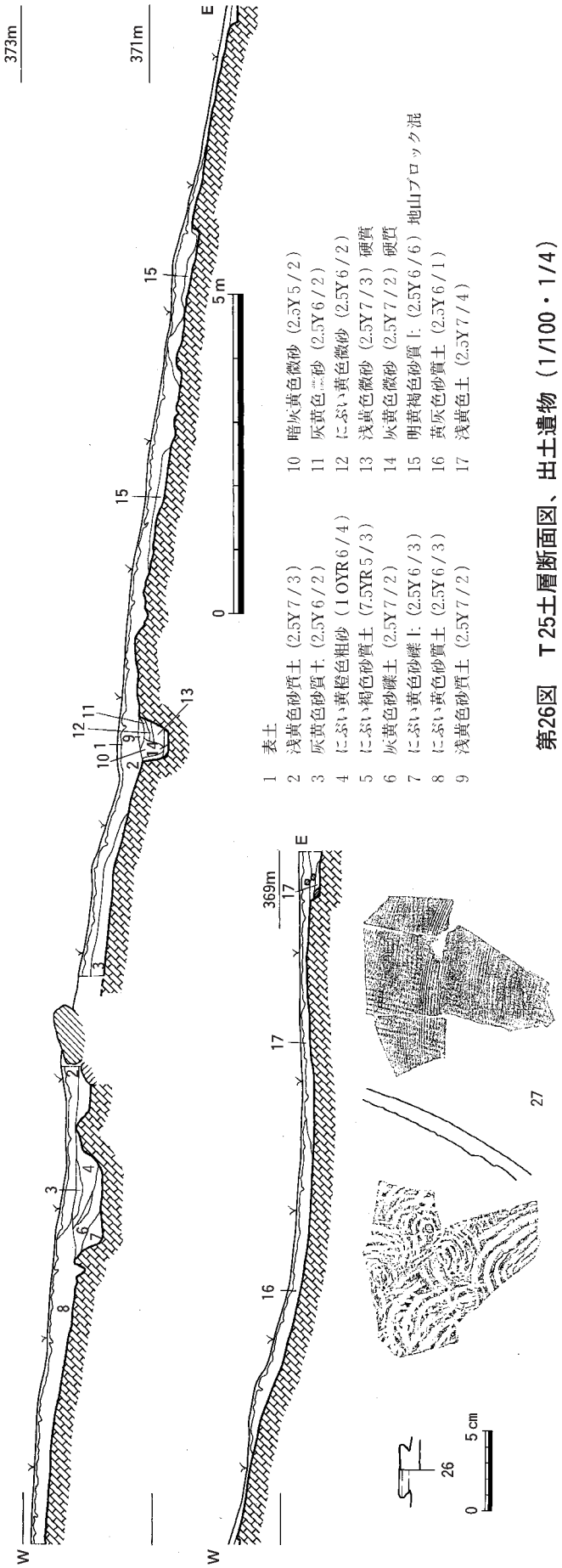




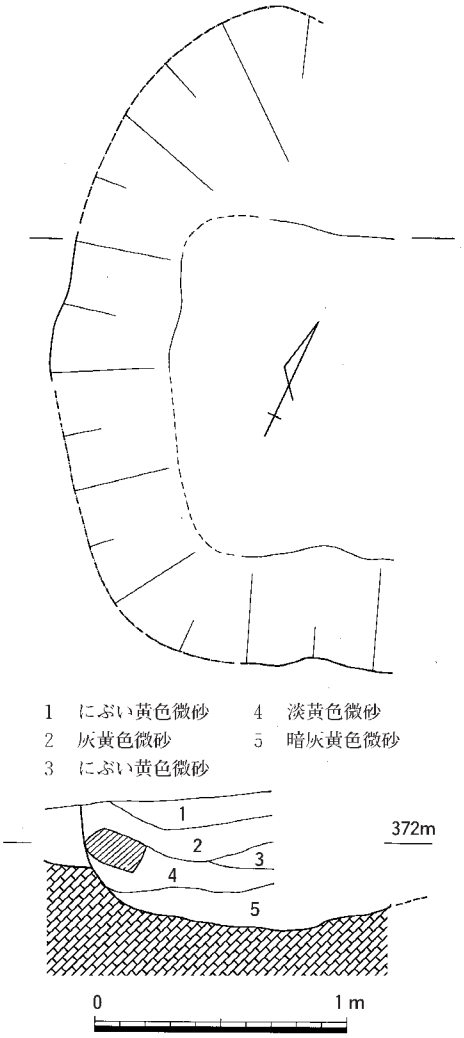




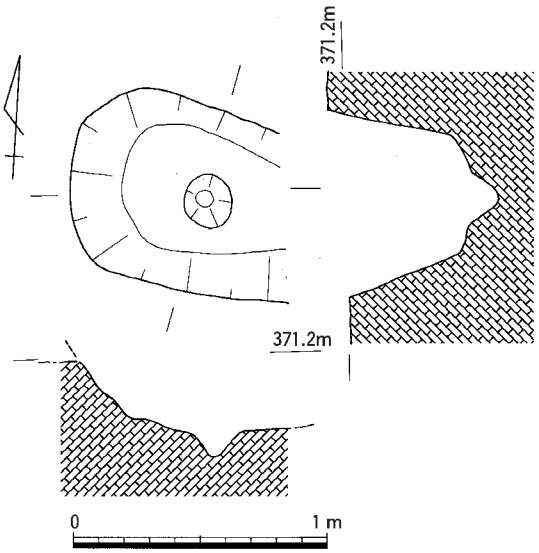
第25図　Ｔ24土層断面図、出土遺物
（1/100・1/2・1/4）



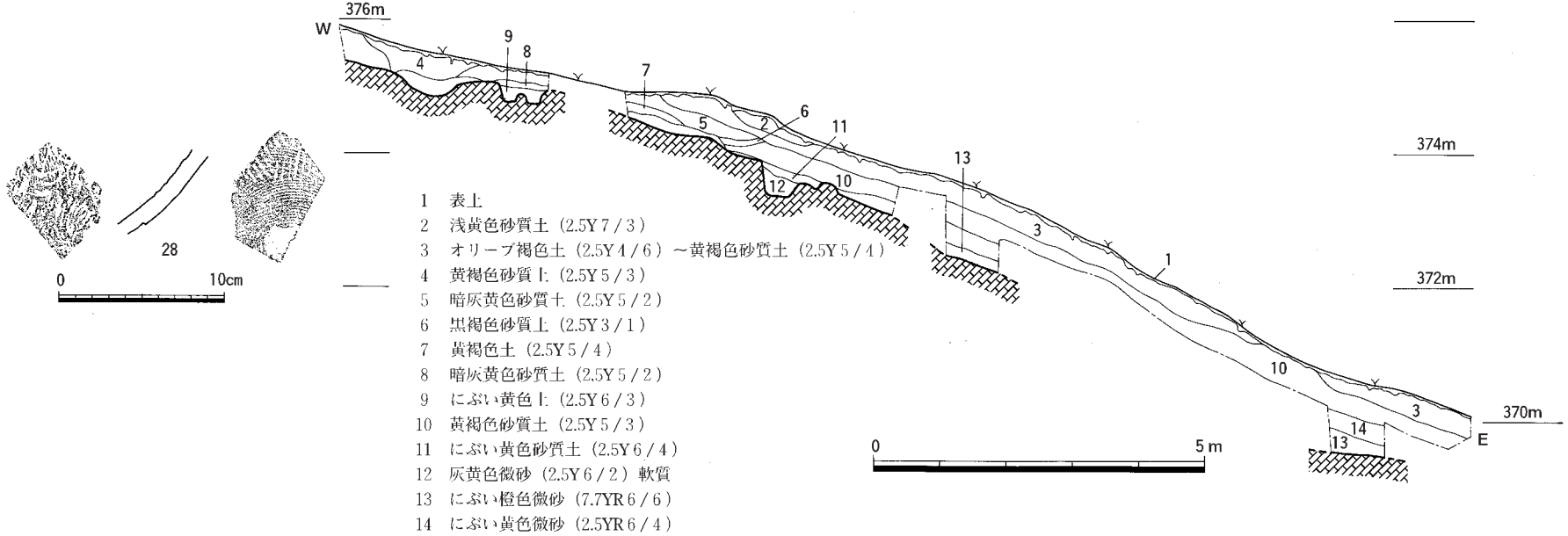
第26図　Ｔ25土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）



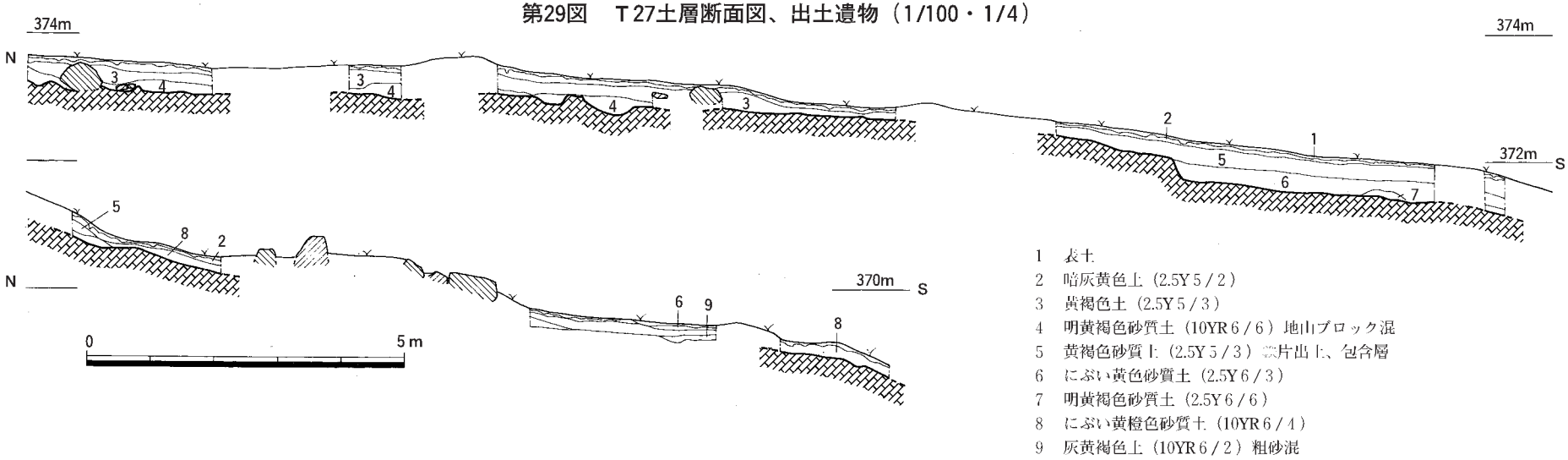
第27図　Ｔ25土壙８（1/30）



第28図　Ｔ25土壙９（1/30）

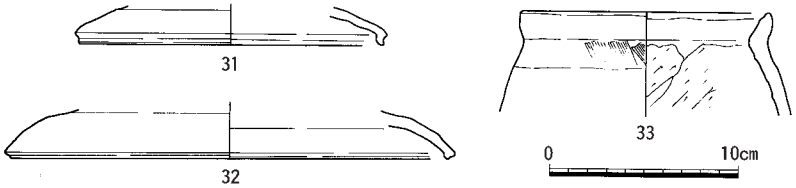


第29図　Ｔ27土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）

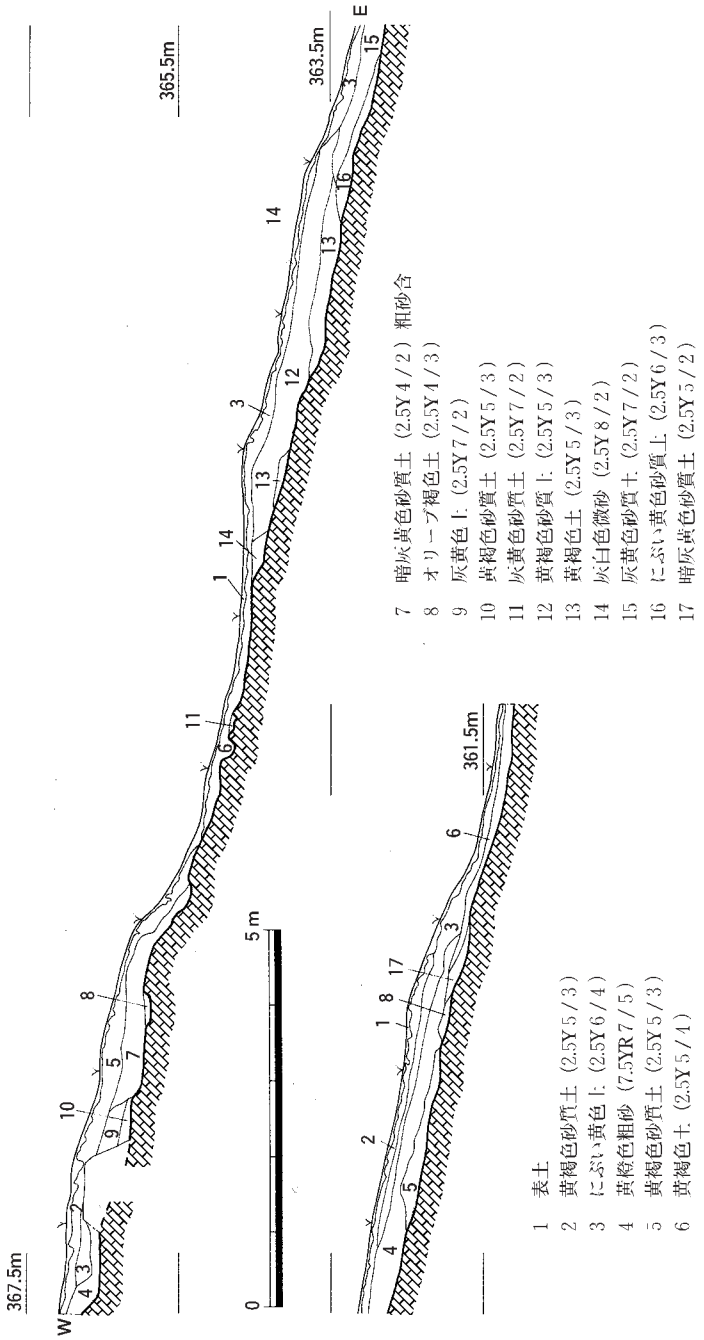


第30図　Ｔ29出土遺物（1/4）

第31図　Ｔ28出土遺物（1/4）



第32図　Ｔ29出土遺物（1/4）



第33図　Ｔ30土層断面図（1/100）

Ｔ27は、Ｔ21の北東側北よりに設定したトレンチである。上位は緩やかであるが、下半は急峻な地形となる。上位での出土遺物に**28**の須恵器横瓶片がある。

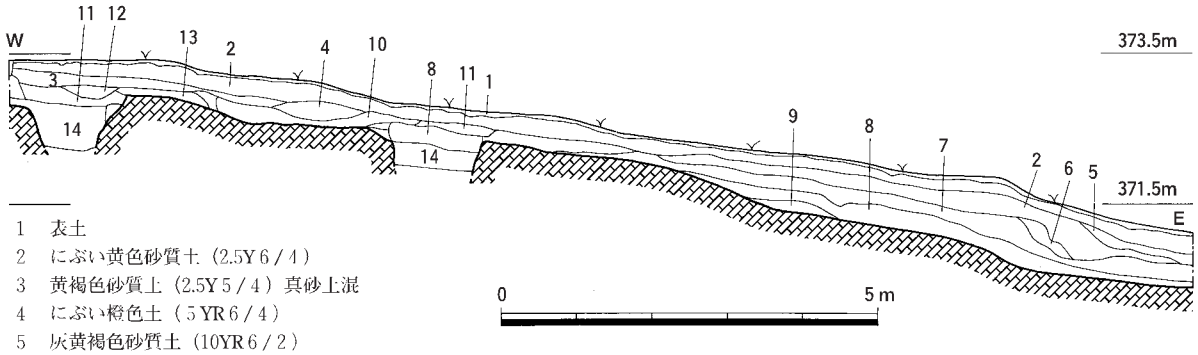
Ｔ28は、土層断面図を割愛するが、**29・30**の須恵器が出土している。露頭岩が目立つ地形である。

Ｔ29は、Ｔ21南東端の東側に設定したトレンチで、尾根上の下位ではあるが、比較的平坦な地形を示す位置を占める。中ほどで錆化が目立つ細かな鉄片が散布する地点があったが、鍛冶を示す関連遺物はまったくみられなかった。

上位を中心に第32図に掲載する須恵器蓋**31・32**と土師器甕**33**が出土している。**33**は炊飯あるいは煮沸に欠かせない調理に直接関わる土器であり、この尾根線上で日常的に使用されたことを示す重要な遺物と考えられる。

Ｔ48は、第Ⅳ期に発掘調査を実施したトレンチであるが、本節に収載する。

追加設定した目的は、Ｔ21で検出した土壙１の広がりと周辺の確認であったが、上位を拡張したに



1　表土
2　にぶい黄色砂質土（2.5Y６／４）
3　黄褐色砂質土（2.5Y５／４）真砂土混
4　にぶい橙色土（５YR６／４）
5　灰黄褐色砂質土（10YR６／２）
6　明赤褐色砂質土（５YR５／６）粘性あり
7　浅黄色細砂（2.5Y７／３）
8　にぶい橙色粘質土（7.5YR６／４）真砂土混
9　灰褐色粘質土（7.5YR６／２）
10　にぶい橙色細砂（7.5YR７／４）
11　明赤褐色粘質土（５YR５／６）
12　灰黄色砂質土（2.5Y６／２）
13　浅黄色砂質土（2.5Y７／４）
14　赤褐色粘質土（５YR４／６）

第34図　Ｔ48土層断面図（1/100）

もかかわらず前者については広がりを確めることができなかった。

しかし、上位では２か所の土壙状の掘りこみを確認した他、豊富な出土遺物（第35図）を得ることができた。34～38は須恵器蓋で38以外はすべて天井部にツマミを持つ。38はやや大型の蓋で、杯に対応する蓋ではなく、甕などの容器に使用された可能性がある。

39～41は杯である。37は外方する高い高台を持ち、古代Ⅰ期の特徴を示す。41は体部の下位に波状文が巡らされている。杯にこのような装飾が施されることは稀で、製作地の特定など今後の興味深い検討課題の一つである。

42は漆が付着した須恵器平瓶の体部片で、破片の割れ口にも付着していることから、漆の容器として持ちこまれ、そのまま割って中の漆を使用したことが考えられる。漆の用途は広汎かつ有用で、城内でどのような作業で使用されたか興味深い。

43～46は須恵器甕である。おもに体部の破片が目立ち、巻頭カラー図版７－１にも掲載している。体部外面は、平行タタキを施した後カキ目調整で仕上げられる破片が多い。すべての破片の内面には、同心円タタキが施されている。47は須恵器壷底部で、器壁は分厚い。

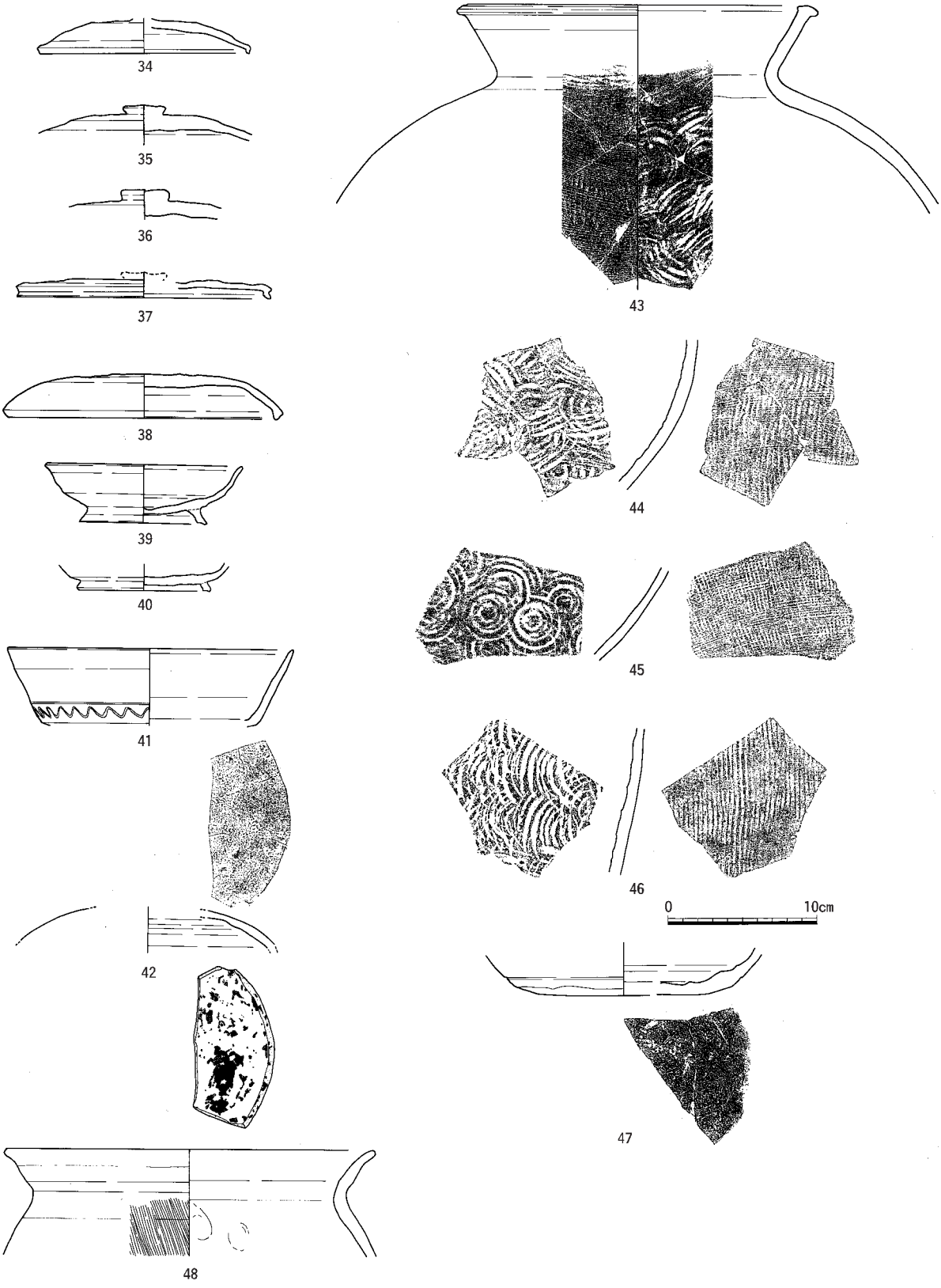
48は土師器甕である。やや長胴となる容量の大きいもので、煮沸等に使用されたものであろう。体部外面には細かいハケ調整痕跡が残る。

以上の土器は、古代Ⅰ～Ⅱ期に比定されるもので、鬼城山の築城時期や存続期間を示唆する重要な遺物と考えられる。

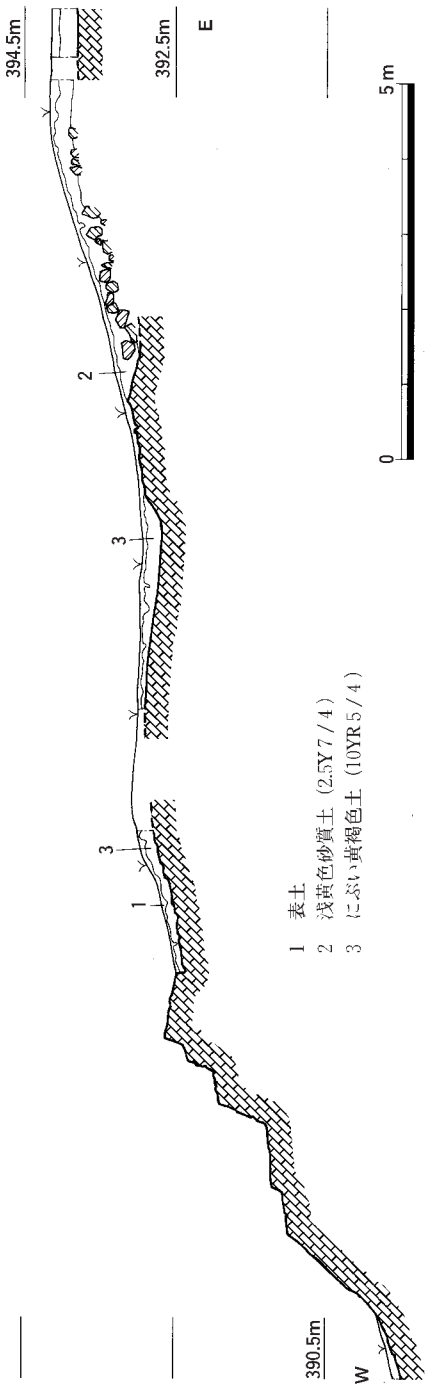
第２節　第Ⅱ期の確認調査概要

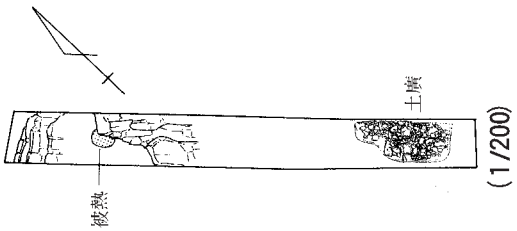
第Ⅱ期の確認調査は、すでに述べたＴ７・Ｔ８の西側、未調査の市有地部分から北方にかけて実施し、県有地部分で早くから存在が知られていた第Ⅰ群礎石建物までの広い範囲を調査対象とした。調査の過程で、Ｔ54で北門北側の版築土塁を精査することができ、さらにＴ59では、新たな礎石が姿を現し、後に設定したＴ123と周辺の精査により礎石建物６の存在が明らかとなった。

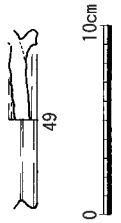
前節同様、第Ⅱ期に発掘調査を実施し、以降に近隣に設定したトレンチについても、実施時期にこだわらず、先行してその調査結果を収載することとしたい。

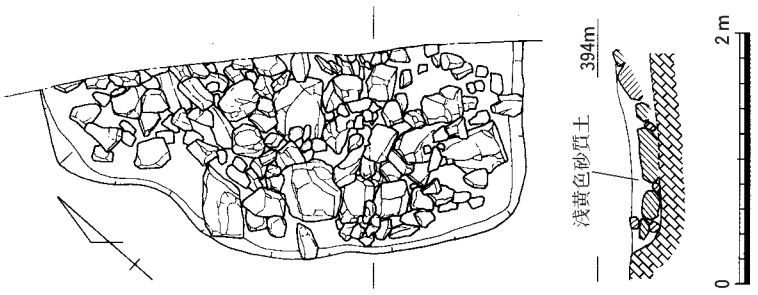


第35図　Ｔ48出土遺物　（1/4）









第36図　Ｔ４土層断面図、平面図、土壙、出土遺物（1/100・1/200・1/30・1/4）

鬼城山の背後といえる西側城郭線は、鬼城山の南東側に存在する敷石や高石垣や城壁・水門など諸施設と比較して目立った防御施設が知られていない。その点についての解明も、今回の確認調査の一つの目標でもあった。

Ｔ４は、設定したトレンチである。Ｔ７の遊歩道をはさんだ西側に位置する。上位は比較的平坦で、下半から急激に傾斜する。上位平坦部で検出された土壙は、内部に花崗岩を主体とした人頭大の礫が埋積している。このような集石土壙は、Ｔ３の土壙３とも類似し、城内各所でも存在する。敷石などに使用する石を小割りにし、選別集積した可能性もある。トレンチの北端で円形に赤変した部分があるが、性格は不明である。

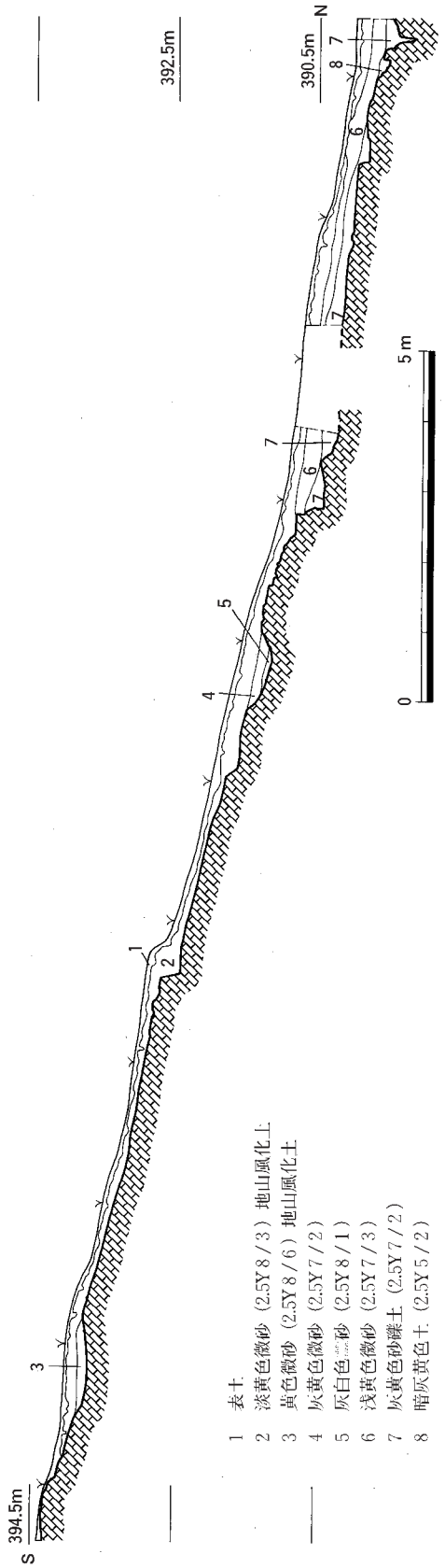
49は須恵器壷の底部片で、外方する高台をもつ。長頸壷の可能性が高い。

Ｔ５はＴ４の北側に、ほぼ平行して設定したトレンチである。緩やかな斜面は、直線的な形状を示し、近代の砂防工事の影響を受けた可能性もある。

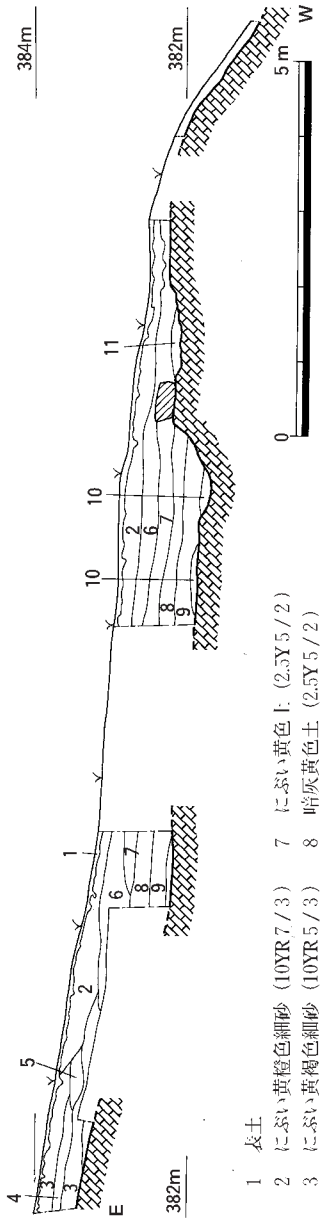
T13は、外郭線がやや西に張り出した空間的にも広い地点に設定したトレンチである。何らかの遺構が残っている可能性も十分に考えられた。トレンチの西端では、地山が高まりとして整形されたとみられる痕跡が残るが、版築や柱などは確認できなかった。

T14は、遊歩道に平行して設定したトレンチである。自然石の露頭が随所にみられ、地山面までは浅く、出土遺物

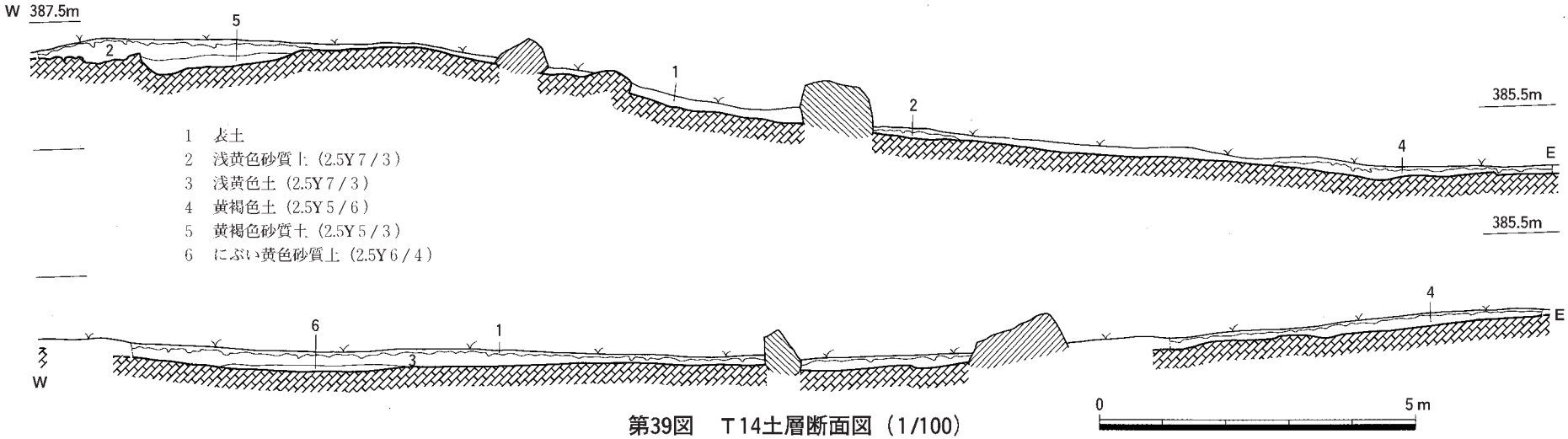
は認められない。T17もＴ４などと同様、外郭線に直行して設定したトレンチである。北端では地山のわずかな高まりが観察される。T18も同様な南北方向のトレンチで、地山は城内側では平坦で、北端で急に下降する。T19は第Ⅰ期に設定したＴ21の北西方の高まりに設定したトレンチである。上位は平坦、中ほどに地山の段が観察される。Ｔ51は南北の遊歩道がⅠ・Ⅱ群礎石建物へ分岐する手前の西側平坦面に設定したトレンチである。地山面も平坦で城内よりでは、炭を含む埋積土が確認されている。西端では、地山の高まりはほとんど認められない。T52はT51の北側に設定した。



第37図　Ｔ５土層断面図（1/100）

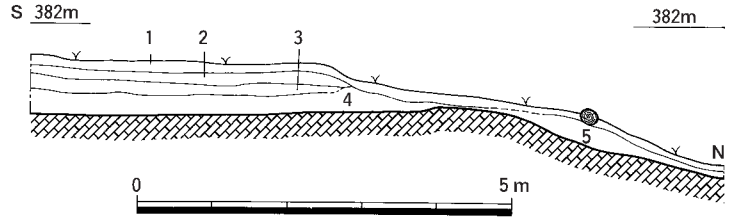


第38図　Ｔ13土層断面図（1/100）



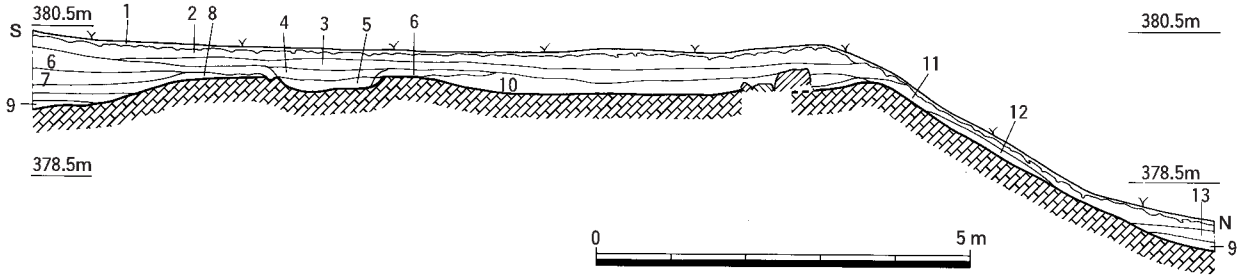
1　表土
2　浅黄色砂質土（2.5Y 7 / 3）
3　浅黄色土（2.5Y 7 / 3）
4　黄褐色土（2.5Y 5 / 6）
5　黄褐色砂質土（2.5Y 5 / 3）
6　にぶい黄色砂質土（2.5Y 6 / 4）

第39図　T14土層断面図（1/100）



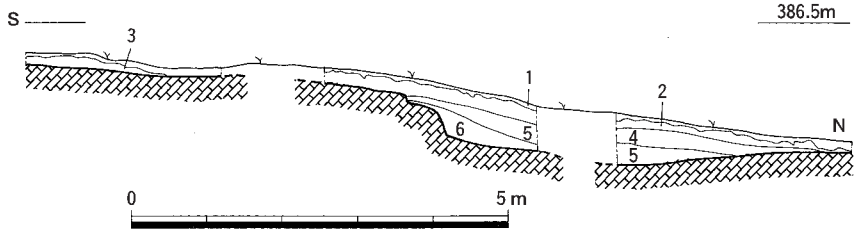
1　黄褐色土（表土）
2　淡（明）黄橙褐色土
3　淡黄褐色土（上と下層に比べるとやや暗い色調）
4　くすんだ淡灰黄色土（パサパサした土）
5　花崗岩バイ乱土

第40図　T17土層断面図（1/100）

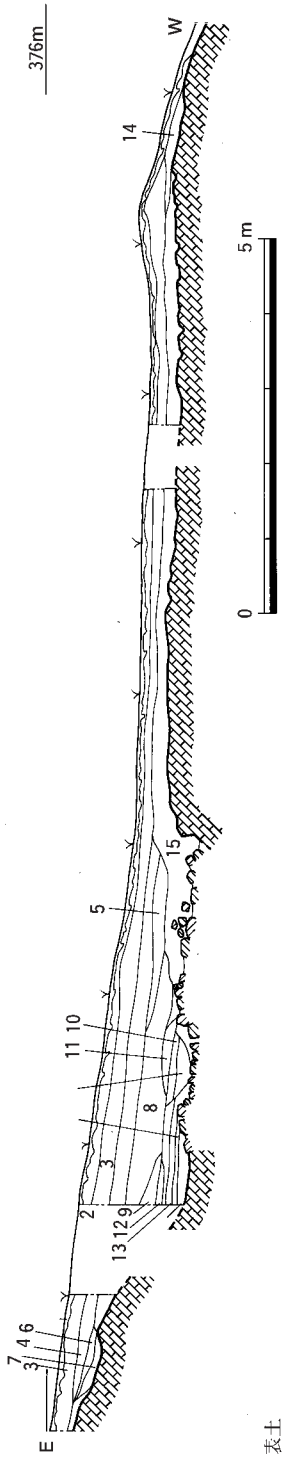


1　表土
2　明黄褐色土（10YR 6 / 6）
3　黄褐色土（10YR 5 / 8）
4　オリーブ褐色土（2.5Y 4 / 3）
5　黒褐色土（2.5Y 3 / 1）
6　にぶい黄色土（2.5Y 6 / 3）
7　灰黄色土（2.5Y 7 / 2）
8　黄褐色土（2.5Y 5 / 3）
9　淡黄色細砂（2.5Y 8 / 3）
10　淡黄色土（2.5Y 8 / 4）
11　にぶい黄橙色砂質土（10YR 7 / 4）
12　黄橙色砂質土（10YR 8 / 6）
13　灰黄色砂質土（2.5Y 7 / 2）

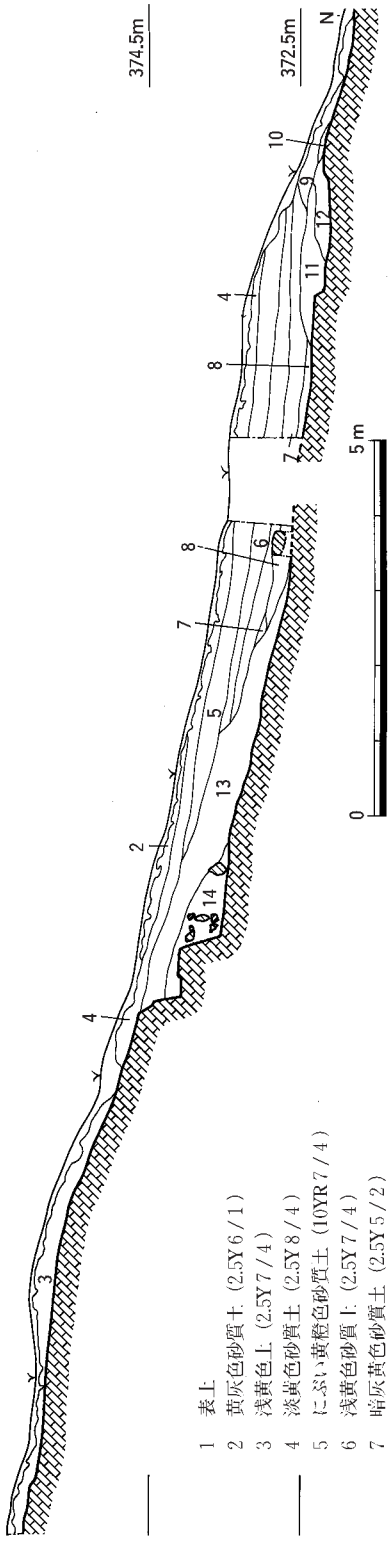
第41図　T18土層断面図（1/100）



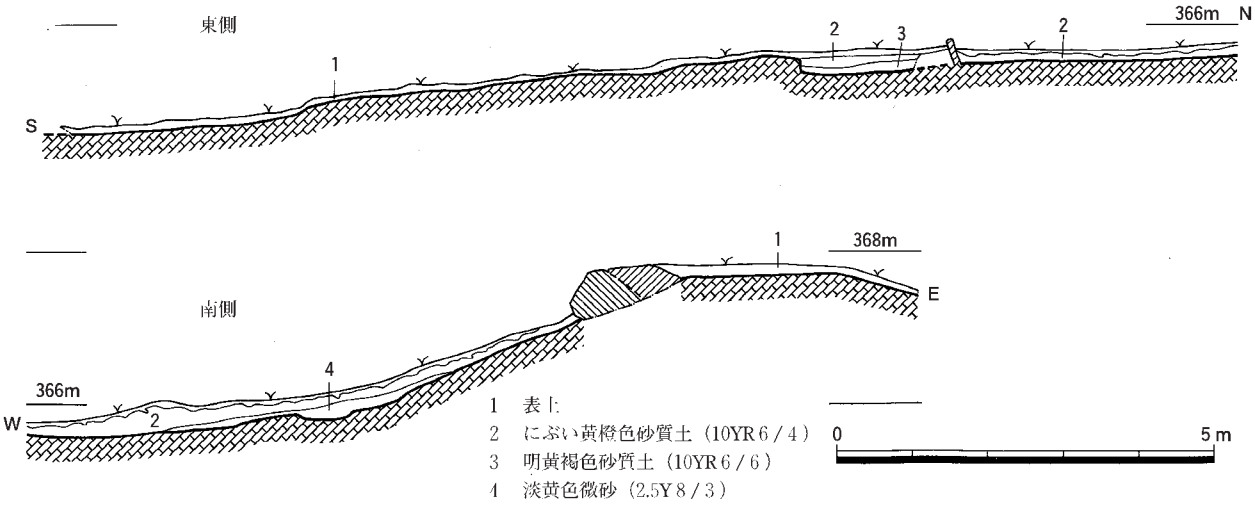
第42図　Ｔ19土層断面図（1/100）



第43図　Ｔ51土層断面図（1/100）



第44図　Ｔ52土層断面図（1/100）



第45図　Ｔ51土層断面図（1/100）

南城内側高位部からは、段差がつき平坦面が形成される。北端下位ではわずかな地山の高まりが観察される。このＴ52とＴ53の間にはわずかな列石を伴う土塁の痕跡が残され、西側下位には神籠石状列石が残存する箇所もある。

Ｔ53は北側塁線状に設定したトレンチである。塁線に直行する部分（第45図下段）と平行する部分（第45図上段）にカギ形に設定した。人工的な土盛りはおそらく流出したものとみられるが、その基礎となる地山整形の痕跡は、上位でわずかに認められる。

Ｔ54は北門の北側、明瞭な土塁部分と下位の神籠石状列石が観察される箇所に設定したトレンチである。

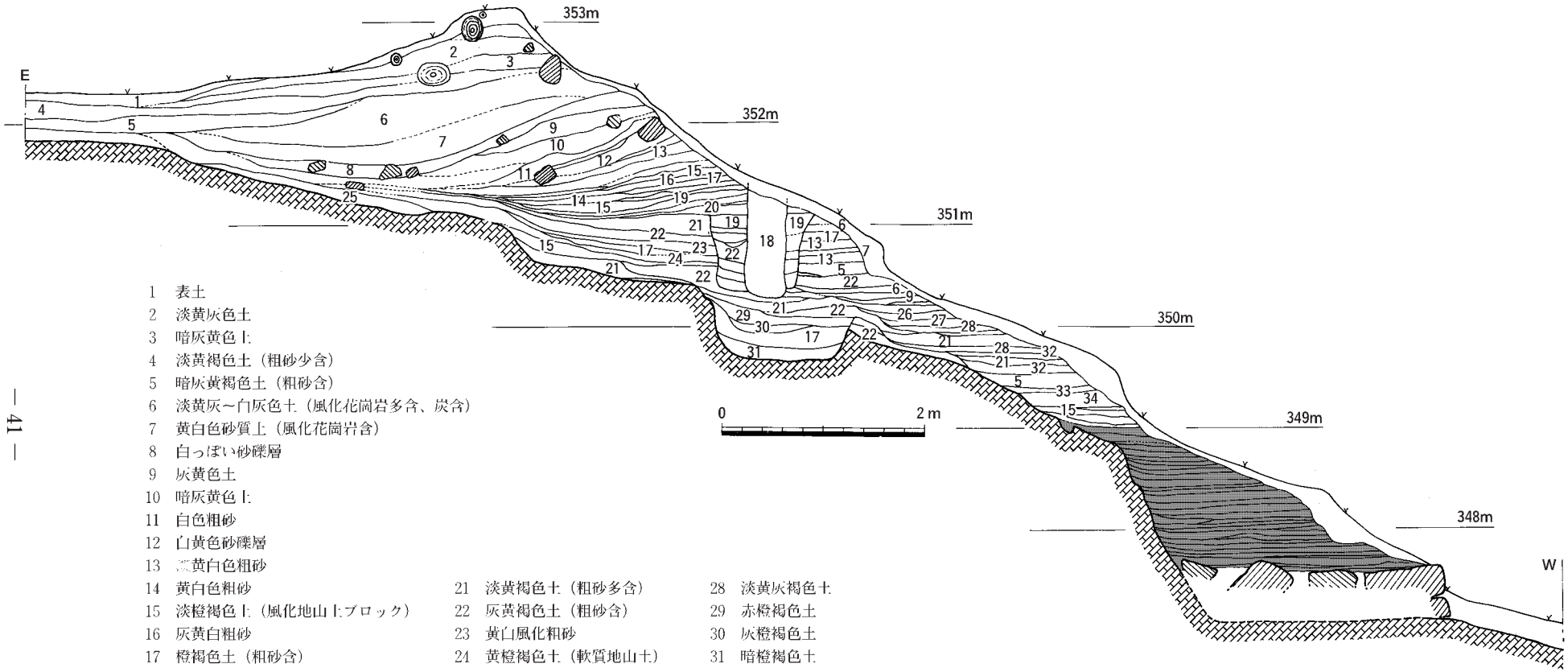
発掘に際しては、トレンチの設定位置が急斜面であることや、掘り上げる土量や置き場所の確保など通常のトレンチの数倍の配慮が必要で、しかもきわめて堅硬な版築層の掘り下げは難渋した。多数の作業員を一時に投入することは発掘道具の使用が著しく制限されるため、数名の作業員を専従として作業を進めた。

最終的に、第46図に示す良好な土層断面の観察が実現した。土塁の現存する高さは、神籠石状列石が築かれた地山から約６ｍを測る。

土塁の築成は、まず地山の整形の後、段切り地業をした平坦な最下段に神籠石を敷き並べ、城内寄りに控え積みの石を配した上位におよそ１ｍほど丹念な版築作業を行っている。この版築層は第46図の網掛け部分で示し、淡黄色、淡灰色、淡橙色のほぼ水平の互層が認められている。それぞれ非常に硬く締められ、掘り起こすと板状に剥がれるほどであった。

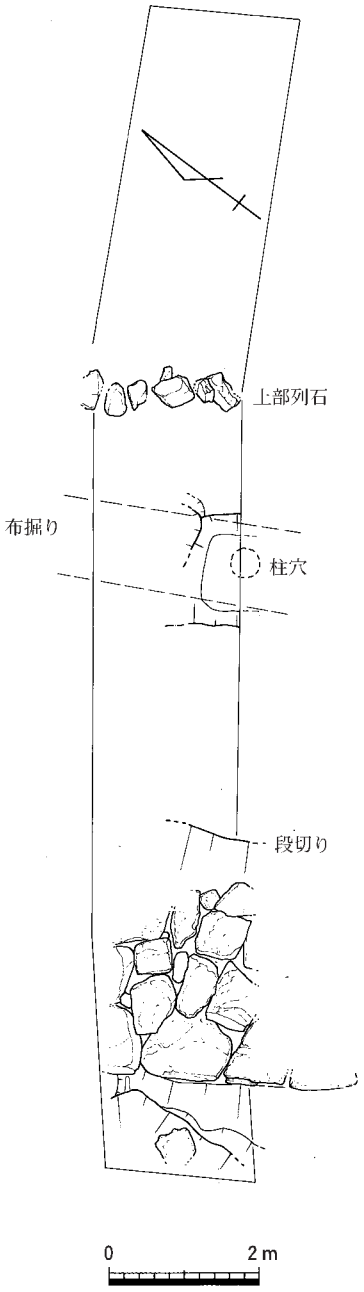
海抜349ｍあたりからは版築層の厚みが変化し、やや疎となる。地山の整形このあたりから緩やか隣り、塁線と平行した溝状のくぼみが掘り込まれている。これは、段切り作業後、神籠石状列石を敷き詰める前後に掘りこまれた可能性があり、工事の妨げになる雨水や土砂の流入を未然に防ぐ目的であった可能性もある。

さらに海抜351ｍほどまで土塁を築いた時点で、塁線に沿った布掘りが掘りこまれ、土層断面に直径約40㎝の柱痕跡が観察された。反対側の壁面は第47図に示すが、当初は布掘りとは気づかず、柱とその掘り方と理解していたが、整備委員会の席上、委員の指摘により精査した結果、現れた断面である。

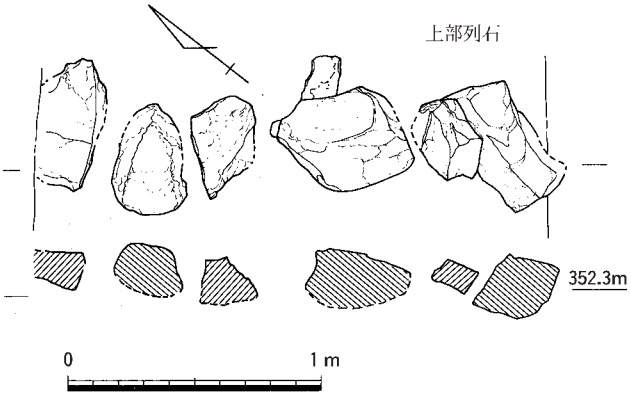


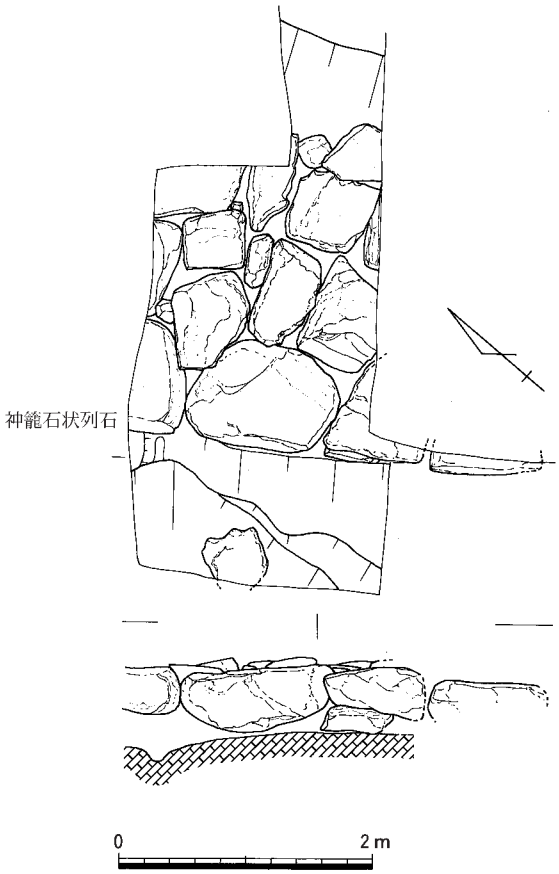
1　表土
2　淡黄灰色土
3　暗灰黄色土
4　淡黄褐色土（粗砂少含）
5　暗灰黄褐色土（粗砂含）
6　淡黄灰～白灰色土（風化花崗岩多含、炭含）
7　黄白色砂質土（風化花崗岩含）
8　白っぽい砂礫層
9　灰黄色土
10　暗灰黄色土
11　白色粗砂
12　白黄色砂礫層
13　黄白色粗砂
14　黄白色粗砂
15　淡橙褐色土（風化地山土ブロック）
16　灰黄白粗砂
17　橙褐色土（粗砂含）
18　暗黄灰色土（柱痕跡）
19　明黄褐色土（地山土ブロック含）
20　白～黄橙色粘質土風化礫層
21　淡黄褐色土（粗砂多含）
22　灰黄褐色土（粗砂含）
23　黄白風化粗砂
24　黄橙褐色土（軟質地山土）
25　明黄橙褐色土
26　灰褐色土（粗砂多含）
27　灰褐色土（硬質）
28　淡黄灰褐色土
29　赤橙褐色土
30　灰橙褐色土
31　暗橙褐色土
32　明白黄色土
33　淡灰黄色土（やや軟質）
34　淡灰黄色土（軟質で炭混じり）

第46図　Ｔ52土層断面図（1/60）

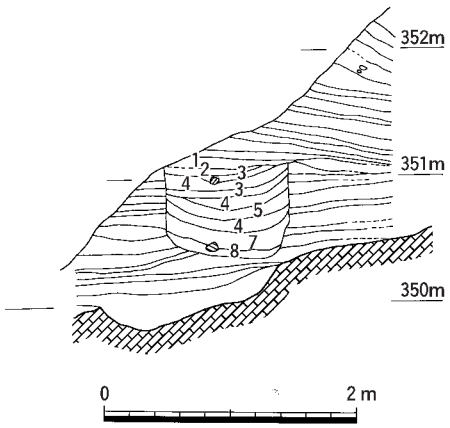


第47図　Ｔ54平面図（1/100）



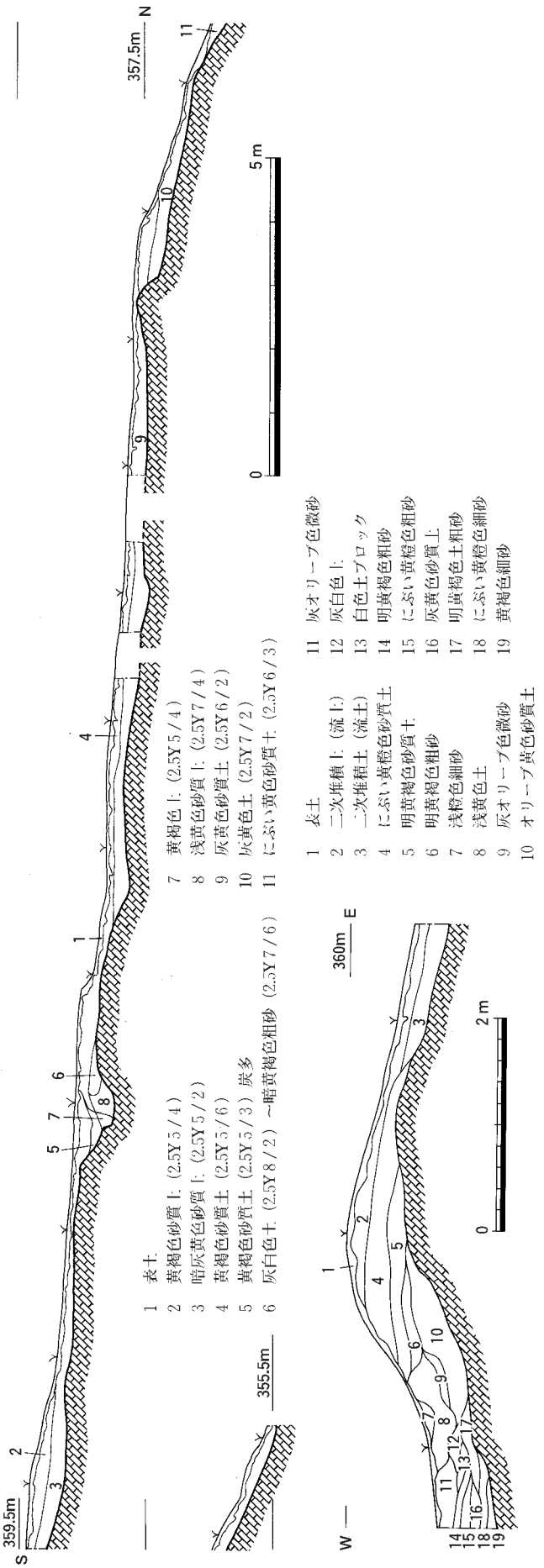


第48図　Ｔ54上部列石、神籠石状列石（1/30・1/60）



1　淡灰黄褐色土
2　淡赤白色土（ピンク色）
3　淡黄褐色土
4　淡黄橙色土
5　淡灰褐色土ブロック層
6　黄白色土（赤褐色土ブロック多含）
7　淡灰黄褐色土
8　黄白色土

第49図　Ｔ54北側布掘り土層断面図（1/60）



第50図　Ｔ55土層断面図（1/100・1/60）

なお、塁線を北門方向へボーリングを行った結果、３～４ｍ間隔で柱が存在することも確認された。これは後年総社市教委による北門の精査によっても判明している。この柱の性格や用途は明らかではないが、土塁上部の建築物の基礎であった可能性が高いだろう。

海抜352ｍあたりの城内側からの土盛りは、版築の意識は薄れ、タタキ締め作業を伴わない通常の埋積土が観察された。

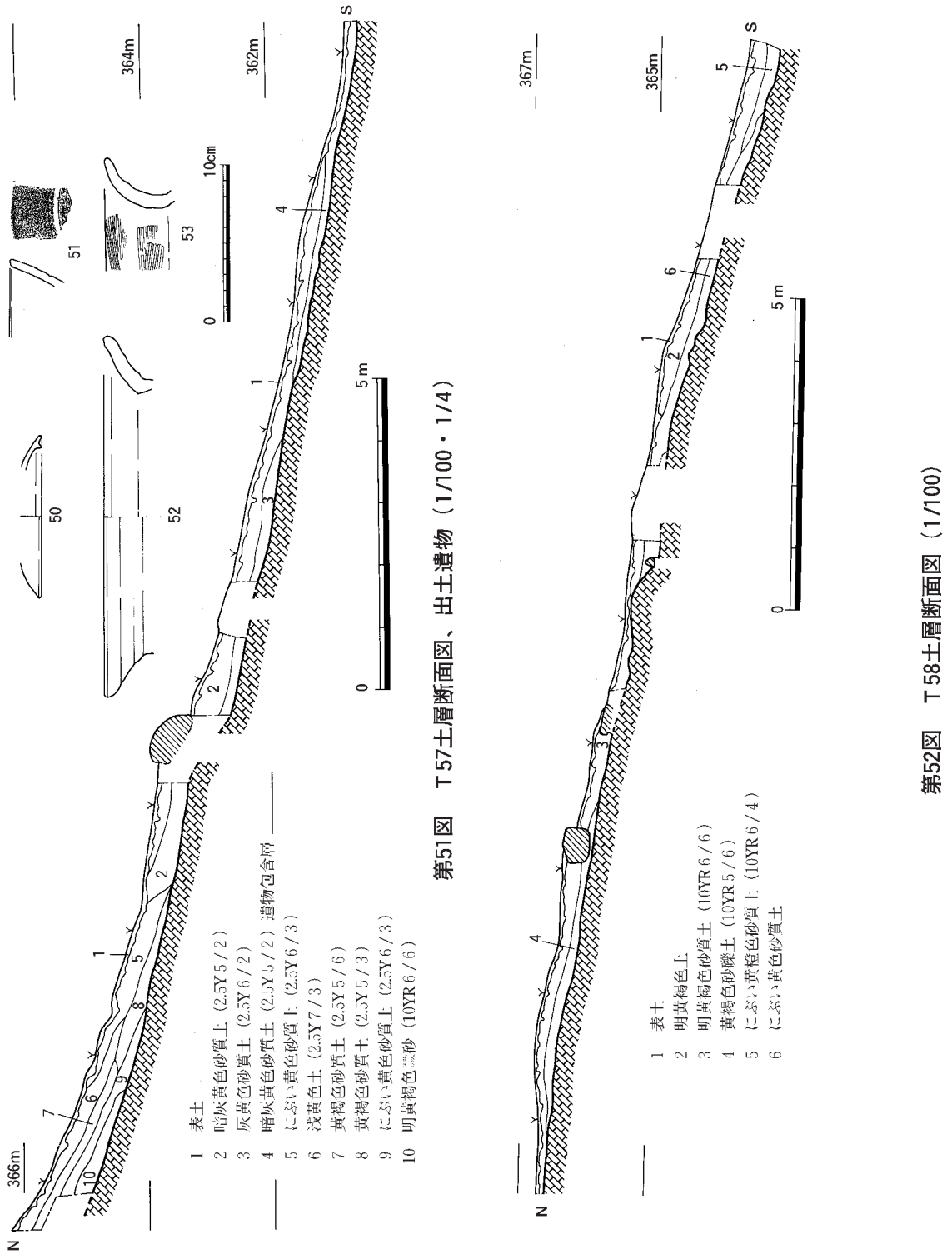
土塁高位部は一目で塁線とわかる高まりが連続し、数10㎝掘り下げた位置に、平行して１列の上部列石（第47・48図）が並ぶ。この列石の意味はよくわからないが、塁線工事の目印あるいは標識のような性格が考えられるかもしれない。

この土塁の下位版築土層断面については、記録（実測・写真撮影）作業終了後、反転剥ぎ取りを行い、巻頭カラー図版８－２に掲げるように表装した状態で保管している。

Ｔ55は、Ｔ53とＴ54のほぼ中間に設定したトレンチである。

第50図に掲げるように、外郭の塁線と直行した土層断面では、地山の整形と土盛りの痕跡が観察される。

なお、後述する第Ⅳ期にこのトレンチのさらに北側にＴ49を設定し、精査の結果、柱穴や土塁が検出されている。（第83・84図）Ｔ57は、北側外郭線とⅡ群礎石建物のほぼ中間、西側谷部に設定したトレンチである。かなり急な印象を受ける斜面であるが、下位の包含層から少量の土器が出土している。50は、小型の蓋で内



第51図　Ｔ57土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）

第52図　Ｔ58土層断面図（1/100）

面にカエリをもつ。51は鏃の可能性がある口縁部小片である。52・53はいずれも土師器甕口頸部片で、長胴のタイプの中型器種と考えられる。

Ｔ58は、さらにⅡ群礎石建物に近い地点に設定したトレンチである。Ｔ57に比べると地形はやや緩やかになる。

この地点へのトレンチ設定は、当初はⅡ群礎石建物の西側への広がりを確かめる目的もあったが、礎石や地山面の地業痕跡などを確認することはできなかった。

Ｔ59はＴ58の反対側の谷部、遊歩道を挟んだ北側斜面に設定したトレンチである。トレンチ設定後

の雑木の伐採や清掃の際、すでに礎石と考えられる巨石が露見しており、周囲の十分な表面観察も必要と考えられた。

後に設定したＴ123との位置関係は、第53図に掲げるとおりである。北方に転倒移動した石は、その間隔から同一礎石建物の桁行部分と考えられ、移動の原因はおそらく近代、明治期の砂防工事による土取り作業によるものと推定される。

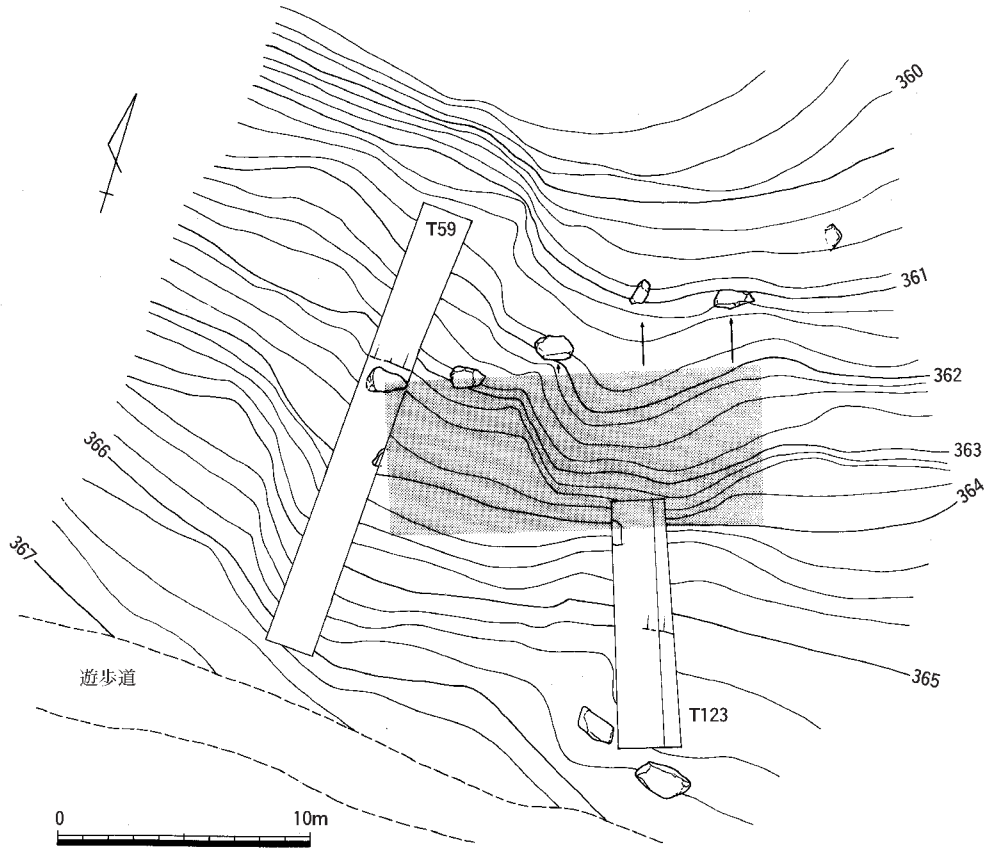
Ｔ59の土層断面では、礎石建物を建築するための造成痕跡は、ある程度地山面を水平に近く削平した形跡を認める以外不明瞭である。

しかし、Ｔ123では高位部の段切り造成が明瞭で、建物の北側部分は盛り土による造成、高所は地山のカットという比較的単純な工法が採用されている。

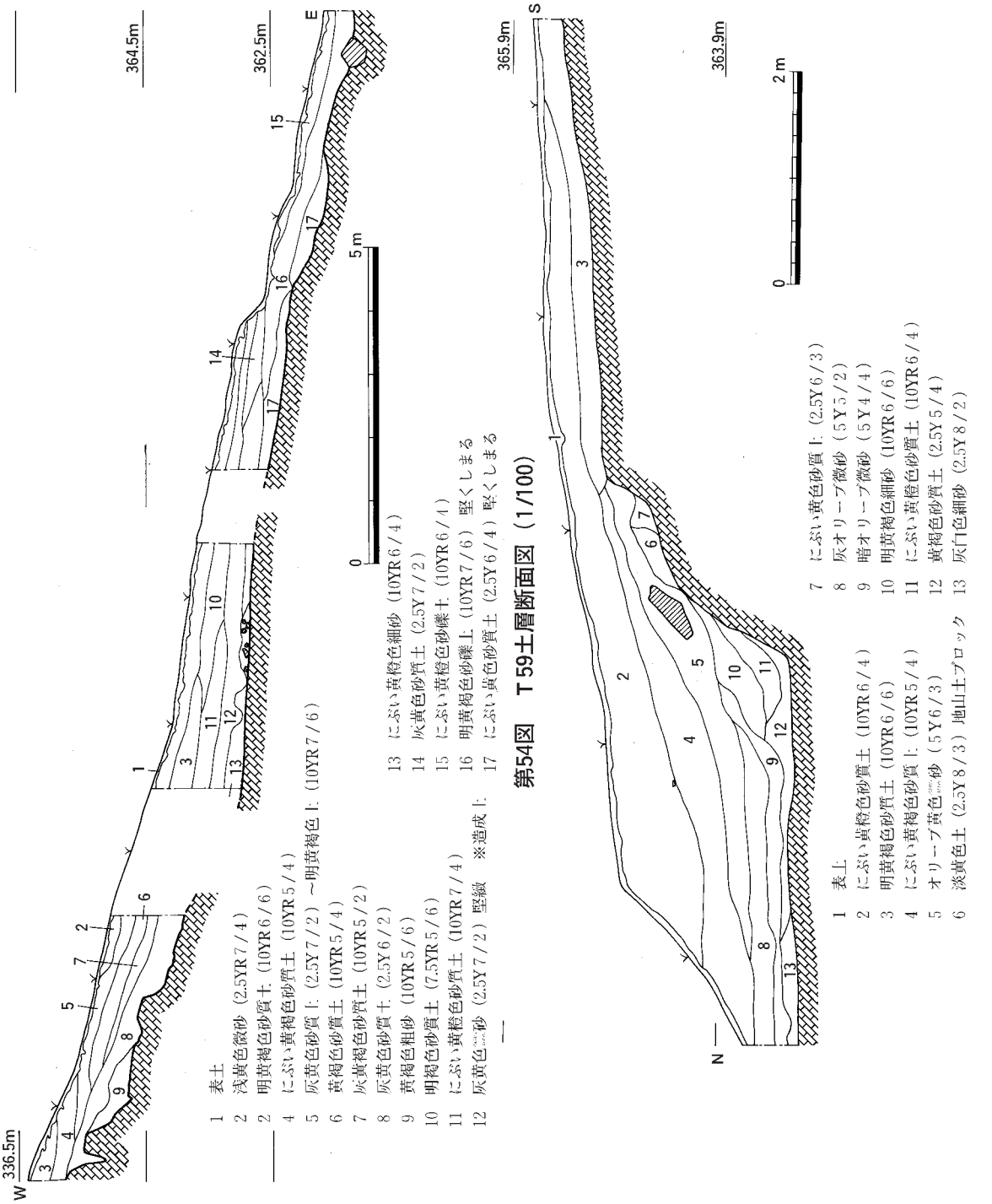
したがって、南側高所の礎石を確認したＴ123では、第56図のように地山面に直接礎石を据えず、まず礎石を埋置するための一回り大きい柱穴を掘り込み、掘り方内に根石を添えて据え置いたことがわかる。

礎石建物の規模は、第57図に掲げるように５×２間の側柱建物であることが復元推定される。桁行の柱間は、約10尺等間と考えられ、Ⅱ群礎石建物とほぼ共通する。

Ｔ123からは、須恵器蓋**54**、壺**56**のほか土師器杯**55**、平瓦**57**が出土している。**54**・**56**は古代Ⅰ期かⅡ期、**55**・**57**は古代Ⅲ期に比定される。なお**56**の器形は特徴的で、生産地について類例を精査したい。また、瓦の出土は１点のみで、礎石建物が瓦葺であった可能性は検討を要する。**55**はⅡ群礎石建物周辺でも破片が出土しており、９世紀代に比定される。

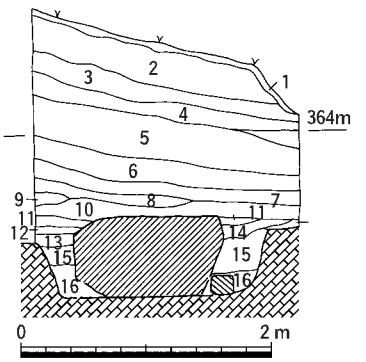


第53図　礎石建物６周辺地形図（1/300）



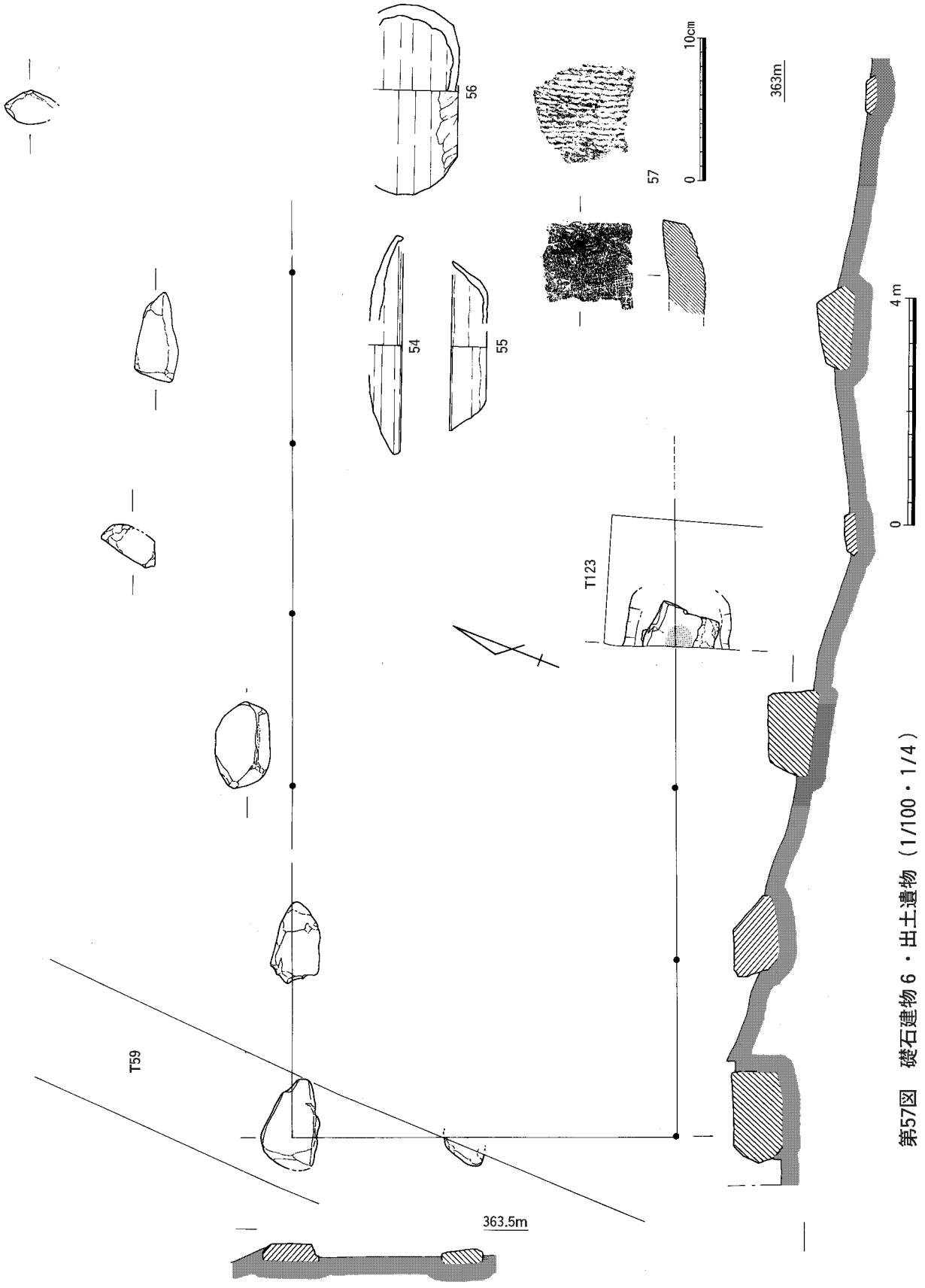
第54図　Ｔ59土層断面図（1/100）

第55図　Ｔ123土層断面図（1/60）

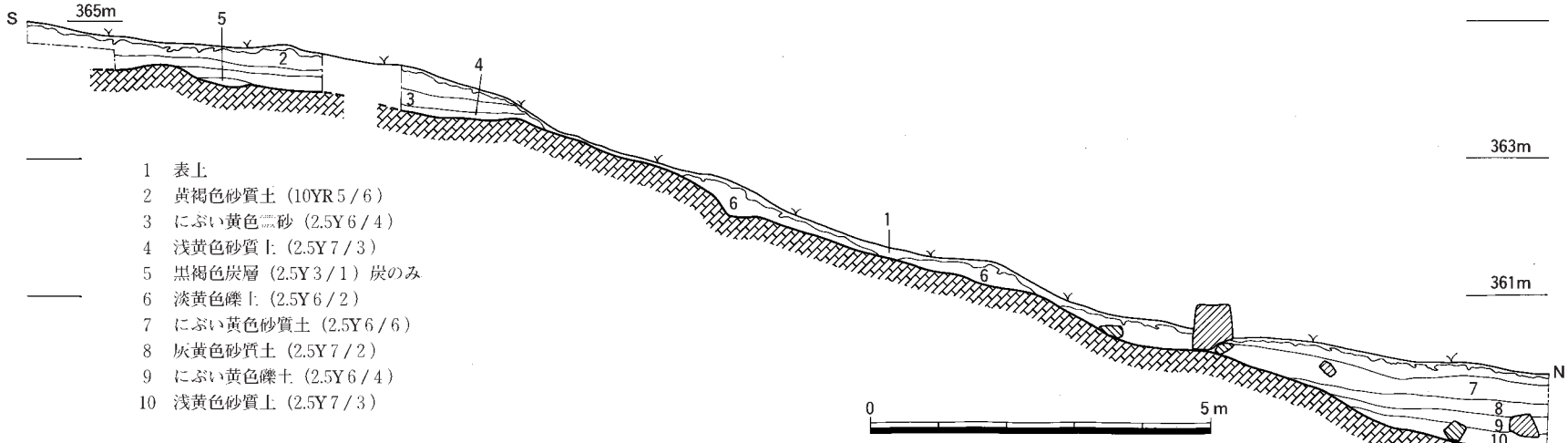


1　表土
2　にぶい黄橙色砂質土（10YR６/４）
3　明黄褐色砂質土（10YR７/６）
4　明黄褐色砂質土（10YR６/６）
5　にぶい黄褐色砂質上（10YR５/４）
6　黄褐色微砂（10YR５/６）
7　オリーブ黄色微砂（５Y６/３）
8　灰オリーブ微砂（５Y５/２）
9　褐灰色炭層（焼土ブロック混）
10　暗オリーブ微砂（５Y４/４）
11　にぶい橙色砂質土（7.5YR７/４）
12　にぶい黄褐色砂質土（10YR５/４）
13　にぶい黄橙色砂質上（10YR６/３）
14　灰白色微砂（10YR８/２）地山土
15　にぶい黄色細砂（2.5Y６/４）地山土混
16　暗灰黄色細砂（2.5Y５/２）地山土混

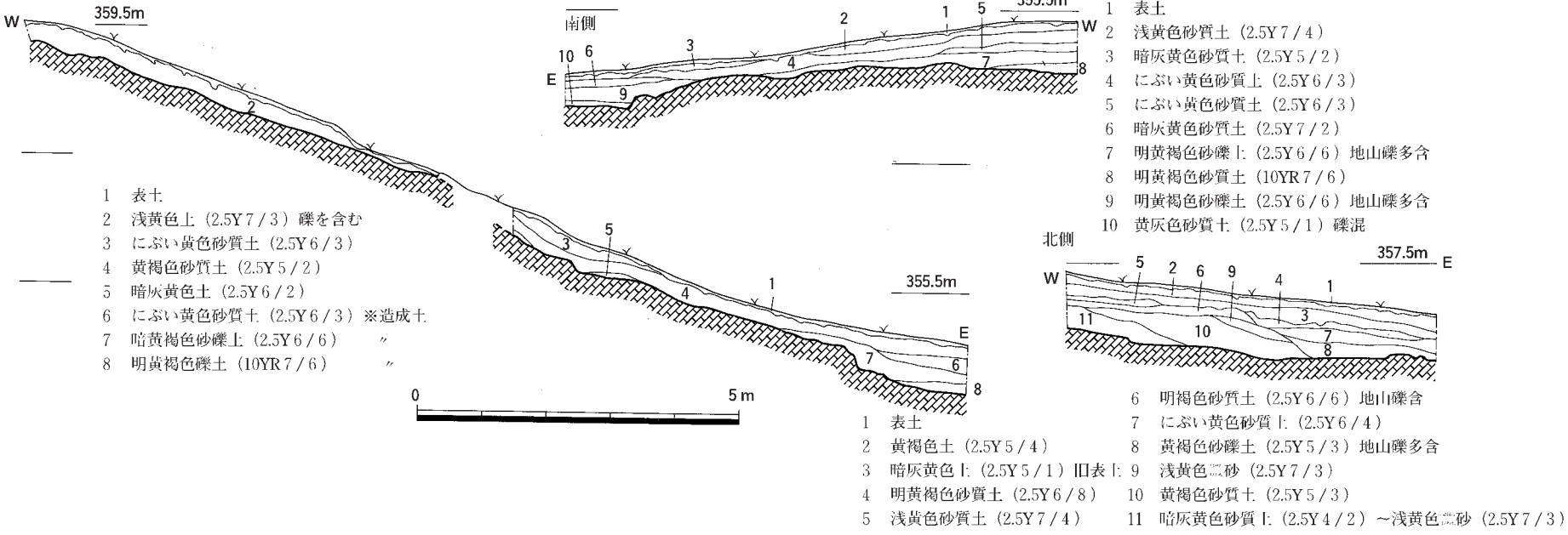
第56図　Ｔ123礎石部分土層断面図（1/60）



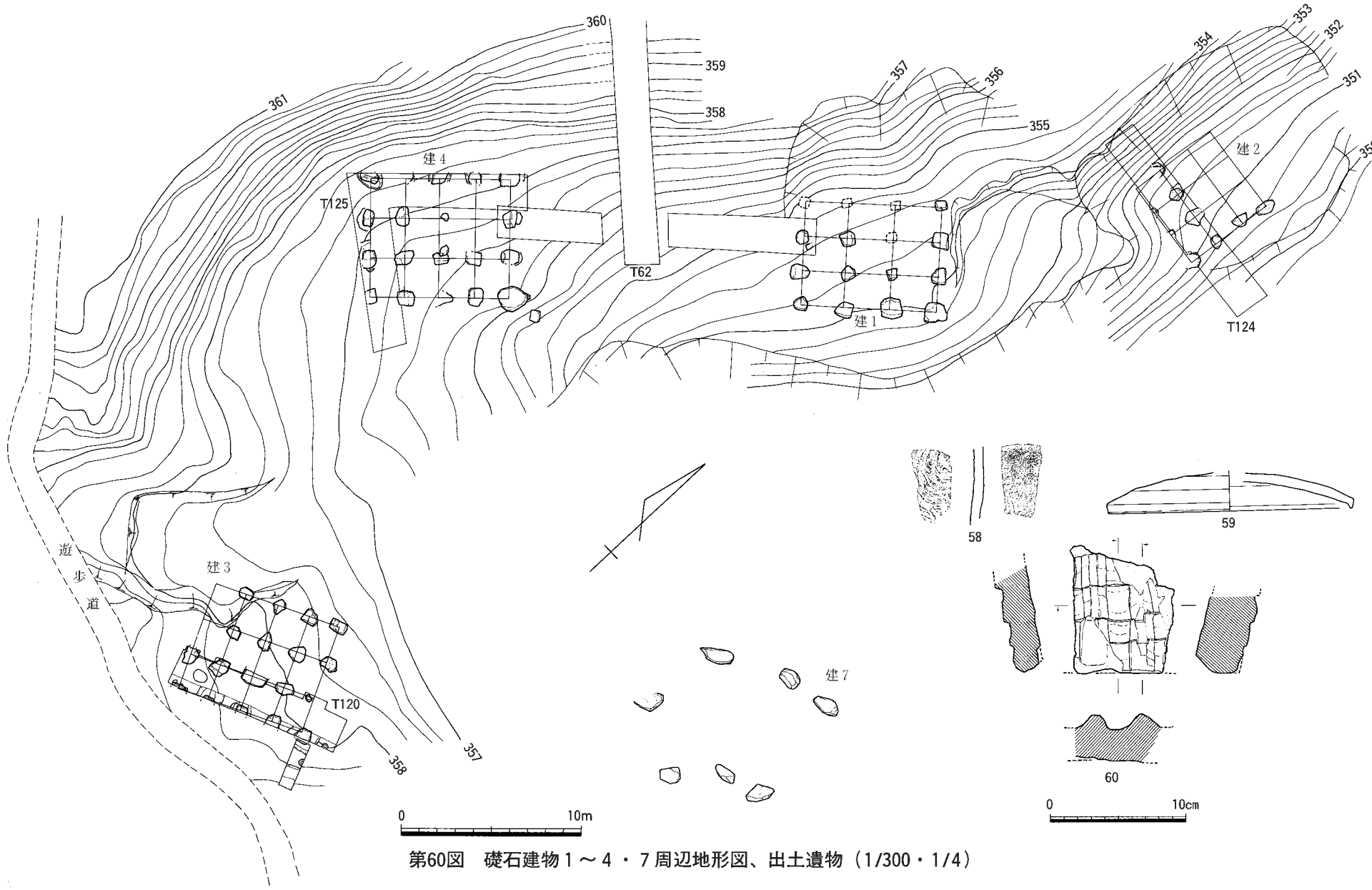
第57図　礎石建物６・出土遺物（1/100・1/4）



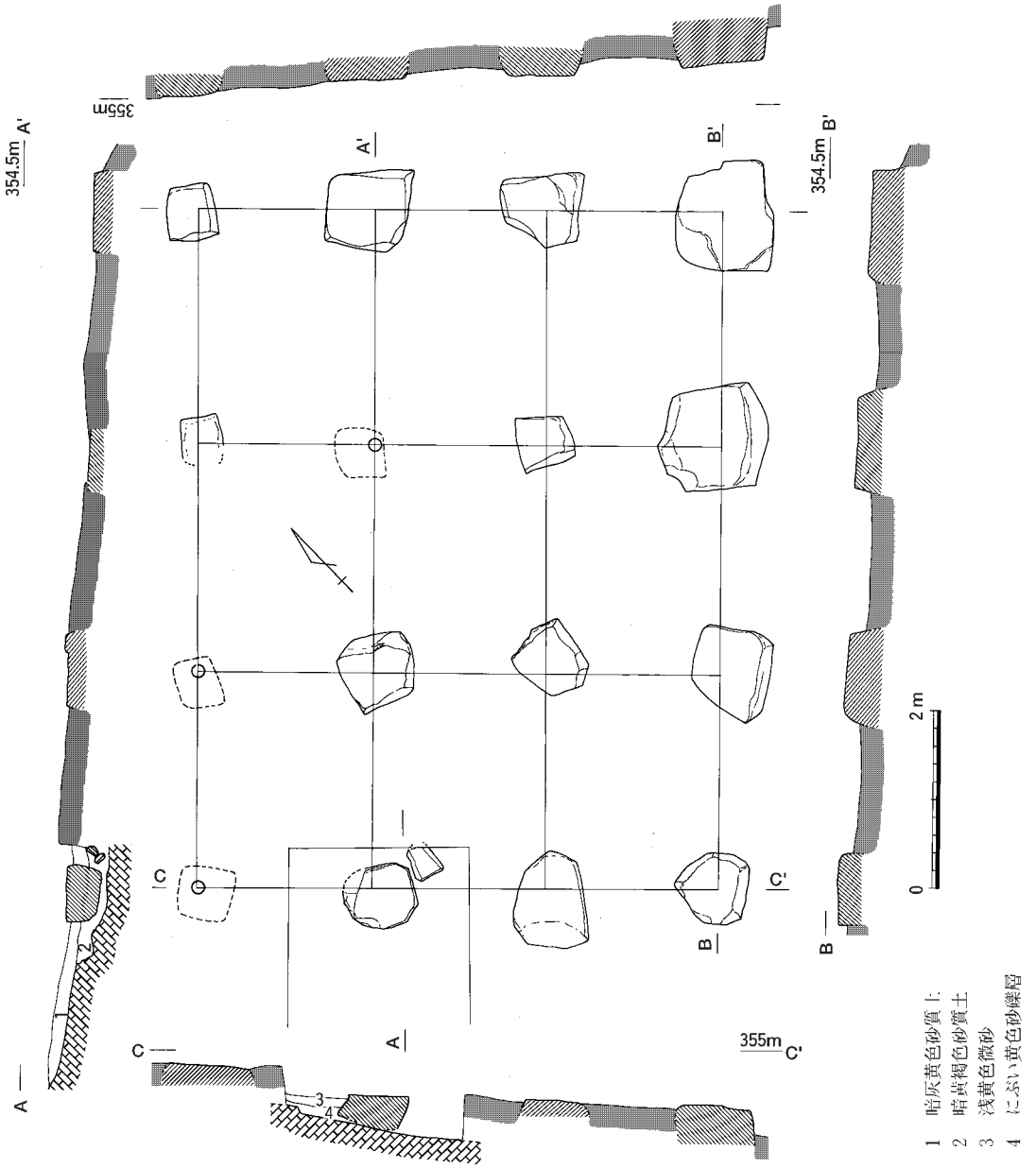
第58図　Ｔ60土層断面図（1/100）



第59図　Ｔ62土層断面図（1/100）



第60図　礎石建物１～４・７周辺地形図、出土遺物（1/300・1/4）



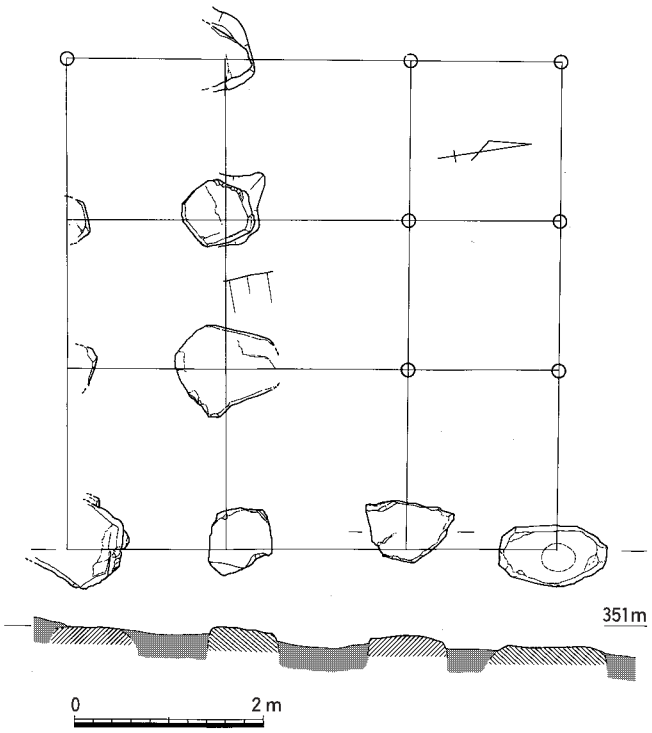
第61図　礎石建物１（1/80）

Ｔ60は、Ｔ123の東方へ設定したトレンチである。Ｔ59やＴ123で礎石建物６の存在が明らかとなり、同一のレベルでの新たな礎石建物の存在や、たとえ礎石が移動していても残される、地山整形痕跡を追及する必要を感じたからでもある。

トレンチ上位では、第５層で炭層が確かめられる一方、地山を平坦に削平したような形状も観察されたが、出土遺物や礎石の手がかりは得られなかった。

Ｔ62はⅠ群礎石建物群を形成する、礎石建物１（従来の呼称では城庫１）と礎石建物４（従来の呼称では城庫４）の間に設定した、ほぼ北西⇔南東方向のトレンチで、建物付近にサブトレンチを増設した。

第59図に掲げるように、礎石建物が存在する平面の背後は、比較的緩やかな斜面で、中ほどで段切



第62図　礎石建物２（1/80）

りの形跡とみられる傾斜変換点が観察される。

Ｔ62西側、礎石建物４付近で出土した遺物に、**58・59**の須恵器がある。**58**は甕か壷の薄手の体部小片で、内面には同心円タタキが施される。

59は蓋で、比較的丁寧な作りが看取され、古代Ⅰ期からⅡ期に比定される。

60は、須恵質の瓦塔片である。礎石建物１の東側で表面採集したが、原位置を保っているかは不明である。本瓦葺きの様子を、型押し技法を駆使して巧みに表現している。

この遺物は、礎石建物の性格を示唆する要素を強く示しているが、この１点によって礎石建物が仏教的な施設と断定することは早計であろう。

第60図は、確認調査の傍ら地形測量を実施した成果である。これにより南北約65ｍ、東西約35ｍの範囲に、４棟の礎石建物が配置されていることや、礎石建物１と礎石建物４は、棟方向が一致することも併せて正確に把握された。

礎石建物３の北東方約20ｍで発見された礎石建物７は、礎石建物１～４に使用されている礎石とほぼ同じ大きさの花崗岩が散乱している箇所に想定している。規模は不明であるが、浅い谷を挟んで礎石建物１の南東方約20数ｍのほぼ同一レベル上に、対置して建築された可能性が高い。

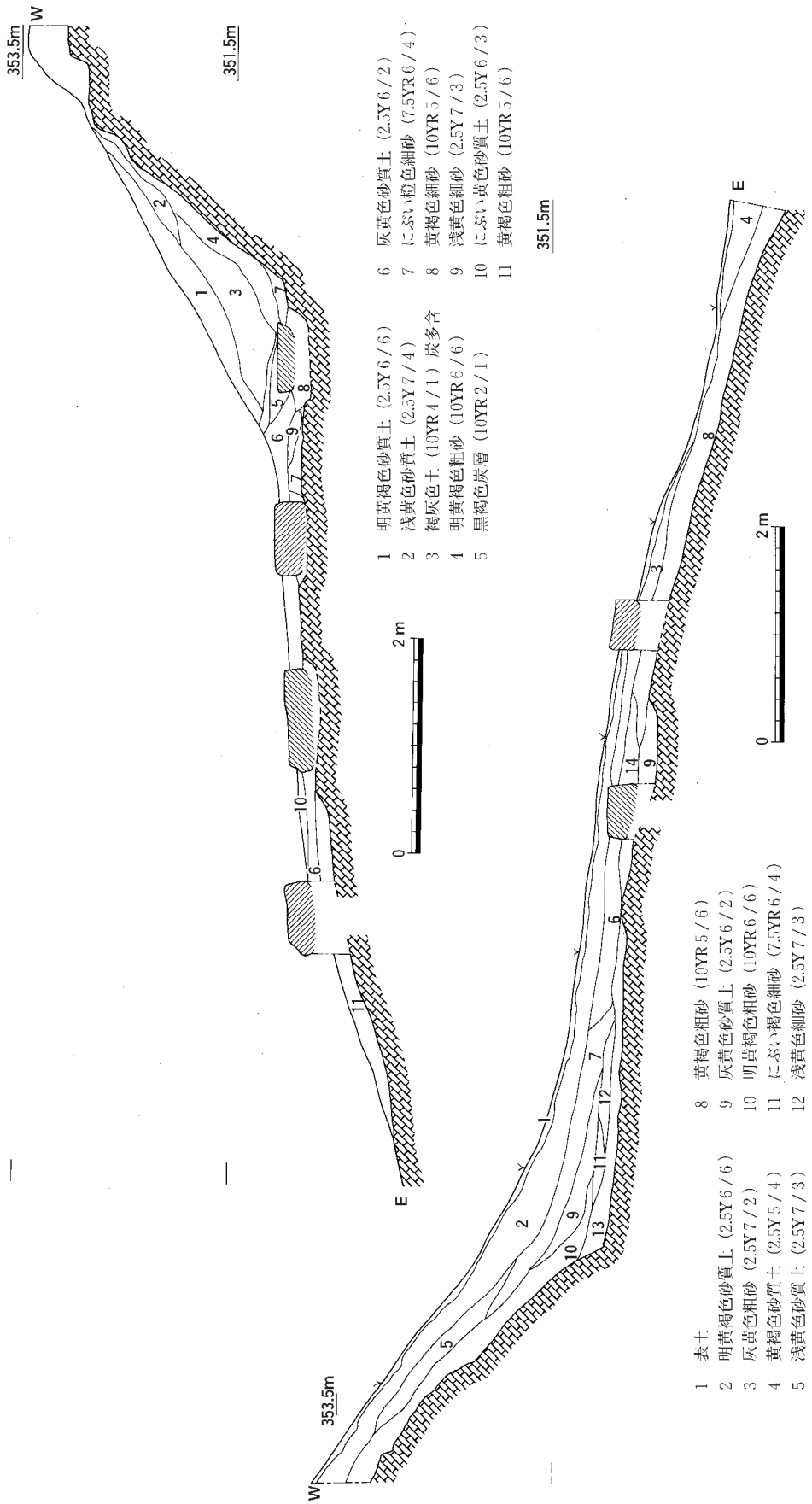
さらに、必要最低限の清掃の後、礎石建物１～４の個別の実測図作成も行い、第61～69図にトレンチ土層断面図も加え、第Ⅵ期に実施したトレンチについても掲載する。

礎石建物１は、３×３間の総柱の礎石建物で、鬼城山で最初に発見された礎石建物である。一部を除いて、礎石のほとんどは原位置を保っていることが観察され、桁行の柱間距離は８尺前後、梁間は７尺弱である。礎石は、母岩を粗割りにした60㎝から１ｍ前後を測る花崗岩が選ばれている。平らな面を上にし、下部には根石を補強し、水平に据え置いていることが断面観察により明らかとなった。礎石を置く場所の地山を掘りくぼめたような箇所もあるが、基本的には平らに整形した地山面に直接礎石を配したことが考えられる。したがって、全体を掘りくぼめて、版築基壇を造成した形跡は観察できない。

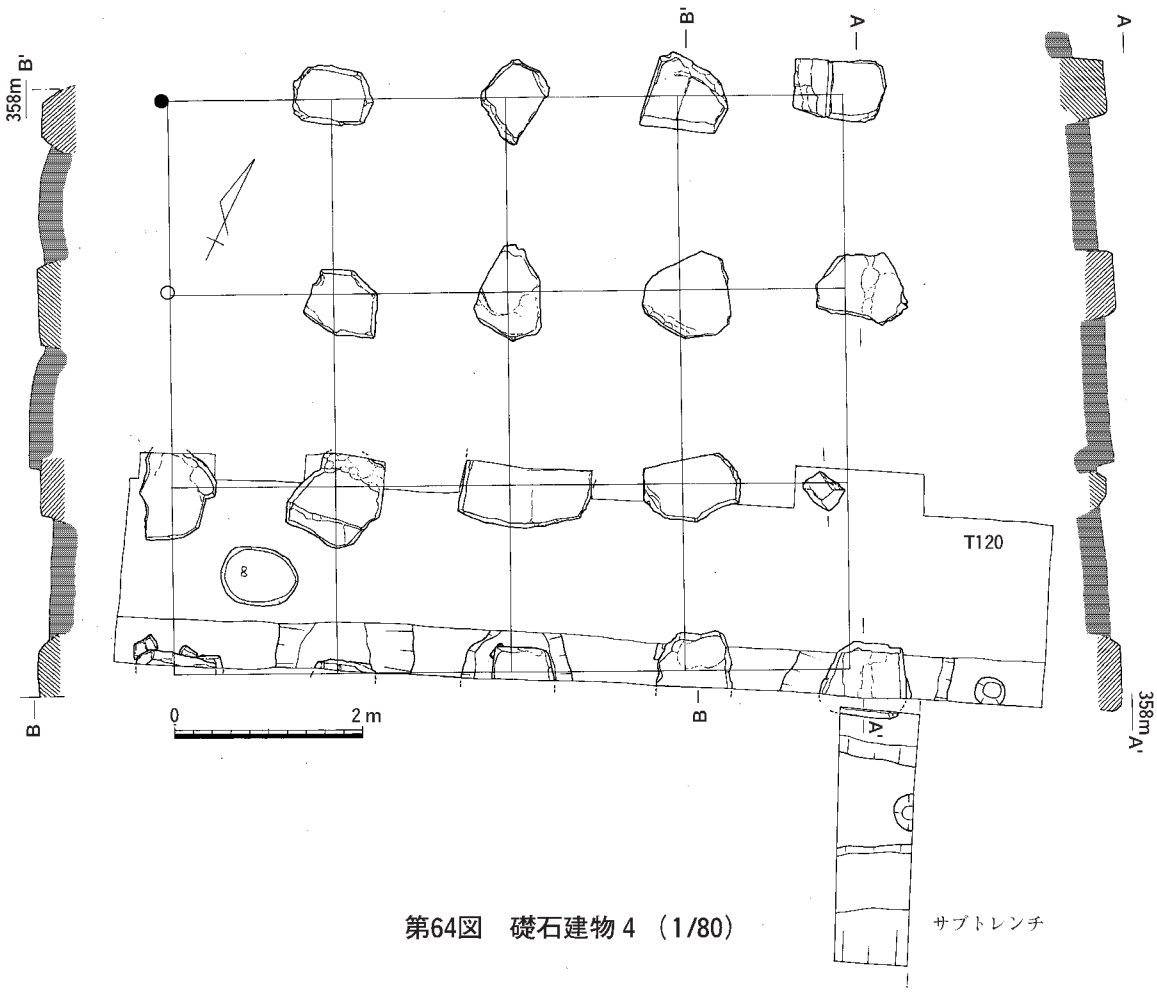
礎石建物２は、確認されている礎石建物の内、北端の下位に位置し、もっとも小規模な建物である。３×３間の総柱建物で、礎石の大半は原位置に残されている。礎石の一部には、円柱の痕跡と思われる円形の変色を認める。柱間は６尺前後を測る。

第63図に掲載するように、背後の地山整形痕跡が明瞭に観察されるが、建物の「軒の出」を考慮すると雨落ち溝なども検出されず、かなり雑な地業が行われた印象を受ける。

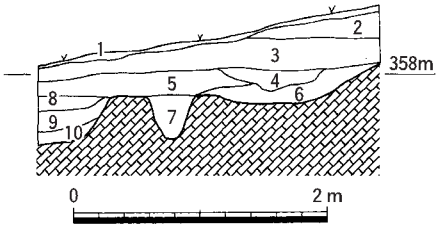
この礎石建物２の北方へ、Ｔ66・Ｔ65を設定したが礎石建物の存在は確認されなかった。



第63図　T 124土層断面図（1 /60）

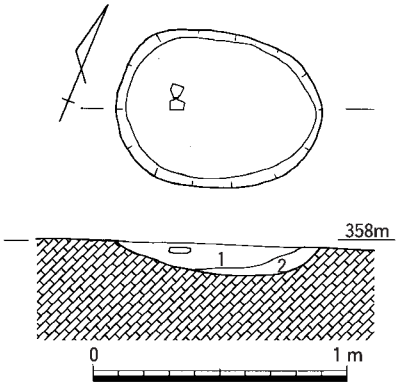


第64図　礎石建物４（1/80）



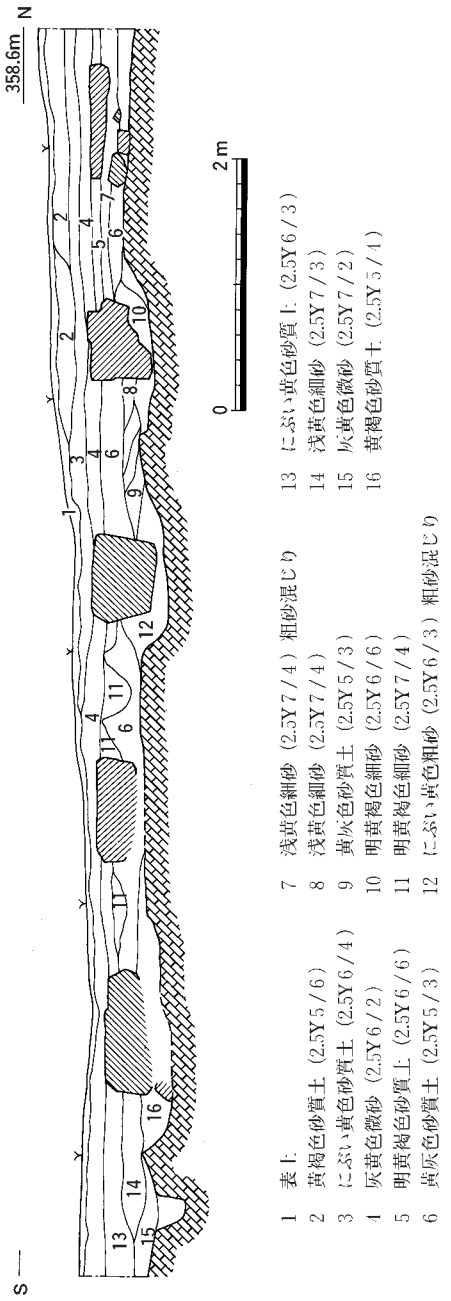
1　表土
2　にぶい黄橙色砂質土
3　にぶい黄褐色砂質土
4　黒褐色炭層
5　灰黄色砂質土
6　にぶい黄色砂質土
7　黄褐色（柱穴＝足場穴？）
8　明黄褐色粗砂
9　黄褐色細砂
10　にぶい黄色細砂

第65図　Ｔ120サブトレンチ土層断面図（1/60）



1　黒褐色砂質土（炭多含）
2　暗灰黄色砂質土

第66図　礎石建物内土壙（1/30）



第67図　Ｔ120土層断面図（1/60）

礎石建物３は、礎石建物１のほぼ南方向約35ｍに位置する。

従来は、３×３間と想定されていたが、４×３間の総柱礎石建物であることが今回の調査で確かめられた。

根石だけ残されていたり、抜き取られた礎石もあるが、柱間は桁行・梁間ともに６ないし７尺を測る。

Ｔ120を設定し、さらに南側へサブトレンチを設定した結果、規模も判明し、加えて礎石の掘り方などの地業や足場穴とみられる小穴が、２か所で検出された。

建物の南よりの身舎内部で、浅い長円形の土壙が検出された。炭を多く含む黒褐色を呈する上層からわずかな土師器片が出土しているが、正確な時期や性格は不明である。

第67図の土層断面図では、礎石を据え置く場所の地山を掘りくぼめた様子がよくわかり、一部には根石が残る。

礎石の上面は、ほぼ水平に保たれ、地山を掘りくぼめる深さの調整が入念に行われたことを示している。

南西隅の礎石は、板状の薄い石材を用い、地山との間に根石を置く。地山のレベルが高い位置では、礎石の掘り方もみられない。

したがって、この程度の規模の礎石建物であれば、版築基壇まで造成せずとも、不同沈下は生じなかったのか、あるいは、建築に要する期間短縮が、このような簡便な工法を選択したことに反映されているのかも知れない。

礎石建物４は、礎石建物３の北西方約20ｍ、礎石建物１の南西方約20ｍに位置する。

４×３間の総柱の礎石建物で、北東から南西方向を示す棟方向は、礎石建物１とほぼ一致している。

一部の礎石は、抜き取られるかあるいは、移動したりしているが、表面に現れている礎石の残りは、比較的良好である。

身舎は、北方の礎石建物１よりひとまわり大きく、Ⅰ群礎石建物の中では、もっとも大きい規模を示している。

また、北東隅の礎石は、長径約180㎝を越える巨石を使用している。この事実は、地山の低い位置に当たる側へは、高所側に使用する石材に比べると、より大きな石を選択する傾向を示しているともいえる。

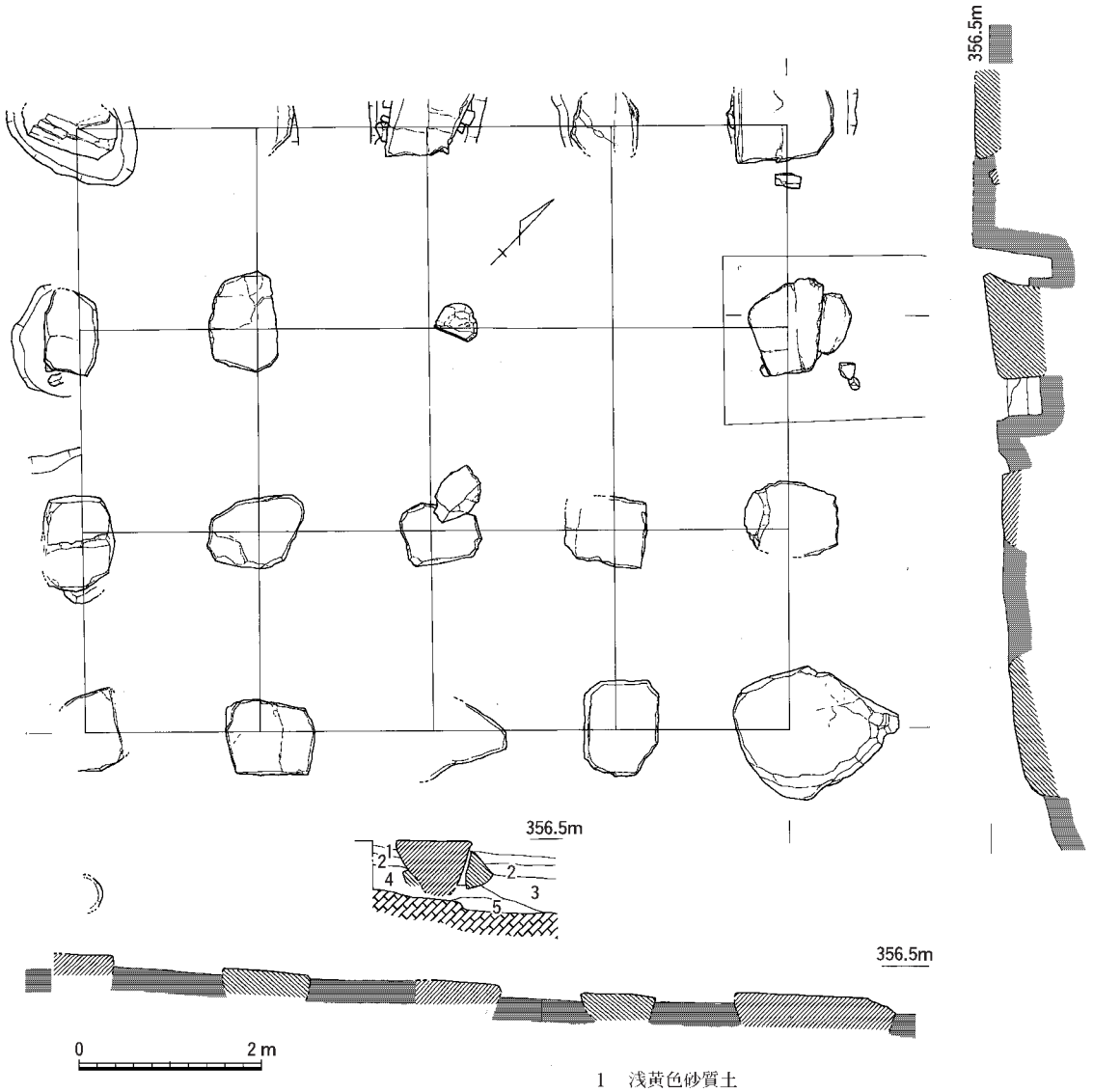
西辺桁行では、第69図上段に示すように、礎石を据え置いた浅い掘り方が明瞭に観察される。南西隅の礎石は、人為的に転倒しているが、わずかに浅い掘り方が残存している。

なお、一部の礎石には、根石が効果的に用いられ、礎石の下位側面に密着するように配されている。

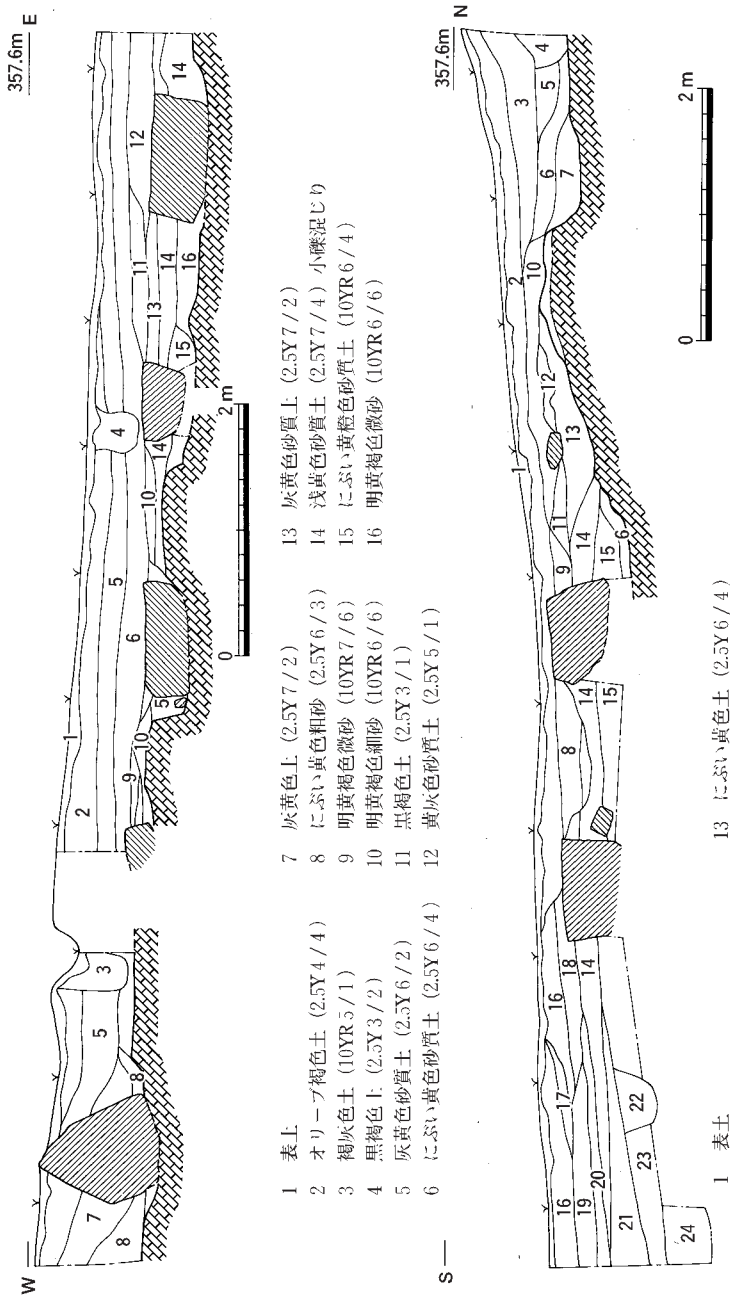
東側の桁行は、第68図の礎石断面をみる限り、かなりの傾斜が生じているが、目立った不同沈下は認められず、建築時にはあらかじめ柱の長さを調整していたのかも知れない。

第69図下段の土層断面図には、南方に足場穴とみられる第22層断面が現れている。礎石との位置や距離から、一定の造成が礎石の配置後に行われ、その後建築が始まったことを示していると思われる。

以上の４棟の礎石建物は、規模が同一なものはなく、棟方向を揃えるのは礎石建物１・４のみである。また、雨落ち溝など付帯する遺構は、確認できなかった。



第68図　礎石建物４（1/80）



第69図　Ｔ125土層断面図（1/60）

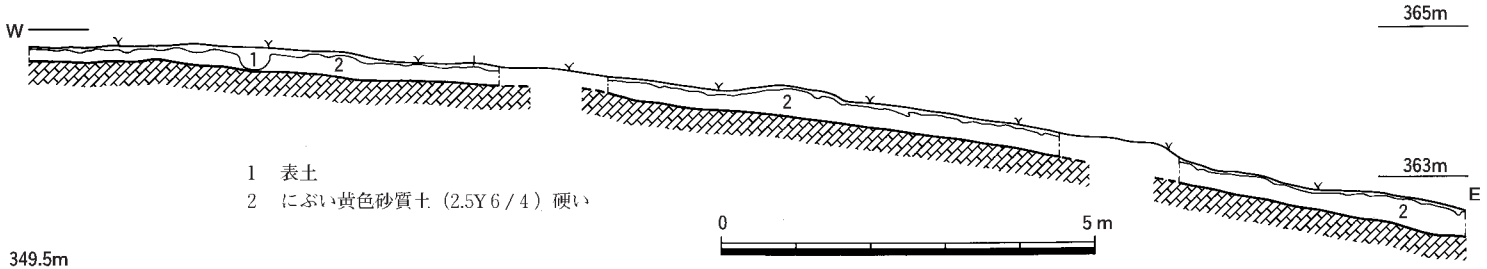
現在では、周囲に樹木が生い茂って視野が狭い、狭隘な谷に建築されているように感じられるが、当時は、東方谷部方向には、視野が開けていたとみられる。しかし、東・南方眼下の平野部からは、これらの建物の存在を視認することは、おそらく不可能であったと思われる。

第３節　第Ⅲ期の確認調査概要

Ⅲ期の確認調査は、11月８日から開始した。計８本のトレンチを、おもにⅠ群礎石建物とⅡ群礎石建物に関連して設定した。

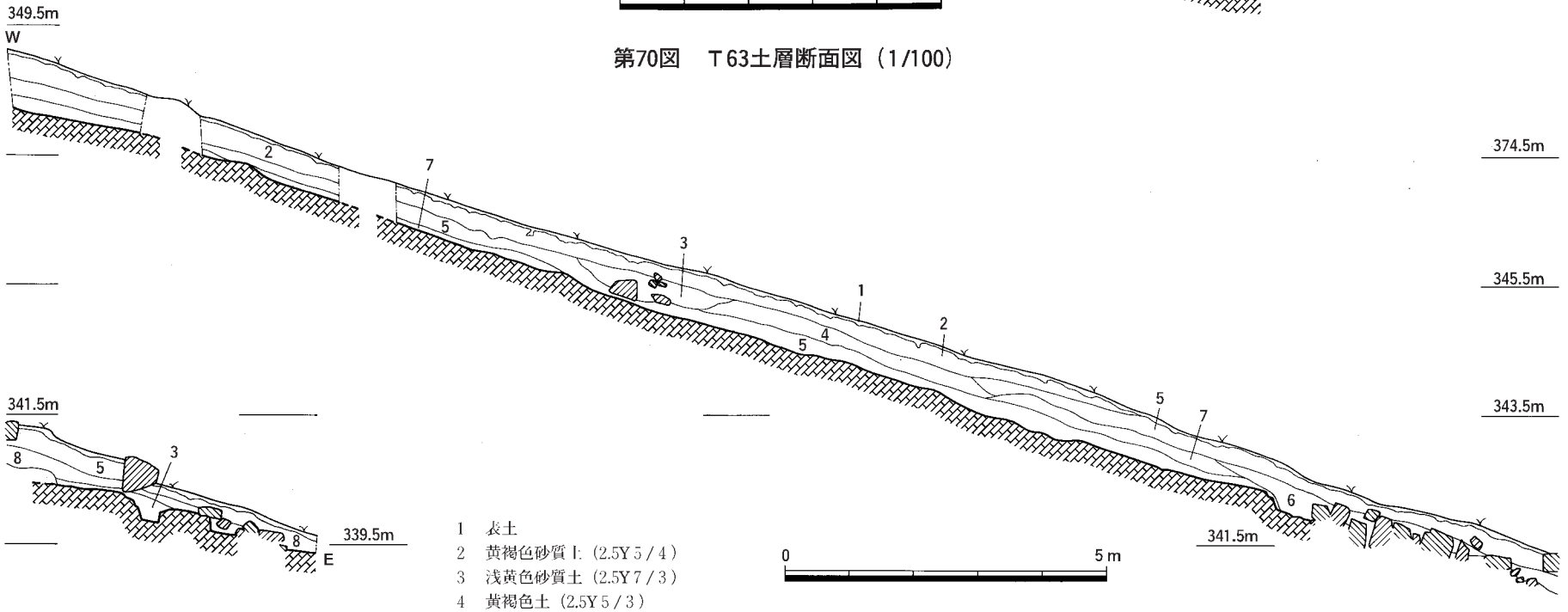
本節では、Ⅳ期に実施したＴ67の発掘成果も併せて掲載する。

Ｔ63は、Ｔ124の西上方約40ｍのやや平坦な尾根上に設定したトレンチである。礎石建物をはじめ、



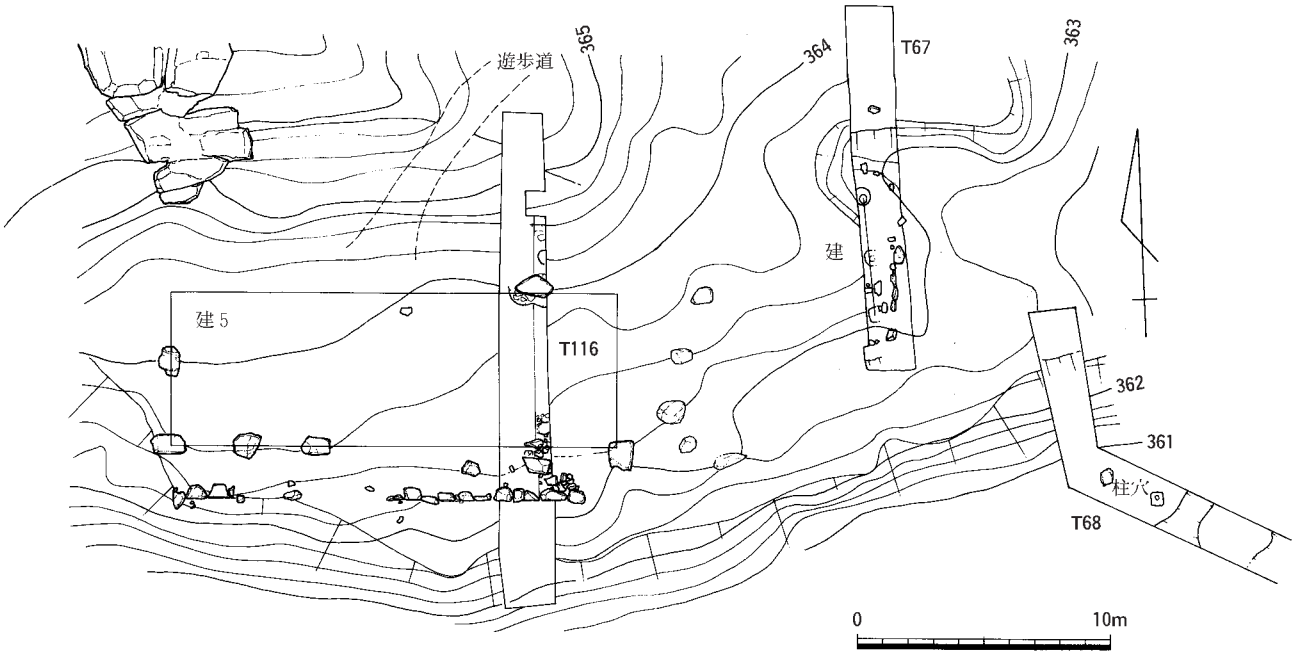
1　表土
2　にぶい黄色砂質土（2.5Y 6 / 4）硬い

第70図　T63土層断面図（1/100）



1　表土
2　黄褐色砂質土（2.5Y 5 / 4）
3　浅黄色砂質土（2.5Y 7 / 3）
4　黄褐色土（2.5Y 5 / 3）
5　にぶい黄色砂質土（2.5Y 6 / 4）
6　灰黄色砂質土（2.5Y 6 / 2）
7　にぶい黄褐色砂質土（10YR 5 / 4）
8　灰黄色土（2.5Y 6 / 2）

第71図　T65土層断面図（1/100）



第72図　礎石建物５周辺地形図（1/300）

何らかの遺構の検出が期待されたが、なだらかな緩斜面が検出されたにとどまった。また、出土遺物もまったくみられなかった。

Ｔ65は、Ｔ124の浅い谷を挟んだ下方約30ｍに設定したトレンチである。Ⅰ群礎石建物の広がりを確認するために設定したが、期待された礎石や地山の造成痕跡は、認められなかった。

下位には、自然の露岩が密集するが、人工的に敷き詰めた状態ではなく、凹凸が目立つ。Ⅰ群礎石建物からは10ｍ以上レベルも下がり、大きな地形改変やその後の造成工事は行われなかった地点とみられる。

Ⅱ群礎石建物は、早くからその存在が知られていたが、考古学的な発掘調査は、Ⅰ群礎石建物同様実施されておらず、今回３本のトレンチを設定した。併せて、地形測量と礎石・基壇南側列石の実測も行った。

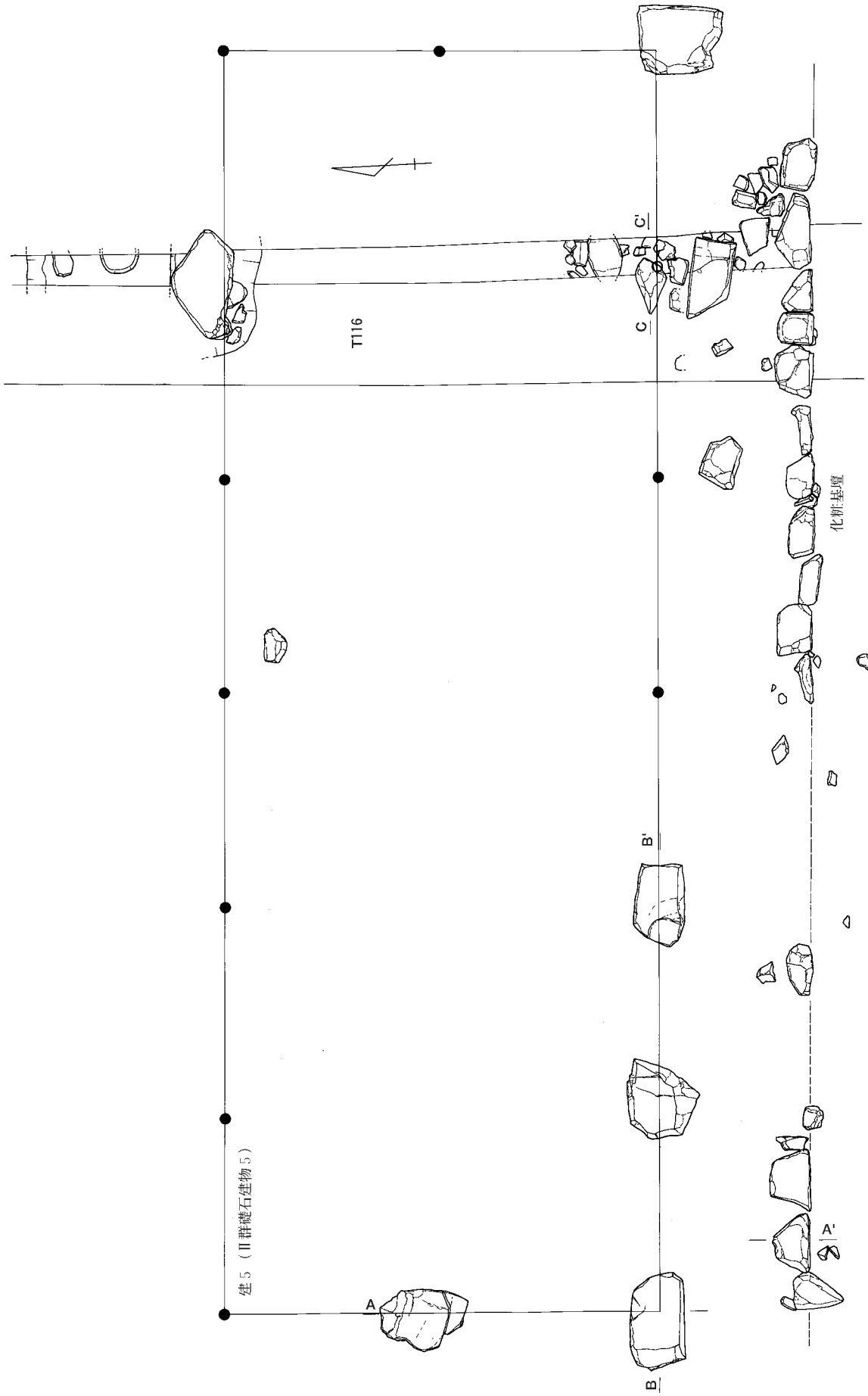
礎石建物５は、東西の棟方向を示す側柱建物で、今回の測量調査を実施した結果、６×２間の規模が推定されるに至った。現存する確実な礎石は、６石でＴ116にかかる部分では、根石の残存が認められる。北側桁行の１石では、地山を掘り込んだ礎石据え付けの掘り方が確かめられている。

南側の列石は、化粧基壇の石積みと考えられるが、基壇そのものは版築造成は行われていない。高位は地山削平、低位南側は造成地業を行っている。

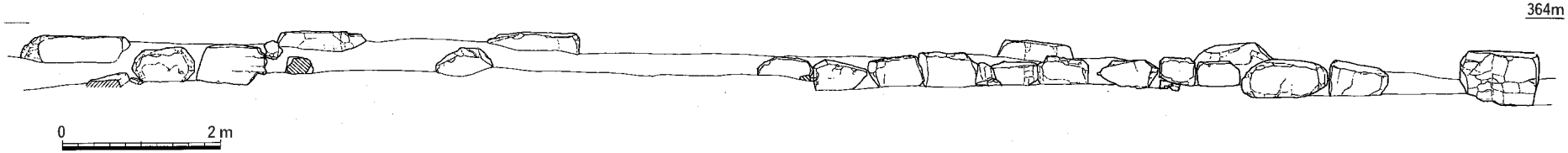
この周辺では、従来から瓦や土師器の出土が目立ち、トレンチ出土あるいは表面採集遺物の一部を第75図に掲載する。**61・62**は、Ｔ116の造成土中から出土した須恵器蓋・土師器杯で、前者は古代Ⅰないし Ⅱ期に比定される。**63・64**は古代Ⅳ期、平安時代中頃以降に比定されるだろう。

Ｔ67は、Ｔ116の約14ｍ東に平行して設定したトレンチである。地表面からわずかな深さで、第76図に示すような小規模な列石が検出された。地山面では、３本の柱穴が検出され、掘立柱建物を形成する柱と推定している。柱間距離は、約７尺前後を測る。

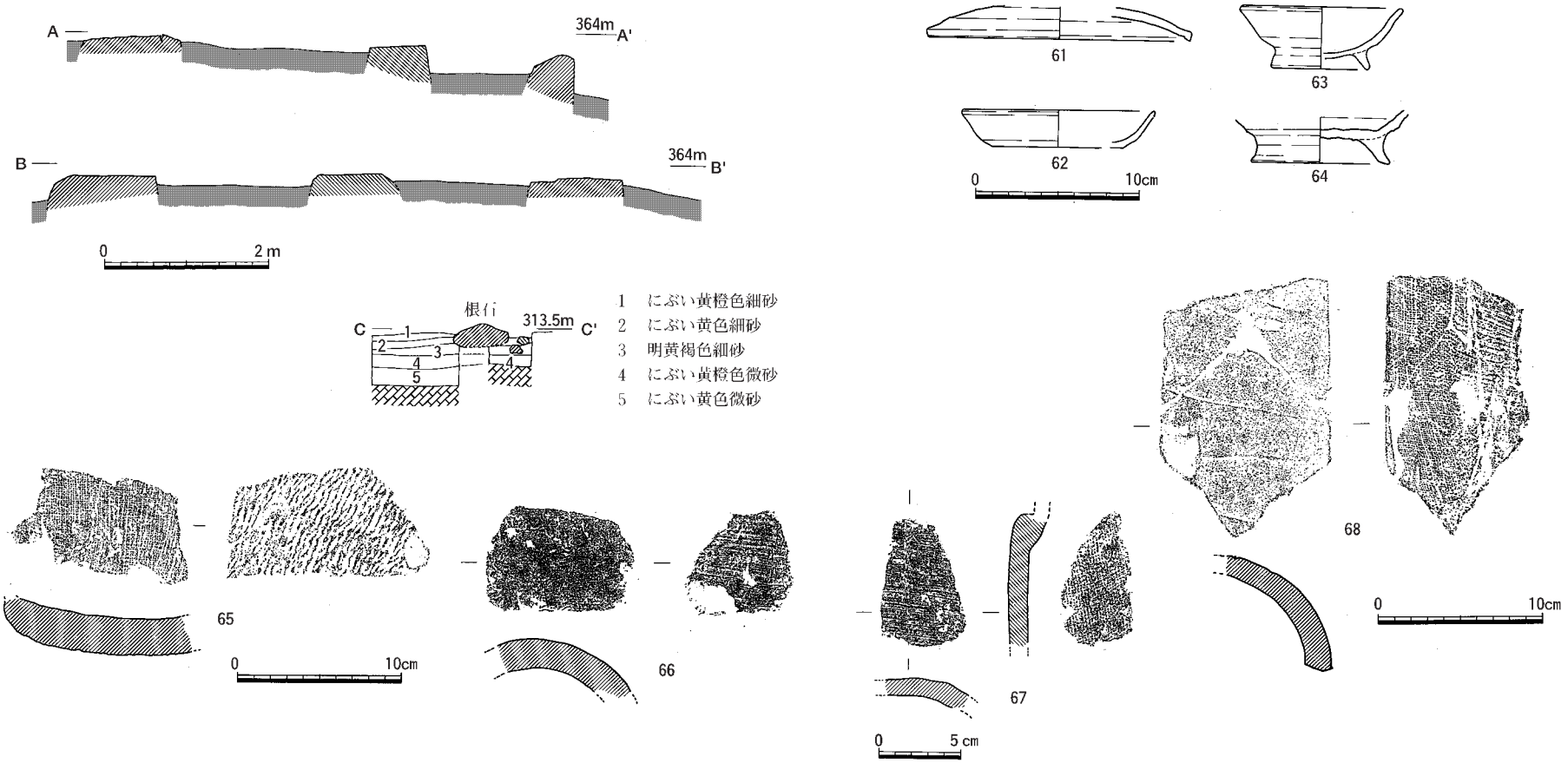
出土遺物には、第78図に掲げる須恵器・土師器・瓦がある。須恵器蓋**69**や甕**72**は、造成土から出土した遺物である。掘立柱建物１がこの時期すなわち、古代Ⅱ期より古い可能性を示しており、このこ



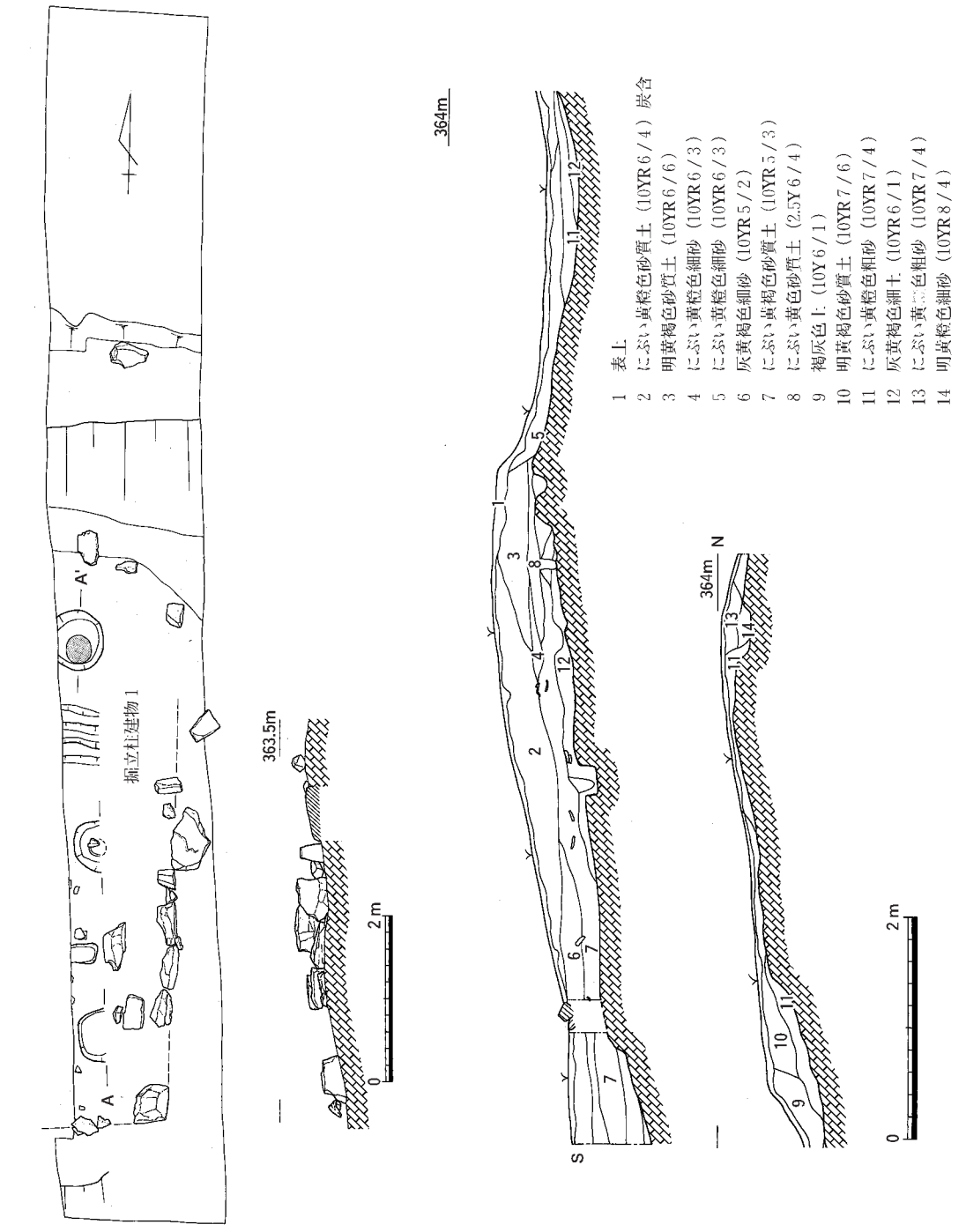
第73図　礎石建物５（1/80）



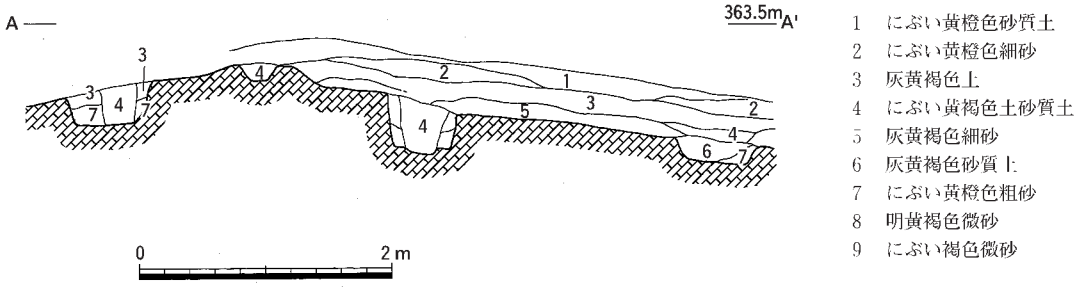
第74図　礎石建物５南化粧基壇立面図（1/80）



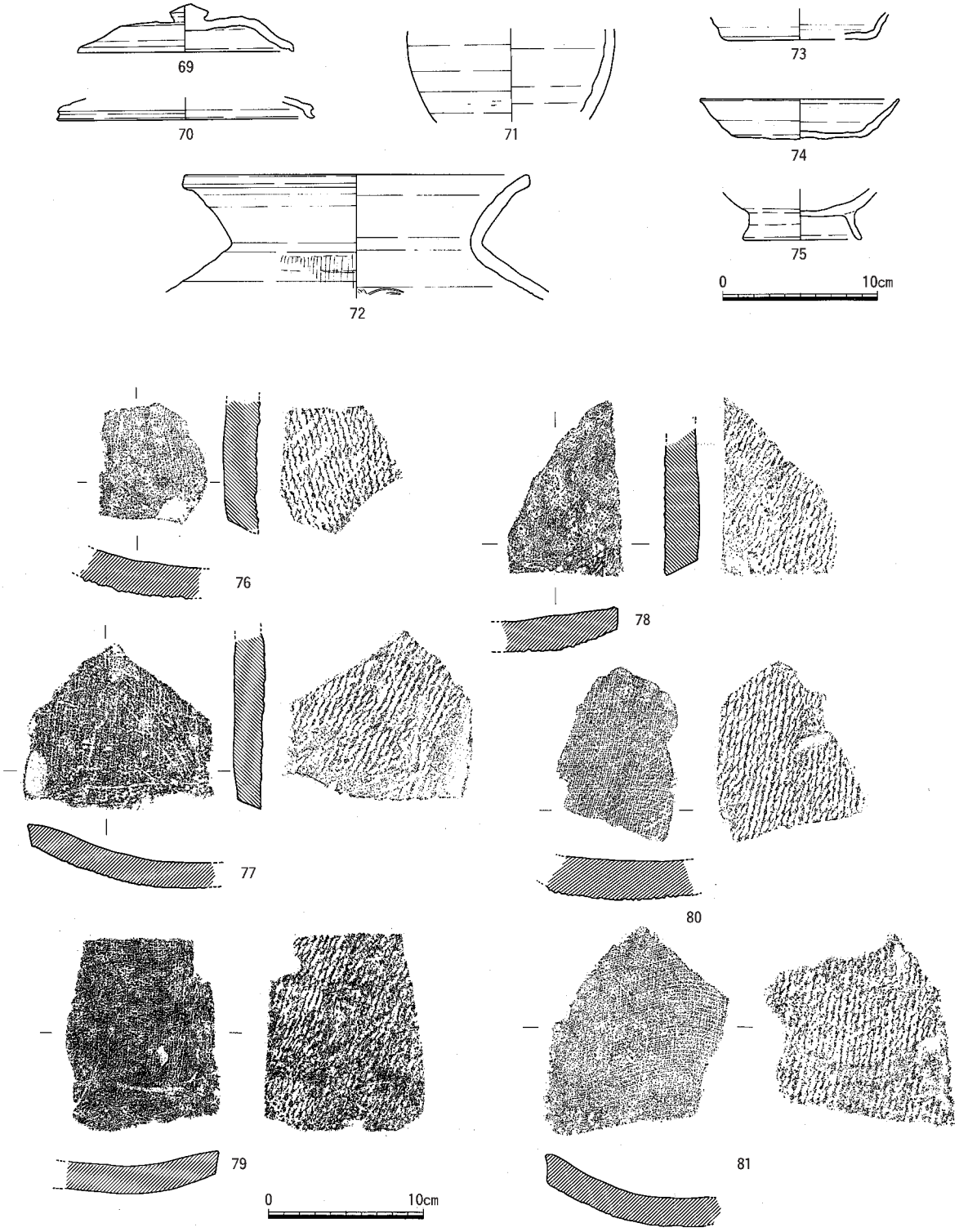
第75図　礎石建物５断面図、出土遺物（1/80・1/4）



第76図　Ｔ67平面図、土層断面図（1/80・1/60）



第77図　Ｔ67掘立柱建物１断面図（1/60）



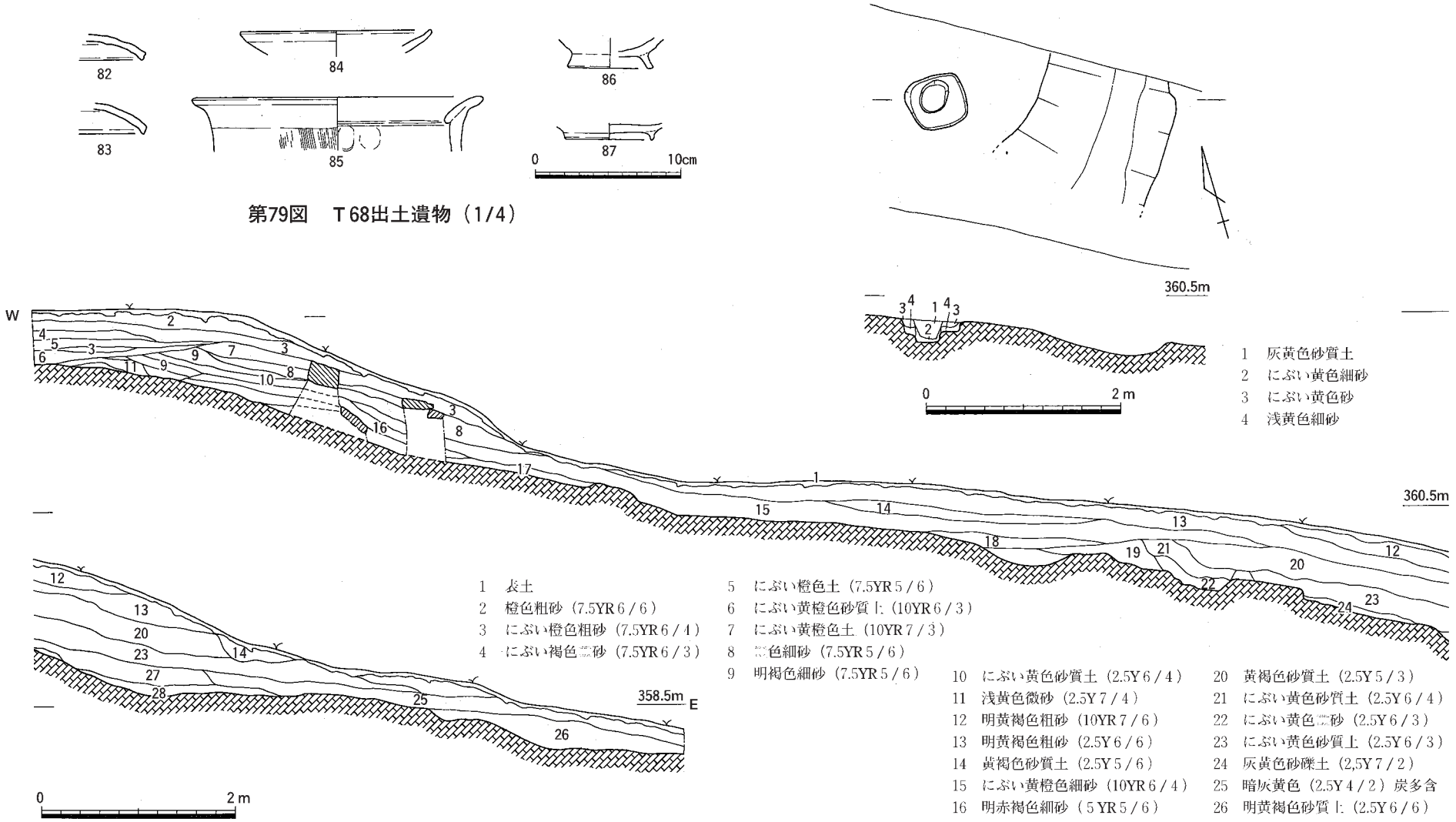
第78図　Ｔ67出土遺物（1/4）

とは同時に、礎石建物５より古い前身建物の存在を示唆していると考えられる。

瓦**76～81**はすべて平瓦で、Ｔ116およびその周辺から出土する平瓦と共通する。凹面は布目、凸面は荒い縄目が観察される。

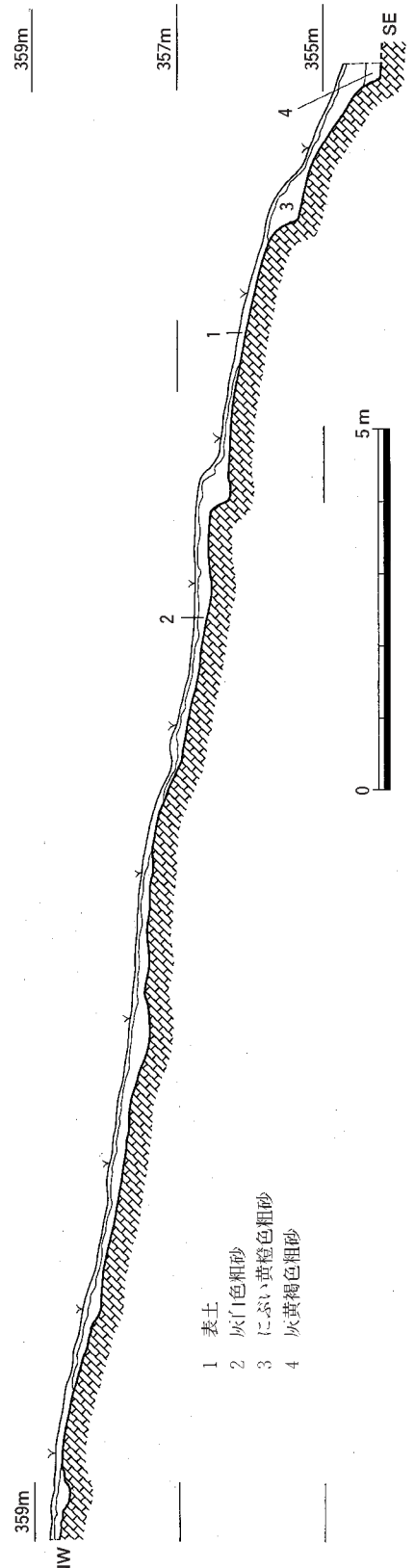
Ｔ68は、Ｔ67の東方約６ｍに設定したトレンチである。上位から一段下がった平坦面で、溝状の掘り込みと柱穴を検出している。柱穴はやや隅丸方形を呈し、柱痕跡も観察される。掘り方はやや浅い。

第79図　T68出土遺物（1/4）

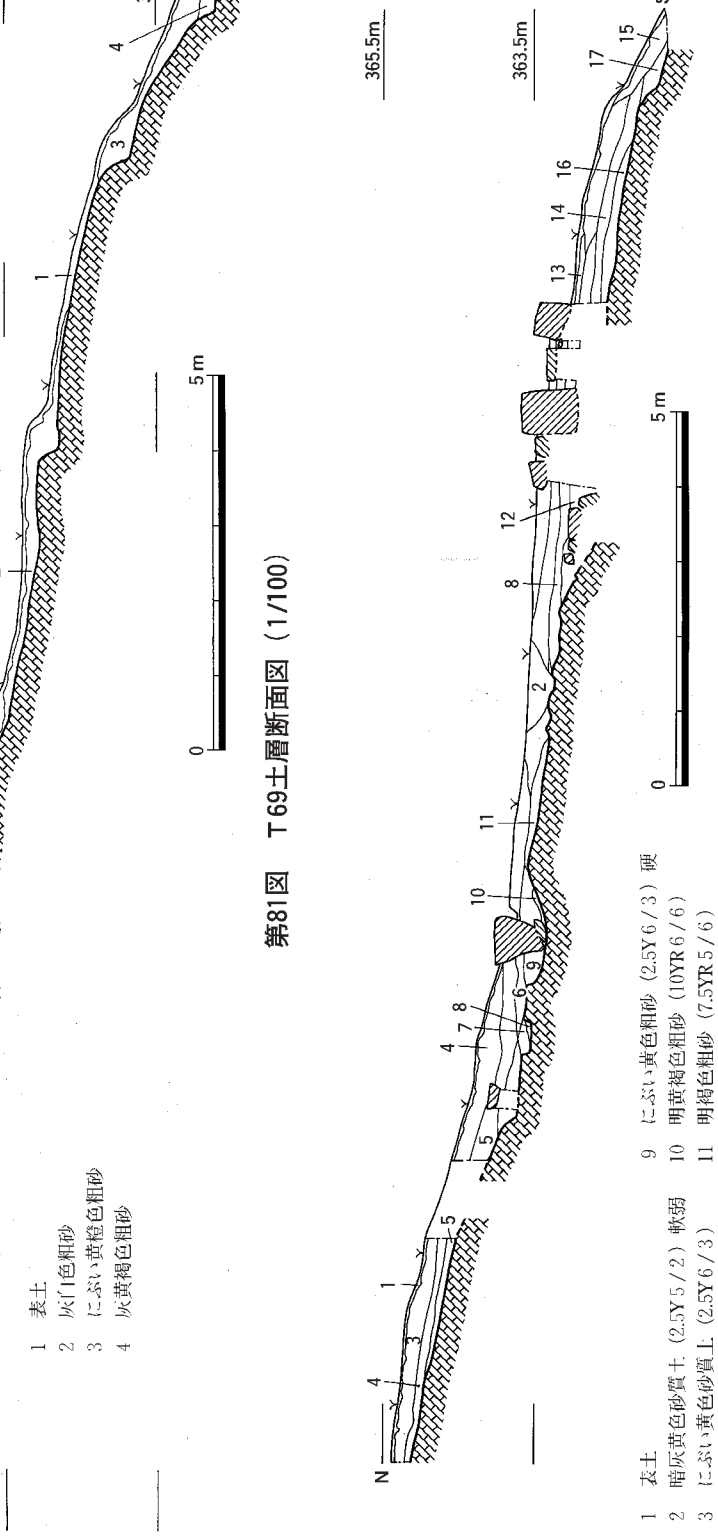


第80図　T68土層断面図、柱穴（1/60）

トレンチ設定範囲では、溝が掘られていることや、下位に炭を含む造成土が認められることから、造成が行われた可能性が高く、一方で出土遺物も目立つ。84は、鬼城山では初めて出土した緑釉陶器皿で、古代Ⅲ期すなわち９世紀前半に比定される良質な製品で、京都産である。85はやや長胴の甕で、須恵器蓋82・83とともに、古代Ⅰ期あるいは、Ⅱ期の可能性が高い。



第81図　Ｔ69土層断面図（1/100）



第82図　Ｔ116土層断面図（1/100）

第４節　第Ⅳ期の確認調査概要

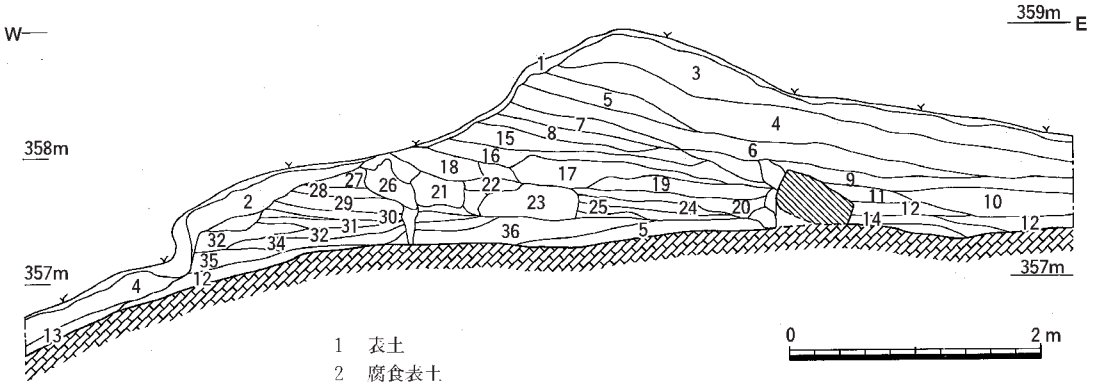
第Ⅳ期の開始は、11月末日に開始した。城内の中心部から北辺部、旧第２城門付近にかけての広範な城内に18本のトレンチを設定した。

このうち、第Ⅰ～Ⅲ期に実施した確認調査の補足精査が必要な箇所にも追加設定したＴ48・Ｔ67を含み、この期間内に発掘を実施したが、最寄りの初出関連トレンチと併記した方が理解しやすいのでそれぞれ前送りして、第Ⅱ期、第Ⅲ期に併載した。

また、４本のトレンチで「落とし穴」とみられる円形の土壙が相次いで検出され、鬼城山一帯が、縄文時代にさかのぼるハンティングエリア（狩猟場）であったことを示す具体的な遺構が明らかとなった。このうちＴ91からは石鏃が出土している。

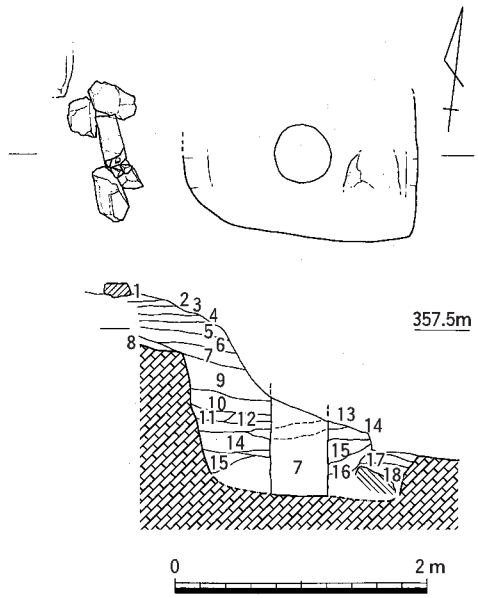
Ｔ49は、Ｔ55のすぐ北に設定したトレンチで、北門の西方約40ｍの「折れ」にあたる。この部分は、鬼城山西辺背後の城郭線が、残存する土塁や列石として、比較的良好に確認できる地点にあたる。

実戦に際して、外敵が直接的に侵入する可能性は低いとみられる西側ではあるが、背後の守りも決して手薄ではなく、随所に土塁の残存部を観察することができる。



1　表土
2　腐食表土
3　オリーブ色砂質土（５Ｙ５／４）堅緻
4　灰オリーブ色砂質土（５Ｙ５／４）堅緻
5　浅黄色細砂（2.5Ｙ７／３）
6　灰白色粗砂（10ＹＲ８／２）
7　浅黄橙色細砂（10ＹＲ８／４）（褐色ブロック含）
8　にぶい黄橙色細砂（10ＹＲ６／４）（褐色ブロック含）
9　淡黄色粗砂（2.5Ｙ８／３）
10　黄褐色粗砂（2.5Ｙ５／４）
11　灰黄色細砂（2.5Ｙ６／２）
12　にぶい黄色細砂（2.5Ｙ６／３）
13　にぶい黄色細砂（2.5Ｙ６／４）
14　にぶい黄橙色細砂（10ＹＲ６／４）
15　灰白色粗砂（10ＹＲ８／２）
16　にぶい黄橙色粗砂（10ＹＲ７／３）
17　にぶい黄橙色粗砂（10ＹＲ７／２）
18　灰白色粗砂（2.5Ｙ８／１）
19　灰黄褐色細砂（10ＹＲ６／２）
20　黄褐色砂質土（2.5Ｙ５／３）
21　にぶい黄色砂質土（2.5Ｙ６／３）
22　浅黄橙色粗砂（10ＹＲ８／４）ブロック状
23　にぶい黄色砂質土（2.5Ｙ６／３）ブロック状
24　灰黄褐色細砂（10ＹＲ６／２）
25　黄褐色砂質土（2.5Ｙ５／３）
26　灰白色粗砂（10ＹＲ８／２）
27　にぶい黄色砂質土（2.5Ｙ６／３）
28　にぶい黄橙色細砂（10ＹＲ７／４）
29　にぶい黄橙色細砂（10ＹＲ６／４）
30　灰黄色微砂（2.5Ｙ７／２）
31　灰黄色微砂（2.5Ｙ７／２）
32　灰白色粗砂（2.5Ｙ８／２）
33　灰黄色微砂（2.5Ｙ７／２）
34　にぶい黄橙色微砂（10ＹＲ７／２）
35　明黄褐色細砂（10ＹＲ７／４）
36　明黄褐色粗砂（10ＹＲ７／６）

第83図　Ｔ49土層断面図（1/60）



1　橙色細砂（7.5YR７/６）
2　灰白色細砂（５Y８/１）
3　にぶい黄橙色細砂（10YR７/２）
4　灰白色細砂（５Y８/１）
5　にぶい黄橙色細砂（10YR７/４）
6　にぶい黄橙色細砂（10YR７/３）
7　にぶい黄橙色粗砂（10YR７/３）柱痕跡
8　灰黄褐色微砂（10YR６/２）
9　にぶい黄橙色細砂（10YR６/３）
10　にぶい黄褐色細砂（10YR５/３）
11　灰黄褐色微砂（10YR６/２）
12　にぶい黄橙色細砂（10YR６/３）
13　灰白色粘質土（10YR７/１）（根巻き粘土）
14　にぶい黄色微砂（2.5Y６/３）
15　灰黄色微砂（2.5Y６/２）
16　暗灰黄色粗砂（2.5Y５/２）
17　浅黄色細砂（2.5Y７/３）
18　にぶい黄色細砂（2.5Y６/３）（褐色ブロック混）

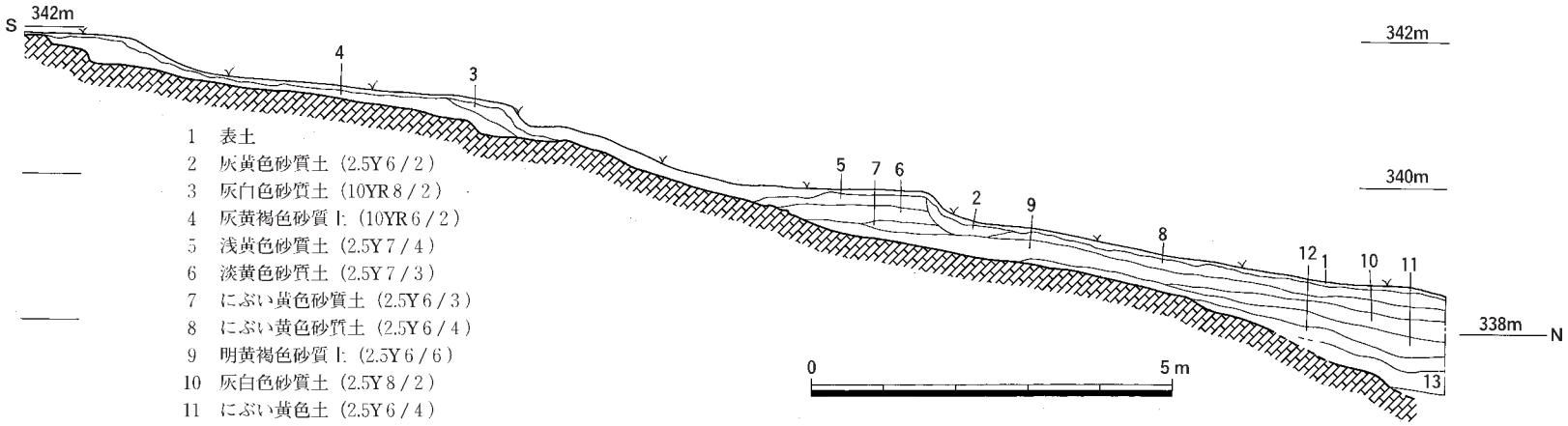
第84図　Ｔ49柱穴（1/60）

第83図の土層断面図では、第Ⅱ期で概述したＴ54の版築土塁下位とは様相が異なり、城内側上位にみられる、幾分粗い土盛りによって土塁が築かれている。したがって、厳密な版築とは認められず、発掘時の掘削作業はＴ54の堅硬な版築層に比べると格段に容易であった。

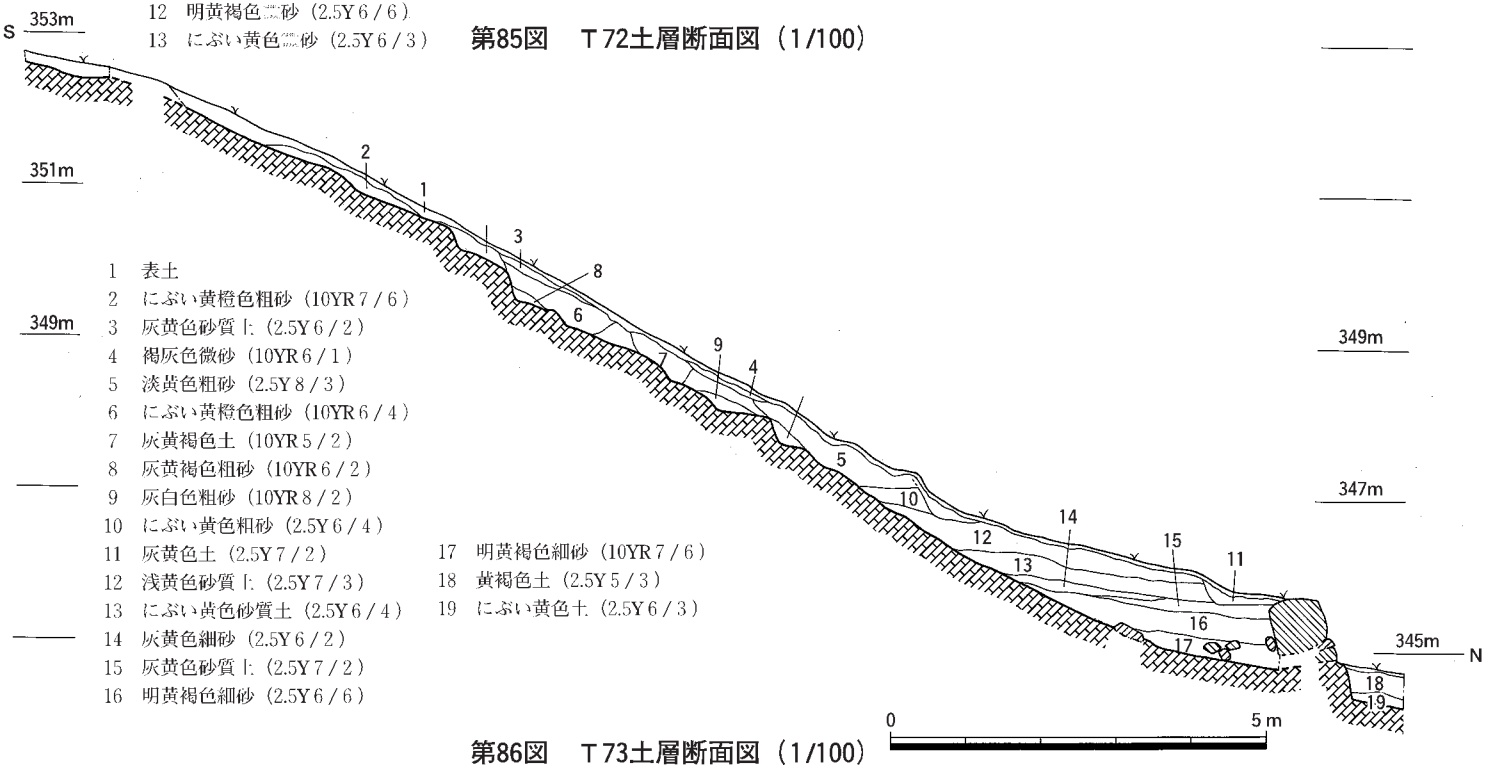
Ｔ49下位では、第84図に掲げる柱穴が検出された。地山を掘り込んだ掘り方は２ｍ以上の方形を示し、径約40㎝の柱痕跡を残す。柱の痕跡は、黄橙色の粗砂が埋積し、締まりがなく軟質である。

層位的にみると、柱を立てた後順次土塁の盛り上げ作業を行っていることがわかる。また、柱痕跡の周壁には、根巻き粘土が部分的に観察される。

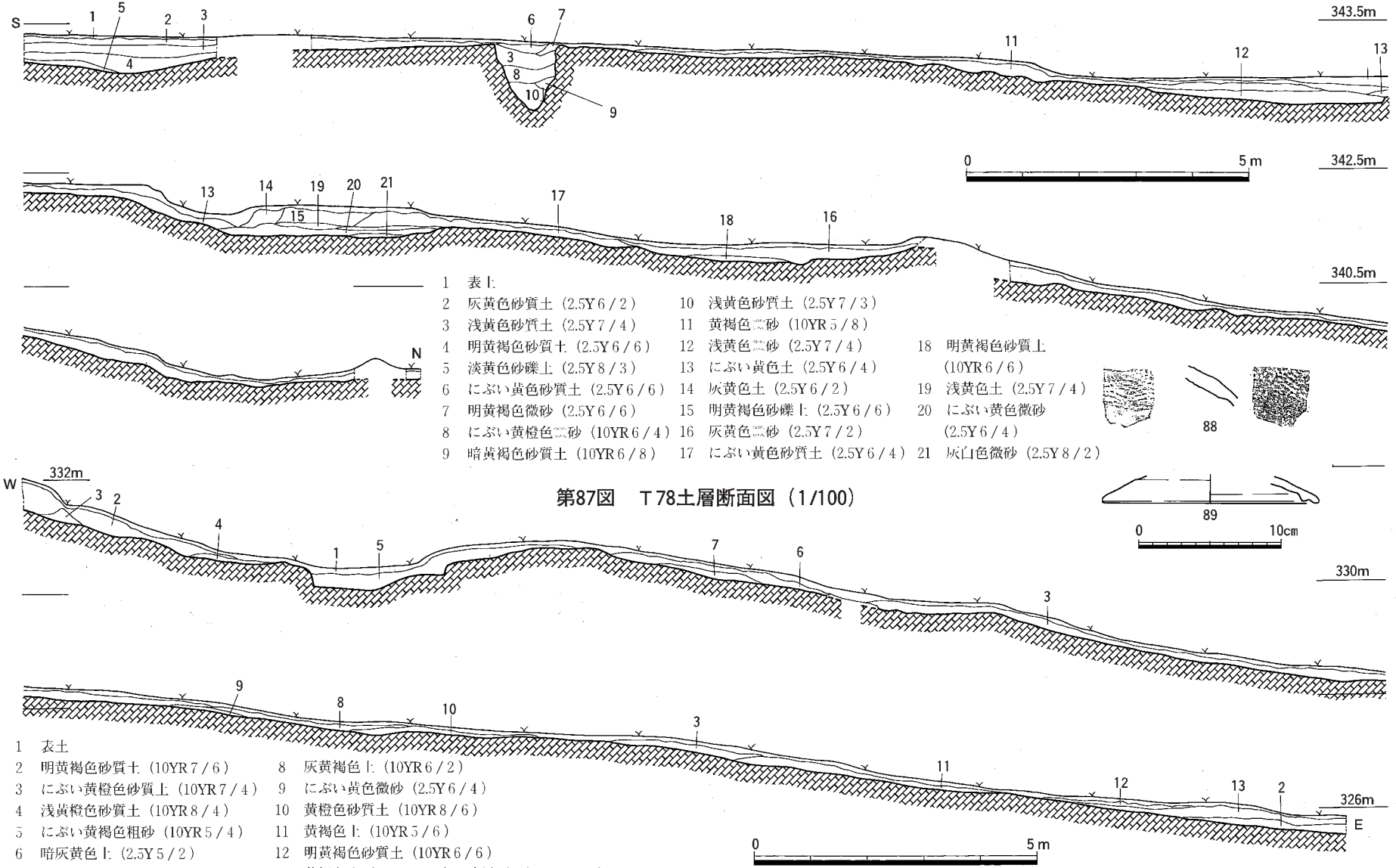
Ｔ49上位土層断面（西から）



第85図　Ｔ72土層断面図（1/100）



第86図　Ｔ73土層断面図（1/100）

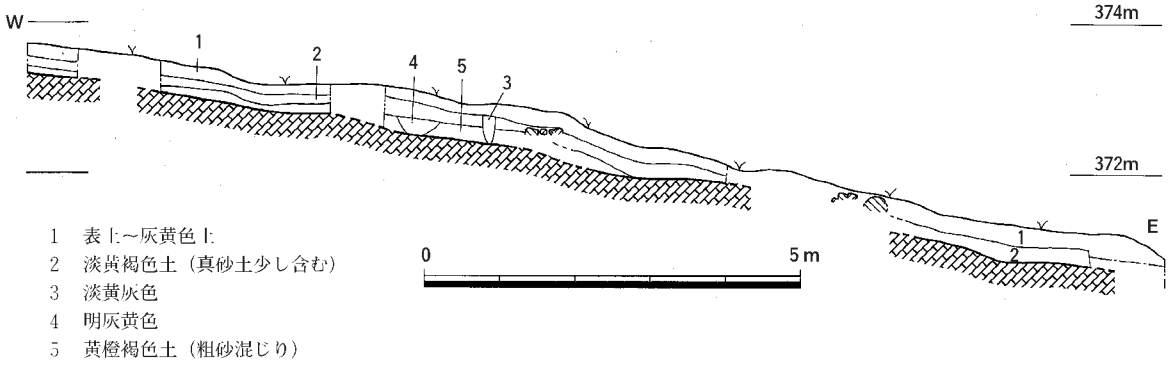


1　表土
2　灰黄色砂質土（2.5Y６／２）
3　浅黄色砂質土（2.5Y７／４）
4　明黄褐色砂質土（2.5Y６／６）
5　淡黄色砂礫土（2.5Y８／３）
6　にぶい黄色砂質土（2.5Y６／６）
7　明黄褐色微砂（2.5Y６／６）
8　にぶい黄橙色微砂（10YR６／４）
9　暗黄褐色砂質土（10YR６／８）
10　浅黄色砂質土（2.5Y７／３）
11　黄褐色微砂（10YR５／８）
12　浅黄色微砂（2.5Y７／４）
13　にぶい黄色土（2.5Y６／４）
14　灰黄色土（2.5Y６／２）
15　明黄褐色砂礫土（2.5Y６／６）
16　灰黄色微砂（2.5Y７／２）
17　にぶい黄色砂質土（2.5Y６／４）
18　明黄褐色砂質土（10YR６／６）
19　浅黄色土（2.5Y７／４）
20　にぶい黄色微砂（2.5Y６／４）
21　灰白色微砂（2.5Y８／２）

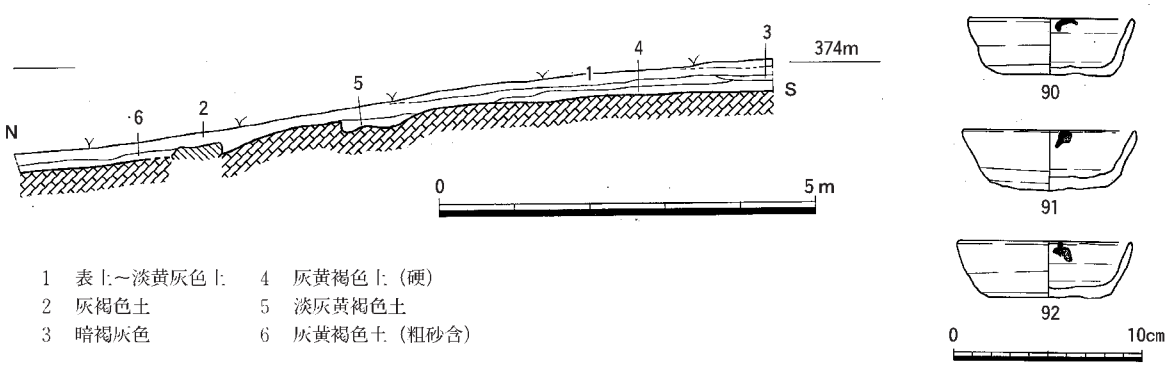
第87図　Ｔ78土層断面図（1/100）

1　表土
2　明黄褐色砂質土（10YR７／６）
3　にぶい黄橙色砂質土（10YR７／４）
4　浅黄橙色砂質土（10YR８／４）
5　にぶい黄褐色粗砂（10YR５／４）
6　暗灰黄色土（2.5Y５／２）
7　橙色土（7.5Y６／６）
8　灰黄褐色土（10YR６／２）
9　にぶい黄色微砂（2.5Y６／４）
10　黄橙色砂質土（10YR８／６）
11　黄褐色土（10YR５／６）
12　明黄褐色砂質土（10YR６／６）
13　黄褐色土（10YR５／６）～褐色土（10YR４／６）

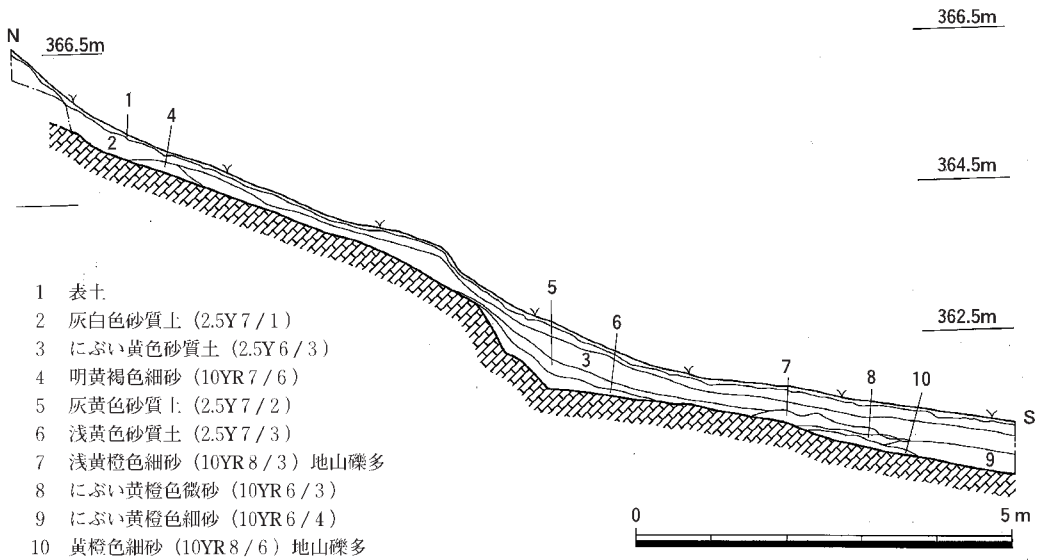
第88図　Ｔ83土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）



第89図　Ｔ85土層断面図（1/100）



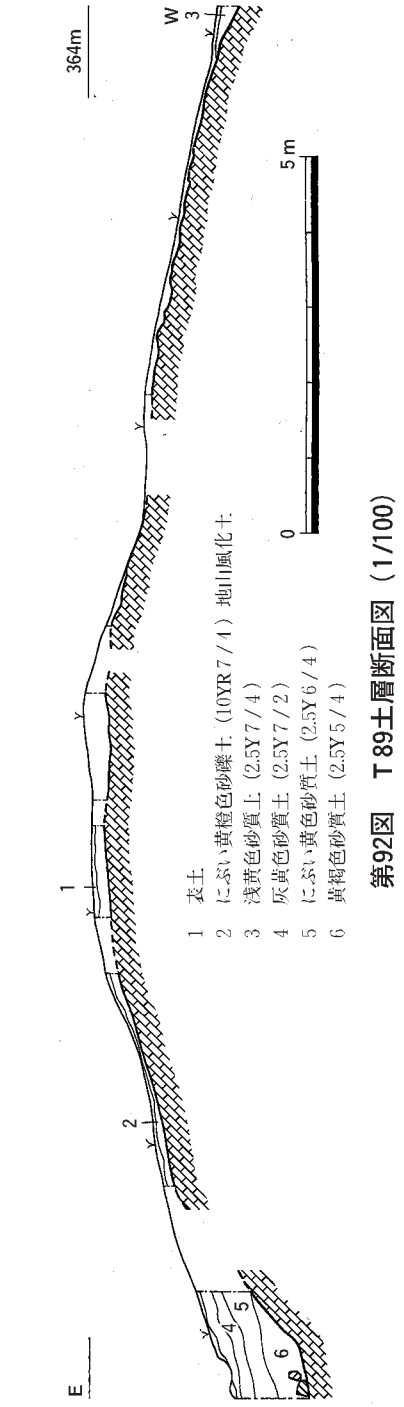
第90図　Ｔ86土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）



第91図　Ｔ87土層断面図（1/100）

Ｔ72は、Ⅰ群礎石建物の東方約100ｍの下位に設定したトレンチである。Ｔ78とともに北方へ張り出す尾根線上での遺構の存在確認を主眼として設定したが、地山面の削平痕跡が認められた以外、遺構は存在せず、出土遺物も皆無であった。

Ｔ73は、よりⅠ群礎石建物に近い北斜面に設定したトレンチである。地山を段切りした痕跡が観察され、下方には砂防工事による石垣が構築される。遺構、出土遺物は認められなかった。



第92図　Ｔ89土層断面図（1/100）

Ｔ78は、Ｔ72に近接して設定したトレンチである。第87図土層断面図に示すように、「落とし穴」とみられる掘り込みが検出された。

設定場所は多少の起伏があるが、比較的平坦で古代の遺構検出が期待されたが、出土遺物も含め成果は得られなかった。

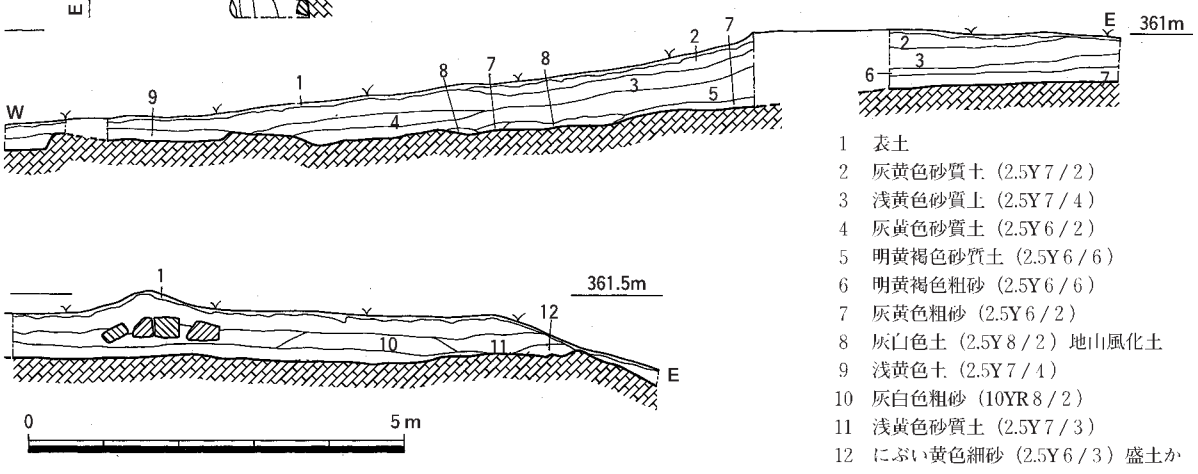
Ｔ83は、Ｔ78の東下方へ設定したトレンチである。地山上には厚い堆積は存在しないが、**88・89**の須恵器小片が出土している。次期、第Ⅴ期に設定したＴ121は、このトレンチを補足する目的もあり設定した。

Ｔ85・Ｔ86は、北門の東方約100ｍの急坂を登り切った平坦面に設定したいずれも東西方向のトレンチである。旧第２城門の南方100ｍにもあたる。

明確な遺構の検出はみられないが、**90～92**の土師器が出土している。**90**はＴ86、**91・92**はＴ85から出土した土師器Ⅲで、いずれも口縁部内面に灯心油痕が残存する。油痕はきわめて小さく、長時間、恒常的に使われたのではなく、ごく一時的な使用による痕跡と考えられる。時期的には、古代Ⅲ期に比定される可能性が高く、修験道などの「火を使う」祭事に深く関わる遺物であるかもしれない。

Ｔ87は、北門の東約70ｍの西に傾斜する斜面に設定したトレンチである。地表面に現れた起伏でもわずかに観察できるが、中ほどで段切り状の地山カット部分が明瞭に検出された。このような地業を行った箇所は、Ⅰ群礎石建物が建築された谷部で観察されたが、付近に礎石は見当たらない。

位置的には、北門から、谷裾を経て東門に通じる間道にあたり、城内の幹線道路が造成された痕跡である可能性もあながち比定できない。



第93図　Ｔ90土層断面図（1/100）

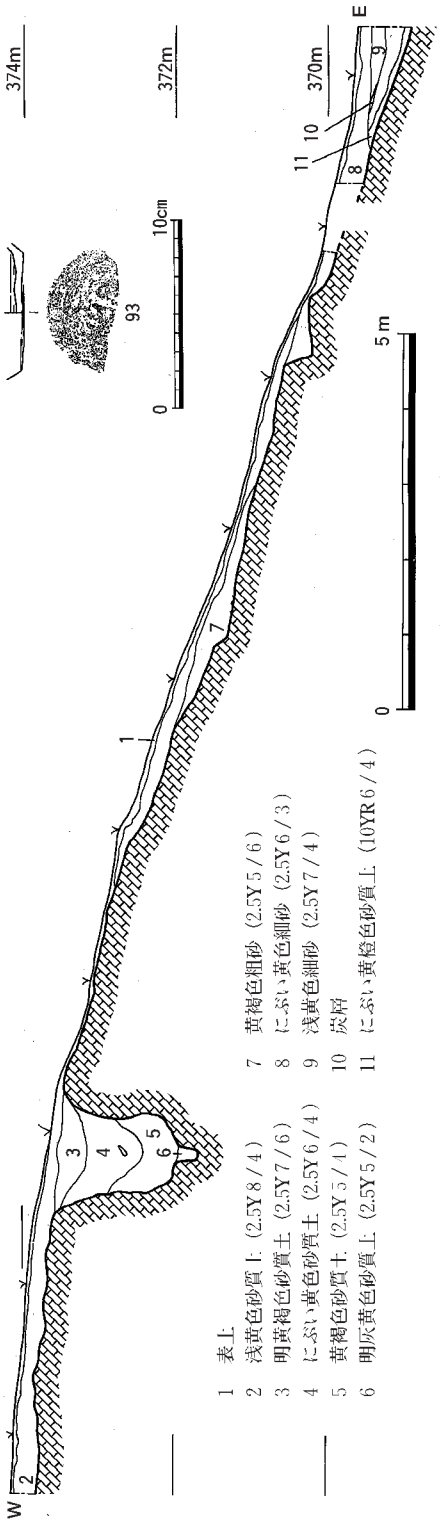
Ｔ89は、鬼城山北端の旧第２城門と呼称された突出部に設定したトレンチである。Ｔ88・Ｔ90とともに、この尾根線の張り出し部分の精査を目的として確認調査を実施した。

Ｔ89の西側下位では、人工的と見られる削平が観察されるが、砂防工事による可能性が高い。Ｔ90は、Ｔ89の北側にほぼ平行して設定したトレンチである。地山は、比較的平坦に削平されているが、遺構の存在を確かめることはできなかった。また、出土遺物もみられない。

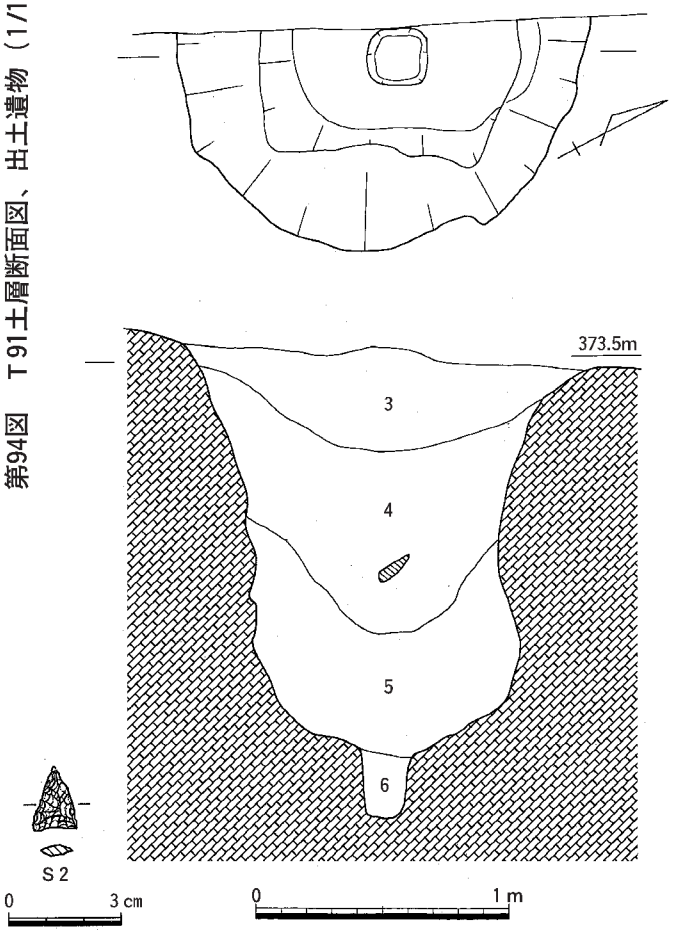
この場所には、巨石がかたまっている地点もあり、いかにも出入り口に想定できそうな窪地もみられるが、現在では、門の存在は否定されている。

Ｔ91は、Ｔ86のすぐ東側に近接して設定したトレンチである。上位は比較的平坦、東方へ緩やかな斜面となる。

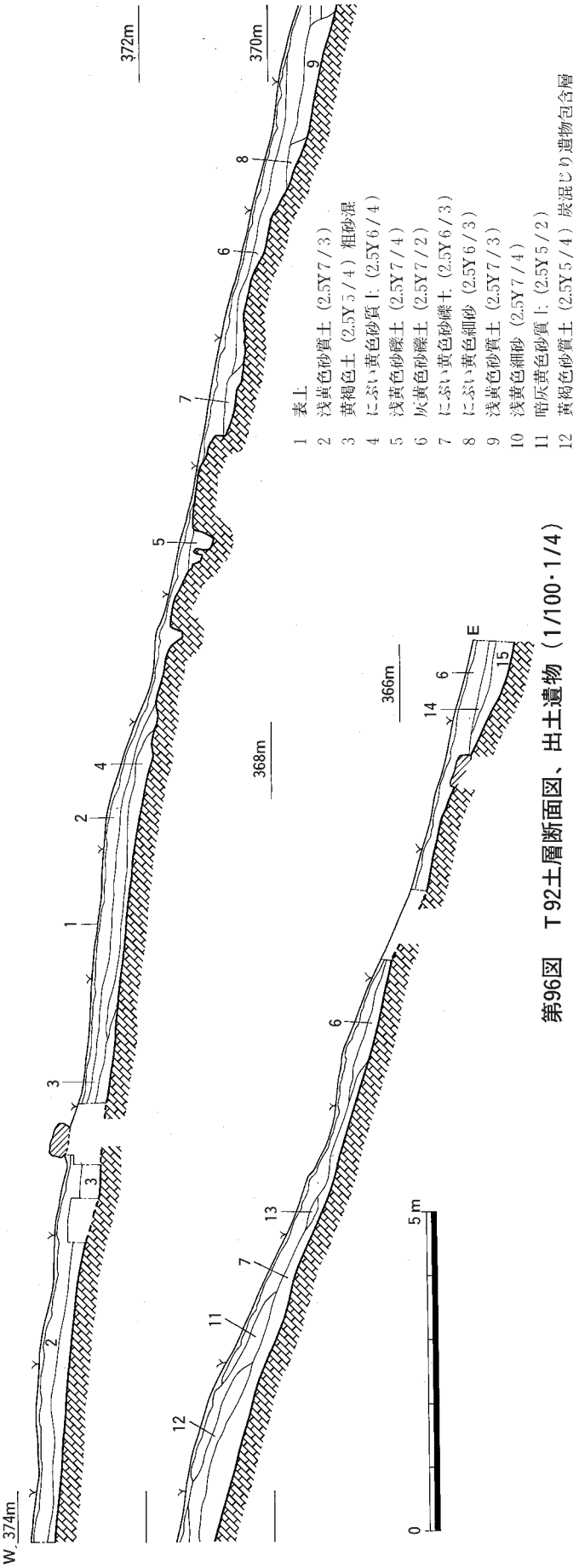
上位地山面で、第95図に示す土壙が検出されている。最大径約140㎝、深さ約160㎝を測るほぼ円形を呈する深い土壙で、壙底のほぼ中央には径約20㎝、深さ約25㎝の小穴が掘り込まれる。大人がすっぽり入れるくらいの大きさで、埋積土上層からＳ２のサヌカイト製石鏃が出土している。

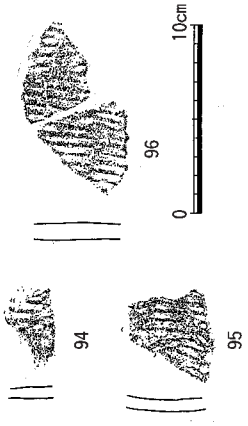


第94図　Ｔ91土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）



第95図　Ｔ91土壙、出土遺物（1/30・1/2）





第96図　T92土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）

土壙の形状から、縄文時代にさかのぼる落し穴と考えられるだろう。

T91では、**93**の土師器小片が出土している。古代Ⅲ期に比定される可能性が高い。

T92は、T91の南側に設定したトレンチで、南東方の尾根線に沿う位置に当たる。地形的には、緩やかな斜面で、多少の起伏が認められるが、明確な掘り込みは認められない。

第12・第13層は、炭を含み黄褐色ないし黄灰色を呈する。これらの土層からは、土師器小片**94**～**96**の出土が認められている。

これらは、すべて同一個体の破片とみられ、甕あるいは甑のような深い容器としての器種が想定されるが、加熱による変色等は目立たない。

体部外面には、縦方向の特徴的な平行タタキが施されているが、類例については不明である。

第Ⅳ期の確認調査について調査概要を述べた。確認調査に伴う写真撮影や実測作業、埋め戻し作業は、1999年末で終了し年明けからは、第Ⅴ期に着手した。

第５節　第Ⅴ期の確認調査概要

第Ⅴ期の確認調査は、2000年明け早々１月５日から着手した。計６本のトレンチを設定し、１月中旬の完了を目指した。

最初に発掘着手したのはＴ121で、これは第Ⅳ期、Ｔ83の調査時に確認した出土遺物や列石に関連する補足調査を主眼とした。

Ｔ98は、先のＴ92を南東方に下った尾根線先端に設定した。近接してＴ97・99も設定、発掘を実施したが、明確な遺構はほとんど確認することができなかった。

第97図はＴ98の土層断面図である。北西方上位で土壙の一部が現れている。上面径約140㎝、深さ約120㎝を測り、平坦に削平された底面は特徴的である。

検出範囲では、小穴は検出されていないが、形状や規模から推察すると、Ｔ91のそれと同様縄文時代の「落し穴」と考えるべきであろう。

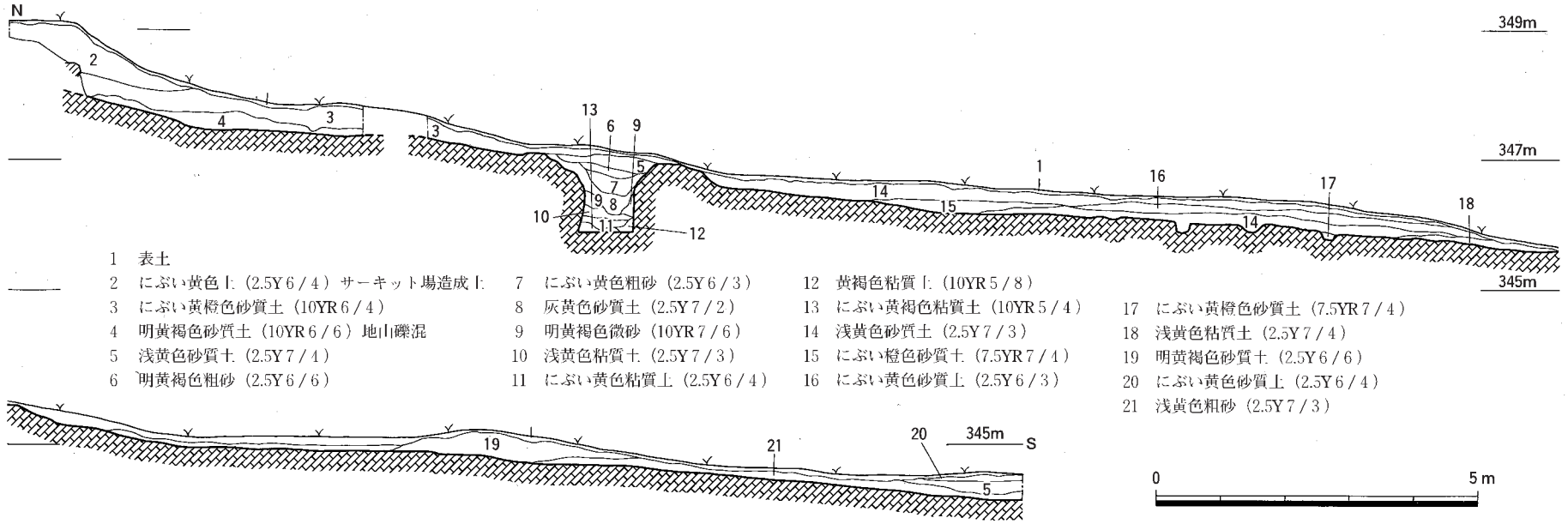
この土壙の下方には比較的平坦な地山面が続くが、古代に比定される明確な遺構の存在は、確認することができなかった。

Ｔ121は、東方下位の第四水門から登ること約100ｍの南側尾根線上、先述の通り、Ｔ83と東端で直行するように設定した。トレンチの中央付近は鞍部状をなすが、両側は削平されたような痕跡を残す。

第98図は、トレンチの西壁の土層断面図であるが、北端付近に大きめな石を人為的に並べた箇所がある。

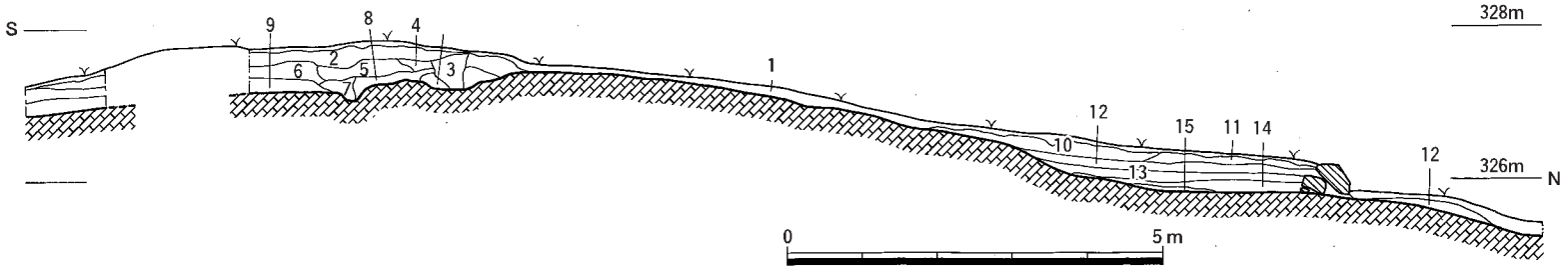
この地点は、一段低く、しかも平らに造成されたように見え、列石の背面は幾層かの埋積土が観察

T121　列石（北から）



1　表土
2　にぶい黄色Ⅰ（2.5Y６/４）サーキット場造成Ⅰ
3　にぶい黄橙色砂質土（10YR６/４）
4　明黄褐色砂質土（10YR６/６）地山礫混
5　浅黄色砂質土（2.5Y７/４）
6　明黄褐色粗砂（2.5Y６/６）
7　にぶい黄色粗砂（2.5Y６/３）
8　灰黄色砂質土（2.5Y７/２）
9　明黄褐色微砂（10YR７/６）
10　浅黄色粘質土（2.5Y７/３）
11　にぶい黄色粘質土（2.5Y６/４）
12　黄褐色粘質Ⅰ（10YR５/８）
13　にぶい黄褐色粘質土（10YR５/４）
14　浅黄色砂質土（2.5Y７/３）
15　にぶい橙色砂質土（7.5YR７/４）
16　にぶい黄色砂質土（2.5Y６/３）
17　にぶい黄橙色砂質土（7.5YR７/４）
18　浅黄色粘質土（2.5Y７/４）
19　明黄褐色砂質土（2.5Y６/６）
20　にぶい黄色砂質土（2.5Y６/４）
21　浅黄色粗砂（2.5Y７/３）

第97図　Ｔ98土層断面図（1/100）

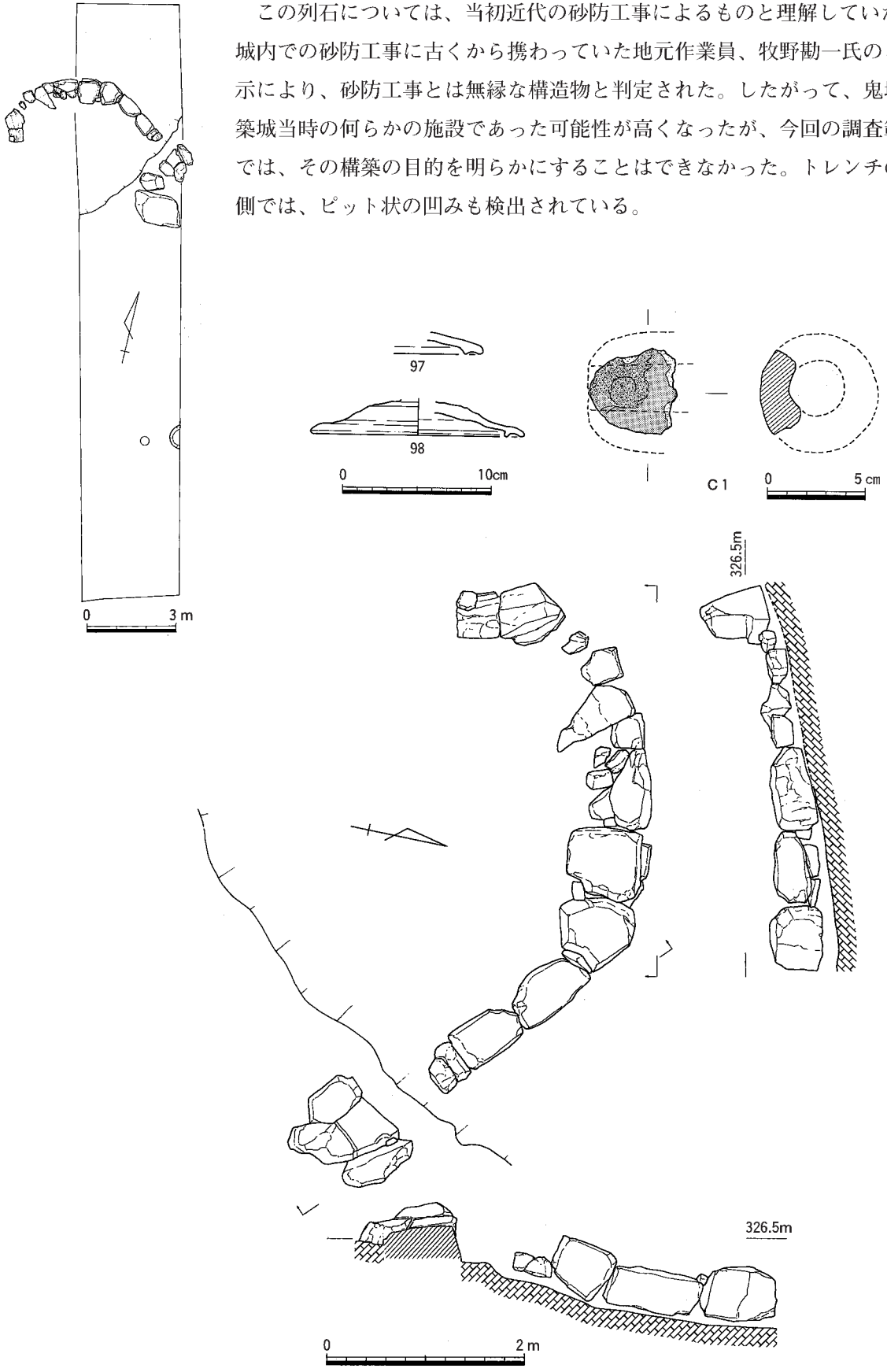


1　表土
2　灰黄色砂質土（2.5Y７/２）
3　にぶい黄色砂質土（2.5Y６/３）木根カクラン
4　にぶい黄橙色砂質Ⅰ（10YR６/３）
5　黄褐色土（10YR５/６）真砂土混
6　灰黄色砂質土（2.5Y７/２）炭混
7　にぶい黄褐色Ⅰ（10YR５/４）
8　明黄褐色砂質土（10YR６/６）
9　にぶい黄色砂質土（2.5Y６/３）
10　にぶい黄褐色粗砂（10YR５/６）
11　にぶい黄褐橙細砂（10YR７/４）
12　明黄褐色細砂（2.5Y６/６）
13　浅黄色細砂（2.5Y７/４）
14　浅黄色砂質土（2.5Y７/３）
15　黄褐色Ⅰ（10YR５/６）

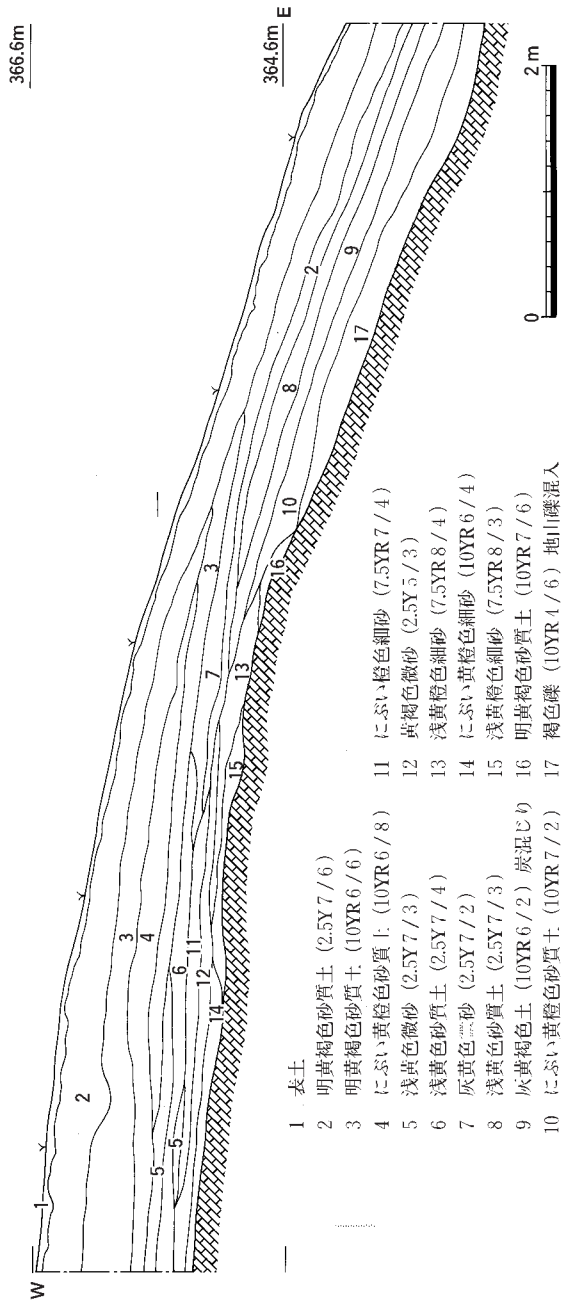
第98図　Ｔ121土層断面図（1/100）

される。列石は第99図のような平面形を示し、途中で屈曲させている。

この列石については、当初近代の砂防工事によるものと理解していたが、城内での砂防工事に古くから携わっていた地元作業員、牧野勘一氏のご教示により、砂防工事とは無縁な構造物と判定された。したがって、鬼城山築城当時の何らかの施設であった可能性が高くなったが、今回の調査範囲では、その構築の目的を明らかにすることはできなかった。トレンチの南側では、ピット状の凹みも検出されている。



第99図　Ｔ121列石、周辺出土遺物（1/200・1/60・1/4・1/3）



第100図　T122土層断面図（1/60）

T121では、須恵器97・98とC１の鞴の羽口片が出土している。

97・98はいずれも蓋で、内面に特徴的なカエリをもつ。時期的には古代Ⅰ期に比定される。列石の構築時期を知る手がかりとなる遺物とみて良いだろう。

C１の鞴の羽口は、今回の確認調査では後述のT113からも数点出土している。鍛冶と密接な遺物で、しかも先端には、高熱で使用されたことを示す溶融部分が観察される。

このトレンチの北方谷部には、西上位の湿地部分に源を発する小川が、第４水門の方向へ流れている。

この谷地形周辺には、しばしば鉄滓が採集されることが知られており、この谷部の両側では鍛冶工房が展開していた可能性が高い。

第Ⅴ期の確認調査では、すでに記述したとおり、礎石建物６が発見された地点に追加設定したT122とT123の２本のトレンチの確認調査も併せて実施した。

後者では、建物の規模を確定する手がかりとなる、明瞭な掘り方を持つ礎石を新たに検出し、礎石建物の建築技術の一端を知ることができた。

第６節　第Ⅵ期の確認調査概要

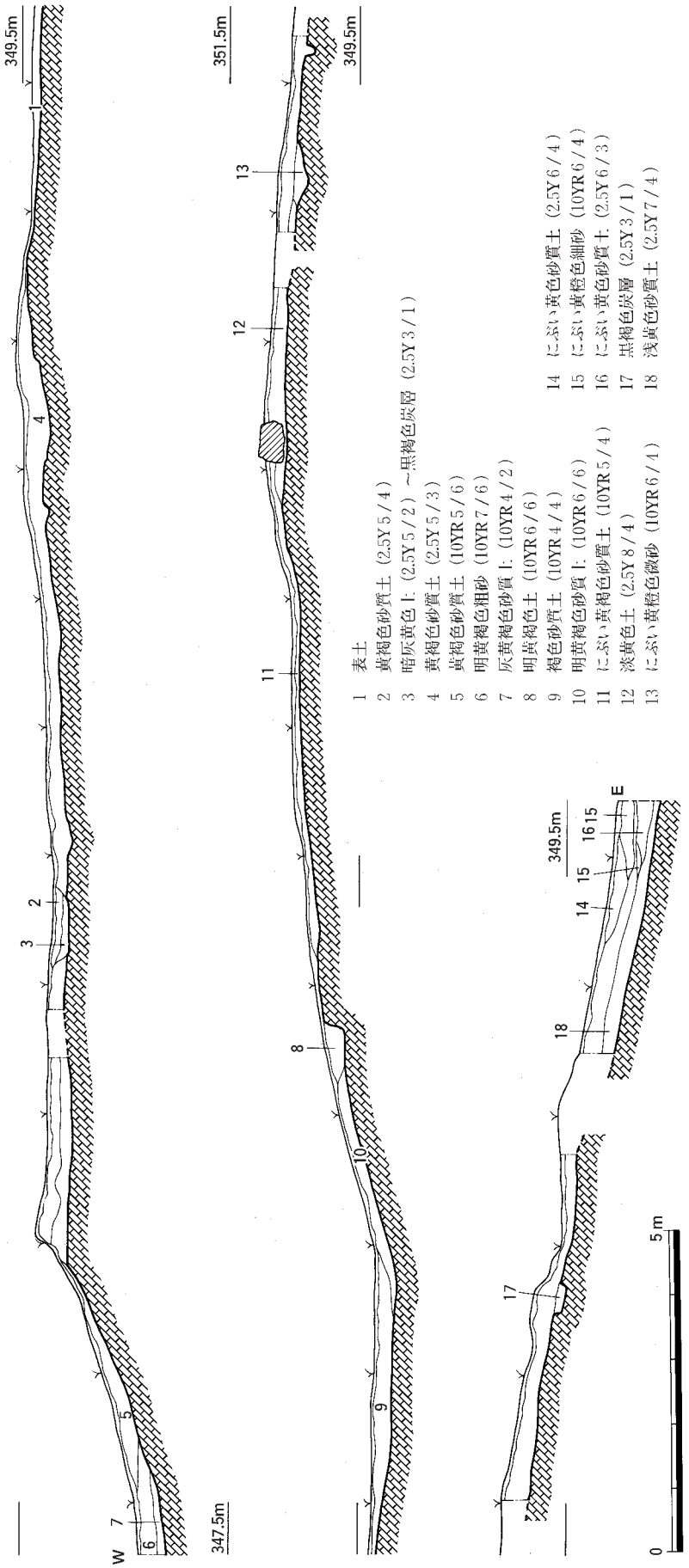
第Ⅵ期の発掘調査は１月17日から開始し、２月中旬までに15本の確認調査を実施した。

対象箇所は、おもに城内北よりの遊歩道周辺部と、第Ⅰ群礎石建物の東方約150ｍの下位尾根線上で、礎石建物３に関連するT120もこの期に実施した。

この時期はもっとも寒冷な気象条件となり、幾度も降積雪に見舞われた。城内各所を移動しながらの発掘作業、作業拠点の移動は困難を極めた。

T75は、第Ⅰ群礎石建物が立地する地点から、南東方向へ延びる尾根線上先端に設定した全長60ｍのトレンチである。従来から何らかの施設が存在する可能性が指摘されており、地形的にも平坦な空間が存在することから、遺構の検出が期待された。

第101図に示すように、地山が平坦に削平された形跡は確かに観察され、随所に炭を含む埋積土を持



第101図　Ｔ75土層断面図（1/100）

つくぼ地もあるが、明瞭な掘り方とは程遠い。

出土遺物としては、土師器細片をわずかに認めるに過ぎない。

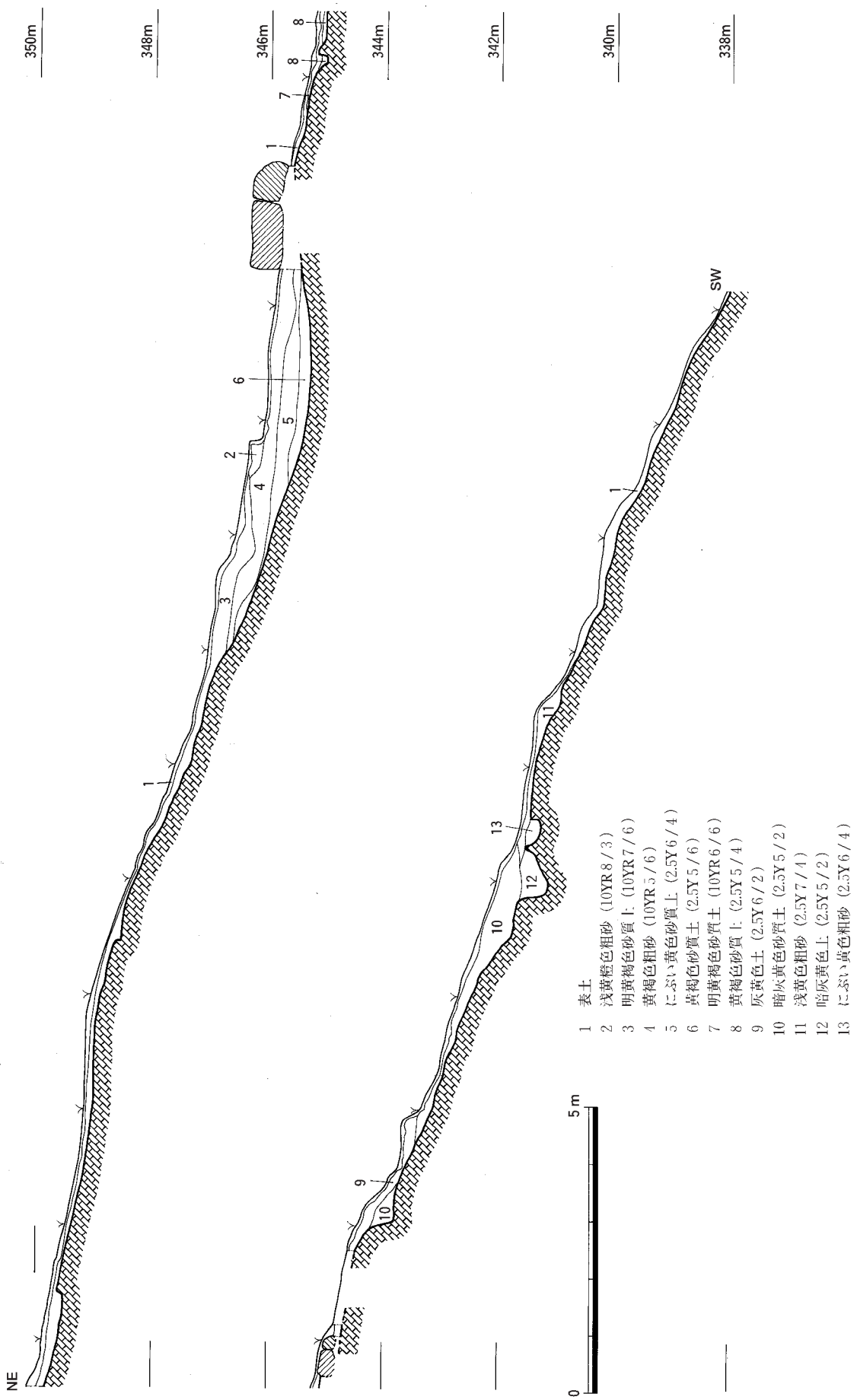
Ｔ76は、Ｔ75の東より部分から南へ直行して設定したトレンチである。上位では緩やかな傾斜を示すが、中ほどから下位にかけては砂防工事の影響、石垣や段が残され、最下位では急斜面に移行する。

Ｔ77は、さらに東方先端部に設定したトレンチである。第103図土層断面図では、地山は上位から傾斜面となり、直上層では炭を含む灰黄色の砂質土が堆積する。最下位で、傾斜変換点があり、段差が観察される。出土遺物は須恵器細片が数点認められるが、器種・時期は不明である。

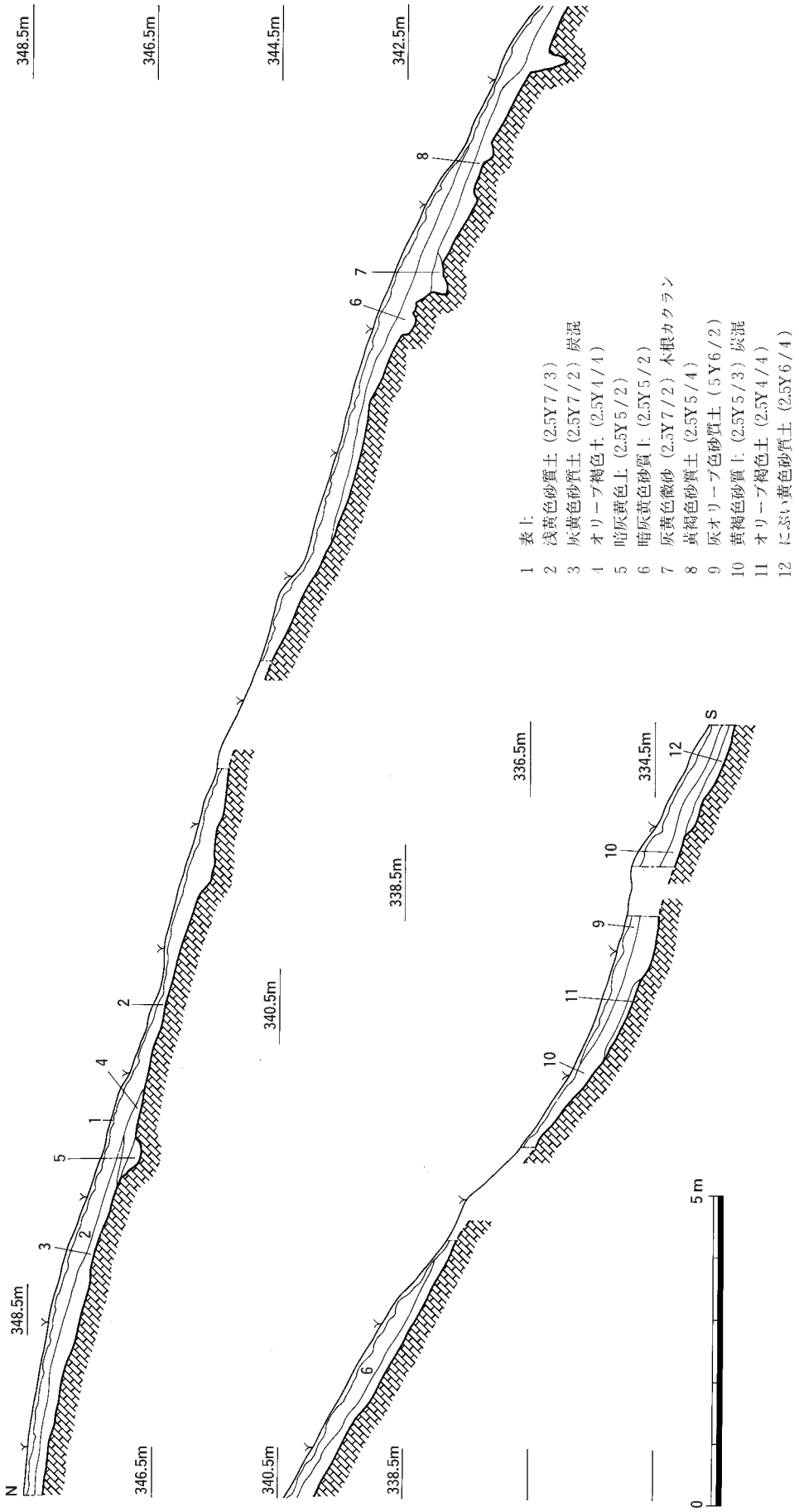
Ｔ80は、Ｔ75のすぐ北側へ設定したほぼ南北方向のトレンチである。多少の起伏があるが、比較的緩やかな地形を示す。

地山面では随所にくぼみや溝状の掘りこみを認めるが、古代に遡る人為的な造成であるかは、不明である。また、炭や出土遺物もまったく認められない。

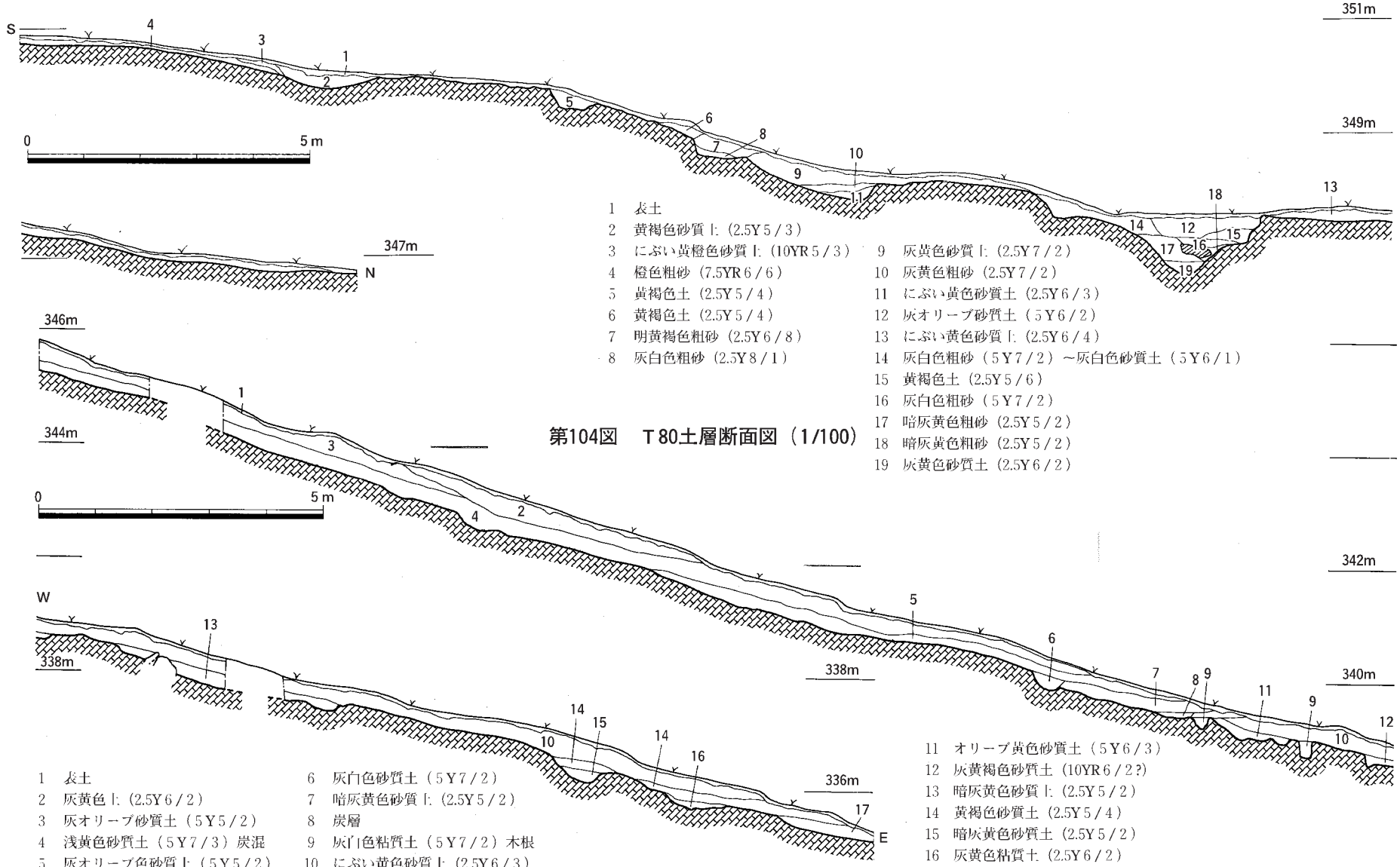
Ｔ82は、Ｔ75の東下方約40ｍに設定したトレンチである。



第102図　T76土層断面図（1/100）



第103図　Ｔ77土層断面図（1/100）

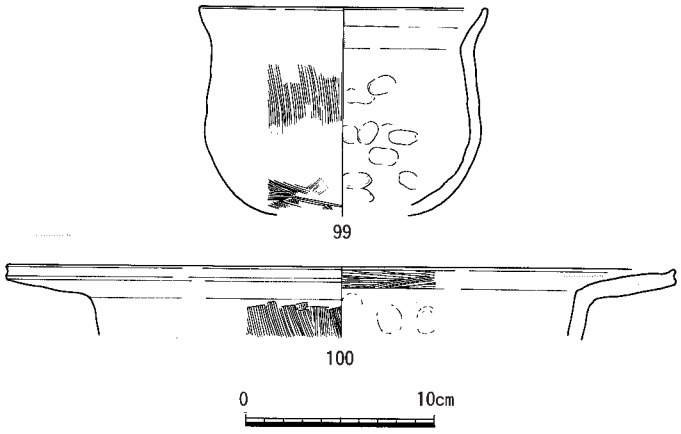


1　表土
2　黄褐色砂質Ｌ（2.5Y５/３）
3　にぶい黄橙色砂質Ｌ（10YR５/３）
4　橙色粗砂（7.5YR６/６）
5　黄褐色土（2.5Y５/４）
6　黄褐色土（2.5Y５/４）
7　明黄褐色粗砂（2.5Y６/８）
8　灰白色粗砂（2.5Y８/１）
9　灰黄色砂質Ｌ（2.5Y７/２）
10　灰黄色粗砂（2.5Y７/２）
11　にぶい黄色砂質土（2.5Y６/３）
12　灰オリーブ砂質土（５Y６/２）
13　にぶい黄色砂質Ｌ（2.5Y６/４）
14　灰白色粗砂（５Y７/２）～灰白色砂質土（５Y６/１）
15　黄褐色土（2.5Y５/６）
16　灰白色粗砂（５Y７/２）
17　暗灰黄色粗砂（2.5Y５/２）
18　暗灰黄色粗砂（2.5Y５/２）
19　灰黄色砂質土（2.5Y６/２）

第104図　Ｔ80土層断面図（1/100）

1　表土
2　灰黄色Ｌ（2.5Y６/２）
3　灰オリーブ砂質土（５Y５/２）
4　浅黄色砂質土（５Y７/３）炭混
5　灰オリーブ色砂質Ｌ（５Y５/２）
6　灰白色砂質土（５Y７/２）
7　暗灰黄色砂質Ｌ（2.5Y５/２）
8　炭層
9　灰白色粘質土（５Y７/２）木根
10　にぶい黄色砂質Ｌ（2.5Y６/３）
11　オリーブ黄色砂質土（５Y６/３）
12　灰黄褐色砂質土（10YR６/２?）
13　暗灰黄色砂質Ｌ（2.5Y５/２）
14　黄褐色砂質土（2.5Y５/４）
15　暗灰黄色砂質土（2.5Y５/２）
16　灰黄色粘質土（2.5Y６/２）
17　黄褐色砂質土（2.5Y５/３）

第105図　Ｔ82土層断面図（1/100）



第106図　Ｔ82出土遺物（1/4）

第105図に掲げるように、地山面は中途で大きな地形の変化は現れず、緩やかな傾斜面が続くが、所々にくぼみがある。

上位の地山直上層、浅黄色砂質土には少量の木炭が含まれ、**99**の土師器甕が出土している。巻頭カラー図版８－３に示すように、ほぼ完形に復元することが可能となった。時期的には、古代Ⅰ期かⅡ期に比定される。

100は、トレンチ下位で出土した土師器である。口径は約35cmを測る大型の甕で、特徴的な口縁部をもつ。体部は比較的長胴になるとみられ、甑などと組みあわせて使用されたものであろう。**99**と大差ない使用時期が考えられる。

このＴ82でこのような土師器が出土したことは、先述のＴ75を設定したある程度の空間を持つ尾根線上に、何らかの生活、居住空間が存在したことを示しているが、明確な遺構の存在を示す手がかりは、近接して設定したトレンチからも確認することができなかった。

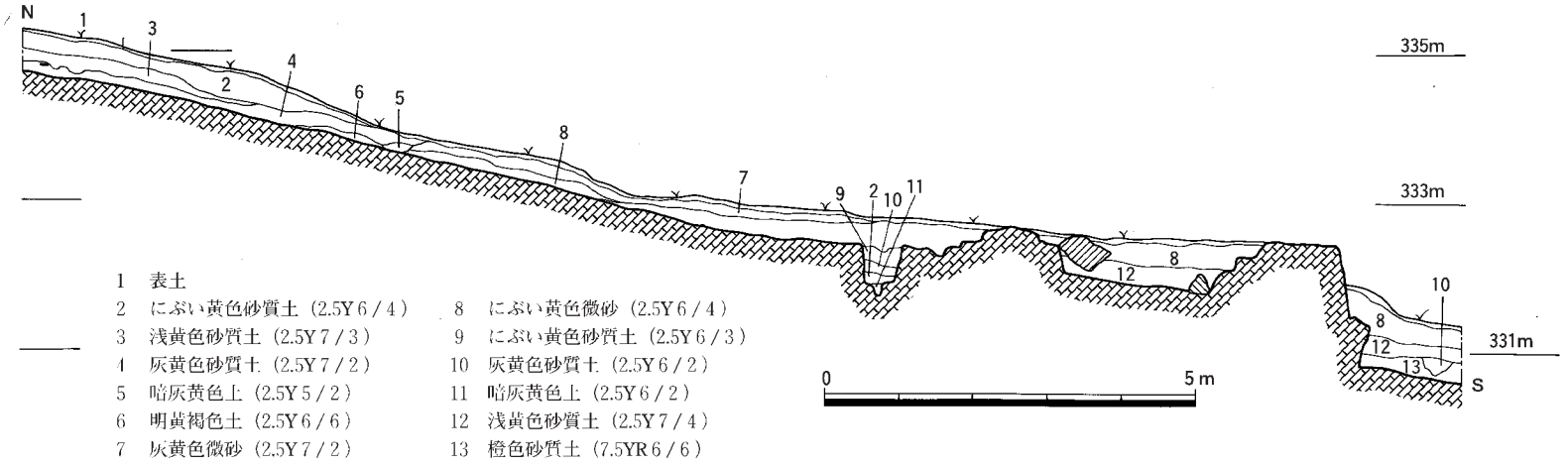
Ｔ102は、北門と東門を結ぶ中ほど、湿地を西に臨むやや東よりの高位部に設定したトレンチである。下位では、砂防工事による段が築成されるが、やや上方で土壙が検出された。最大径は50㎝を越えるやや角張った平面形を示し、底面に小穴が掘りこまれている。小動物の捕獲を目的とした落し穴と考えてよいだろう。

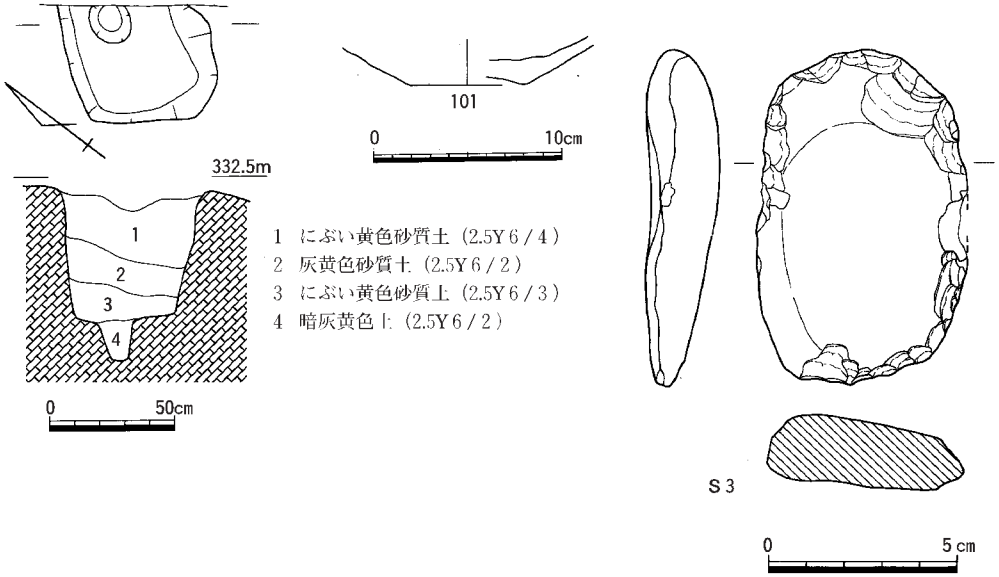
付近から出土した**101**は、縄文時代晩期か弥生時代前期と考えられる鉢あるいは、壷の底部小片で、揚げ底である点が特徴的である。同じく土壙付近の第８層から出土した**Ｓ３**は、流紋岩製の石斧と考えられ、扁平な形状を示す。これらの遺物から、土壙は古代以前と断定することができよう。

Ｔ106は、第４水門と第５水門の間、東西の尾根線上（遊歩道南側）に設定したトレンチである。東よりの土層断面壁で、上面径160cmの土壙が検出された。安全のため完掘できなかったが、これも落し穴の可能性が考えられるだろう。規模は、先述のＴ91で検出した土壙にもっとも近く、大型動物の捕獲を目的としたものであろう。

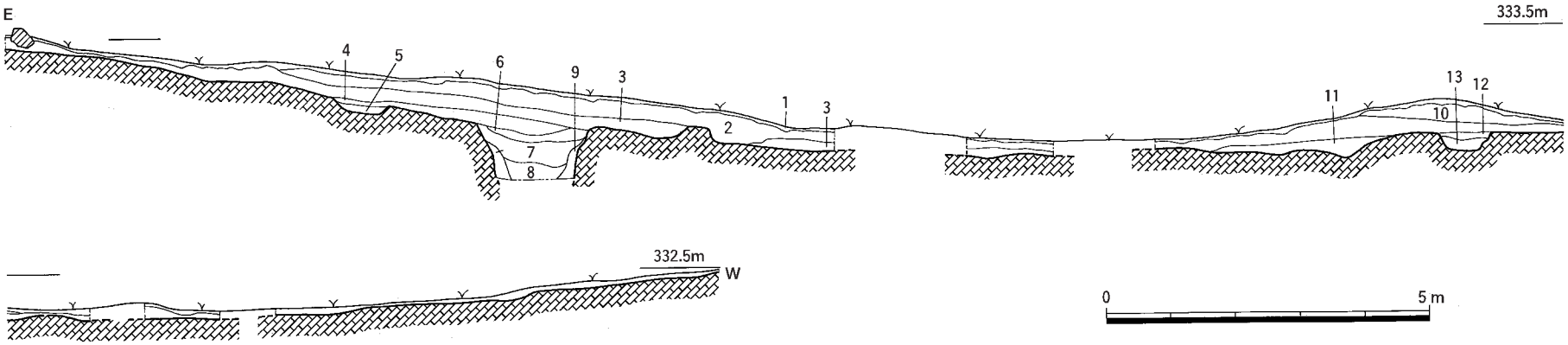
Ｔ108は、Ｔ106の東方に設定した小規模なトレンチである。上位では、地山が露出するほど地表面の流出が認められた。

Ｔ109は、Ｔ108のさらに東側、尾根線の先端に設定したトレンチである。人為的な地形の改変や、柱穴などは、まったく確認できなかった。



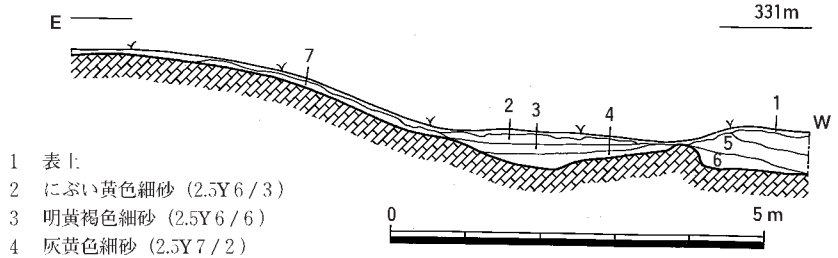


第107図　Ｔ102土層断面図、土壙、出土遺物（1/100・1/30・1/4・1/2）



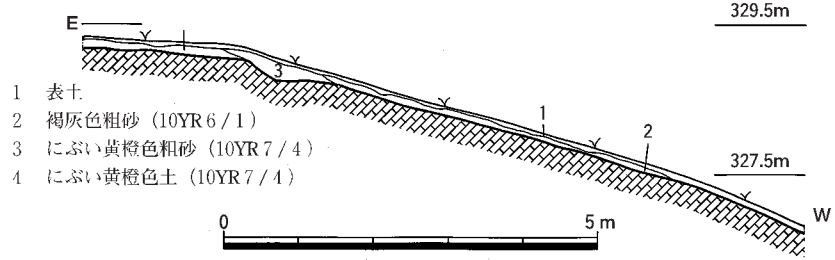
1　表土
2　黄橙色砂質土（10YR 8 / 6）
3　明黄褐色砂質土（10YR 7 / 6）
4　浅黄色砂質土（2.5Y 7 / 4）
5　にぶい黄橙色砂質土（10YR 7 / 4）
6　浅黄色粗砂（2.5Y 7 / 4）
7　淡黄色砂質土（2.5Y 8 / 4）
8　にぶい黄色砂質土（2.5Y 6 / 3）
9　黄褐色砂質土（2.5Y 5 / 6）
10　浅黄色土（2.5Y 7 / 4）
11　黄褐色砂質土（2.5Y 5 / 3）
12　にぶい黄色土（2.5Y 6 / 3）
13　オリーブ黄色土（5Y 6 / 3）

第108図　T106土層断面図（1/100）



1　表土
2　にぶい黄色細砂（2.5Y 6 / 3）
3　明黄褐色細砂（2.5Y 6 / 6）
4　灰黄色細砂（2.5Y 7 / 2）
5　にぶい黄色砂質土（2.5Y 6 / 4）
6　明黄褐色砂質土（2.5Y 6 / 6）
7　橙色砂質土（2.5Y 8 / 6）

第109図　T108土層断面図（1/100）



1　表土
2　褐灰色粗砂（10YR 6 / 1）
3　にぶい黄橙色粗砂（10YR 7 / 4）
4　にぶい黄橙色土（10YR 7 / 4）

第110図　T109土層断面図（1/100）

第７節　第Ⅶ期の確認調査概要

第Ⅶ期の確認調査は、２月17日に開始した。

第Ⅶ期では、５本のトレンチを第Ⅵ期の補足的な部分、すなわち第５水門南側尾根線のＴ108と、第４水門との間、東門背後から北方へかけてＴ112～Ｔ115を設定した。

Ｔ112は、鬼城山の東側外郭線にあたる位置に設定したトレンチである。従来、このあたりだけは高石垣や土塁の存在が明確に把握されておらず、確認調査によってその手がかりを得ることを目的とした。第111図に掲げるように、かすかな地山整形痕以外、明瞭な版築痕跡や石垣は認められなかった。

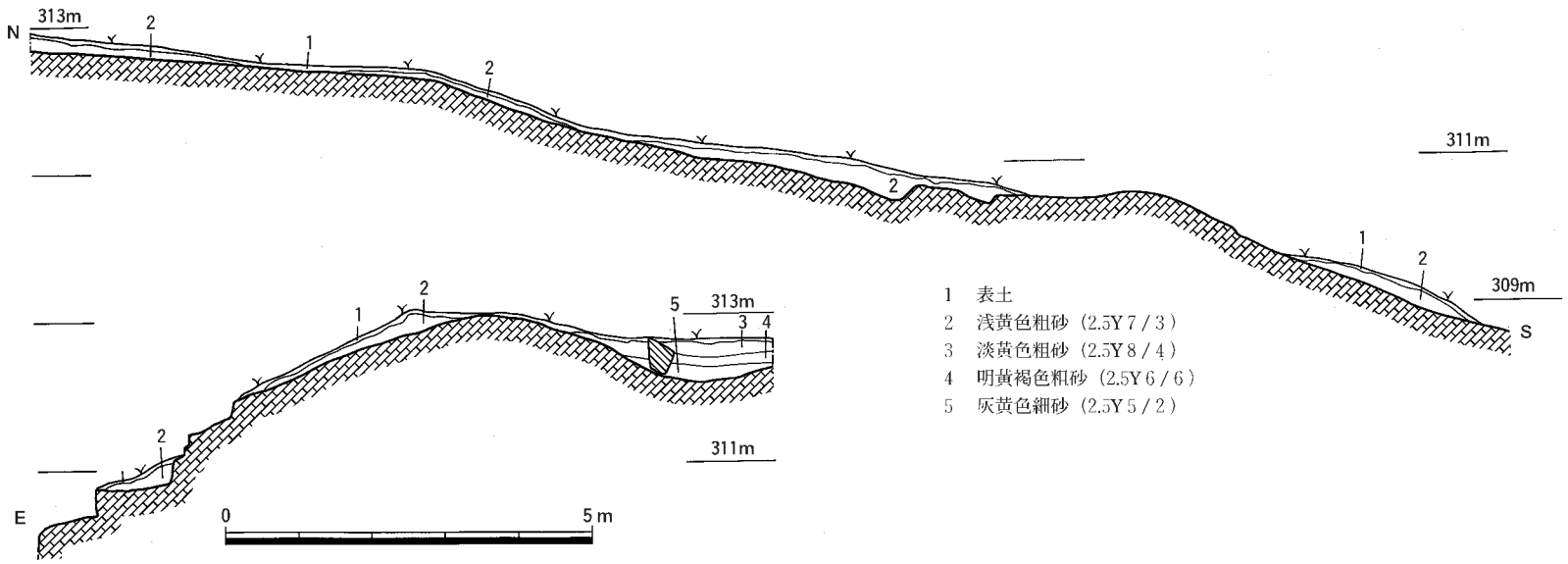
Ｔ113は東門の背後に当る北西側、なだらかな尾根線の西斜面に設定したトレンチである。第112図に示すように、かなり起伏に富む地形を呈しているが、北上方でトレンチを掘り下げていく過程で、鉄滓や炉壁片の出土が目立った部分があり、最終的に第113・114図に示す竪穴遺構の一部が検出された。復元径約６ｍ、残存する深さ約60㎝を測る。床面および掘り方には柱穴も検出されているが、壁溝は認められない。また、壁際にかなり大きな花崗岩がみられるが、竪穴の廃絶時に埋没した可能性もある。

出土遺物は、周辺部や埋積土から多数の鍛冶滓とみられる鉄滓、炉壁片、炭、焼土をはじめ、須恵器・土師器片が出土している。鉄滓の中には、強い磁性を示す破片が確認され、鍛冶滓の可能性を示唆している。また、少数ではあるが小鉄片も含まれている。

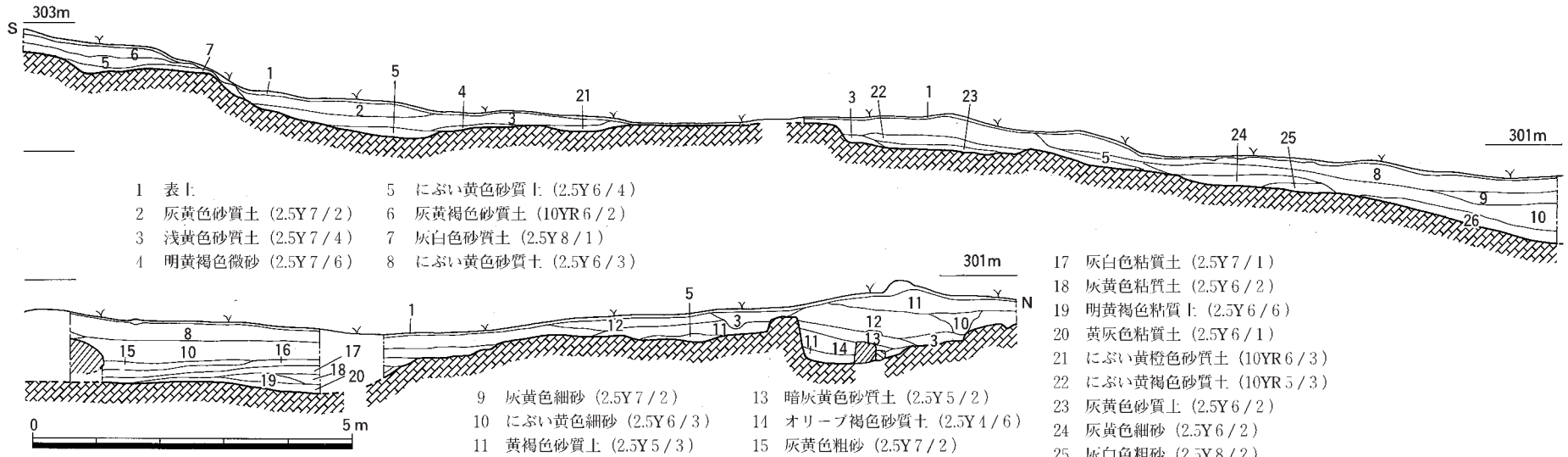
102は、竪穴遺構上層から出土した須恵器杯である。古代Ⅰ期に比定される特徴を示す確実な須恵器である。共伴する少量の土師器片は、すべて甕の破片とみられる。

Ｃ２・Ｃ３は鞴の羽口である。いずれも竪穴遺構の埋積土から出土し、先端の溶融部分や赤色変化

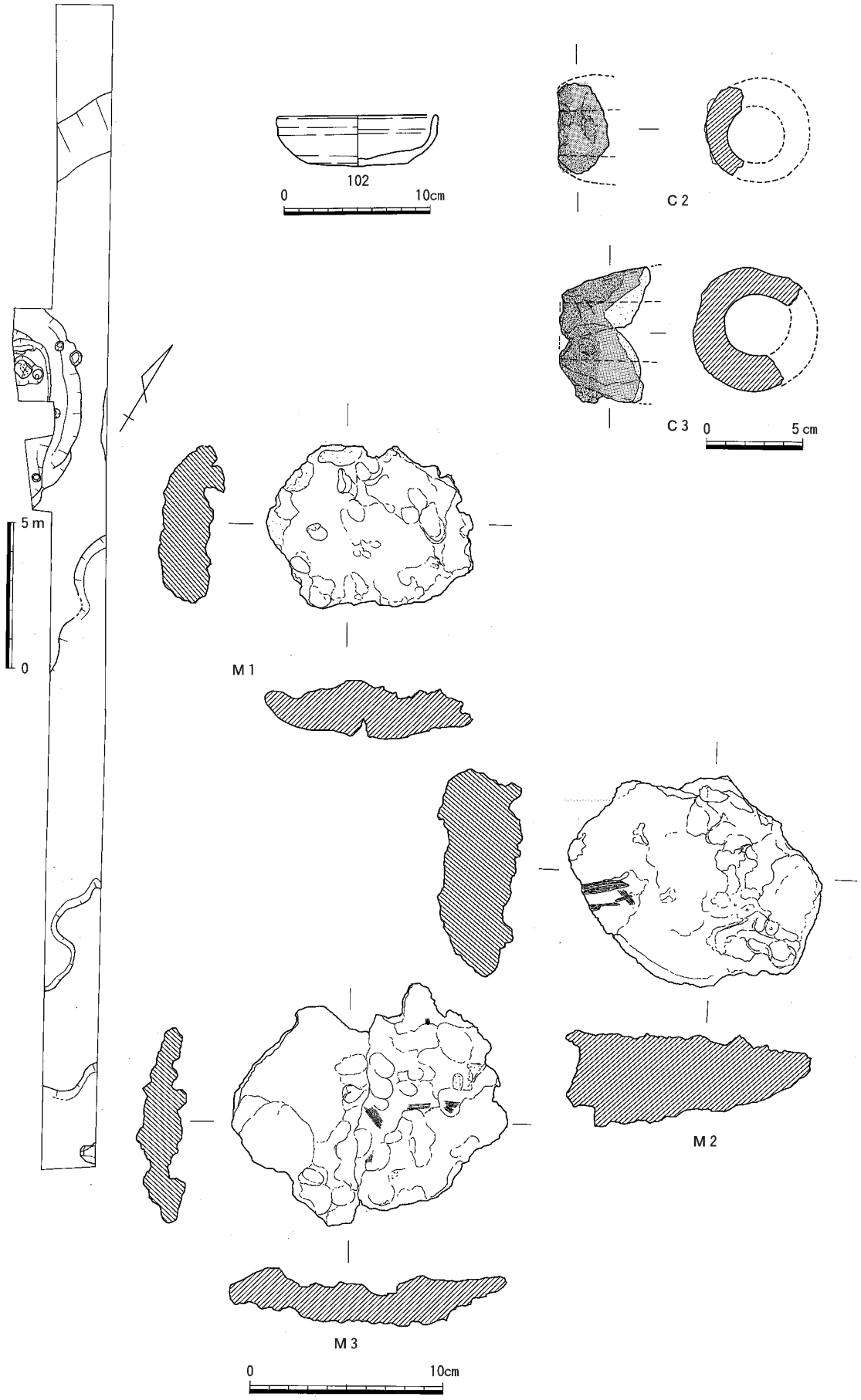
T112の位置（北西から）



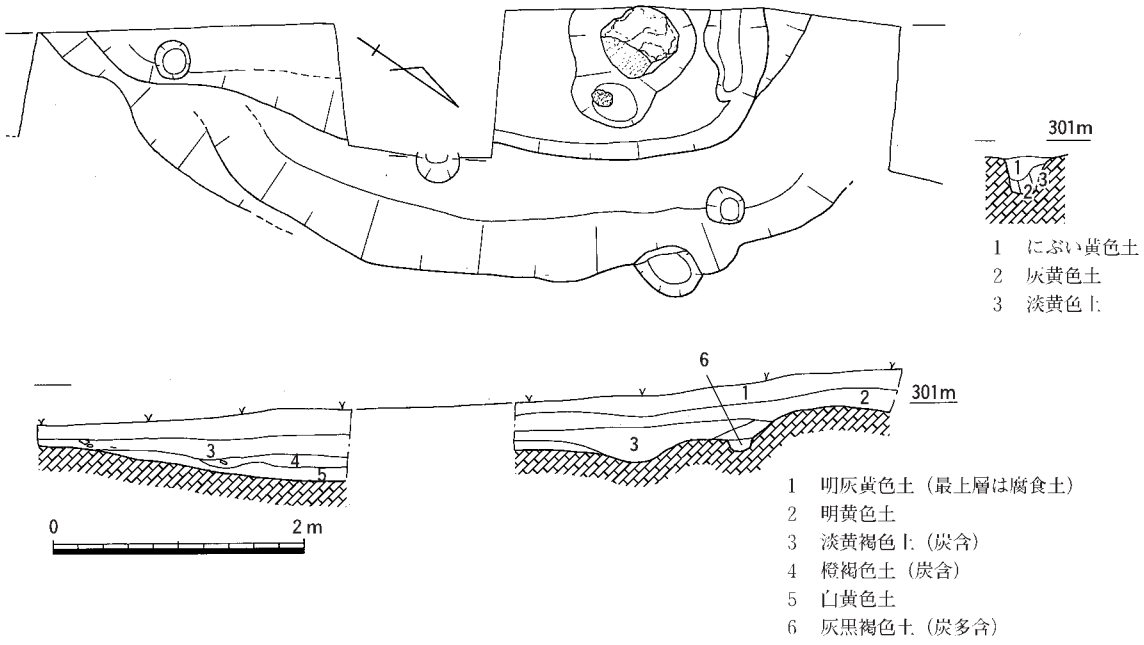
第111図　T112土層断面図（1/100）



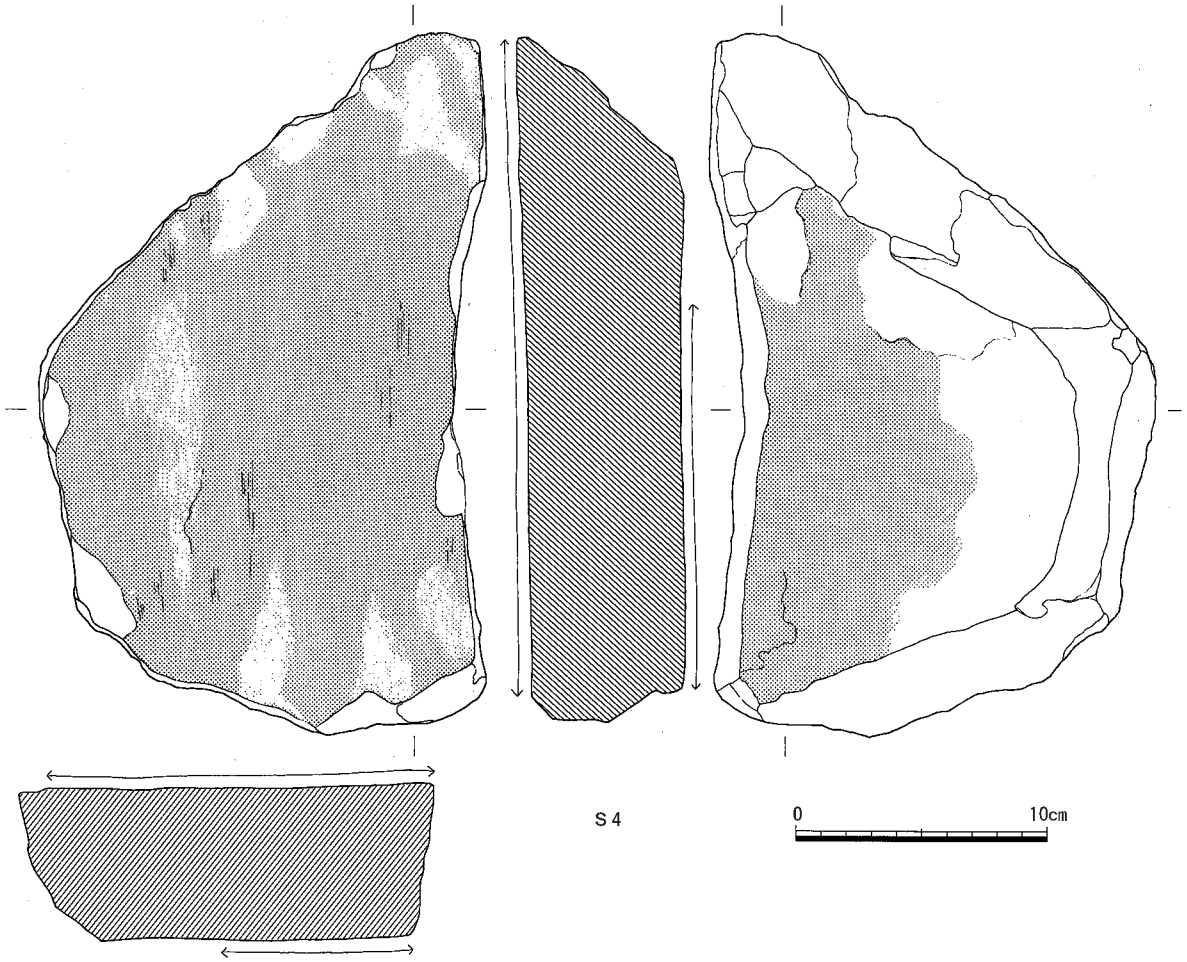
第112図　T113土層断面図（1/100）



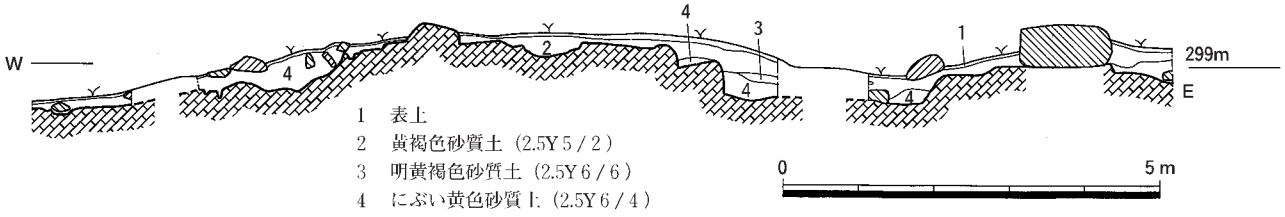
第113図　Ｔ113平面図、出土遺物（1/200・1/4・1/3）



第114図　Ｔ113竪穴遺構（1/60）



第115図　Ｔ113竪穴遺構付近出土砥石（1/3）



第116図　Ｔ114土層断面図（1/100）

から明瞭な加熱使用が認められる。Ｍ１～Ｍ３は、いずれも椀形を示す炉底滓である。Ｍ１は、床面から出土している。

Ｓ４は竪穴遺構周辺の掘り下げ中に出土した砥石である。表裏に明瞭な使用痕跡が観察され、鈍い光沢を放つ部位もみられる。鋭利な鉄器の製作・研磨に頻繁に使われたことを示す貴重な遺物と考えられる。石材は流紋岩で、本来鬼城山山塊の花崗岩に嵌入している石材の可能性もある。

以上の出土遺物は、竪穴遺構あるいはその周囲で鍛冶が行われ、鍛冶工房が存在した可能性を強く示している。位置的に東門に近く、鉄素材の入手、鍛冶従事者の交流など、東下方の千引カナクロ谷遺跡群との深い関わりを想定する必要があるだろう。

「どのような道具を」「何のために」製作したのか？築城に伴う諸工事で使用される工具であったのか、あるいは築城前後に武器の製作も行われたのか？

この第４水門の西側谷部縁辺でのみ鉄関連遺物が出土しており、さまざまな工房群が集中していた可能性もある。これらの平面的な広がりや機能の解明は、今後の鬼城山城内調査の大きな課題といえるだろう。

第８節　第Ⅷ期の確認調査概要

第Ⅷ期の確認調査は、最後の長期発掘期間として２月28日に開始した。18本のトレンチを鬼城山北縁外郭線部分と第５水門付近、南門から第２水門北方の広範囲に設定した。

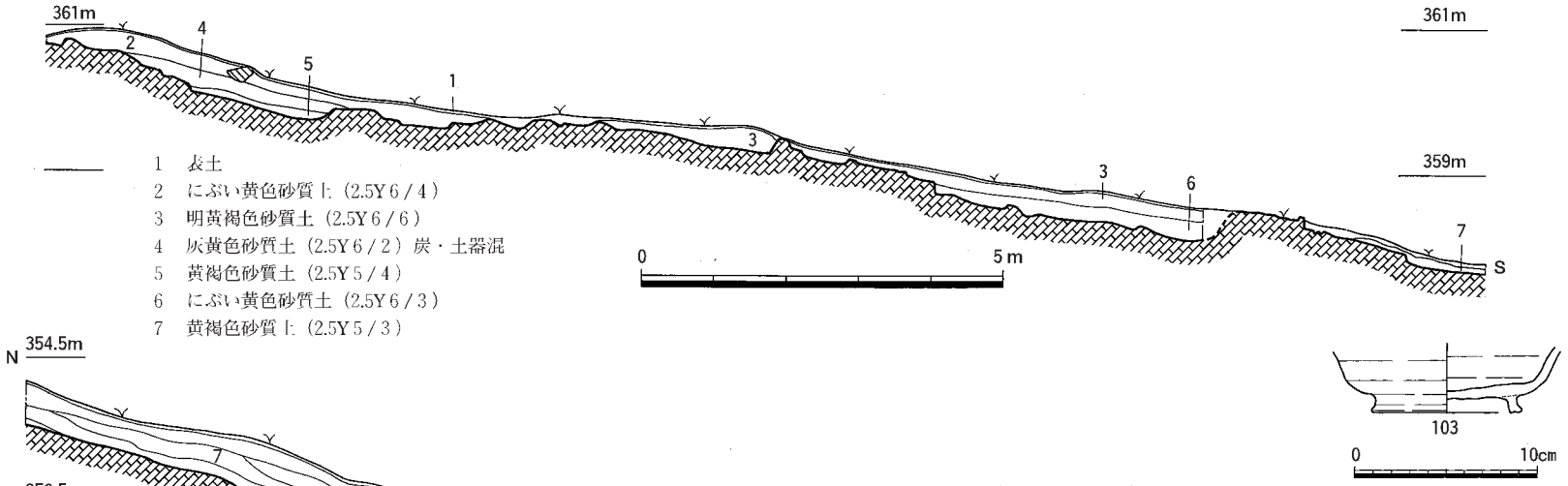
Ｔ31は、第Ⅱ期で確認調査を行ったＴ21から南方へ派生する尾根線南端に設定したトレンチである。第117図土層断面図では、上位・下位それぞれ掘り込み状のくぼ地があり、上位からは少量の炭が土器片（須恵器・土師器）とともに出土している。

103は須恵器杯で、外方する高い高台を持つ。古代Ⅰ期に比定される可能性がきわめて高い遺物と考えられる。

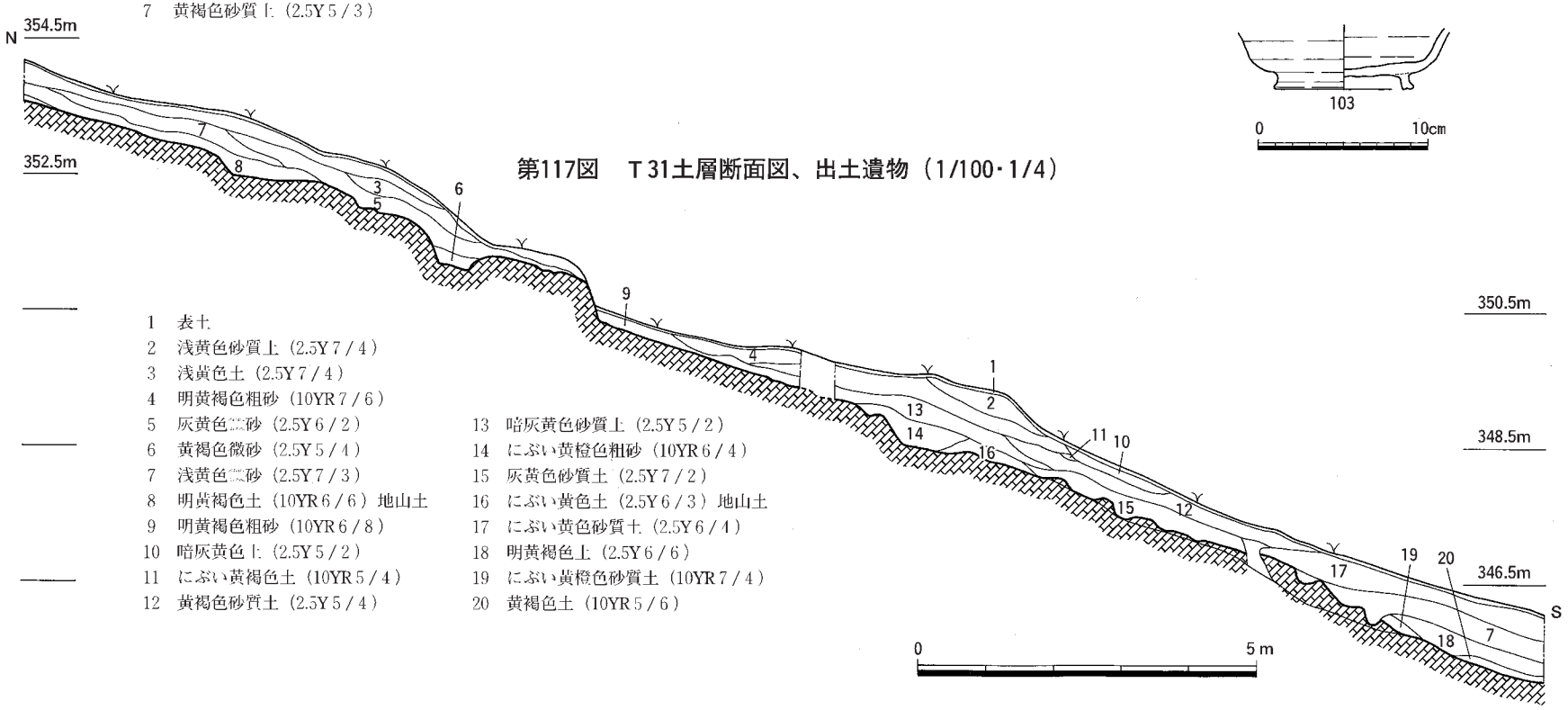
Ｔ38は、Ｔ31の北東方約110ｍ、先日のＴ21を設定した広い尾根線が、下位で二股となる北側尾根線下位に設定したトレンチである。第118図土層断面図では、地山は比較的急傾斜を示す。出土遺物や明確な遺構は認められない。

Ｔ94は、鬼城山北端の旧第２城門の東方約80ｍに設定したトレンチである。遊歩道のすぐ北側に、土塁状の高まりが連続する地点にあたる。

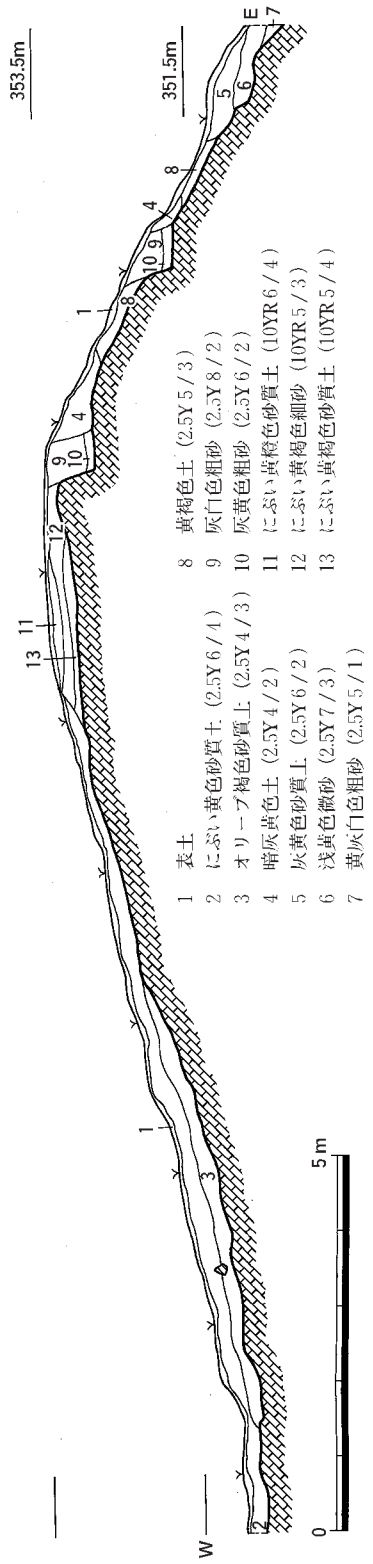
第119図には、土塁状高まりに直行する土層断面図を示す。東側では、明らかに砂防工事に伴う段造成の痕跡が観察される。一定の地山整形が築城時に行われたことは確実と見られるが、版築や柱穴などの遺構は不明である。



第117図　T31土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）



第118図　T38土層断面図（1/100）



第119図　Ｔ94土層断面図（1/100）

Ｔ47は、南門と第３水門のほぼ中ほど、西寄りの平坦面に設定したトレンチである。

南門に近い場所としては、もっとも空間的な広がりがあり、何らかの施設が存在する可能性が想定されたが、少量の土師器片が出土したほか、明確な遺構の存在は認められなかった。

Ｔ95は、Ｔ94の東方70ｍに設定したトレンチである。この周辺では、外郭線があいまいで、石垣や土塁などの施設が表面的には不明瞭な場所である。第121図の土層断面図、のように、人工的な地業痕跡や出土遺物は、確認することができなかった。

Ｔ96は、Ｔ95からさらに東方約100ｍ、屏風折れの高石垣から約150ｍに設定したトレンチである。第122図の土層断面図では、上位で地山を平坦に仕上げた造成箇所がみられる。すぐそばには炭層が堆積したくぼ地もあり、何らかの地業が行われた可能性がある。

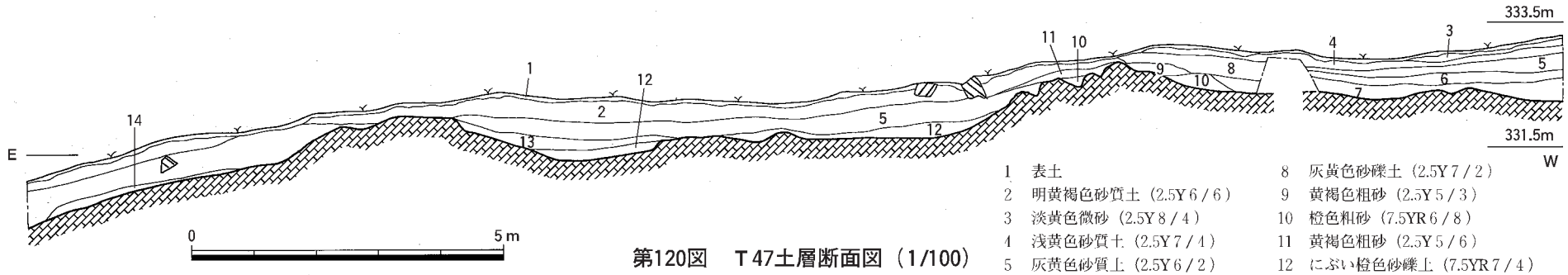
Ｔ104は、Ｔ96の東方約40ｍ、第５水門から約70ｍに設定したトレンチである。浅い谷部の緩やかな斜面にあたる。出土遺物、明確な遺構は確認できなかった。

Ｔ110は、Ｔ107のすぐ北側に設定したトレンチである。第124図のように、緩やかな斜面の中ほどに溝状の段が造成されているのが確認された。時期は不明である。

Ｔ111は、今回の確認調査でもっとも低位に設定することができたトレンチで、第５水門の西方上位にあたる。

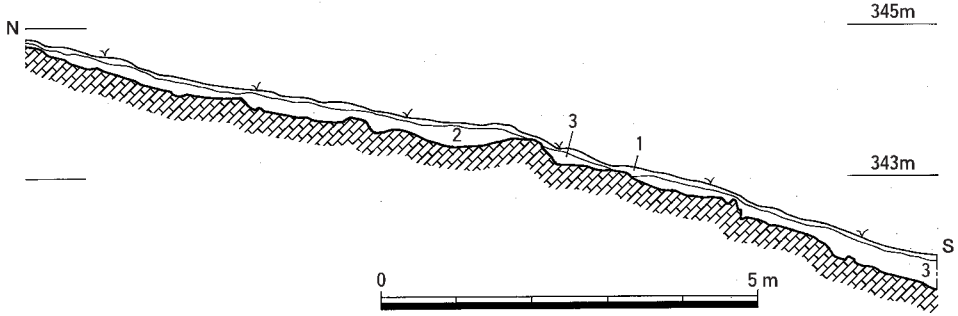
第124～126図に示すように、トレンチ中ほどで高さ約１ｍほどの石垣が検出された。前面に石敷を伴い、横口積みに花崗岩を積み上げている。第125図は、周辺の遺構図であるが、北方の築堤と相対する位置にこの石垣が造成されていることから、第５水門の上位に築かれた水利施設の一部と推定される。石垣背後の控え積み石の中から、古代Ⅰ期かⅡ期に比定される104の須恵器甕が出土している。

Ｔ117は、第３水門の西方尾根線に設定したトレンチである。かなり急な斜面であるが、下位に黄褐色の包含層が認められ、第129図の須恵器のほか鉄滓も出土している。105～107は蓋、108は平瓶の可能性もある。109は甕か壷、110は横瓶でほぼ完形に復元することができた。ごく少量の土師器も出土している。総社市教委の調査では、南門周辺で出土遺物が多く、陶硯の破片もみられる。何らかの城内施



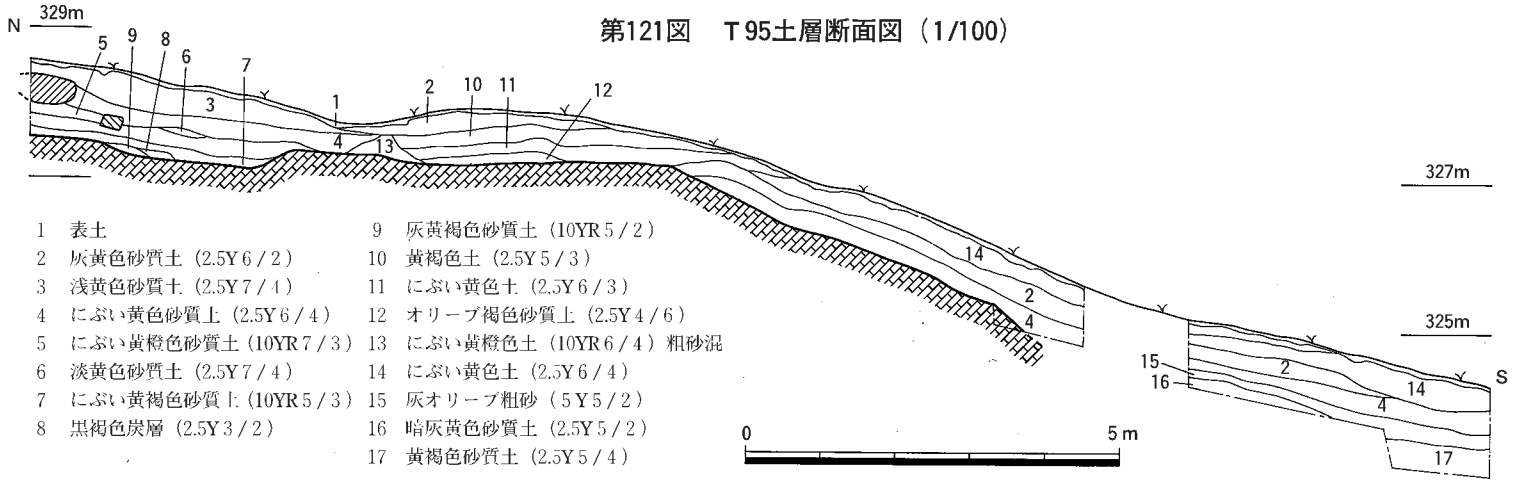
1 表土
2 明黄褐色砂質土（2.5Y 6 / 6）
3 淡黄色微砂（2.5Y 8 / 4）
4 浅黄色砂質土（2.5Y 7 / 4）
5 灰黄色砂質土（2.5Y 6 / 2）
6 にぶい黄色砂質土（2.5Y 6 / 4）
7 灰黄色砂礫土（2.5Y 6 / 2）
8 灰黄色砂礫土（2.5Y 7 / 2）
9 黄褐色粗砂（2.5Y 5 / 3）
10 橙色粗砂（7.5YR 6 / 8）
11 黄褐色粗砂（2.5Y 5 / 6）
12 にぶい橙色砂礫土（7.5YR 7 / 4）
13 浅黄色微砂（2.5Y 7 / 3）
14 黄橙色砂礫土（10YR 8 / 6）

第120図　T 47土層断面図（1/100）



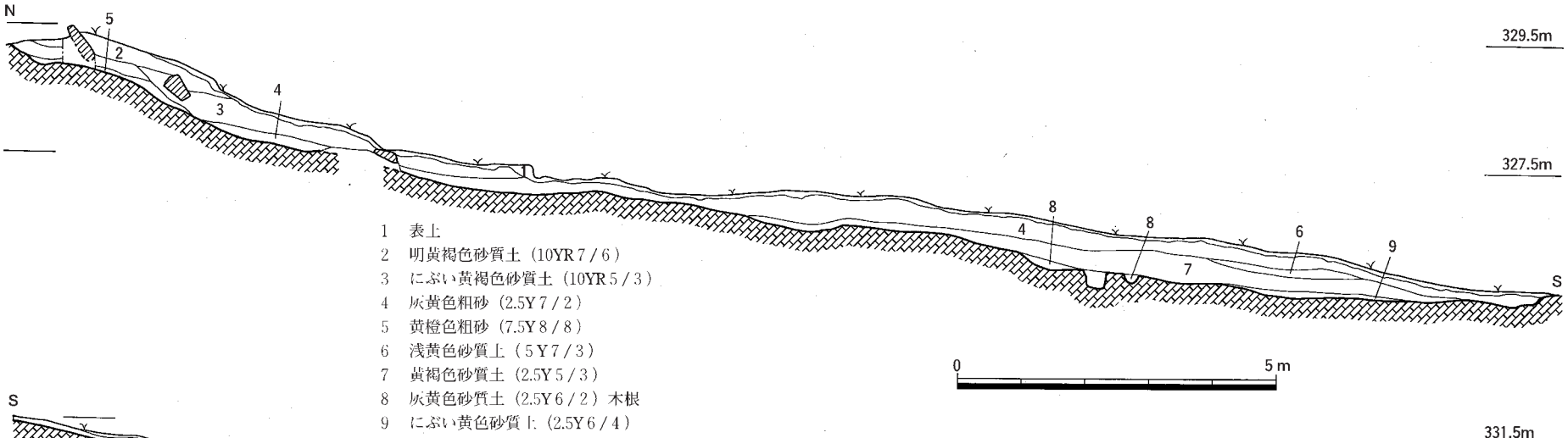
1 表土
2 にぶい黄褐色土（10YR 4 / 3）
3 にぶい黄褐色砂質土（10YR 5 / 4）

第121図　T 95土層断面図（1/100）

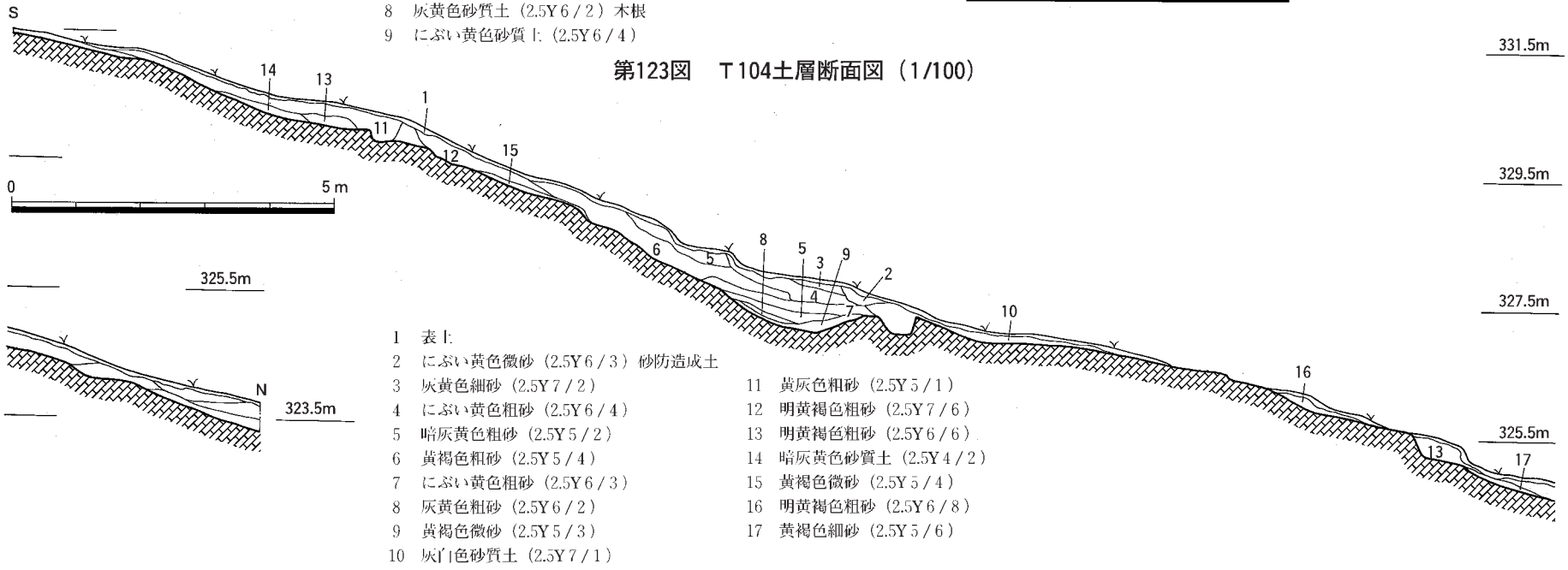


1 表土
2 灰黄色砂質土（2.5Y 6 / 2）
3 浅黄色砂質土（2.5Y 7 / 4）
4 にぶい黄色砂質土（2.5Y 6 / 4）
5 にぶい黄橙色砂質土（10YR 7 / 3）
6 淡黄色砂質土（2.5Y 7 / 4）
7 にぶい黄褐色砂質土（10YR 5 / 3）
8 黒褐色炭層（2.5Y 3 / 2）
9 灰黄褐色砂質土（10YR 5 / 2）
10 黄褐色土（2.5Y 5 / 3）
11 にぶい黄色土（2.5Y 6 / 3）
12 オリーブ褐色砂質土（2.5Y 4 / 6）
13 にぶい黄橙色土（10YR 6 / 4）粗砂混
14 にぶい黄色土（2.5Y 6 / 4）
15 灰オリーブ粗砂（5Y 5 / 2）
16 暗灰黄色砂質土（2.5Y 5 / 2）
17 黄褐色砂質土（2.5Y 5 / 4）

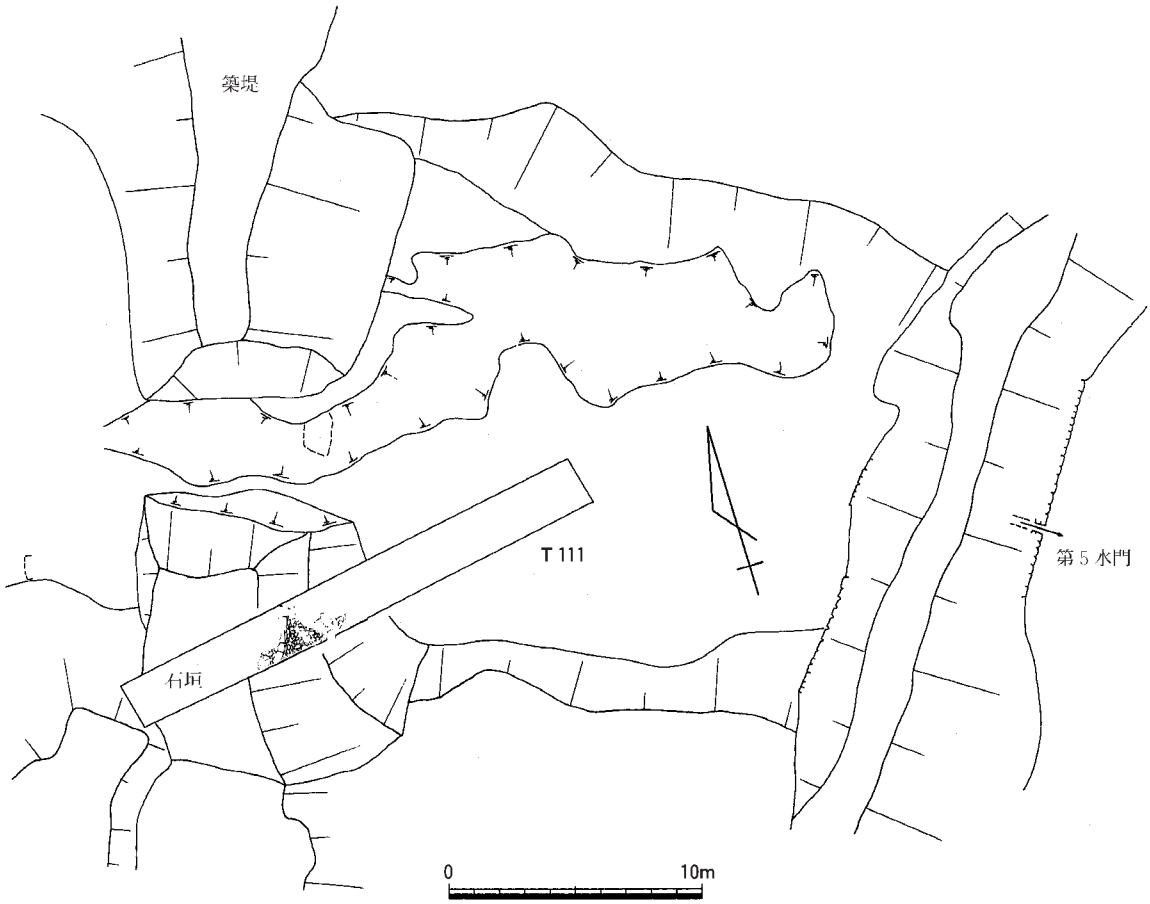
第122図　T 96土層断面図（1/100）



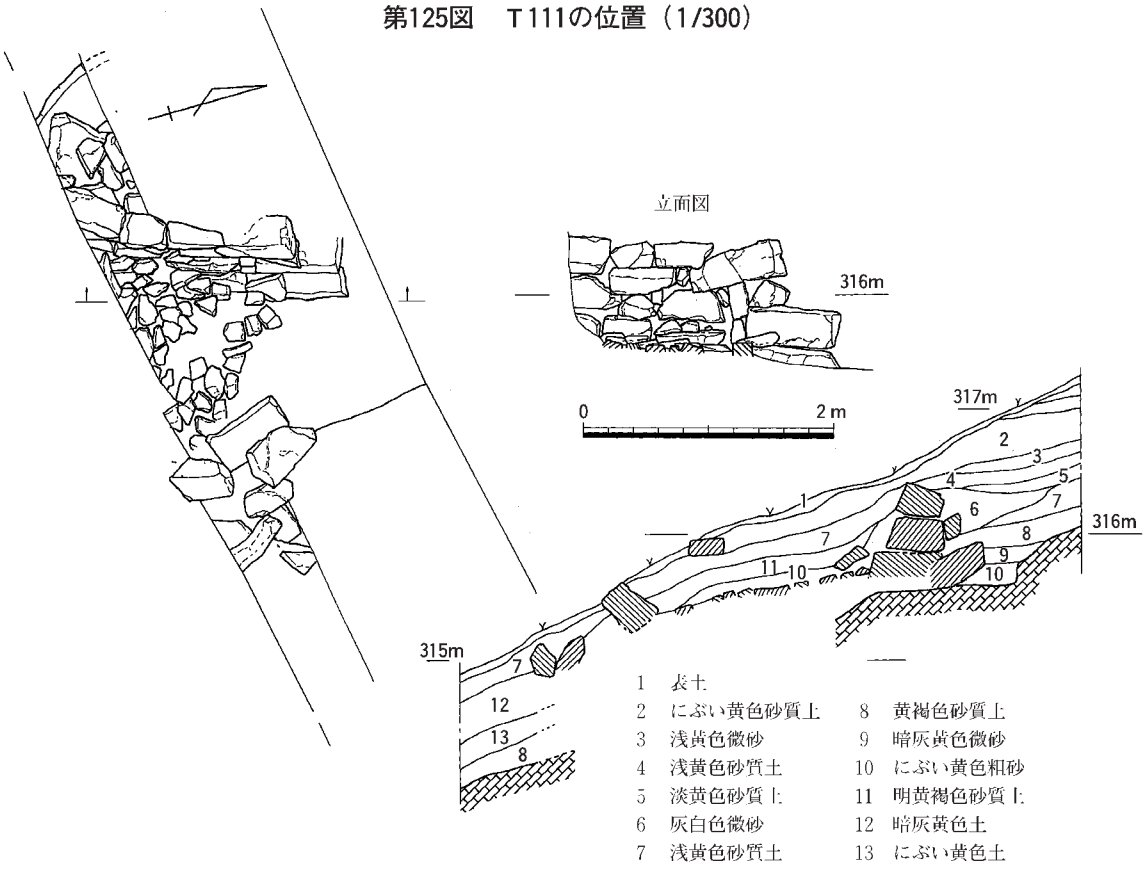
第123図　Ｔ104土層断面図（1/100）



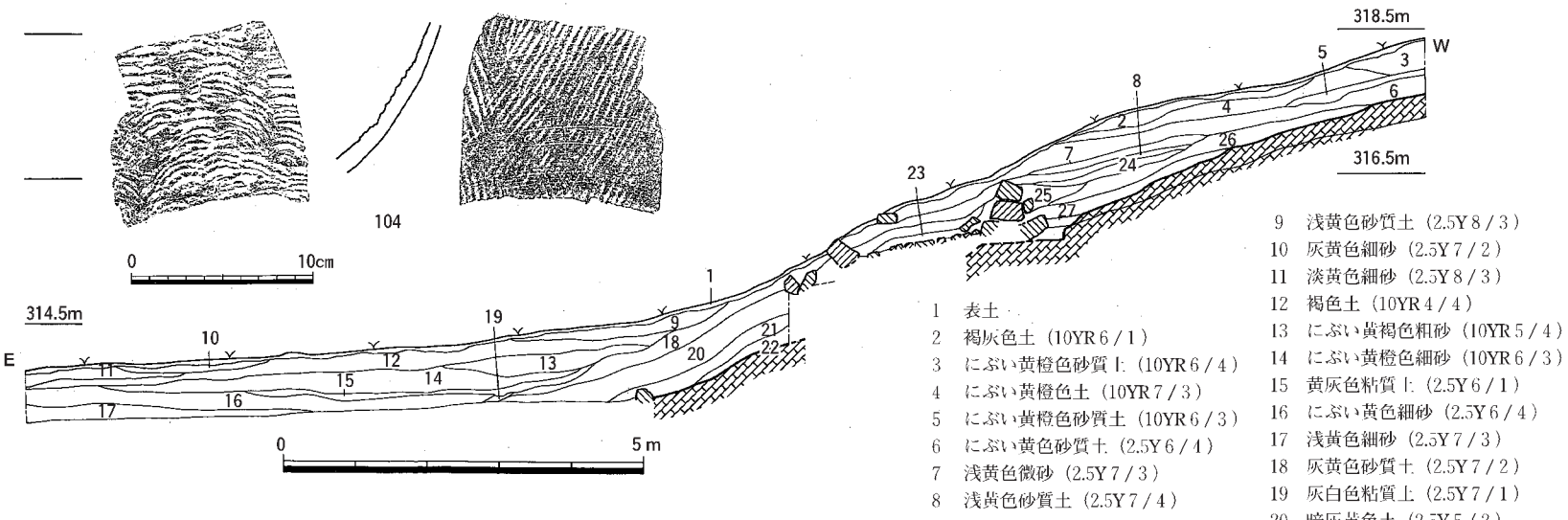
第124図　Ｔ110土層断面図（1/100）



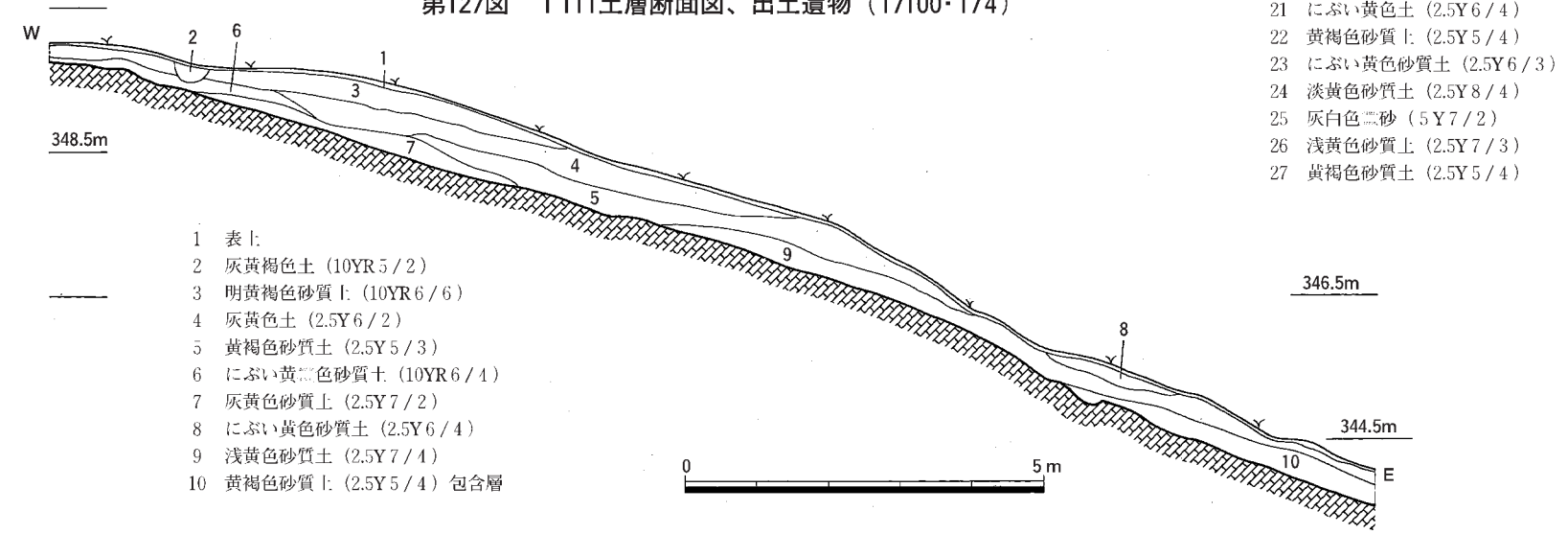
第125図　T111の位置（1/300）



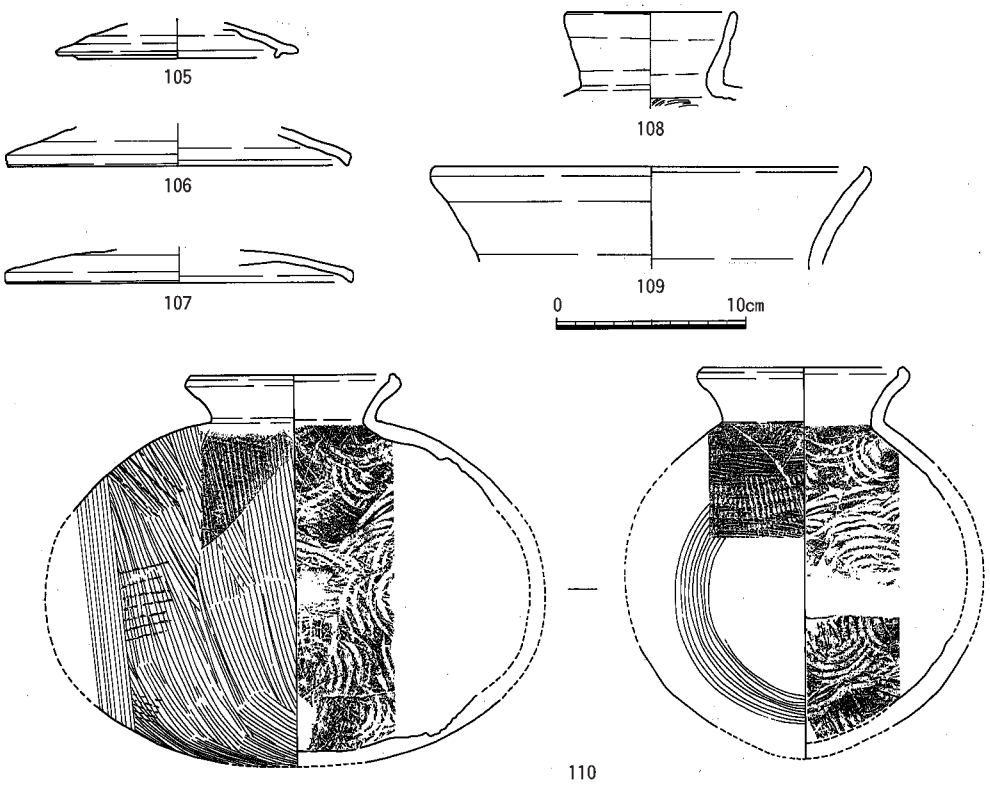
第126図　T111石垣（1/60）



第127図　Ｔ111土層断面図、出土遺物（1/100・1/4）



第128図　Ｔ117土層断面図（1/100）



第129図　Ｔ117出土遺物（1/4）

設が存在したことが想定され、鉄滓の出土も東門背後の鍛冶関連遺構との関係に注意を払う必要がある。

なお、第130図に掲げる須恵器杯111と須恵器壷112は、Ｔ95とＴ103の間の遊歩道で採集された遺物である。古代Ⅲ期に比定される。

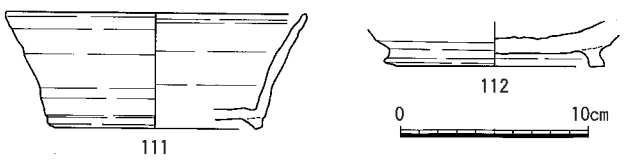
第９節　Ⅸ期の確認調査概要

最後の期間となった第Ⅸ期の発掘は、３月17日に開始し、29日にすべての記録や埋め戻し作業を終える短期間の発掘調査であったが、計９本のトレンチを設定した。

調査の対象範囲は、第２水門と南門の間の西側尾根線に集中したが、これはＴ31とＴ117での遺物の出土により、その間の尾根線での遺構検出を期待したものである。

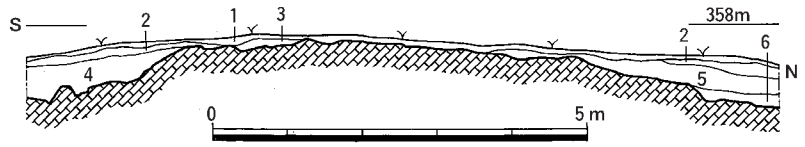
Ｔ33は、Ｔ31の東方約40ｍに設定したトレンチである。第131図のように、狭小な鞍部をなす平坦面には遺構は確認できず、また出土遺物も皆無であった。

Ｔ34は、Ｔ31の東約40ｍに設定したトレンチである。第132図では、露頭岩も多く、起伏に富んだ地形が示されるが、たぶんに砂防工事の少なからぬ影響が推察される。



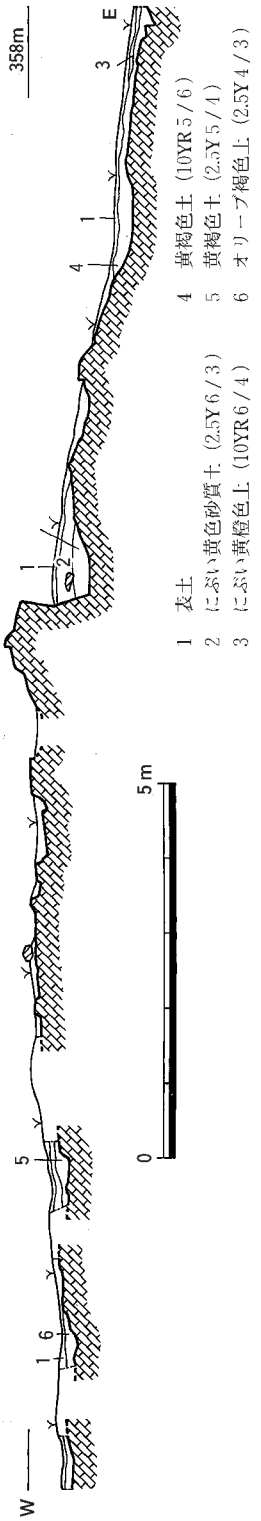
第130図　Ｔ95～103付近遊歩道出土遺物（1/4）

Ｔ40は、Ｔ34の東方約70ｍに設定したトレンチである。第133図では、多少の地形改変がみられるが、大規模なものではない。出土遺物としては、少量の須恵器細片がみられるに過ぎない。



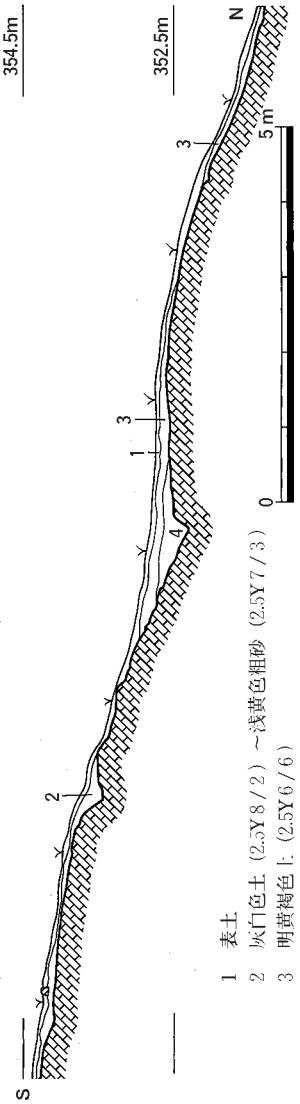
1　表土
2　にぶい黄色 l: (2.5Y 6 / 3)
3　にぶい黄橙色土 (10YR 6 / 4)
4　淡黄色砂質土 (2.5Y 8 / 4)
5　浅黄色砂質 l: (2.5Y 7 / 4)
6　明黄褐色土 (2.5Y 6 / 6)

第131図　Ｔ33土層断面図（1/100）



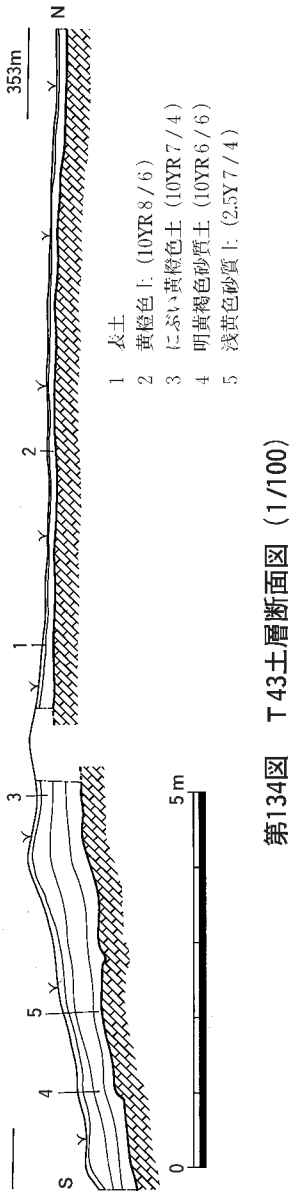
1　表土
2　にぶい黄色砂質土 (2.5Y 6 / 3)
3　にぶい黄橙色 l: (10YR 6 / 4)
4　黄褐色土 (10YR 5 / 6)
5　黄褐色 l: (2.5Y 5 / 1)
6　オリーブ褐色土 (2.5Y 4 / 3)

第132図　Ｔ34土層断面図（1/100）



1　表土
2　灰白色土 (2.5Y 8 / 2) ～浅黄色粗砂 (2.5Y 7 / 3)
3　明黄褐色 l: (2.5Y 6 / 6)
4　灰黄色砂質土 (2.5Y 6 / 2)

第133図　Ｔ40土層断面図（1/100）



1　表土
2　黄橙色 l: (10YR 8 / 6)
3　にぶい黄橙色土 (10YR 7 / 4)
4　明黄褐色砂質土 (10YR 6 / 6)
5　浅黄色砂質 l: (2.5Y 7 / 4)

第134図　Ｔ43土層断面図（1/100）

Ｔ43は、Ｔ40のさらに東に設定したトレンチである。第134図に示すように、かなり平坦に削平された部分もみられるが柱穴などの遺構は認められない。出土遺物は近接するＴ41では、わずかな土師器片が認められるものの、ここでは皆無である。

Ⅸ期に設定した箇所は、南側外郭線のすぐ上方にあたるが、尾根線からは相当急峻な地形で、古代の遺構面の残存は低い可能性も考えられる。

第４章　まとめ

1999年８月から翌2000年３月にかけ、発掘時期を９期に区分して実施した成果は、第３章で確認調査概要として述べた。さまざまな制約のもとで実施した調査ではあったが、調査期間中、文化財保護と自然保護というそれぞれの立場を理解し、鬼城山のもつすばらしさをあらためて実感する機会を得ることができた。

今回の城内での発掘成果を整理してみると、検出遺構や出土遺物によって、第135図に示すように、Ａ・Ｂ・Ｃゾーンの３つの特徴的な機能・性格に大別することができる。以下、ゾーンごとに説明を加えてみよう。

Ａゾーン（第Ⅰ・Ⅳ期）

Ｔ21を中心に安定した尾根線上に８本ほどのトレンチを設定した範囲を示している。ここでは、今回の確認調査では、もっとも多くの土器が出土し、しかも土壙や柱穴などが検出された。

築城工事に伴う作業拠点あるいは、築城後の兵士の駐屯地としての平面的利用が考えられる。

Ｂゾーン（第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期）

従来から礎石建物群が確認され、原状保存が図られてきた地点で、Ⅰ・Ⅱ群計５棟の礎石建物のほかに、Ｔ59とＴ123によって存在が明らかとなった新たな礎石建物６、そして礎石建物３の北東方でもいくつかの礎石の存在を確かめることができた。

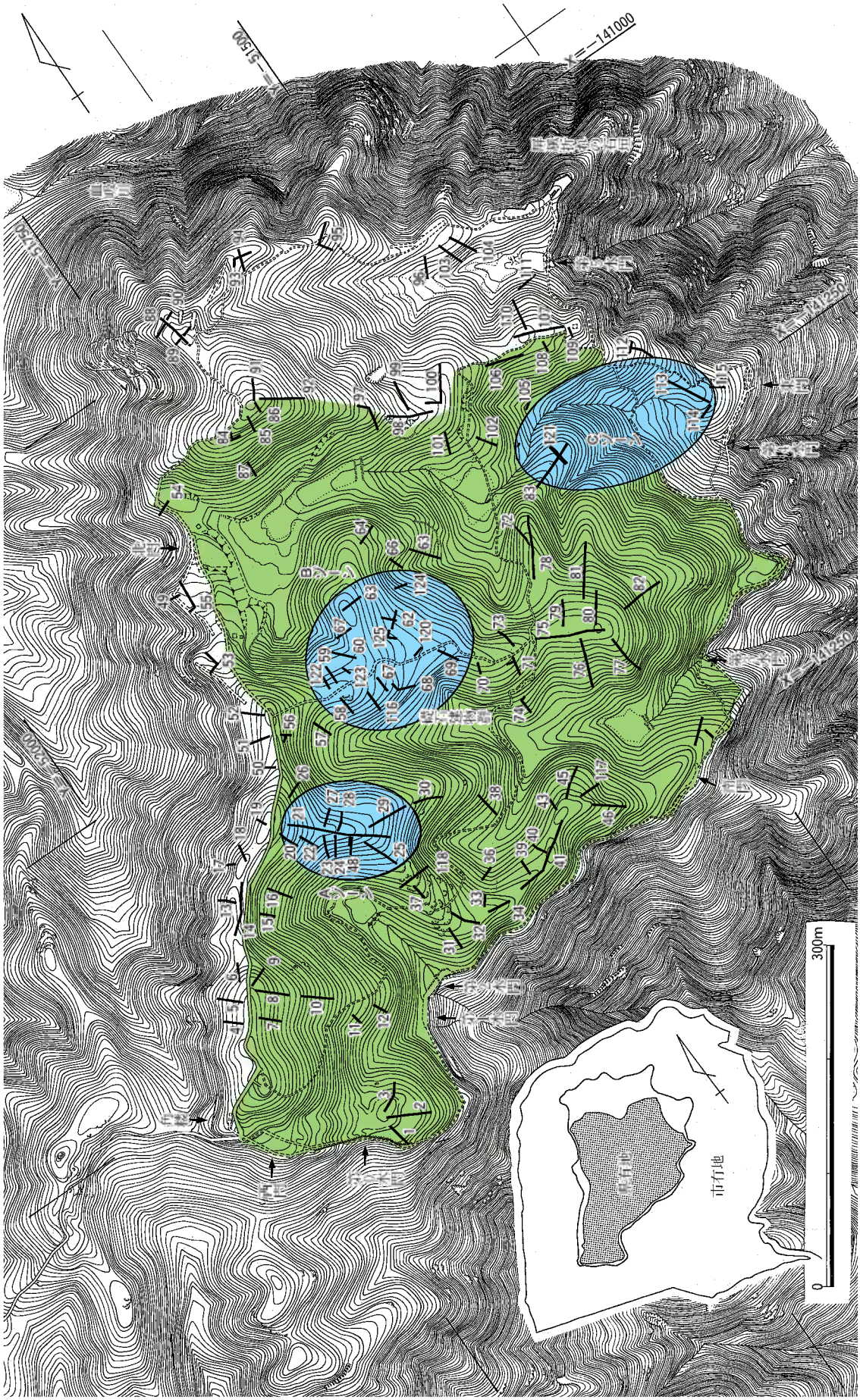
一方、Ⅱ群礎石建物の一角に設定したＴ67やＴ68では、掘立柱建物を構成する柱穴群が検出され、礎石建物に先行する前身建物の存在が想定された。

出土遺物からみると、仏教的な性格を物語る瓦の出土や瓦塔片（註１）が示すように、鬼城山が古代山城としての軍事的緊張から解き放たれた後、仏教寺院あるいは堂塔へと変貌した可能性が推察される。良質な緑釉陶器の出土が示す９世紀前半には、すでにこのような性格の建築遺構が存在した可能性が高い。

Ｂゾーンは、このような建築遺構群が集中する範囲を想定している。

第３表　鬼城山　建物一覧表

掲載遺構名	関連トレンチ	従来の呼称	旧建物番号	規　模	柱間距離（cm）		桁行（cm）	梁間（cm）	面積（㎡）	棟方向	備　考
					桁	梁					
礎石建物１	T62	Ⅰ群礎石建物群	城庫１	３×３	250～260	190～195	745	580	43.2	N-45° -W	総柱礎石建物
礎石建物２	T124	Ⅰ群礎石建物群	城庫２	３×３	165～190	165～190	515	518	27	N- 9 ° -E	総柱礎石建物
礎石建物３	T120	Ⅰ群礎石建物群	城庫３	４×３	175～180	200～205	715	610	44	N-63° -E	総柱礎石建物
礎石建物４	T62・T125	Ⅰ群礎石建物群	城庫４	４×３	185～200	220	767	660	51	N-46° -E	総柱礎石建物
礎石建物５	T116	Ⅱ群礎石建物	Ⅱ群礎石建物	６×２	280～300	300	1750	600	105	N-110° - W	側柱礎石建物
礎石建物６	T59・T123	なし	なし	５×２	300	340	1500?	675	101?	N-17° -W	側柱礎石建物？
礎石建物７	なし	なし	なし	不明	不明	不明	約260	不明	不明	南北棟か	表面精査による発見
掘立柱建物１	T67	なし	なし	?×２	不明	230～235	不明	165	不明	N-86° -E	側柱建物？東西棟か



第135図　鬼城山城内県有地・市有地区分と特色（1/5,000）

Ｃゾーン（第Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ期）

鬼城山東門の背後から、第４水門に注ぐ谷川縁辺部を指す。この谷川は上位低湿地から約200ｍあまり下って第４水門に到達するが、この縁辺では従来鉄滓の出土が知られている。Ｔ121では鞴の羽口、Ｔ113では、竪穴遺構に伴って多数の鉄滓とともに鞴の羽口や炉底滓が出土している。付近からは大形の砥石も出土していることから、周辺で鍛冶が操業されていたことは確実であろう。築城工事に伴う工具あるいは、武器などの鉄器が製作されていたことを示唆する。

Ｃゾーンは、このような「鉄」と深く関わる「モノ作り」の谷を想定している。

以上のゾーン区分以外にも、多くの新たな知見を得ることができた。たとえば、今回の確認調査で縄文時代にさかのぼるとみられる「落し穴」の発見は、10か所を数える。(註２)

一方、古代の遺構として特筆しておきたいのは、Ｔ87の造成工事痕跡である。北門から東へ抜ける通路（道路）が建設された痕跡かも知れず、この段切り工事では、礎石建物背後や版築土塁下部にもほぼ同じ勾配のカットがみられる点で興味深い。

「いつ」「誰が」「何のために」築いた城か？これらの謎のすべてが、今回の城内確認調査で解明できたわけではない。しかし、「いつ」という謎は、出土遺物とりわけ須恵器によって、ほぼ古代Ⅰ期に築造開始時期を特定することが可能になったとみていいだろう。

記紀に記述はないが、国家の意思が反映された結果として、戦火を逃れた渡来人の技術的な支援を受け、多くの民衆や兵士が動員されて築城されたことも疑う余地はない。そして、古代Ⅱ期以降の出土遺物は、廃城後の鬼城山が、平穏な宗教的施設へ変貌してゆくことを示唆する。

身近な存在として多くの人々に親しまれる鬼城山は、今なお多くの謎を残しているが、古代人のさまざまな思いを伝えながら、吉備古代史の舞台を見下ろしている。　（岡田　博）

註

（註１）県内では10例の出土数があり、西日本では群を抜く。亀田修一「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学－平井　勝氏追悼論文集－』　古代吉備研究会 2002年

（註２）形態・時期については、以下の文献を参考にした。
稲田孝司「西日本の縄文落し穴猟」『論苑考古学』坪井さんの古希を祝う会　1993年

主要参考文献

・小田富士雄編「西日本古代山城の研究」（日本城郭史研究叢書　13）名著出版　1985年
・葛原克人「鬼ノ城と小廻り山城」『吉備の考古学』福武書店　1987年
・「総社市史－考古資料編」　総社市史編纂委員会　1987年
・村上幸雄・乗岡　実「鬼ノ城と大廻り小廻り」吉備人出版　1999年
・教育時報　特集　謎の古代山城「鬼ノ城」の解明に向けて　岡山県教育委員会　2000年

第１表　土器観察表

掲載番号	実測番号	出土トレンチ	遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	焼成	形態・手法の特徴など
1	46	T１	T１石敷部分	土師器	甑？	10YR７/４にぶい黄橙	長石･石英･赤色酸化土粒･その他	良好	外面ハケメ、内面軽い押圧
2	21	T８	T８、４ﾌﾞﾛｯｸ下端表土	須恵器	壺	2.5Y５/１黄灰	長石・石英・雲母･その他	良好	小片、口縁端部は上方へ屈曲
3		T11		須恵器	壺	灰	緻密	良好	
4	23	T11		須恵器	壺	５Y７/１灰白	長石・石英･その他	良好	口縁端部はやや肥厚
5	25	T12		須恵器	壺	2.5GY６/１ｵﾘｰﾌﾞ灰	長石・石英	良好	外面自然釉付着、内外面ヨコナデ
6		T12	T12土壙	須恵器	壺	明灰	長石	良好	貼り付け高台
7		T12	T12土壙北	土師器	皿	黄橙	緻密	良好	
8		T12	T12土壙北､柱穴状凹み上面	土師器	皿	黄橙	緻密	良好	
9		T21	T21- ２区土壙３	須恵器	蓋	灰		良好	
10		T21	T21- ２区土壙３	須恵器	高杯	青灰	長石	良好	低脚の高杯、ややひずみあり
11		T21	T21- ３区	須恵器	高杯	明灰	緻密	良好	小型高杯脚部、上位にシボリメ痕跡
12		T21	T21- ２区土壙３	須恵器	杯	青灰	緻密	良好	内面に身受けのカエリ
13		T21	T21- ３区	須恵器	杯	灰	やや荒い	良好	
14		T21	T21- ３区下位	須恵器	杯	明灰	長石	良好	内面に身受けのカエリ
15	22	T21	T21- ２区	須恵器	杯	５Y６/１灰	長石・石英・雲母･その他	良好	高台が付く深い杯、内外面ヨコナデ
16		T21	T21- ３区下位	須恵器	杯	灰白	精良	軟	
17	20	T21	T21- ３区	須恵器	杯	５Y７/１灰白	長石・石英･その他	良好	貼り付け高台は、やや外方する
18	13	T23	T23下位	須恵器	蓋	2.5Y８/２灰白	長石･その他	良好	
19		T23	T23- ３区	須恵器	甕	明灰	緻密	やや軟	口縁端部やや肥厚、体部内面同心円タタキ
20		T22		須恵器	蓋	灰	緻密	良好	宝珠ツマミ
21	27	T22		須恵器	不明	10Y５/１灰	石英	堅緻	小型器種の口縁部か
22	7	T22		須恵器	横瓶	Ｎ４/０灰	長石	良好	
23	26	T24	T24下位	須恵器	杯	10YR７/２にぶい黄橙	精良	良好	外方して踏ん張る貼り付け高台
24	11	T24	T24下位	須恵器	甕？	2.5Y７/２灰黄	長石	良好	
25	34	T24	T24下位	須恵器	壺	2.5Y７/１灰白	長石･黒色粒･赤色酸化土粒	良好	口縁端部はやや肥厚
26		T25	T25下位	須恵器	蓋	灰	精良	良好	
27	5	T25	T25下位	須恵器	甕	Ｎ６/０灰	精良	良好	
28	10	T27	T27最上位	須恵器	甕	2.5Y７/３浅黄	精良	良好	
29	16	T28	T28下位	須恵器	壺？	５Y６/１灰	長石･黒色粒･赤色酸化土粒	良好	口縁端部はややくぼむ
30	6	T28	T28上位	須恵器	壺	7.5Y６/１灰白	精良	堅緻	体部上位片､平行タタキにカキメ調整を加える
31		T29	T29上位	須恵器	蓋	黄灰	砂粒	軟	
32		T29	T29上位	須恵器	蓋	黒灰	石英	軟	大型の蓋
33		T29	T29- ３ブロック	土師器	甕	橙褐	石英	やや軟	外面ハケメ、内面ケズリ
34		T48	T48下半	須恵器	蓋	灰白	緻密	堅緻	
35		T48	T48下半	須恵器	蓋	灰白	砂粒	軟	
36		T48	T48下位	須恵器	蓋	灰黄灰	長石	軟	やや大型の蓋
37		T48	T48上半	須恵器	蓋	灰白	黒色粒	軟	低平な蓋
38		T48	T48下位	須恵器	蓋	灰白	砂粒	やや軟	ツマミははじめからなし
39		T48	T48　土器７	須恵器	杯	灰	緻密	軟	高く外方する貼り付け高台、完形復元
40		T48	T48下半	須恵器	杯	青灰	緻密	良好	低い貼り付け高台
41		T48	T48	須恵器	杯	暗灰	砂粒	良好	体部下半に横位の波状文を描く
42	48	T48	T48上半	須恵器	平瓶	7.5Y７/１灰白	長石・石英･その他	良好	内面と断面に薄く漆が付着､容器として使用か
43	35	T48	T48下半	須恵器	甕	2.5Y５/１黄灰	長石	良好	口縁端部肥厚､外面は縦方向のタタキ＋カキメ
44	2	T48	T48下半	須恵器	横瓶か	10Y５/１灰	長石	良好	
45	4	T48	T48 土器２	須恵器	甕	５Y６/１灰	黒色砂粒	不良	外面平行タタキにカキメ調整を加える
46	15	T48	T48下半	須恵器	甕	５Y６/１灰	長石	良好	外面平行タタキにナデ調整を加える
47	29	T48		須恵器	壺	５Y６/１灰	長石･黒色粒	良好	外底部はヘラケズリ後、ナデ調整
48	42	T48	T48下半	土師器	甕	10YR７/４にぶい黄橙	長石・石英	良好	外面タテハケ
49		T４	T４上位	須恵器	壺	暗灰	長石	良好	低く外方する高台
50	28	T57	T57下位	須恵器	蓋	2.5Y６/２灰黄	長石	堅緻	小型の蓋、内面にカエリ
51	18	T57	T57下位	須恵器	小型壺？	５Y６/１灰	長石・黒色粒	良好	蓋の可能性あり
52		T57	T57下位	土師器	甕	橙褐	長石・金雲母	ふつう	
53		T57	T57下位	土師器	甕	橙褐	長石・石英	ふつう	
54		T123	T123礎石検出直上層	須恵器	蓋	灰	長石	良好	
55		T123	T123下位下層	土師器	杯	橙	緻密	ふつう	
56		T123	T123下位下層	須恵器	壺	灰	長石	堅緻	体部の球形に近い丸みが特徴的
57	57	T123		瓦	平瓦	５Y８/１灰白	長石・石英･黒色粒	良好	凸面は縄目、凹面に布目
58	9	T62	T62西側	須恵器	壺	7.5Y７/１灰白	長石	良好	
59		T62	T62西側４号礎石辺物	須恵器	蓋	明灰	長石	良好	天井部に、かすかな重ね焼痕跡
60			Ⅰ群礎石建物１～２の間	須恵質	瓦塔片	明灰	長石	良好	内外面ナデ､型押し技法で本瓦葺きを表現か
61		T116	T116造成土内	須恵質	蓋	灰	緻密	良好	転用硯？
62	45	T116	T116造成土内	土師器	皿	10ＹＲ７/４にぶい黄橙	長石･石英･雲母･赤色酸化土粒･その他	良好	
63	39	T116	T116表面採集	土師器	椀	10ＹＲ６/４にぶい黄橙	長石・石英・雲母・その他	良好	貼り付け高台
64		T116	T116表面採集	土師器	椀	橙	長石	良好	高い貼り付け高台
65	49		Ⅱ群礎石建物付近 表採	瓦	平瓦	５Ｙ７/１灰白	長石・石英	良好	凸面は縄目、凹面に布目
66	56		Ⅱ群礎石建物付近 表採	瓦	丸瓦	2.5Ｙ５/２暗灰黄	長石・石英・赤色酸化土粒	良好	凹面はナデ、ヘラケズリ
67	55	T116	Ⅱ群礎石建物付近 表採	瓦	丸瓦	2.5Ｙ６/２灰黄	長石･石英･赤色酸化土粒･その他	良好	凸面は平行タタキ?玉縁部分をわずかに残す
68	59	T116	T116表面採集	瓦	丸瓦	2.5Ｙ７/２灰黄	長石・石英・雲母・その他	良好	凸面に圧痕、凹面は布目
69		T67	T67造成土内	須恵器	蓋	灰	長石	堅緻	天井部に自然釉
70	12	T67	T67表面採集	須恵器	蓋	2.5Ｙ７/１灰白	長石・石英・雲母・その他	良好	

掲載番号	実測番号	出土トレンチ	遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	焼成	形態・手法の特徴など
71	24	T67		須恵器	壺	2.5GY4/1暗オリーブ灰	精良		内外面ヨコナデ、外面下半はヘラケズリ
72		T67	T67造成土内	須恵器	甕	青灰	長石	堅緻	内面に同心円タタキ
73		T67	T67側溝造成土内	土師器	杯	橙	角閃石	良好	共伴遺物に丹塗り土師器あり
74		T67	T67造成土側溝	土師器	杯	橙	長石	やや軟	薄い器壁
75	40	T67	T67表面採集	土師器	椀	10YR6/4にぶい黄橙	長石・石英・雲母・赤色酸化土粒・その他	良好	高く外方する貼り付け高台
76	51	T67	T67表面採集	瓦	平瓦	10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英	良好	凸面は縄目、凹面に布目
77	58	T67	T67表面採集	瓦	平瓦	5Y3/1オリーブ黒	長石・石英・雲母・その他	良好	凸面は縄目、凹面に布目
78	53	T67	T67表面採集	瓦	平瓦	2.5Y6/3にぶい黄	長石・石英	良好	凸面は縄目、凹面に布目
79	54	T67	T67-102・T67側溝造成土内	瓦	平瓦	2.5Y8/2灰白	長石・石英・赤色酸化土粒	良好	凸面は縄目、凹面に布目
80	52	T67	T67表面採集	瓦	平瓦	2.5Y6/1黄灰	長石・石英・黒色砂粒	良好	凸面は縄目、凹面に布目
81	50	T67	T67表面採集	瓦	平瓦	2.5Y8/2灰白	長石・石英・雲母	良好	凸面は縄目、凹面に布目
82		T68		須恵器	杯	灰	長石	良好	
83		T68	T68中位溝埋土	須恵器	杯	明灰	緻密	良好	
84	60	T68		緑釉陶器	皿	素地：5Y7/1灰白 釉面：5Y7/3（浅黄）	精良	堅緻	9世紀中頃に京都で生産された優品
85	43	T68	T68下位地山直上	土師器	甕	7.5YR6/6橙	長石・石英・金雲母・黒色土粒	良好	外面タテハケ
86	38	T68	T68上位	土師器	椀	5YR6/6橙	長石・石英・赤色酸化土粒・その他	良好	外方する貼り付け高台
87	37	T68	T68上位	土師器	椀	10YR8/3浅黄橙	長石・石英・その他	良好	貼り付け高台
88	8	T83	埋め戻し中採集	須恵器	横瓶	2.5Y7/2灰黄	長石	良好	外面わずかに格子目タタキ
89		T83	T83から50cm地点表採	須恵器	蓋	明灰	緻密	良好	内面に大きな目のカエリ
90		T86	T86上位	土師器	杯（灯明皿）	黄橙	シャモット	良好	体部内面上位に灯心油痕あり
91		T86	T85上器2	土師器	杯（灯明皿）	黄橙	長石・シャモット	良好	体部内面上位に灯心油痕あり
92		T86	T86ピット土器1	土師器	杯（灯明皿）	黄橙	シャモット	良好	体部内面上位に灯心油痕あり
93	30	T91	T91	須恵器	杯か	5Y6/1灰	長石・赤色酸化土粒・黒色粒	良好	
94	47	T92	T92下位	土師器	甕	5YR6/6橙	長石・石英・雲母・赤色酸化土粒・その他	良好	～96同一個体、体部にタタキを施す
95	47	T92	T92下位	土師器	甕	5YR6/6橙	長石・石英・雲母・赤色酸化土粒・その他	良好	
96	47	T92	T92下位	土師器	甕	5YR6/6橙	長石・石英・雲母・赤色酸化土粒・その他	良好	
97	17	T121	T121南半	須恵器	蓋	5Y6/1灰	精良	良好	内面に身受けのカエリ
98		T121	T121埋め戻し中	須恵器	蓋	暗灰	緻密	堅緻	天井部に自然釉
99		T82	T82上位	土師器	小型甕	5YR7/4にぶい橙	長石・石英	良好	体部外面ハケメ、完形復元
100	41	T82	T82上位	土師器	甕	5YR6/6橙	長石・角閃石・金雲母	良好	長胴甕の口縁部、体部外面にタテハケ
101	44	T102	T102上位　土器①	弥生土器？	壺？	10YR7/4にぶい黄橙	長石・石英・雲母・赤色酸化土粒・その他	良好	底部は揚げ底、器表面剥落
102	14	T113	T113上位たわみ	須恵器	杯	5Y6/1灰	長石・石英・その他	良好	外底部ヘラオコシ
103		T31	T31上位	須恵器	杯	灰	長石	良好	比較的高くしっかりした高台
104	3	T111	T111中位	須恵器	甕？	N5/1灰	長石	良好	体部下半の破片
105		T117	T117下位	須恵器	蓋	青灰	黒色粒	良好	天井部に自然釉
106		T117	T117下位	須恵器	蓋	灰	緻密	良好	天井部に自然釉
107	19	T117	T117上位	須恵器	蓋	7.5Y6/1灰	長石・石英・黒色粒	良好	天井部ケズリ、内外面ヨコナデ
108		T117	T117下位	須恵器	横瓶？	灰	長石・黒色粒	良好	体部外面にカキメ調整痕、内面同心円タタキ
109		T117	T117下位	須恵器	甕	青灰	緻密	精良	
110	1	T117	T117下位	須恵器	横瓶	7.5Y7/1灰白	長石・石英・赤色酸化土粒	良好	完形復元、回転カキメ調整痕明瞭
111		T95～T103	T95～T103の間、遊歩道脇で採集	須恵器	杯	暗灰	長石	良好	体部ラインは屈曲せず下端貼り付け高台へ
112		T95～T103	T95～T103の間、遊歩道脇で採集	須恵器	壺底部？	暗灰	長石	良好	分厚い貼り付け高台

第５表　石器・石製品観察表

掲載番号	実測番号	出土トレンチ	遺構・土層名	器　種	計測値（mm）			重量（g）	石　材	時　期	備　　考
					最大長	最大幅	最大厚				
S１	S１	T24		石鏃	18.5	14	3	0.51	サヌカイト	縄文？	付近に土壙
S２	S２	T91	土壙上層	石鏃	16.5	12	3.3	0.5	サヌカイト	縄文？	土壙は落とし穴か？
S３	S３	T102	下層	石斧	88.5	56	20	112.3	流紋岩	縄文？	付近に土壙
S４	S４	T113	包含層	砥石	279	177	66	4500	流紋岩	古　代	竪穴遺構に伴う可能性大

第６表　土製品観察表

掲載番号	実測番号	出土トレンチ	遺構・土層名	器　種	計測値（ｍｍ）				色　調	胎　土	焼成	時期	備　考
					最大長	最大幅	外径	孔径					
C１	31	T121	高位部	鞴の羽口	15.00	12.00	61.00	28.00	2.5Y6/2灰黄	長石・石英ほか	良好	古代	先端部約1/4残存、溶融部分あり
C２	32	T113	竪穴遺構	鞴の羽口	12.60	45.50	53.00	12.90	10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英多含	良好	古代	溶融部分あり（ガラス質）
C３	33	T113	竪穴遺構	鞴の羽口	17.00	64.00	64.00	32.10	2.5Y6/2灰黄	長石・石英ほか	良好	古代	溶融部分あり（ガラス質）

第７表　鍛冶関連遺物観察表

	実測番号	出土トレンチ	遺構・土層名	種　別	計測値（mm）			重量（g）	材　質	時　期	備　考
					最大長	最大幅	最大厚				
M１	M２	T113	竪穴遺構	椀形滓	240.00	240.00	24.00	266.37	鉄	古代	溶融ガラス質部分あり
M２	M１	T113	竪穴遺構	椀形滓	109.50	132.00	48.00	624.68	鉄	古代	炭化した木片付着
M３	M３	T113	竪穴遺構	椀形滓	125.50	143.00	25.50	371.55	鉄	古代	炭化した木片付着

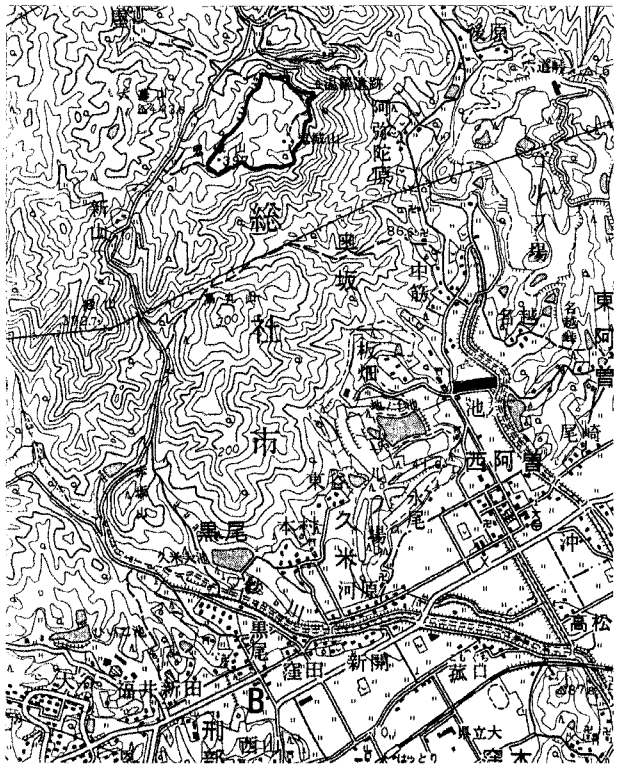
付章　池ノ下散布地の試掘調査

第１節　調査の概要

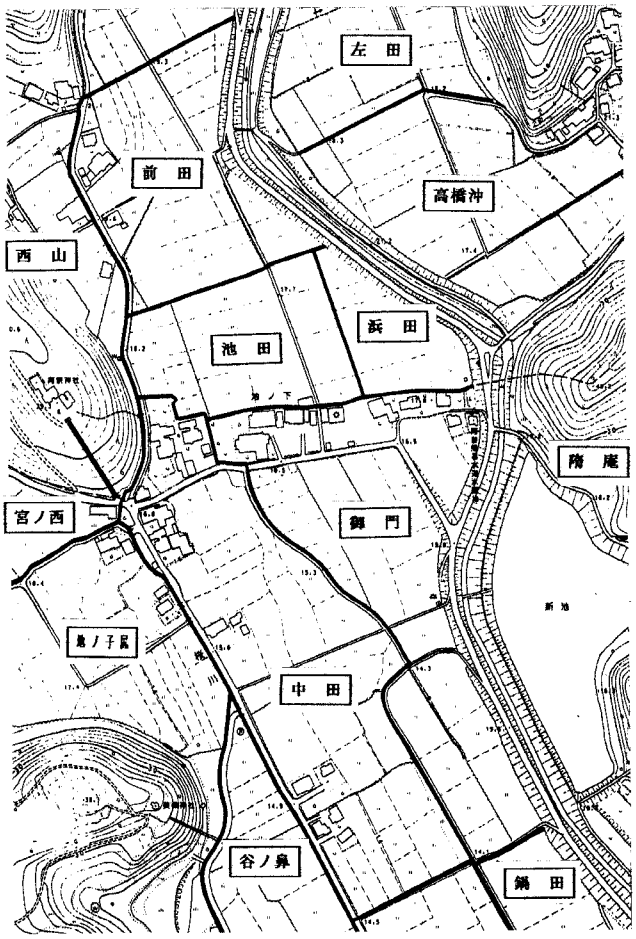
鬼城山の南東約1.8㎞に位置する池の下散布地は、血吸川によって形成された谷部が総社平野に向かって大きく開放する位置にあたっている。随庵古墳と阿宗神社の立地する丘陵を結んでこの谷部を横切るように、東西約300ｍにわたり堤状の土塁が延びているが、この土塁については早くから高橋護氏らによって鬼城山の防塁の可能性が指摘され、平成７年には総社市教育委員会によって試掘調査も行なわれている。

このたび、鬼城山内部の調査を実施するにあたり、この遺跡についても時期・性格を明らかにすることを目的として、総社市埋蔵文化財学習の館館長 村上幸雄氏の指導・協力のもとに、平成12年２月14日～３月９日にかけて試掘調査を実施した。

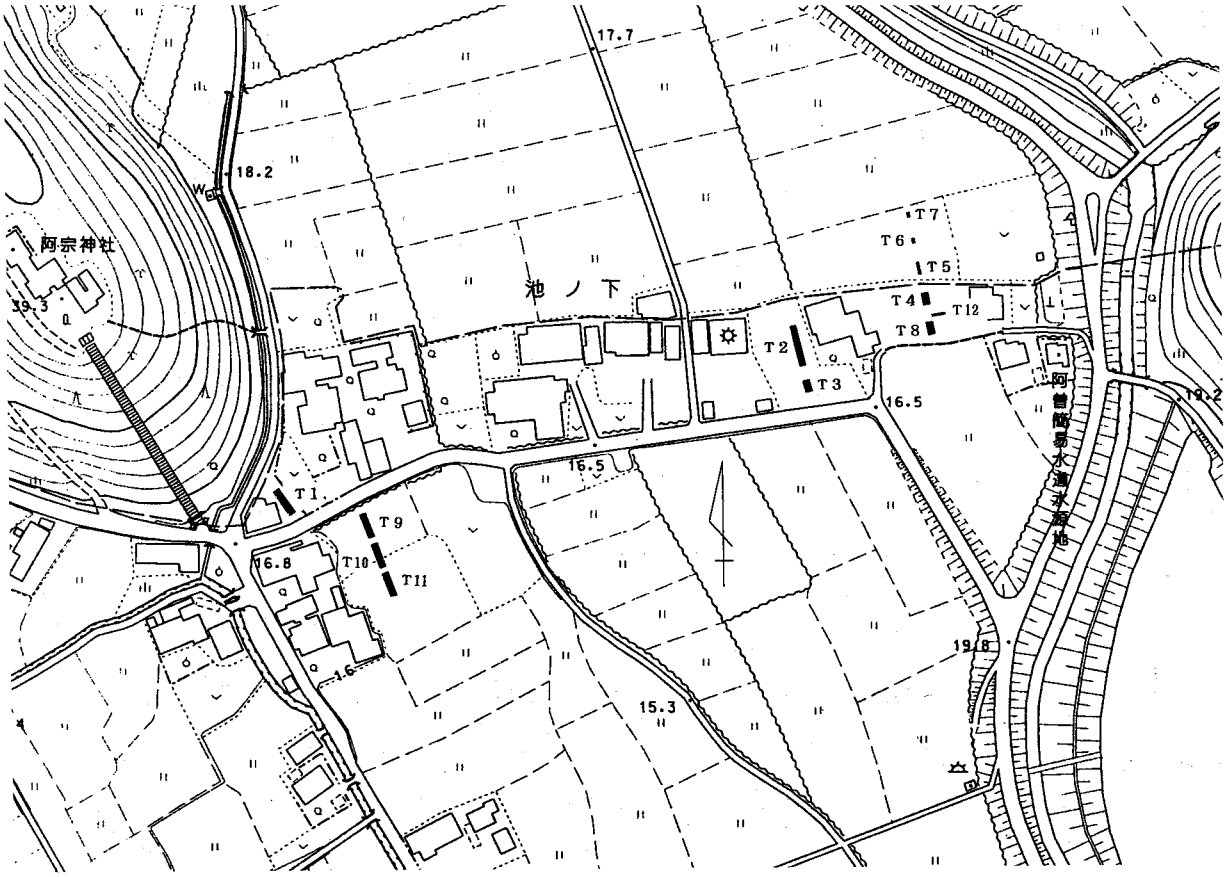
調査は、この土塁の規模・構造を把握するとともに、防塁を証拠立てるような付帯施設の存在や、池堤として機能したことを示す湛水の痕跡についても検討するため、土塁の南側にトレンチ１・９～11、北側にトレンチ５～７、土塁の上部にトレンチ２～４・８・12を設定して掘り下げを行なった。



第１図 池ノ下散布地の位置（黒塗り：1/25,000）



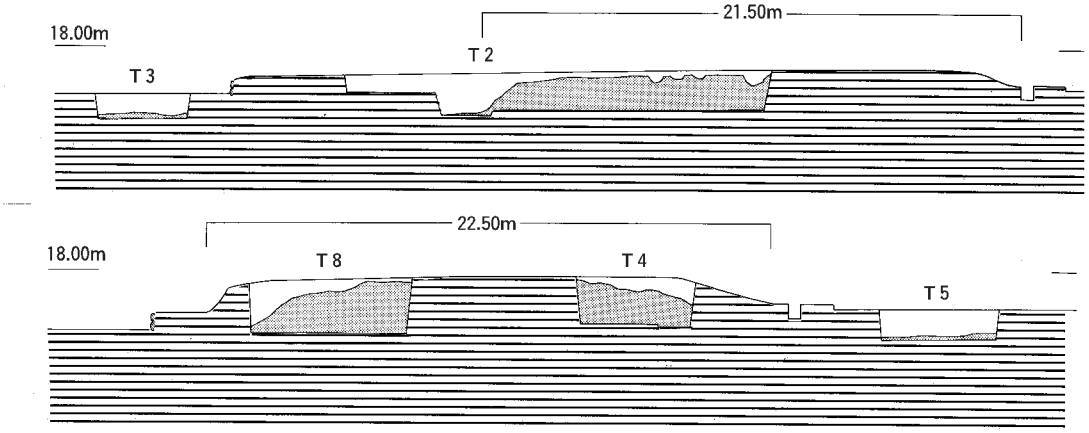
第２図　周辺地形図（約1/6,000）



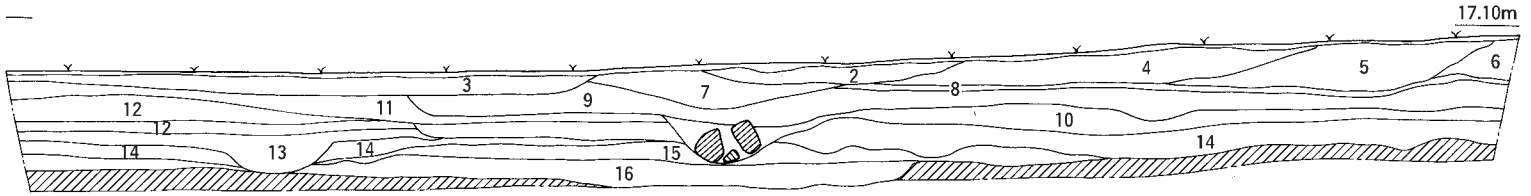
第３図 トレンチ設定図（1/3,000）

トレンチ１（第３・５・６図、図版15）

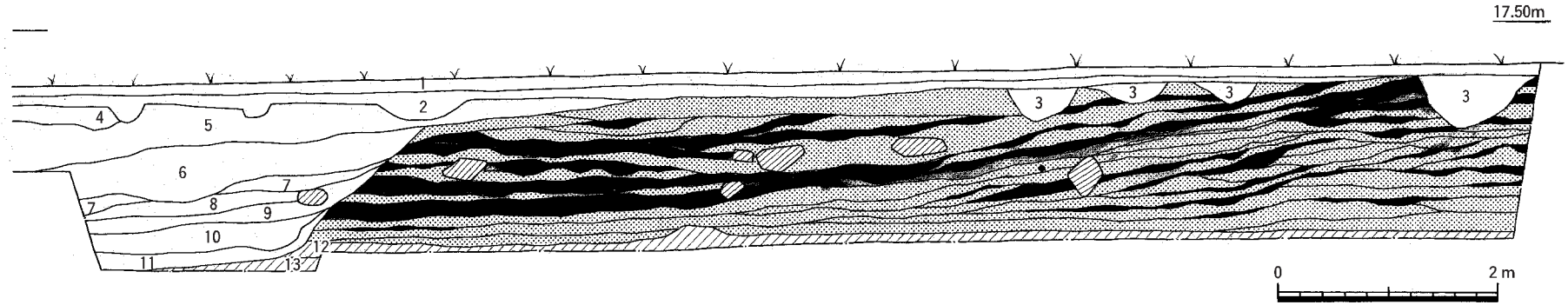
土塁が西側丘陵に取り付く部分に設定した11×２ｍのトレンチで、土塁の南側の状況を把握する目的で掘り下げを行なった。上層は撹乱をうけていたが、地表下80㎝（海抜16.2ｍ）でわずかに南へ傾斜する花崗岩の地山を確認した。しかし、顕著な遺構は検出されず、遺物も地山上の黒灰色土から須恵器の壺１が出土したにすぎない。



第４図　土塁横断模式図（１/300）

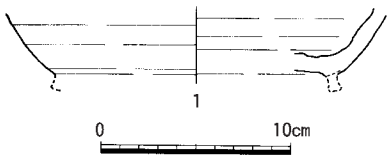


1　暗褐色土＝表土
2　暗褐色土（瓦含む）
3　暗茶褐色土（瓦・ビニール含む）
4　明褐色土（地山礫含む）
5　明褐色土
6　黄褐色土（礫多）
7　褐色土（瓦含む）
8　暗茶褐色土
9　黄褐色粗砂
10　青灰色土（黒灰色土ブロック含む）
11　黄茶色土
12　灰褐色土（酸化鉄・マンガン沈着）＝水田層
13　暗灰色土
14　黒灰色土
15　灰色土
16　褐灰色土
斜線：黄灰～緑灰色基盤層

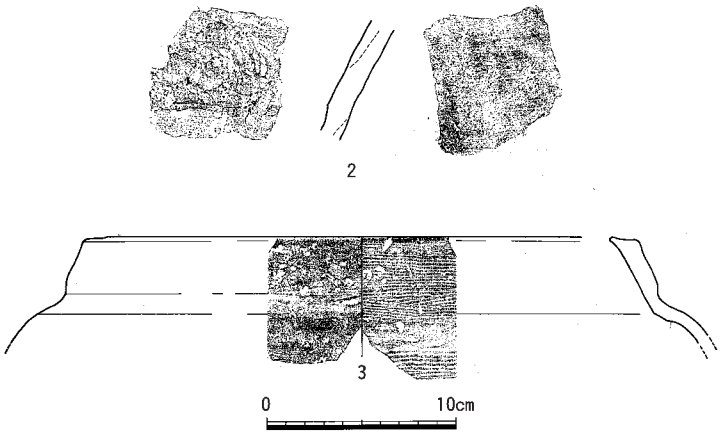


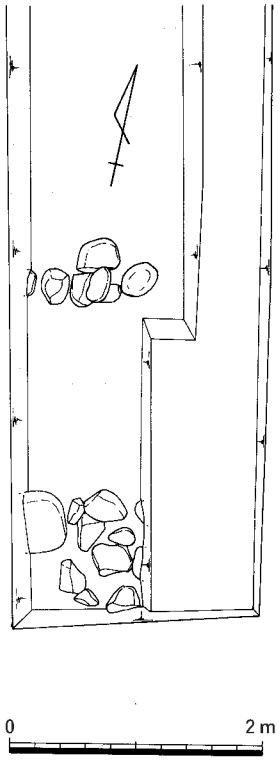
1　暗褐色土（現代耕作土）
2　暗茶褐色土
3　褐灰色土
4　灰褐色土（褐色土ブロックを含む）
5　褐色土（角礫多く含む）
6　明褐色土
7　褐灰色土
8　灰褐色砂
9　暗灰色土
10　灰黄色土（礫含む）
11　暗灰色土
12　暗灰色粘質土＝旧表土
13　灰色砂
黒塗り：礫を多く含む山土
網目：硬く締まった暗灰色土

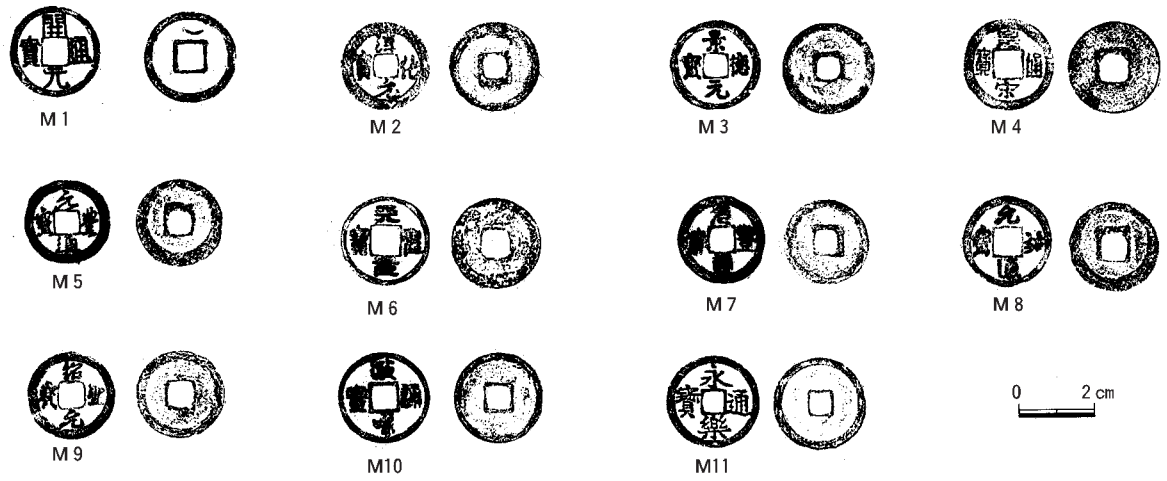
第５図　Ｔ１・Ｔ２土層断面図（1/60）



第６図　Ｔ１出土遺物（1/4）





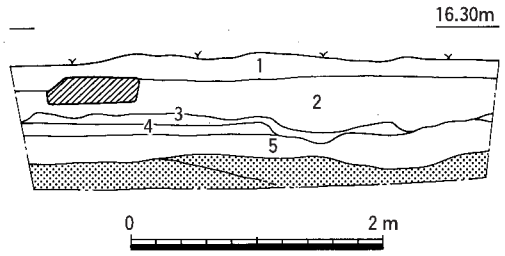


第７図　Ｔ２集石、出土遺物（1/60・1/4・1/2）

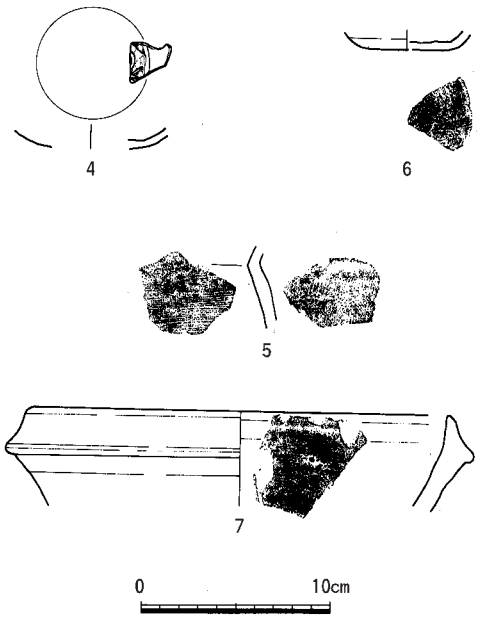
トレンチ２（第３～５・７図、図版16・17・20）

平成７年に実施された試掘調査地点の東に隣接して設定した16.9×２ｍのトレンチである。厚さ10㎝の耕作土下で検出した盛土は、厚さ10㎝ほどの茶褐色礫混じり土層と灰色粘質土層を、土塁の中心から南に向かって交互に積み上げたもので、その高さは1.4ｍにおよぶ。海抜15.7ｍを測る暗灰色粘質土の基底面からは広葉樹の枝葉が検出されたが、構築に直接かかわるものかどうか判断できない。この盛土は、土塁の北端を区切る側溝から21ｍの位置で終わり、それより南側は土塁を崩した土で造成されている。

この造成土からは室町時代後半の瓦質土器３や銅銭Ｍ１～11が出土しており、この時期には本来の機能を失っていたものと思われる。



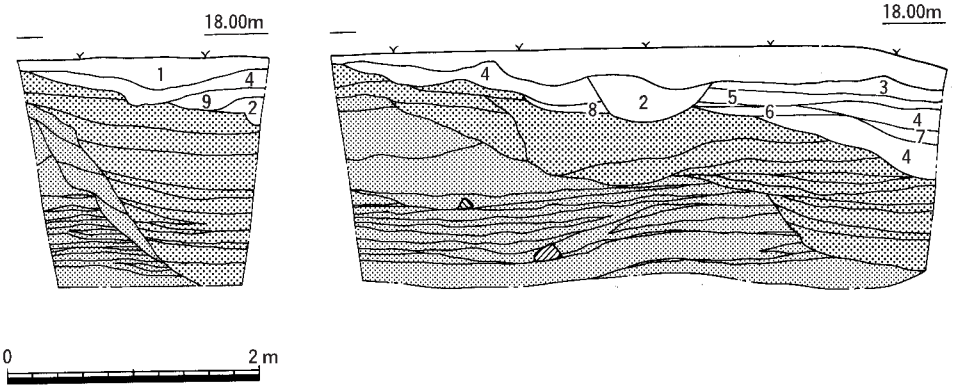
1　暗褐色土＝現代耕作土
2　黄褐色土（灰色粘土塊含む）＝造成土
3　黒灰色粘質土＝旧水田層？
4　灰茶色粘質土
5　暗灰色土＝中世包含層
網目：灰色細砂～粗砂層



第８図　Ｔ３土層断面図、出土遺物（1/60・1/4）

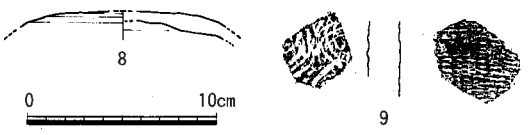
トレンチ３（第３・４・８図、図版15・20）

トレンチ２の南6.1ｍに設定した3.9×２ｍのトレンチである。地表下40㎝に黒灰色をなす旧水田層が確認され、その下には染付け皿４や土師器の鍋５、備前焼の杯６・擂鉢７を含む厚さ20㎝の暗灰色土層が堆積していた。海抜15.3ｍより下は自然堆積層と見られる灰色の砂層となり、土塁の基盤に対応するものと考えられる。



1　淡褐色土
2　茶褐色土
3　黄茶褐色土
4　暗褐色土
5　黄褐色土（礫含む）
6　茶褐色粗砂
7　暗褐色土（黄褐色土の互層）
8　暗灰色土
9　暗茶褐色土

粗い網目：盛り土（褐灰色砂質土～黄灰色粘土など互層）
細かい網目：礫を多く含む山土と硬く締まった暗灰色土の互層



第９図　Ｔ４土層断面図、出土遺物（1/60・1/4）

トレンチ４（第３・４・９図、図版17）

東側の土塁上に設定した4.9×２ｍのトレンチである。厚さ10㎝ほどの黄褐色の礫混じり土と灰色の粘質土を交互に積み上げた後、茶褐色の砂質土を厚さ40㎝にわたって盛り上げている。この盛土はトレンチの西半において46°の傾斜をなして終わり、それより東側は黄灰色の粘質土と灰色の砂質土を互層に積み、厚さ20㎝の褐色土層を盛り上げる。盛土の高さは現状で1.8ｍ測るが、海抜15.9ｍまで掘り下げたものの基底面は確認できなかった。

遺物は、上層から須恵器の蓋**８**と甕の小片**９**が出土している。

トレンチ５（第３・４・10図、図版18）

土塁の北側水田中に設定した4.9×１ｍのトレンチである。耕作土の下には厚さ30～40㎝の灰色をなす粘質土が厚さ20㎝の砂層を挟んで堆積し、海抜15.7ｍ以下は植物遺体を含む粘土と砂の互層となる。

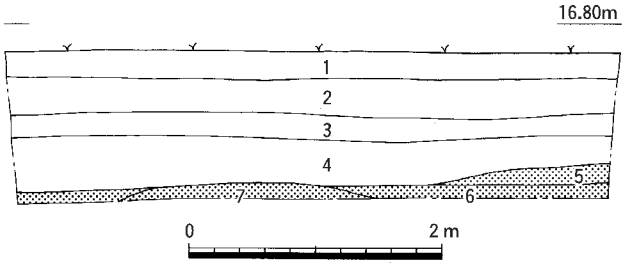
トレンチ６（第３・10図）

２×１ｍのトレンチで、トレンチ５の北８ｍに設定した。トレンチ５と同様に、耕作土の下は灰色をなす粘質土と砂層が互層をなし、地表下90㎝（海抜15.7ｍ）で植物遺体を含む茶褐色土層に達する。

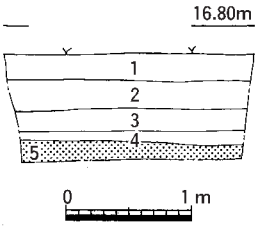
このうち３層からは肥前系陶器が出土している。

トレンチ７（第３・10図、図版18）

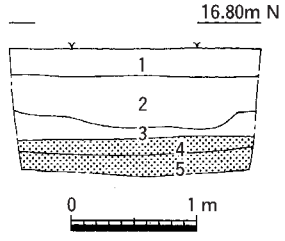
トレンチ６の北８ｍに設定した２×１ｍのトレンチである。耕作土の下には造成土と見られる黄灰色土が堆積し、その下はトレンチ５・６と同様に暗灰色の粘質土と砂層が互層をなす。地表下１ｍまで掘り下げたが、ここでは植物遺体を含む粘質土は確認できなかった。



1　暗褐色土＝現代耕土
2　暗青灰色土
3　暗灰色粗砂（近世陶器出土）
4　灰色粘質土
5　灰色砂質土
6　暗茶褐色土（植物遺体を含む）
7　灰色粗砂

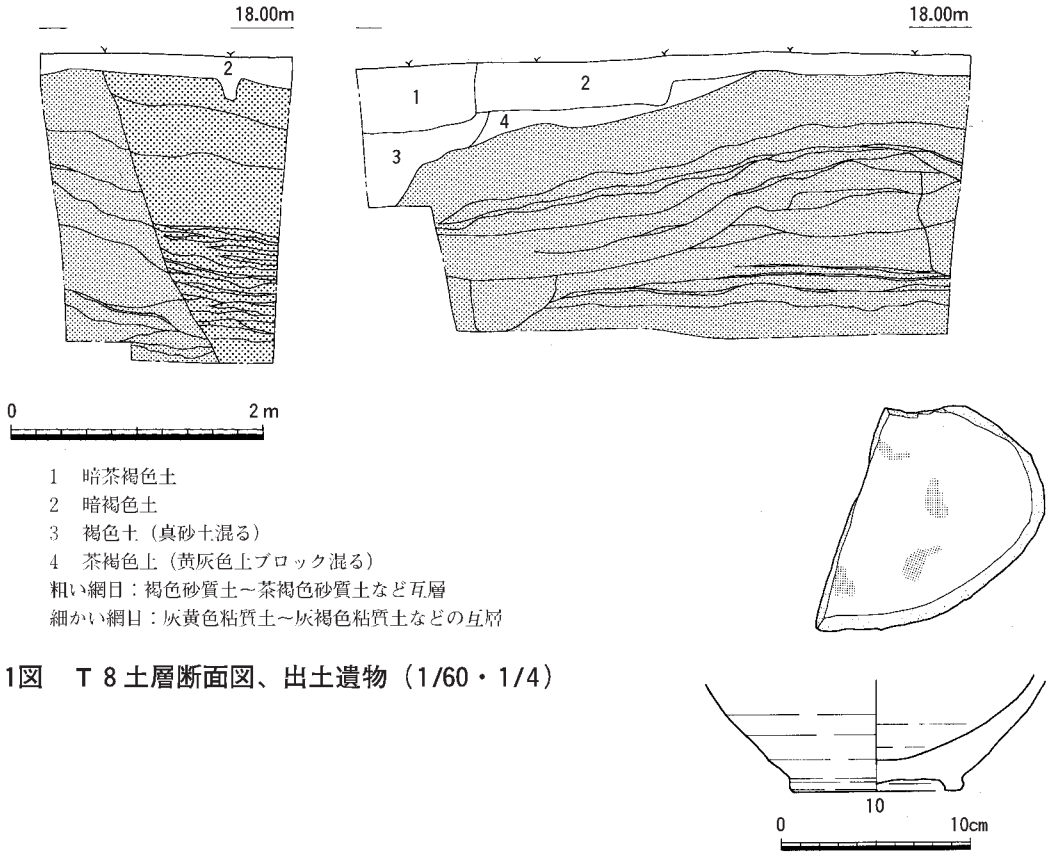


1　暗褐色土＝現代耕土
2　暗青灰色土
3　暗灰色粗砂（近世陶器出土）
4　灰色粘質土
5　灰色粗砂



1　暗褐色土＝現代耕土
2　黄灰色土
3　黒灰色粘質土
4　暗灰色粗砂
5　暗灰色粘質土

第10図　Ｔ５～７土層断面図（1/60）



第11図　Ｔ８土層断面図、出土遺物（1/60・1/4）

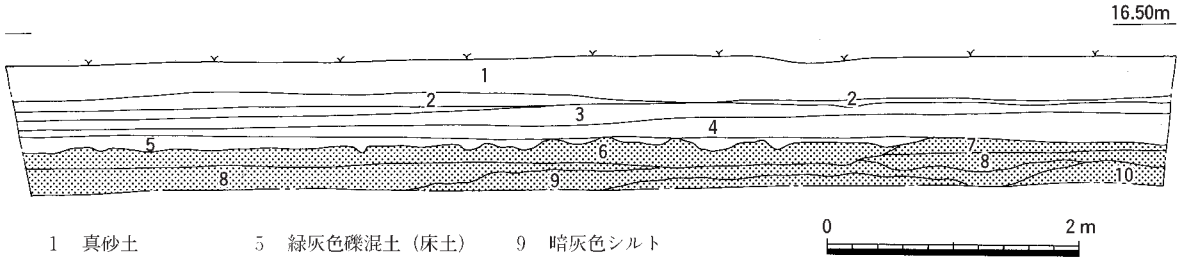
トレンチ８（第３・４・11図、図版16・17）

1.9×２ｍのトレンチで、トレンチ４の南6.3ｍに設定した。現状で高さ2.1ｍを測る盛土は、トレンチの西半において、茶褐色の礫混じり土に灰色の粘質土を薄く挟みながら積み上げた上に、灰色土と黄褐色土がブロック状に混じる粘質土を盛り上げている。トレンチ東半では、下層に灰黄色と暗灰色の粘質土を互層に積み、褐色砂質土を1.2ｍにわたって盛り上げる。トレンチ４から続くこの盛土の境は68°の急傾斜をなし、土塁の主軸とほぼ直交する。ここでも地表下1.9ｍ（海抜15.5ｍ）まで掘り下げたが基盤層は検出していない。

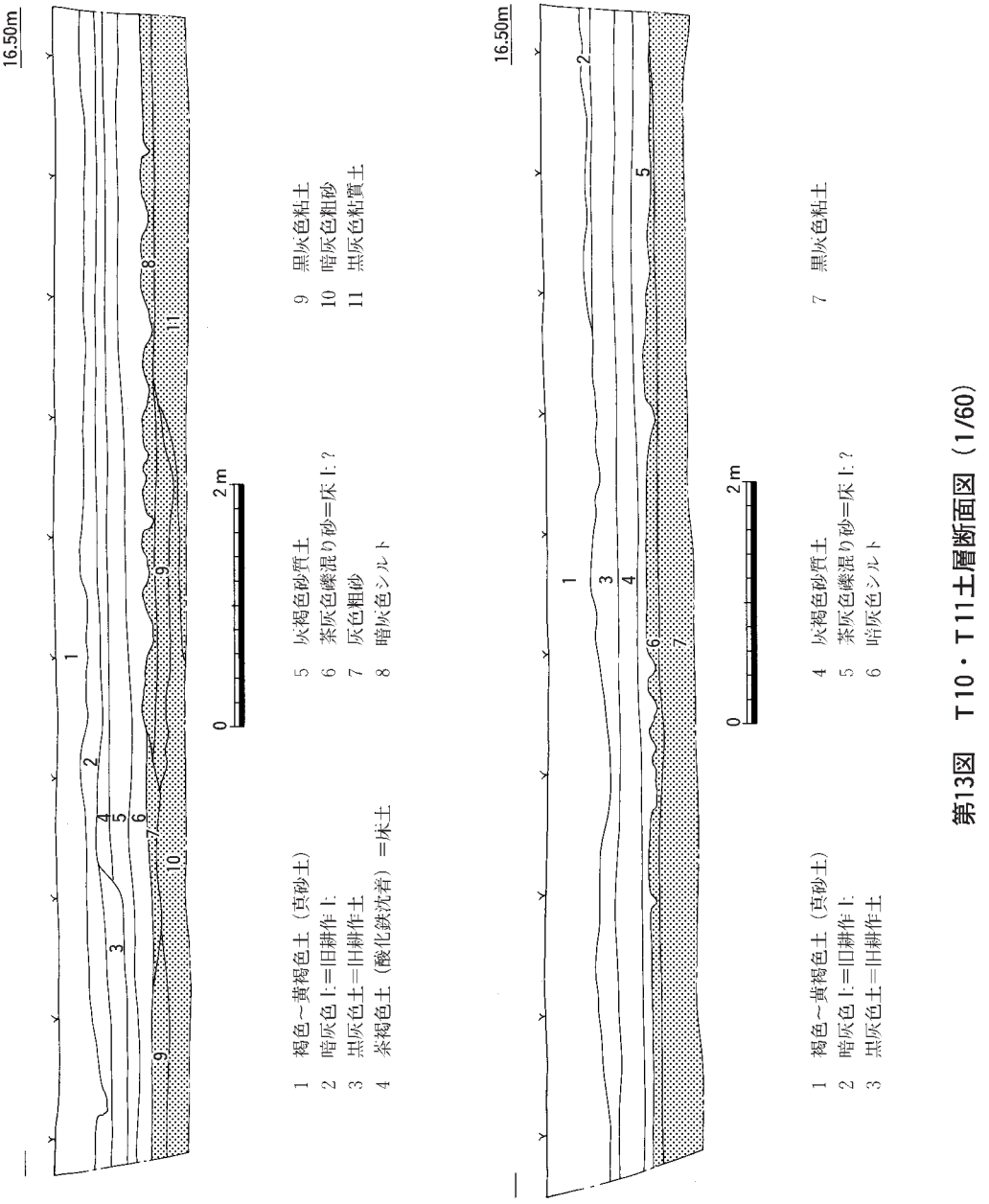
遺物には、上層から出土した肥前の胎土目鉢**10**がある。

トレンチ９（第３・12図、図版18）

土塁の南側に設定した9.3×２ｍのトレンチである。厚さ40㎝ほどある造成土の下には暗褐色の耕作



第12図　Ｔ９土層断面図（1/60）



第13図　T10・T11土層断面図（1/60）

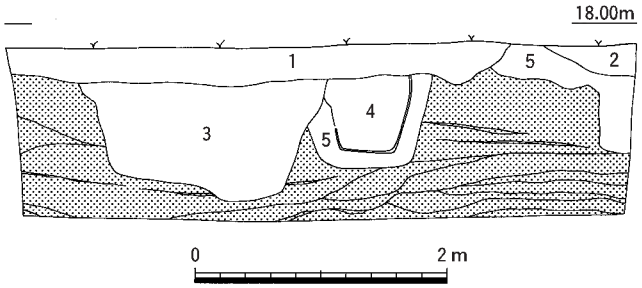
土と酸化鉄の沈着した茶褐色の床土が見られ、地表下80㎝（海抜15.6ｍ）からは黒灰色の粘質土と砂質土が交互に堆積する。

トレンチ10（第３・13図）

9.7×２ｍのトレンチで、トレンチ９の南2.8ｍに設定した。ここでもやはり、厚さ30㎝前後の造成土の下には暗灰色の耕作土と茶褐色の床土が見られ、地表下70㎝（海抜15.4ｍ）から黒灰色の粘質土と砂層の互層になる。

トレンチ11（第３・13図、図版19）

トレンチ10の南2.1ｍに設定した9.9×２ｍのトレンチである。厚さ40～50㎝ある造成土の下には暗灰色の耕作土と酸化鉄の沈着した茶褐色の床土が見られ、地表下80㎝（海抜15.3ｍ）より下は黒灰色の粘質土が堆積している。



第14図　Ｔ12土層断面図（1/60）

トレンチ12（第３・14図）

トレンチ４・８で確認した盛土の境の性格を探るため、トレンチ８の北端と直交するように設定した６×２ｍのトレンチである。海抜17.8ｍの地表から1.2ｍ下まで撹乱がおよんでいたが、西側から続く盛土層にはトレンチ４・８に対応するような盛土の境は検出できなかった。

第２節　調査の結果

土塁の南側に設定したトレンチ１・３・９～11において、これに伴うような遺構は確認されず、その北側に設定したトレンチ５～７においても湛水をうかがわせる痕跡は認められなかった。

土塁は、トレンチ４・８を境に西側では粘土と礫混じり土を交互に積み上げ、東側では砂と粘質土の互層で構築している。その境は急傾斜をなすが、これと対になるような境は確認できず、土塁構築の工程を示すものと思われる。また、トレンチ２では盛土層の直下から植物遺体が検出されたが、基盤層に含まれていたものが露呈した可能性もあり、その性格については判断を保留したい。今回の調査で明らかになった土塁の規模は、基底部の幅が21ｍ余りで高さは2.6ｍを測るが、土塁を崩して南側に押し広げた造成土の体積を考慮すれば本来の高さは３ｍ近くと推定される。

土塁から出土した遺物は、盛土中から６世紀後半の須恵器が、土塁を切り崩した造成土から室町時代後半の瓦質土器や銅銭が出土している。また、盛土直下の植物遺体については放射性炭素年代測定により1650±60年の値が示されているが、これが基盤層の年代を示すものとすれば、５～16世紀の幅の中で理解するよりほかはない。

この土塁は、「御門」という地名からも鬼城山との関わりが想定されてきたが、今回の調査ではそれを積極的に裏付けるような証拠は得られなかったものの、これを否定する材料も見つからなかった。このような場所に、谷を締め切るような土塁を構築することはいかにも不自然であり、防塁の可能性は依然として残されたままである。

最後に、調査全般にわたって懇切な指導を賜った村上幸雄氏、調査成果について有益な助言を賜った鬼城山整備委員会の諸先生、寒さの厳しい中作業に従事された地元住民のみなさんに厚くお礼を申し上げる。

（亀山行雄）

第１表　土器観察表

掲載番号	実測番号	出土トレンチ	遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	焼成	形態・手法の特徴など
1	4	Ｔ１	暗褐灰色土	須恵器	壺	Ｎ７／０灰白	長石・石英	良好	
2	2	Ｔ２	黄褐色土	備前焼	壺？	7.5YR４／１褐灰	長石	堅緻	体部下位片
3		Ｔ２	暗灰色土	瓦質土器	甕？	Ｎ３／０暗灰	長石・石英少	良好	
4	6	Ｔ３	暗灰色土	染付陶器	皿？	Ｎ８／０灰白	精良	良好	肥前系染付けか、見込みに藍色の文様
5	8	Ｔ３	暗灰色土	土師器	鍋	7.5YR７／２褐灰	長石・石英・角閃石	良好	
6	9	Ｔ３	暗灰色土	備前焼	小壺？	10R５／２灰赤	長石	良好	外底部糸切り、見込みに白然釉
7	7	Ｔ３	暗灰色土	備前焼	擂鉢	2.5YR４／２灰赤	石英ほか	堅緻	卸目残存、使用による磨滅あり
8	3	Ｔ４	上層	須恵器	蓋	５BG５／１青灰	長石・黒色砂粒	良好	天井部１／４を残す
9	5	Ｔ４	上層	須恵器	甕	Ｎ６／０灰	長石・石英ほか	良好	内面同心円タタキ
10	61	Ｔ８Ｂ		陶器	鉢	５Ｙ６／２灰オリーブ	精良	良好	唐津、見込みに胎土目トチン痕跡

第２表　銅銭観察表

掲載番号	遺構・土層名	計測値（mm）		重量（g）	材　質	時　期	備　考
		最大径	最大厚				
Ｍ１	包含層	24.8	1.3	2.9	銅	初鋳 621年	唐　開元通寶（鋳造開始初期とされる「背上月」を認める）
Ｍ２	包含層	24.3	1.3	3.4	銅	初鋳 990年	北宋　淳化元寶
Ｍ３	包含層	24.5	1.1	2.8	銅	初鋳 1004年	北宋　景徳元寶
Ｍ４	包含層	25	1.3	3.6	銅	初鋳 1039年	北宋　皇宋通寶（銭文は対読）
Ｍ５	包含層	23.5	1.3	3.6	銅	初鋳 1078年	北宋　元豊通寶
Ｍ６	包含層	23.7	1.4	2.8	銅	初鋳 1078年	北宋　元豊通寶
Ｍ７	包含層	23.7	1.3	3.1	銅	初鋳 1078年	北宋　元豊通寶
Ｍ８	包含層	24.3	1.2	3.2	銅	初鋳 1086年	北宋　元祐通寶
Ｍ９	包含層	23.7	1.2	2.9	銅	初鋳 1094年	北宋　紹聖元寶
Ｍ10	包含層	24.5	1.5	3.5	銅	初鋳 1111年	北宋　政和通寶（銭文は対読）
Ｍ11	包含層	25	1.3	3.3	銅	初鋳 1408年	明　永楽通寶（銭文は対読）

図版 1

1　鬼城山遠景
（南東から）

2　鬼城山からの眺望
（北西から）

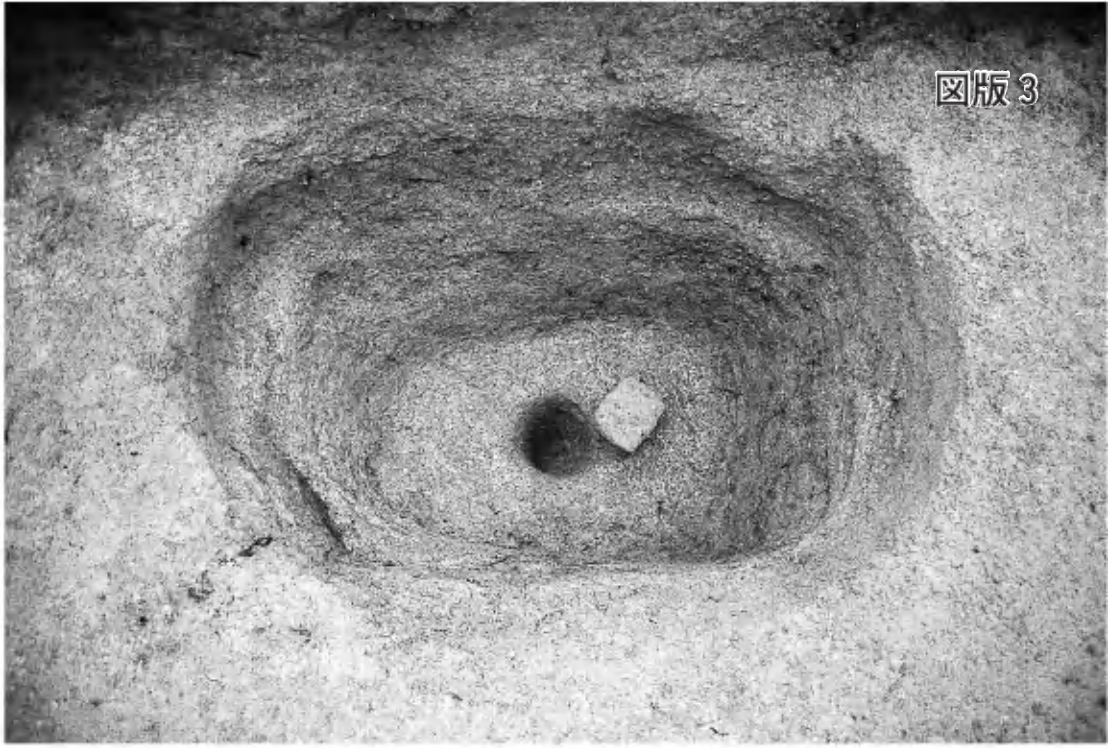
3　確認調査初日、
葛原所長作業説明
風景

図版２

1　Ｔ４発掘着手風景
（西から）

2　Ｔ10土壙検出状況
（南から）

3　Ｔ21土壙１須恵器
出土状態（東から）



1　T21土壙２検出
状態（東から）

2　T54版築土塁下位
（西から）

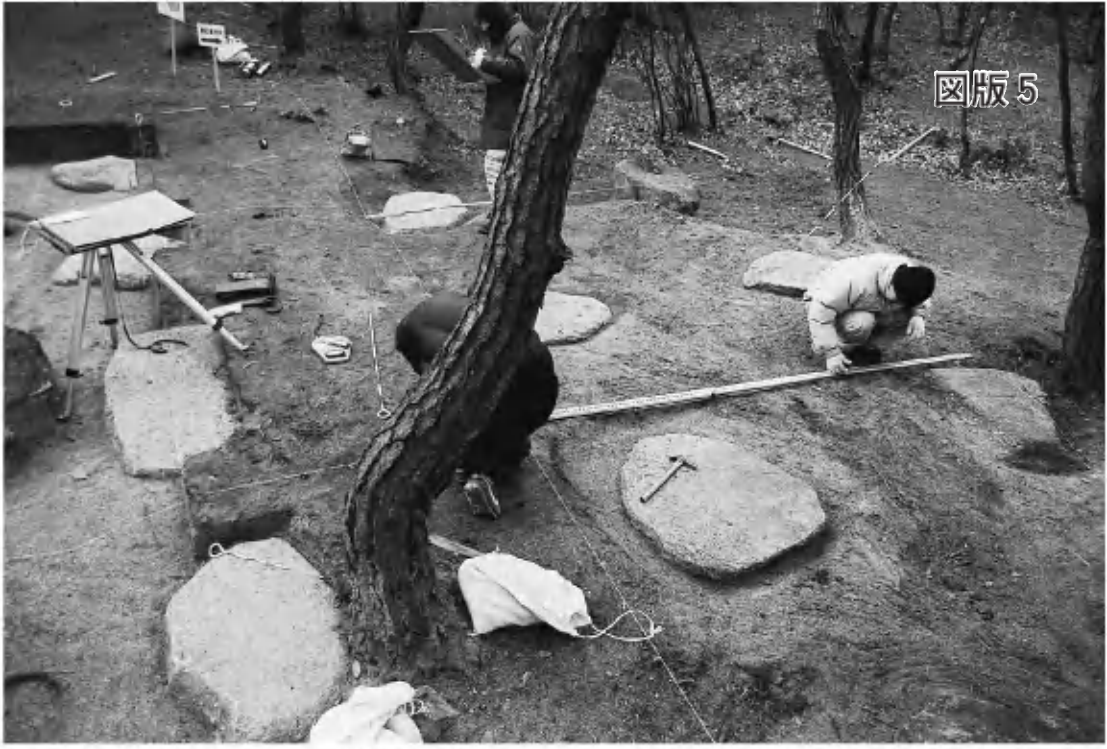
3　T54土塁下位石列
（東上方から）

図版 4

1　T62と礎石建物1
（南西から）

2　T62礎石（南から）

3　礎石建物2とT124
（東から）

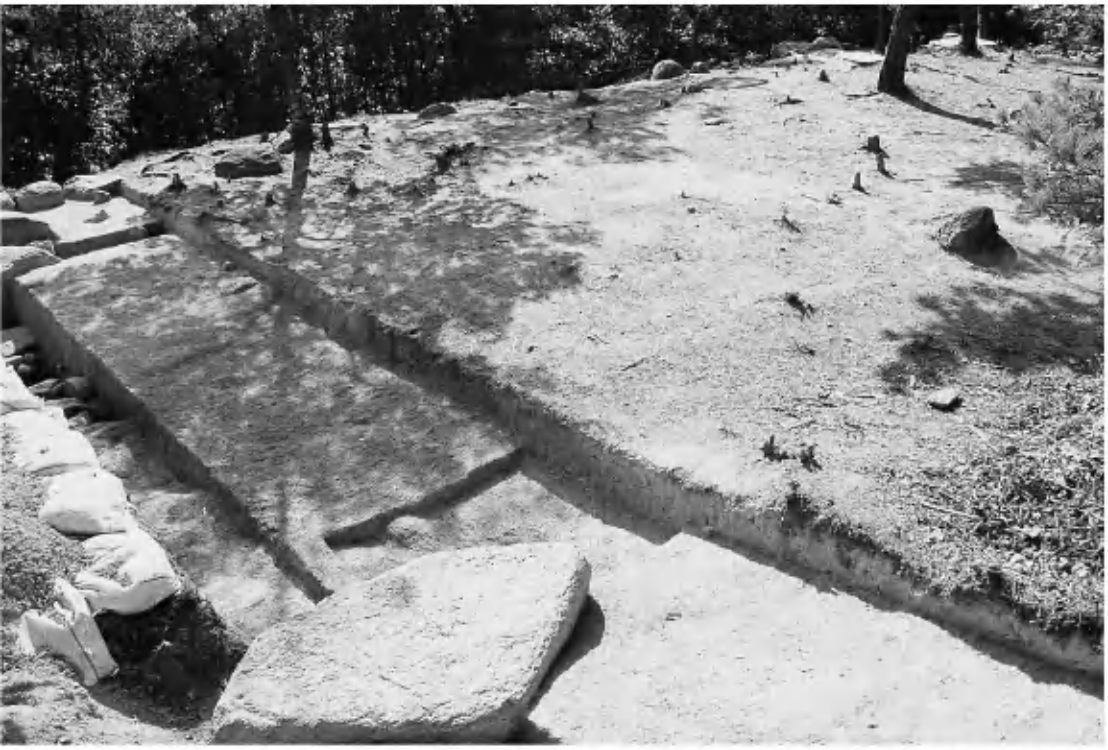


1　礎石建物 3 調査
風景（北東から）

2　礎石建物 4 と T125
（北東から）

3　礎石建物 4 と T125
土層断面（南から）

1　T62土層断面と礎石
（北東から）



2　Ⅱ群礎石建物と
T116（北東から）

3　Ⅱ群礎石建物基壇
石列（南から）

1　Ｔ67と掘立柱建物
　１・石列（南から）

2　Ｔ67と掘立柱建物
　１・石列（北から）

3　Ｔ68（北西から）

1　T49柱穴・石列と
土層断面（南から）

2　T91落とし穴
（西から）

3　T87土層断面
（西から）

1　T121石列
（東から）

2　T113竪穴遺構付近
作業風景（北から）

3　T113竪穴遺構
（北から）

1　T106（西から）

2　T111石垣
（東から）

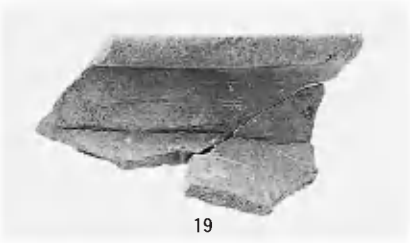
3　鬼城山整備委員会
（T54、'99年12月
17日）

10

11

14

16

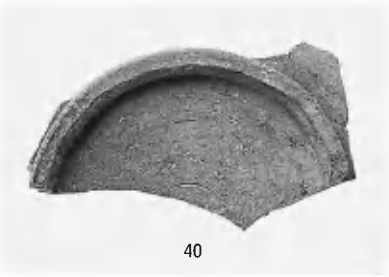

19

25

35

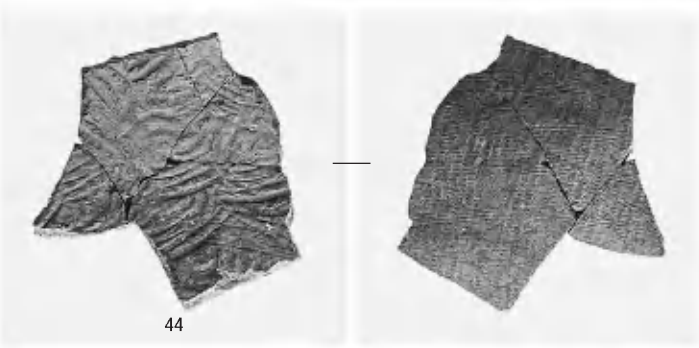
38

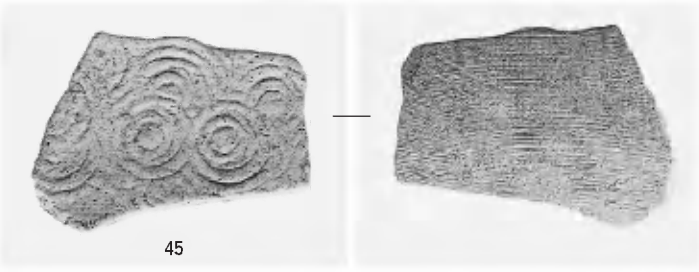
39


40

41

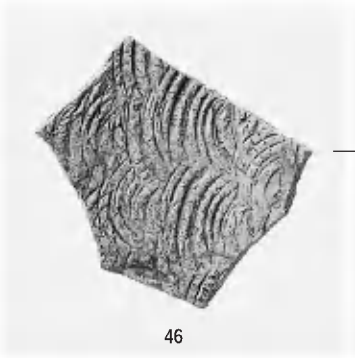
43


44

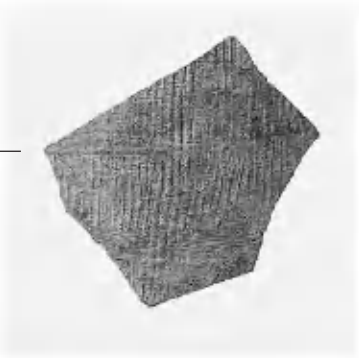

45

出土遺物（須恵器・土師器）

図版12

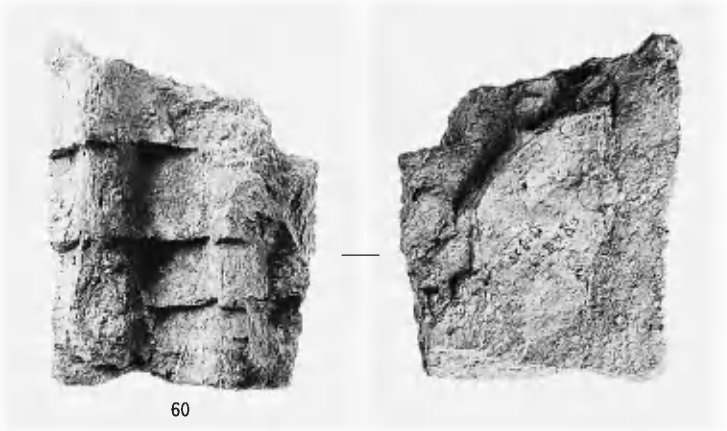


46



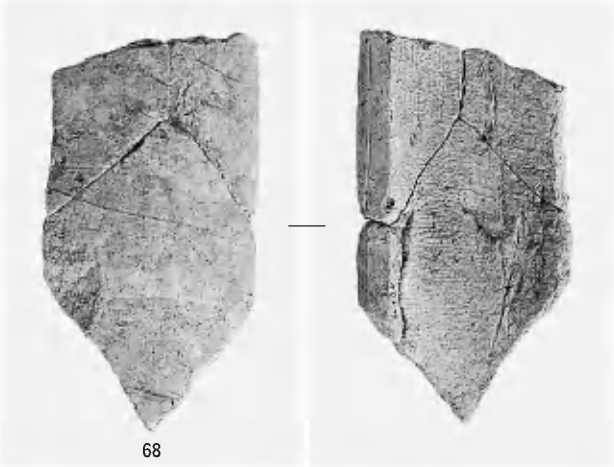
48

56



60

65



68

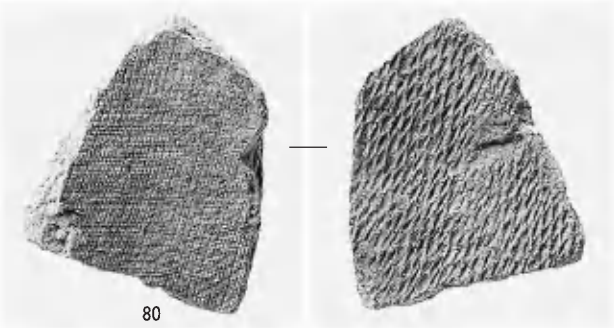
69

72

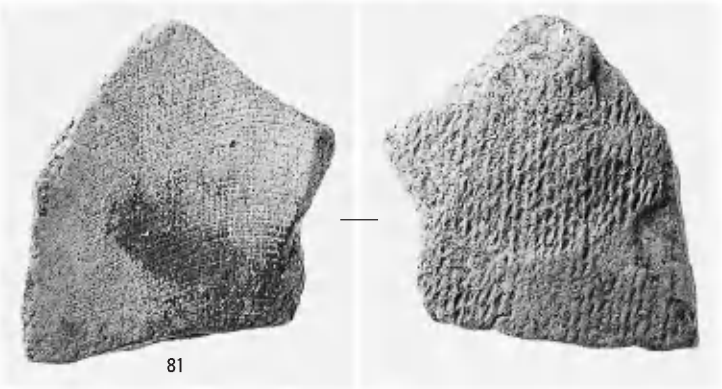
出土遺物（須恵器・土師器・瓦塔・瓦 ）

77

78


80

90


81

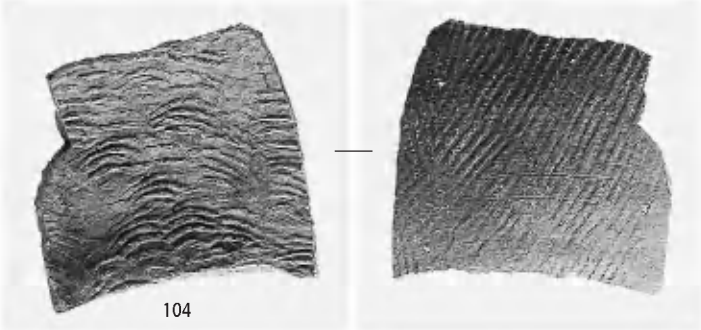
91

98

102

92

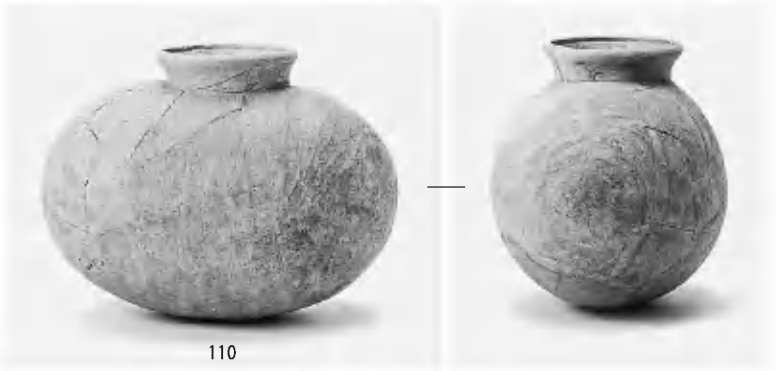
103


104

出土遺物（瓦・須恵器・土師器）

図版14

108


110

112

M 1

M 2

M 3

S 3

S 1

S 2

S 4

出土遺物（須恵器・椀形滓・石器・石製品）

1　池ノ下散布地遠景
（北西から）

2　Ｔ１全景
（南東から）

3　Ｔ３全景
（南東から）

1　Ｔ２土層断面
（南東から）

2　Ｔ２土層断面（北東から）

3　Ｔ８全景（南から）

1　Ｔ２敷葉層？
（西から）

2　Ｔ８全景
（南東から）

3　Ｔ４全景
（北東から）

1　Ｔ５全景
（南東から）

2　Ｔ７全景
（南東から）

3　Ｔ９全景
（南東から）

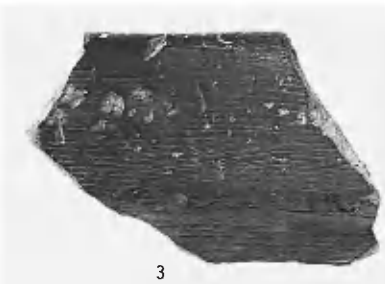
1　T11全景
（南東から）

2　T５付近作業風景
（南から）

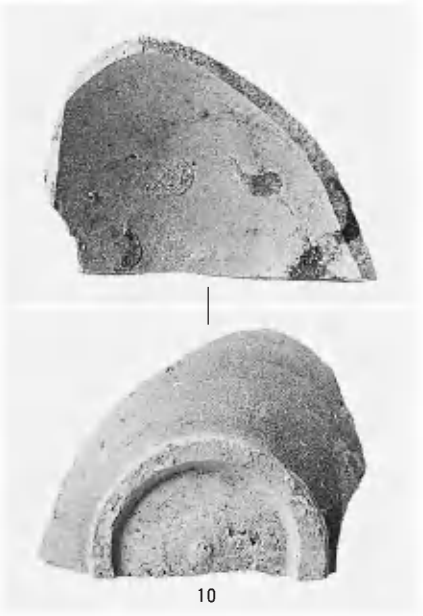
3　鬼城山整備委員会の視察
（2000年３月１日）

図版20

1


3

7


10

M1

M1（裏）

M2

M3

M4

M5

M6

M7

M8

M9

M10

M11

出土遺物（土器・銅銭）

報告書抄録

ふりがな	くにしていしせき きのじょうざん
書　　名	国指定史跡　鬼城山
副 書 名	国指定史跡整備事業に伴う確認調査
巻　　次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	203
編著者名	岡田　博・亀山行雄
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所 在 地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　　TEL 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所 在 地	〒700-0824 岡山県岡山市内山下2-4-6　　TEL 086-224-2111
発行年月日	西暦2006年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地 岡山県	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
鬼城山（きのじょうざん）	総社市奥坂	33—208	488	34°43′26″	133°45′50″	1999.8.6～2000.3.31	5,830	国指定史跡整備事業
池ノ下散布地（いけのしたさんぷち）	総社市西阿曽	33—208		34°42′34″	133°47′01″	2000.2.14～3.9	170	国指定史跡整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鬼城山 池ノ下散布地	古代山城	飛鳥・奈良時代 鎌倉時代	土塁・礎石建物・竪穴 築堤	須恵器・土師器・鉄滓 備前焼・銅銭	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告203

国指定史跡　鬼城山

国指定史跡整備事業に伴う確認調査

平成18年3月24日印刷
平成18年3月31日発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷　株式会社　中野コロタイプ
岡山県岡山市玉柏390

R100
本文用紙は古紙配合率100%、白色度70%の再生紙を使用しています。